first fantasy

安楽樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｆｉｒｓｔ　ｆａｎｔａｓｙ

【Ｎコード】
Ｎ１３８３Ｑ

【作者名】
安楽樹

【あらすじ】
正義感や使命感というよりも、「目に映った人々を助けたい」とかその程度の気持ちで日々を暮らす、とある面々。

無敵でもなく、ハーレムでもなく、世界を救うわけでもない冒険者たちが織り成す、ポップでライトで時々リアルな珍道中。

そんなよくある剣と魔法のファンタジー世界の冒険日記です。

第1話　いきなりの冒険者（前書き）

第一章は雰囲気をつかむためのオープニング。
第二章からがきちんとしたお話になってます。
第六章からは一話の文字数を少なめにしました。

では、ごゆるりとどうぞ。

第1話　いきなりの冒険者

これは、とある剣と魔法のファンタジー世界での冒険日記である。

＊

『イセルの日記より』

まず今日は、野営中の一コマ。

「えーっ！こんなの食べるの～？」
「うるせぇな！これぐらい食えねえと商売やってけねーんだよ！」

ギャーギャーとわめくベルに向かって、俺は叫んだ。
ここは森の中。
俺たちは野営をしている所だ。
目の前にはこんがりと焼けた狼の肉が串に刺さっている。
ついさっき俺たちが仕留めた奴だった。

「だって私、森にいた時は肉なんてほとんど食べなかったんだよ！木の実とか野草だったもん！」
またベルが抗議の声を上げる。……こいつはさっきから、狼の肉が食えんだなんだと文句ばっかり言いやがって。

「ここはお前の故郷じゃないんだよ！はよ食え！」

俺はもう一度そう叫ぶと、自分の肉に手を伸ばした。
……ちっ、まだ生焼けだ。

「……私もやだなぁ……」
「何だと？」

反対の隣からぼそっと聞こえた声に向かって、ドスを利かせて俺は呟いた。
グラムルの奴だな。

「黙って食えっ！」

彼女に向かって即座に突っ込むと、肉を目の前にして何だか困ったような表情をしている女騎士を睨みつけた。
こちとら腹が減ってんだよ！神経逆撫ですんじゃねぇ。
……とうとう携帯食も無くなり、町にもたどり着けなかったのだ。
メシにありつけるだけでもありがたいと思えよな。

「えぇ～っ……」

不満げな声を挙げるグラムル。……どうやら、まだ納得していないらしい。

「うん、いけるね」
「もぉひっこもはっへひひ？」
「おいしぃー」
「ほらあいつらを見ろ！腹がはちきれるほど食ってんだろが！」

大飯食らいのドワーフのおっさんと、同じく大飯食らいのアホ魔術師と、何も考えていないちびっこを見てると、必死で説得しているこっちが馬鹿らしくなってくる。
……こいつらなら、目の前にあるのがたとえ悪魔の肉だろうと、お構い無しに違いない。

おいおっさん、それほとんど生だぞ。

「うぅ～……」

ようやくグラムルも、この動く胃袋たちを見て少しは食べる気になったらしい。

「町に着いたら、絶対ちゃんとしたもの食べるんだからねっ！」

なんだかんだ喚いていたベルも、とうとう肉に手を伸ばした。

……あの高慢エルフも、さすがに空腹には勝てないようだ。

「ふぅ……」

やっと俺も食事にありつける。長い道のりだったぜ……。

ようやく落ち着き、さすがにそろそろ焼けたであろう肉に、俺は再び手を伸ばした。

「……無い」

「なんでっ！？なんで無いの！？」

慌てて辺りを見回したが、どこにも無い。一体、いつの間に俺の肉が！

……。

……。

気付いちゃったよ。

「……おいスプ。お前は何で両手に串を持ってんだ？」

「ん？食ったよ」

ぷち。

「……『食ったよ』じゃねーよ。何で俺の食ってんだって聞いてんだよ！」

殺す！ほぼ殺す！

俺は躊躇無く剣を抜き払った。

同時に、クソ魔術師も杖を構える。お互いに立ち上がり、一瞬にして間合いを取った。

「はは～ん。……歯向かうつもりかぁ？」

「てめぇが食うの遅いのが悪いんだろ」

「……遺言はそれだけだな？」

「また始まったよ……」

ベルが呟く。

最初はあれだけ文句を言ってたくせに、もう既に半分は食べ終わっている。……お前はそういう女だよな。

他のメンバーは、もういつもの事だとばかりに傍観を決め込んでいた。

特におっさんなんて、食後の酒がとばっちりを受けないように、ちゃっかり避難してるし。

「覚悟はいいな？」

「●×△◆……」

奴が呪文を唱え始めると同時に、俺は地を蹴った。さっきまでの間合いは消え、刹那にして懐に入り込む。

波打った刀身を下から振り上げ、魔術師に向け一直線に突き出す―

―っ！
かと思いきやそのまま横を素通りし、スプの背後の茂みに向かって大剣を無造作に突き込んだ。
と――。

「ギャグワェーッ！」

明らかに人間のものではない悲鳴が辺りに響いた。
そして茂みから、やや小柄な人型の生き物がこちらに倒れこんできた。

「ゴブリンか……」

俺がそう呟いた時には、食事中だったみんなは既に戦闘体勢に入っている。
……あ、いや、おっさんだけはコップの酒を飲み干している所だったが。
すると、周りの茂みから奇怪な声が幾つも聞こえ、今倒れたのと同じような人影が数体、焚き火の前に姿を現した。

一、二……五匹。ほぼ囲まれている。
粗方、うまそうな臭いに惹きつけられてやってきたんだろう。……とすると、奴らの巣が近いのかもしれない。
……ようやく今回の仕事も終わりそうだ。
そして、俺が剣を構えなおすのと同時に、スプの呪文が完成した。

「こげろっ！」　――　＊＊＊＊

バタバタ……と、二体がその場に倒れる。
奴お得意の、眠りの呪文だ。掛け声には、特に意味は無い。

これでこいつらは倒したも同然だろう。きっと残りの奴らは逃げ出すか、自暴自棄になって突っ込んでくるはずだ。
まあそっちはグラムルとおっさんに任せるとして。

……俺には、この限界までの空腹を一体どうやって紛らわせようかと言う事が大問題だった。
ゴブリンって食えねえのかな……。
目の端に、狼の肉の食い残しが映る。あれを何とか調理すれば……。

……まあ、今日はそれで我慢しよう。
ああしてこうして……、まあそれでどうにか食えるだろう。
めんどくさいから出来上がりってことで。

＊

まあ、大体俺たちの仕事ってのはこんな感じだ。
まだまだ駆け出し。
ゴブリン退治なんてのが定石の依頼。

まさかそんな俺たちがあんな出来事に巻き込まれるとは、まだこの時には思ってもみなかったね。
良かったらそこのアンタ、ちょっと聞いてってくれよな。

では、俺たちの初めての冒険物語、はじまりはじまり……。

第2話　なりゆきの休息者

今日は街での一コマ。

『おっさんの回想より』

シャーコ、シャーコ……

やはり、一流の戦士たるもの、自らの武器は常に手入れしてないといかん。
ドワーフならば、鍛冶をするのは尚更じゃな。
そう思い、ワシは一心不乱に戦斧を研ぎ続ける。
少しずつ鋭さを増してくる斧と同時に、自分の心までもが研ぎ澄まされていくのを感じる。
一流の戦士にとって武器の手入れは、精神修練の一環でもあるのじゃ。
ぶつぶつ……。

「おっさん、斧研ぎながらぶつぶつ言ってるとすげー怖いぞ」

また余計な事を言ってきたのは、イセルじゃった。

「……お主も今のうちに愛剣を研いでおいたらどうじゃ？」

ワシは親切にそう言ってやる。街の鍛冶屋に頼むなんてのは、三流の金持ち戦士のやる事じゃ。

「いーよ、俺のフレイムスラストはゴブリンごときで刃こぼれしたりしないの」

いけしゃあしゃあと、三流戦士はそう言う。

「……」

……言うだけ無駄じゃったか。まあいい。一流の戦士はひたすら自分を磨き続けるものじゃ。

向こうでその言葉を聞いていたらしいグラムルが、自分も剣を取り出して研ごうとしている。……感心感心。それこそが戦士の心構えじゃぞ。

その横のベッドではシャルルの嬢ちゃんがぐっすりおねんねしていた。

イセルはどうやら鎧を外そうかどうしようか迷っているらしい。

とりあえずそのまま、壁にもたれながら話し掛けてきた。

「おっさん、武器の手入れもいいけどさ。神殿とかにお参りに行かなくて良いの？一応司祭だろ？」

「……」

……余計な事を。

「おいおっさん、聞いてる？」

せっかくワシが聞き流してやってるのに、奴は突っ込んで聞いてきた。

「……いいんじゃ！やられる前にやれば回復魔法なんぞいらん！『斬られても斬れ！』これが戦の極意じゃ！」

ワシはついつい興奮気味に答える。……ついでにお祈りは嫌いじゃ

った。

「そんな極意ありかよ……。まあ否定はしないけどさ」

イセルがやや呆れ気味に呟いた。……確かに奴も同じような戦いをしている部分はあるからのう。

向こうではやっぱりグラムルが頷いていた。いたく感動したらしい。

「あいつが一番、回復魔法が必要だろうに」

イセルがやや同情の目を向けながらワシに囁いてきた。……確かになぁ。彼女がもう少し丈夫になってくれたら、ワシももう少し戦えるのに。

……あ、後はあの無謀魔術師もか。

そう話していると、廊下からドタドタと音が聞こえた。

部屋の中にいた全員が少し身を固くする。

（従業員か……？もう勘定するのか？）

ワシがそう考えつつ、懐の財布に手を伸ばしながら身構えた時。

ノックも無く、おもむろにドアが開いた。

「おーい、帰ったぞー！」

あ、噂をすれば例の無謀魔術師の登場じゃ。知ってるか？お主は魔術師なんじゃぞ？

「全員出動準備！急いで！」

隣でそう叫んだのは、一緒に出ていたイゼベルじゃ。

「……どうしたんじゃ？何があった？」

ベルのあまりの剣幕に、慌てて支度をしながらもワシはそう聞いた。
彼女とスプは、情報収集に出ていたのじゃ。

「どうしたもこうしたもないわよ！あの強盗、グルだったのよ！」

ヒステリック気味に叫ぶベル。……こりゃ相当きてるわい。
グズグズしてたら、こっちが標的にされちまうのう。ワシは支度を急ぐ事にした。

「グルだったって、あの依頼人と！？」

同じく慌てながら鎧を着ているグラムルが叫ぶ。……あ、嬢ちゃんを起こさんといかんな。まだ寝てる。

「そうっぽいよ。どうする？あいつんちに隕石でもぶち込むか」

その質問にはスプが代わりに答えた。
……まだそんな大魔法使えないくせに、口だけは大魔術師じゃわい。

……我々は、前回のゴブリン退治の依頼終了後、報酬を貰うべく依頼人の家に行ったのじゃが、ちょうど我々が出ている間に、依頼人の家が強盗に襲われたとかで、まるっきり報酬を貰えずじまいじゃった。
しかし、依頼人の態度の怪しさと強盗の目撃証言の曖昧さ、あまりのタイミングの良さなどから裏付け捜査をしていた所だったのじゃ。

皆で手分けして情報収集し、最後に戻ってきたスプとベル組が、見事決定的情報を持ってきてくれたというわけじゃ。

「うっし！そうと分かっちゃぁ黙ってるわけにゃいかねえな！」

準備を終えたイセルが剣を担ぎながら扉から出て行く。
ガチャガチャと重そうな鎧の当たる音を鳴らしながら。

「ふあーぁ……」

やっとシャルルが起きたらしい。グラムルが準備を手伝っている。
スプとベルはもう部屋の外じゃ。宿代を払いに行ってくれたんじゃろう。……ん？奴ら、金持ってたか？
ワシも忘れ物を確認し、まだ半分ほどしか刃の手入れが終わってない愛用の斧を背に担ぐ。
あー、まだ出来上がってないのに……。
よく見ると、かなりアンバランスじゃった。
……非情に嫌な気分じゃわい。

むぅ、あのケチ依頼人め！絶対捕まえて、たたっ斬ってやるからのう！待っておれ！
どこかからか沸々と、怒りの炎が湧き上がってくるのを感じる。
こんな余計な手間をかけおって！ズバシュッと一撃でこの斧の錆びにしてくれるわい！
ワシは背中にある鉄の塊の重さを確かめた。……刃の手入れだけが心残りじゃが仕方ない。
鼻息荒く、ワシは部屋の外に一歩踏み出した。

「もういいわい！めんどくさいから出来上がりじゃ！」

＊

まあ見ての通り、頭を使うことには慣れていない一行。
たま〜に、こういうこともあったり無かったり。

それよりも、分かりやすく剣と魔法で語るのが得意な面々なのです。
では次は、そんな一シーンをお届け。

第3話　おいかりの襲撃者

戦闘中の一コマ。

「がはは、思ったよりうまくいったぜ」
「あいつらの面食らった顔は見ものだったなぁ」
「これで本当の依頼人から金をもらえば……？」
「後もう少しで俺たちもこの街の騎士団に入れるって訳だ」
「盗賊上がりの俺たちがなぁ……。戦乱の世サマサマってもんだ！」
「ホント、馬鹿な素人冒険者がいて助かったぜ……」

街外れの廃屋の前で、ベルはそんな会話を聞いていた。
他の仲間は少し後ろで待機している。
音が聞こえなくなる魔法の力場の中で、彼らの怒りは頂点に達しようとしていた。

窓の場所を確認した後、仲間に軽く合図を送る。
それを見た瞬間、待ってましたとばかりに皆は武器を構えた。
突入5秒前。4、3、2……1……。

ドカッ！

「てめぇら、さっきから聞いてりゃあいい気になりやがって！俺が全員叩っ斬ってやっから覚悟しやがれ！」

最初の口上はいつもイセルの役だ。そして斬りこみ隊長役も。

「うわぁっ！」

したり顔で酒を飲みながら、上機嫌だった悪党どもは相当驚き、椅子から転げ落ちた者もいた。
しかし入り口が狭かったのが幸いし、イセルの次にグラムルが入った頃には、全員が体勢を立て直したところだった。

「私達のお金、払いなさい！」

相変わらず、凄みの無いグラムルの口上だ。……まあそこが彼女らしいのだが。
そして彼女の次に入ってきたのはおっさんだ。

「有り金置いてけ～ぃ……」

低い声でそう言った後、斧を壁に叩きつける。
一体誰が彼に司祭なんて職業を薦めてしまったのだろうか……。今日も最前線で戦う気満々だ。

「う、うわぁーっ！」

一番奥にいた一人が恐慌に襲われ、奥の窓から逃げ出す。
入ってきたばかりで、入り口側にいたイセル達には、さすがにそれを止める術は無かった……が。

「行け、うぃすぷ！」

外に飛び出した悪党の前に、突如光の塊が現れる。
そして逃げ出そうとする悪党に向かって、それを阻害するように漂い始めた。
避けきれず光に触れた悪党はギャッと悲鳴を上げ、窓際にヨロヨロと後退する。

光に触れた部分を見ると、まるで火薬でも弾けたように赤く腫れていた。

ウィル・オ・ウィスプ。光の精霊である。
精霊使いは異界より精霊を呼び出し、使役する事ができる。
それは例え、シャルルのような小さな子供だったとしても例外ではなかった。

ドスッ

そして気の毒な事に、せっかく逃げ出そうと外に出た悪党君の太ももに、無慈悲にも短弓の矢が刺さる。

「絶対逃がさないからね！私達のお金払いなさいよ！」

そこには炎の精霊でもたじろぎそうな、燃える瞳をしたエルフが仁王立ちしていた。
イゼベルだ。……女性はお金が絡むと、異常に行動力を起こすのは何故だろうか。
逃げられない彼の命運はもう決まってしまっただろう。重ね重ね気の毒に。

一方、室内はというと。

「おいおっさん、グラムルやべぇって！」
「何、また回復？」

室内の直接戦闘では一対一の戦いが三組できていた。
まずイセル対禿げた頭の男。
最初に一行に仕事を持ちかけてきたのがこの男だった。

裏付け捜査で発覚した通り、強盗に入られたと言って報酬を断ったが、実はその強盗ともグルだった。
彼に一番、全員の怒りが集まっている。

立派な武器を持っているわけでもない偽依頼人は、イセルの体に傷一つ付ける事ができない。
偶然でもない限り、板金鎧の装甲を貫く事はできなそうだった。
一方、イセルの攻撃は、当たれば確実に生命力を奪っていく。
……決着が付くのは時間の問題だろう。

次におっさん対太った男。
こいつも大した強さではない。しかしおっさんはこう見えても司祭なので、きちんとした戦闘訓練を受けているわけではない。技術で言えばどっこいどっこいだった。
……ただ、回復魔法が使える分、おっさんの優位は変わらないだろう。

問題は、グラムル対ひげ面の男だ。
……どうやら悪党どもはきちんとした訓練を受けたわけではなく、ただの腕っ節が強いだけの男どものようだったが、唯一この男だけが例外だった。
間違いなく、戦闘に慣れている。
そして恐らくは、イセルと同程度の技術を持っているようだった。
グラムルもそれほど戦闘に疎いわけではなかったが、いかんせん地力で劣っていた。
お互いに徐々に傷が増えていく。
そして……。

「あ、あれ！？」
（あちゃ～、またやったよ……）

丁度禿げた男を気絶させたイセルは、グラムルの方を見て頭を抱えたくなった。
何故かグラムルの剣は、机に刺さっている。
そしてそれが抜けずに困っているようだった。
……ひげ面の男はその隙を見逃さない。

ズシュッ！

派手に鮮血が飛び散る。
グラムルの左肩口に相手の剣が食い込んでいた。そのままグラムルはゆっくりと膝を付く。
そしてうつ伏せに倒れこんだ。
……どうやら意識を失ったらしい。

（まずい……）

慌てて援護に向かうイセル。
しかし、奴を倒した後でグラムルの止血が間に合うかどうかは、微妙な所だった。

「イセル、奴を頼む！あの子は任せい！」

おっさんからの声が飛ぶ。
チラッと見ると、おっさんの相手の太った男は、スプの呪文によって魔法の糸に絡み取られていた。
当分は身動きできそうにない。

（おっさんが付いてくれれば安心か……）

イセルが返事をしようとした時。

「よし、あいつは俺が時間稼ぐ！」

スプの声だった。

「お、追い待てスプ！」

イセルは慌てて止めようとしたが、もう遅かった。

薄っぺらい魔術師用のローブ一枚で、短剣を抜いて立ち向かうスプ。

ひげ面の男は、まず人数を減らそうというのか、スプを目標に定めたようだった。

「死ねっ！」

「来いっ！」

ズシュッ！

「ぐわっ」

……死にそうだった。

「野郎っ！」

注意がスプに向いている隙に、イセルは全力で打ち込む。その踏み込みの速さに、ひげ面の男は反応しきれなかった。

……両手に伝わってくる、確かな手応え。相当の深手を負わせたようだ。

「ぐ、ぐふっ……」

丁度その時、窓から光の精霊が入ってくる。どうやら外の方も片付いたようだ。

「……どうする？後はあんた一人だぜ？」

「……こ、降参だ」

状況を見て取ったのだろう。ひげ面の男は、大人しく武器を捨てる。

「グラムル大丈夫！？」

中に入ってきたベルがそう叫んだ。いつもの事とはいえ、やはり心臓に悪い。

倒れたグラムルの横では、おっさんが傷口に手をかざし、回復魔法を唱えていた。

「おっさん、どうだ？」

ひげ面の男に剣を突きつけながら、イセルは尋ねる。

……気付かぬうちに、体が緊張していたのが判った。

仲間の体を心配するこの気持ちは、何度味わっても慣れそうに無い。

他の皆も、その気持ちは同じようだった。

場に緊張が走る。

回復魔法と言っても、万能ではない。

既に心臓が止まり、生命力が無くなっていれば、それは無駄な努力に終わるのだ。

そうなってはもう、上級の蘇生魔法に頼るしかない。

……しかし彼らには、そんな魔法が使える人物に心当たりは無かった。

「……ああ、大丈夫じゃ。血も止まった」

『ふぅ～っ』と、誰からともなく安堵の息が漏れる。
グラムルの呼吸も、規則正しいものに変わった。……しばらくすれば目を覚ますだろう。
何とか今回も片がついたようだ。

「さて、じゃあこいつら自警団に突き出そうぜ。ベル、頼む」
「え？何が？」
「何がって、縄だよ縄。抜け出せないような、何か特殊な縛り方があんだろ？」
「え、無いよそんなの。自分で縛ればいいじゃん」
「嘘だ絶対。多分忘れたかよくわかんなかったんだろ。……きっとそうだ！」
「え、何の事？あはは、そんな訳ないじゃん」
「いいからやれって」
「……え～っ、しょうがないなぁ。わかったよ」
「早くしろって」
「……」
「ＯＫ？」
「うん、ＯＫ。めんどくさいから出来上がり」
「駄目だって」

ふぅ、これで今回の依頼も、めでたしめでたし……かな？

＊

誰もいなくなった廃屋に、一つの影が残っていた。
……息を殺し、静かに成り行きを見守っている。しかし、段々とそ

れも限界に近づいて来た。

「お～い、誰か～っ」

情けない声をあげたのは、スプだった。
血がドクドクと流れている。周囲には誰もいない。
彼は一人取り残されたまま、仰向けに倒れていた。
そして窓が割れ、ドアも半開きの廃屋に冷たい風が吹き抜けていく。

「誰か～。マジで死ぬって」

＊

彼らの日常は、概ねこんな感じだ。
駆け出し冒険者の寄せ集め。……その日暮らしをする毎日。

特にこれといった目的も無く、何となくこの暮らしが好きだったから始めた冒険者稼業。
ようやく仲間意識なんてものが芽生え始めた頃。
その運命は、ぽとんと天から降ってきたのだった……。

――こうして、彼らの日常は転機を迎える事となる。

第４話　唐突にキャラ紹介

▼登場人物紹介

イセルナート／自称熱血戦士
とある王国お抱えの司祭の両親を持ったが、王国が侵略された時、両親によって逃がされる。
それ以来、放浪戦士をしながら両親の行方を探しているはずだが、結構適当。
かわいい妹が一人いる。

ヌニエル・スーン／おっさん
癒す事よりも倒す事が好きなドワーフの司祭。一応パーティーのリーダー。
何故かこれでも一応貴族。時に面白い言動をする事がある。

スプ／破壊的魔術師
場を混乱させるためだけに作られた凶悪人型兵器。
破壊する事しか生き甲斐を持っていないのではないかと思われる。
しかし、誰も話の進行役がいないと真面目になる。

イゼベル／いじけエルフ
エルフの森から家出してきた盗賊。原因は妹の方が出来が良かったからしい。
そのためか、しばしば世間ずれした行動を見せてくれる。
イセルとはいいコンビのはず。

グラムル／落ち武者
イセルと同じ王国出身の女騎士だったが、王国が征服されたことに

より、放浪の騎士となる。
行方不明の兄を探しているはずだが、結構適当。
かなり消極的。

シャルル／子供
精霊使いの孤児。何となくパーティに拾われた。
そこそこいい年齢のはずだが、いかんせん頭がついてきていない。
とにかくこの冒険を楽しんでいるようだ。

第5話　新しき依頼人

新しい依頼の一コマが始まりました。

「あ～、そろそろ仕事しねぇとまずいよな～」
「確かにのう、あれからもう一年経ちそうだしの」

そう一行がぼやきながら、いつものようにいつもの街をぶらついていた時のこと。
突如、目の前を歩いていた年寄りが、フラフラとその場にへたり込んだのが目に入った。

あまりのタイミングといえばタイミングに、一瞬だけ立ち止まって悩む一同。
……が、こうしたトラブルは自ら首を突っ込んでかき回して立ち去るというのが冒険者の務め。
とかそこまで考えたわけではないと思うが、とりあえずイセルが声をかける。

「おい、どーしたばーさん」

その間に、司祭であるおっさんと騎士であるグラムルが駆け寄る。
軽く見ただけで、それほど重症ではないことを見抜くと、ほっと肩の力が抜けた。

「お、おぉ、誰か……誰か……腹がぁ～……」
「減ったんだね？」

婆さんは精一杯哀れみをそそるように演技をしたつもりだったろう

が、シャルルの無邪気な一言で全て無に帰した。
一気に婆さんの表情が申し訳なさそうになる。

「……減ったぁ～……」
『空腹→食事が必要→でも食べてない→文無し→おごるしかない！』

という行き倒れの公式がすぐに思い浮かんだ一行に、あからさまに躊躇の空気が広がる。
ある者はさりげなく、ある者は慌てて。それぞれの懐をチェックし始めた。
それを見た婆さんにも、一抹の不安がよぎる。
これはまずい……急がねば！と思ったのかどうか、突然元気よく声を挙げた。

「あ！あんな所に大衆酒場が！？」
「……」

婆さんが指差したその先にある酒場は、彼らのいつも行きつけである、冒険者たちがクダをまく……じゃなかった、依頼を待つ酒場だった。
あまりの出来過ぎといえば出来過ぎな流れに、一行の間に急にこの婆さんに対する不信の念が渦巻き始める……。

「あ！ホントだ！よしじゃあみんな行こうぜー！」

その筆頭であるイセルが、あっさりと婆さんを無視して酒場へと歩き始めた。
しまった！と悔しげな表情を見せる婆さん。
当たり前のようにそれにスプが続き、懐事情に厳しいベルたちも続こうとした時。

「つ、連れてきましょうよ……」

パーティーに唯一残った良心、グラムルが何とか聞こえるぐらいの声で皆に呼びかけた。

それを聞いて安堵の表情を浮かべる婆さんと『あっちゃ～！』という表情を浮かべるイセル。

しかし、とにもかくにも、ここからお話は始まってしまうのだった……。

＊

「グラムルさん、あなたが連れてきたよね？」

酒場兼冒険者の宿『明日の風は明日吹く』亭に着くやいなや、活き活きとしてメニューの高い方から順番に十個ほど頼んだ婆さんを見た瞬間、即座に責任の所在を再確認したイセル。

あっという間にグラムルの顔が青ざめ、さっきの婆さんの表情よりも生気が無くなっていった……。

懐事情に厳しいベルを始め、同様の状況である仲間たちは（厳しい……）とは思いつつも、誰も手助けできずに顔を背ける。

……結局ここの料金は、後でグラムルが金持ちのリーダーから借りて払ったのだった。

「ふぃ～、……食った食った。お前さん世話になったな。お礼というほどでもないが、わしは金は持っておらんのでな。代わりに占いなどしてしんぜよう」

言うや否や、婆さんは懐から水晶玉を取り出し、なにやらテーブル

の上で念じ始める。
（……これを売ればいくらになるんだろう……？）という表情を隠すのにグラムルは必死だった。
しばらくの後、水晶玉とにらめっこしていた婆さんは、ついに一行が飽き始めたとき、ようやく顔を上げてグラムルのほうを向いて話し始めた。

「む、むぅ～ん……、お主。……デブリーズ・フェアチャイルドというのか。珍しい名前じゃな」
「な、何故俺の本名をっ！？」

横から口を出すイセルをシカトするのには、もうみんな完全に慣れていた。

「あの……あの席じゃな。あの奥の隅のテーブルに座っておるがよい。そうすればお主らの未来は開けるであろう……」

たっぷりと占い師の余韻を含ませながらそう言い放った婆さんだが、予想通り、このメンバーの心を動かすようなことは無かった。
婆さんは「えっ！」とか「おっ！」とかいう反応ぐらいあるかと思っていたようだが、言われた当人であるグラムルを始めとして、（……ふぅ～ん……）というリアクションたっぷりに無反応だ。
そのあまりの反応の悪さに居心地が悪くなったのか、「そ……それじゃあ世話になったな」と言い残し、謎の婆さんはそそくさと酒場を去って行ったのだった。

残された一同の間に、気まずい沈黙が流れる。
その視線の中心となっていたのは、グラムル改めデブリーズ・フェアチャイルドだった。

「え、……えーっと、それじゃあ……」
「……」
「折角なので、あっちに移動しましょう……か？」
「……」
無言でそれに従い、テーブルを移動する一同。
（……な、なんでこんな、私の責任みたいな空気になってるの……！？）
グラムルの背中に、無言のプレッシャーが突き刺さる。
というわけで一行は、言われた通りのテーブルに場所を移し、いつもの如く酒盛りを始めるのだった……。
そしてほんの数分後には、さっきまでのそんな空気もあっという間に忘れてしまうのが彼らが彼らたる所以なのだ。
＊
さて、さっきまでの出来事もすっかり忘れた二時間後。
いつもの酒場にいつもの仲間。……それだけでもう何も説明は要らなかった。
最近多くなったイセルの愚痴と、ダラダラしたみんなの雰囲気。
彼らには最近、冒険者のボの字も見当たらなく、日雇いの雑用まがいの事をして、日々の食いぶちを稼いでいるのが常だった。
「あーあ、おいしい仕事無いかな～」
……ベルはいつもそればっかりだ。
「あの～……」

「そうだよねー。なんかこう、ちょっと誰かを送ってってっただけでお礼が貰えるとかさー」

グラムルも、騎士の割には何故か金にはこだわる。

……まあ、さっきの今だから無理もないといえば無理もない。切実な問題だ。

「じゃあそろそろ、俺の師匠でも探しに行くか」

スプは相変わらず唐突だ。

エール酒の最後の一滴を飲み尽くすと、イセルはしみじみと呟くのだった。

「スプの師匠か……その罪は重いな。……お姉さんおかわりー！」

何故か近くの男性店員を無視して、奥にいるウエイトレスに声をかけるイセル。

そんな彼に、ベルはじとーっと音がしそうな視線を送るのだった。

「……全く、やーね人間って」

「あ、あの～……」

「……なぁに？僕」

さっきからすぐ側で声をかけてきている子供に気づいて、シャルルが返事をする。

……ちなみに、イセルとスプはさっきからその存在に気づいていたのだが。

「ぷぷっ！子供が子供を子供扱いしてるよ」

すかさずイセルが茶々を入れる。

「む～……、子供じゃないもん！」

いちいちシャルルもほっぺを膨らました。

そういうシャルルは一人だけ、特別注文のお子様定食です。

「全くホント子供なんだから……」

『って子供っ！？』

みんな一斉にそちらを向いて叫んだ。

さすが、オーバーリアクションだな……。

「あの～……、お仕事をお願いしたいんですけど……」

彼らのあまりの勢いに気後れしながらも、その男の子は確かにそう言った。

その声は周囲の喧騒に紛れて掻き消されそうだったが、みんなその一言だけは聞き逃さなかった。

『仕事っ！？』

またも息ぴったりにそう叫ぶと、全員が一気に身を乗り出してくるのだった。

「引き受けよう」

そう言ったのはおっさんだ。

「早っ！」

……さすがリーダー。即断即決。

「せめて内容だけでも聞こうよ」

あまりの即決に、若干不安になったグラムルがたしなめた。

「あ、ありがとうございます。実は、仕事と言うのは護衛をお願いしたいんです。……僕をポルトヴァの町まで連れて行って欲しいんです」

「……ポルトヴァ？」

「はい、ここから徒歩だと大体三日ぐらいの所にある小さな町です」

彼らは（冒険者のくせに）あまりこの辺りの地理には詳しくないが、その名前くらいは小耳に挟んだ事があった。

……確か、優秀な執政官がいるとかいないとか……。

「怪しいな」

イセルは唐突に言った。

「何でですか！」

思わず少年も突っ込んだ。

「他にも冒険者はたくさんいるというのに、よりによって俺たちに声を掛けてくるというのが怪しい」

「確かに」

……スプよ、自分で頷くな。

「自分たちで言わないで下さいよ。……あなたたちに声をかけたのは、とても賑やかそうだったから……あ、じゃなくて、すごく頼りになりそうだったからですよ！」

妙に『頼りになりそう』という部分を強調する少年であった。

「怪しい。断る」

イセルは即答した。

「だから何でですか！……あ、報酬ならそこそこは払えると思いますよ」

「引き受けます」

グラムルは即答した。

「早っ！」

……ナイスタイミングでみんなから突っ込みが入る。

そのまま、仲間内でワイワイガヤガヤと騒ぎ始める一同。

「あの～、詳しく説明をしたいんですが……」

なんとなく居場所が無いような気がしながらも、控えめにそういうしか出来ない少年だった……。

＊

「……というわけで父が亡くなって、僕が父の仕事を引き継ぐことになったんです」

ソーンダイク・ラカーサと名乗ったその少年は、なんだかんだの末の交渉成立後、出来るだけ早く出発したいとの事で、次の日の朝には全員支度を済ませることになった。

もちろん、こういう所は冒険者だ。手早く準備をするのには慣れている。

……手荷物が何にも無いからではないはずだ。多分。

「なんか父親が亡くなった割にはあっさりしてるな」

まだ微妙に疑っているのか、イセルは昨日からしつこく突っかかるのだった。

……非常に大人気ない。

「いえ、そんなことないですよ。実は内心はとても……」

ダイク（そう呼んでくれとの事だった）は、それにいちいち弁解する律儀な少年だった。

これだけ聡明で利発な割に、彼はまだ十二歳だと言う。

……一種の天童と言っても良さそうだ。

一瞬、沈んだ顔を見せたダイクだが、それは本当にほんの一瞬だけの出来事だった。

部屋の中からスプの声が聞こえてきた時には、彼からそんな表情は全くどこかへと吹き飛んでいた。

「よっし、準備できたぞー」

「こっちもいいよー」

女性部屋の方からも声がして、グラムルとベルとシャルルが出てきた。
……が、シャルルはまだ眠そうだった。

「んじゃ、出発するか！」

そうイセルが言って、階段を降りて行こうとする。

「んん、オホン！」

……どうした？おっさん。

「……してもいいですか、リーダー？」

イセルがおっさんの顔を覗き込む。
イセルの半分ほどしかないおっさんの顔を見るためには、彼はかなり腰を屈めなければならなかった。

「うむ、出発じゃ」

そう聞かれ、おっさんは満足気に頷いた。
……なるほどね。

「お、おぉ～！」

なんだか気合が入りきらないながらも、ようやく彼らは長い道のりの第一歩を踏み出したのであった。

第6話　追いついた護衛人

新しい依頼の二コマ目。

「どうしていつも飯時にくんだよ」

ぼやきながら、スプが残ったスープをかきこむ。彼はもう一杯お代わりしようとしていたのに。

「同感」

スプに続けて、イセルも串に刺さっていた残りの肉を全て頬張った。……その顔にはうんざりした表情がありありと見て取れる。彼は丁度重い鎧から動きやすい皮の鎧に着替えた所だったのだ。この串が今日の夕食最初の一口だった。

「恐らく、同じ場所に留まっているのは食事時か睡眠中しかないからではないでしょうか」

他の人の何か緊張した雰囲気を感じ取り、自分の荷物を集めていたダイクが二人に向かって解説をする。

「「ガキは黙ってろ」」

そんな事は分かってるとばかりに、すかさずスプとイセルの二人が同時に答える。……実に大人気ないな。

「四……いや、五人かの」

二人とダイクのやり取りも全く気にせずに、おっさんことヌニエル・スーンが木のジョッキに残ったエール酒の最後の一滴を飲み干した。

それを肩に担ごうとして、慌てて横に置いていた戦斧に持ち変える。
このドワーフはほっといたら本当にジョッキで戦いかねないからなぁ。……しかも割と強かったりして。
……少しドキッとしたイセルだった。

「……お客さん、みたいですね」

それらと同時に、グラムルも大剣を手に取り、戦闘支度を整える。
果たして今回は活躍を見せることができるだろうか？

時刻は夜半。ダイクをポルトヴァの街まで護衛する途中の出来事だった。
特に何事も無くここまで来て、あと一日もあれば着くだろうという所で林の中で一同は野営をしていた。

「もう食後の運動か」

イセルもかなり大きい大波剣（彼はフレイムスラストと呼んでいる）を担ぎ上げ、続いてグラムルの隣へと進み出た。前列にこの二人が並ぶのが、いつもの彼らの陣形だった。

「えっ何々？」

一人事態が分かっておらず、まだベルは山草のスープを食べていた。
おいおい、貴方が一番専門家でしょうに……。
ベルが弓矢を構え、ダイクがレム睡眠になりかけていたシャルルを起こした時、『お客さん』は姿を現した。

ガサガサッ、ザザッ

森の中から、数人の男たちが立ち上がる。
誰も皆、無精ひげを生やし、髪も伸び放題。粗末な鎧を身に着けており、中には酔っ払いみたいな男もいる。……一目で分かる、ゴロツキって奴だ。

「大人しく武器を捨てりゃあ、命だけは助けてやるぞ」

先頭にいた奴がそう言った。
人数は六人。……丁度ダイクを除いた彼らと同じ数だ。
既に一同は半円状に包囲されていた。

「生憎、俺にゃあ命より大事なもんがたくさんあるんでな」

ゴロツキたちとの距離を狭めるため、近づいていくイセル。
実に無造作に見えるその動きには、ゴロツキたちに見つけられる隙などどこにも無かった。

「てめえらこそ、大人しく有り金全部置いてけば許してやるぞ」

スプもそれに続き、杖をヒュンヒュン回しながら言う。少し前の戦いで懲りたのか、前線に出ようという動きは無かった。
それを見て安心し、イセルの後に続くおっさん。
彼は常に中列の存在だ。ドワーフの持つ暗視の力は、ゴロツキたちの目線がちらちらとダイクに向かうのを見逃さなかった。

「どうやらあの坊ちゃんが目当てみたいじゃの」

それを聞いたダイクが、ビクッと肩を振るわせる。
普段は大人びていても、やはりまだ年端も行かぬ子供なのだ。彼が行動を共にしてから初めての戦いとなる。

この後に起こる惨劇に、彼は果たして耐えられるだろうか？

「一応隠れてもらってた方がいいだろ？」

そう言うとスプは、古代語の詠唱を始める。

「＊＃％＆？……、闇よ！」

彼らを挟んで、ゴロツキたちと反対側の茂みの奥に真っ暗な空間が現れる。

焚き火の炎も届かないその闇は、周囲の暗さと相乗して不気味な空間をかもし出していた。

「おいダイク！向こうに隠れてろ！」

「分かりました！」

そういうとダイクは魔法で創造された闇の方へ向かい、駆け出していく。

「あ、あのガキッ！」

やはりダイクが目当てだったらしいゴロツキたちが一斉にダイクの後を追って動き出す。

それが戦闘開始の合図となった。

まずはイセルが先頭に立っていた男に斬りつける。

しかし移動しながらの攻撃だったこともあり、その太刀はぎりぎりで相手にかわされてしまった。

その右ではグラムルが隣の男と戦闘状態に入った。今までの数々の経験を参考にして、彼女は慎重に相手の出方を窺っている。

左ではおっさんも同じく接敵していた。相変わらずこのドワーフは戦いとなると異様に張り切るな。

「ちっ、人手不足だな……」

戦闘が始まってすぐ、イセルはそう呟いた。
逃した敵は三人。皆ダイクを狙って駆け出している。
内一人は、ベルが放った弓矢に怯んだ隙に、シャルルが呼び出した光の聖霊に行く手を阻まれた。
……焚き火のみに照らされた暗い森の中に、幻想的な光が踊り始める。

「な、何だこいつ！？」

三人のうち一人は何とか足止めができたようだ。
……しかし、残った二人はそのまま一行の後ろへと走り抜け、ダイクが消えた闇へと近づいた。
さすがに前回の仕事で懲りたのか、スプも白兵戦を挑むつもりはないらしい。

「……しょうがねぇな！」

見かねたイセルが駆けつけようとするが、それはできなかった。
まだ彼の相手は戦闘不能状態にもなっておらず、そのまま駆けつけた所で人数は変わらない。

「もらった！」

背を向けた瞬間に、勢いづいて斬りかかって来た剣を振り向きざまに受け止めつつ、イセルは歯噛みする。

「うざってぇな……！」

そうしているうちに、二人の男が魔法の闇の中へと飛び込んでいく。

「どこだガキ！」
「しまった！」「ダイク！？」

グラムルとおっさんが同時に声を上げる。
いくら魔法の闇の中とはいっても、二人がかりで捜索されては捕まるのも時間の問題だ。

「……いたか！？」
「いねぇ！どうなってんだ！？」

しかし、意外にも暗闇の中から聞こえたのは、慌てたゴロツキ二人の声だけだった。

「¥@＊＜……寝とけ！」

丁度そこへ、割と聞き覚えのある詠唱が響く。
ガサッ、ドサッ。
すると二人が倒れたような音がし、ゴロツキたちの声は聞こえなくなった。

「よくわかんねぇけど、チャンス！」

ここぞとばかりに攻め立てる一行。
今回はグラムルも無事意識を保っていた。……それどころか、無傷のまま相手を追い込んでいる。

「もらいました！」
「ぐ……ぁ」

見事な大剣の一撃でゴロツキBは鎧ごと近くの木まで弾き飛ばされ、そのまま意識を失った。
向こうでは、ウィスプに顔を弾かれたゴロツキDがゆっくりと倒れていくのが見える。
イセルの相手の男もこれまでの出血に意識を保っていられず、剣を受けたままうつ伏せに倒れた。

……となると、残りはおっさんが相手をしていたゴロツキCだけ。

「後はお前だけじゃぞ？」

おっさんがそう言うと、ゴロツキCは辺りを見回して悔しげな表情を浮かべた。
相手は戦意をほぼ喪失している。

「そこじゃっ！」

狙い済ました一撃。横薙ぎに相手の肩口を狙う。
これならもし防御されても、体勢を大幅に崩せる……はずだった。

「こ、降参だ！助けてくれ！」

最後に残った一人は、凄まじい速さで地面に膝を着く。
膝を着いたゴロツキの頭の上を、渾身の力を込めた戦斧の一振りが凄まじい勢いで空を切る。

……それが戦闘終了の合図となった。

＊

一同はまず命乞いをした奴を縛り上げる。

「た、頼む、他の奴も手当てしてやってくれよ……」

最後まで残ったゴロツキCは情けない声をあげ、懇願する。
今回は身内の誰にもほとんど怪我は無い事もあり、情報を聞き出すためにも頼みを聞いてやることにした。
おっさんが回復魔法を唱え、とりあえずの処置をする。それから縛り上げようとした時だった。

「！」

「二重の罠とは、やられたな……」

「雑魚をあてがって、精神力も消耗させてから満を持しての登場ってわけか……」

「こいつらを捨て駒にした、卑怯な手じゃ」

「どうします？私はまだやれますが……」

「……相手次第よね」

一同全員が、その気配を察知したのだ。
恐らく、さっきの奴らよりも多い。
蹄の音が少しずつ近づいてくるのが聞こえる。
一同が陣形を整え、再び戦闘準備をして待つと、程無くそいつらは姿を現した。

「……遅かったようですね」

先頭に立ち、馬上から彼らを見下ろす男は、誰が見ても分かる立派な白い鎧を身に纏い、堂々たる出で立ちをしていた。その姿は間違いなく……。

「騎士!?」

グラムルが驚きの声をあげる。

……無理も無い。彼女も元は同じ身分だったのだから。

それにグラムルに限らず、他の誰もが驚きを隠せなかった。

（明らかに、さっきまでの奴らとは格が違うな……）

イセルの背に嫌な汗が伝う。戦士の勘と呼ばれるものが、全身でその男を警戒していた。

先頭に立つ男に付き従う十数人の者たちもまた、先頭の白い男にはやや劣るものの、同様の格好をしていた。

「一体どういう事……?」

彼ら全員の気持ちを代表して、ベルが呟いた。

確かにダイクは追っ手の存在を匂わせてはいたが、それが一国の騎士たちなどとは聞いていない。

もし騎士たちから追われるような存在だったとしたら、ダイクは一体何をしたというのだ……。

そう一同が思い巡らせていると、先頭に立つ白い騎士が馬を下りる。

警戒する一同を全く気にしていないように、そのまま無造作にこちらへと近づいてきた。

（チッ！）

イセルは内心舌打ちして、一歩前へ出る。同時に、他の者は一歩後ろへと下がった。

近づいてくる騎士を前にして、イセルは背負った剣に手を掛けたものの、抜き放つタイミングを掴めないでいた。
剣を抜いた瞬間に斬られる……そんな嫌なイメージが浮かんで離れない。

歩いてくる騎士は、イセルまで十歩ほどの距離まで近づいて、止まった。
そして静かに口を開く。

「……ダイク様はどこです？」

面を被っていて分からないが、どうやら若い男のようだった。

「ちっ、やっぱりダイク目当てかよ……」

悔しげに吐き捨てるイセル。どう考えてもさっきの今でこの人数相手に勝てる見込みは無い……ん？

「……？」

全員が何か違和感を感じた。

「ダイク様はどこです？」

もう一度、騎士が口を開く。

「……ダイク、様？」

全員の頭の上に？マークが浮かんだ瞬間、後ろからダイクの声がした。

「カシューナ！！」

振り返ると、依然存在していた魔法の闇の中から、ダイクが駆け出してくる所だった。

「ダイク様！」

その姿を見た騎士は慌てて膝まづき、面頬を上げるとダイクに向かって安堵した表情を見せた。

ダイクはそのまま騎士の下へ駆け寄ると、首元へ飛びつく。

傍から見るとそれは、仲の良い家族が久しぶりに再会した時のようだった。

「……で？」

完全に置いていかれた一同は、皆揃ってぽかんとした表情のまま、成り行きを見守っていた。

スプが隣のおっさんに向かって呟いてみたものの、それに答えるものは誰もいなかった……。

＊

「じゃあこれで依頼は達成したって事か？」

「そうですね。そうなります」

一同は、町へと向かう途中の道にて、馬上の人となっていた。
結局、あれから駆けつけた騎士の素性を聞いた所、彼らはポルトヴァのダイクの家に仕えていた騎士たちだと言う。

「カシューナと言います。皆様、この度はダイク様を守って頂き、誠に感謝の念に耐えません」

白い騎士はそう言って自己紹介をした。鎧の面を取った彼の姿は、二十代ぐらいに見えるほど若く、金髪に青い瞳の整った……いや、非常に整った顔立ちをしていた。

「……（ふ～ん）」
「……（へぇ～）」

しかし、このメンバーの女性（－1）たちには、何の感銘も与えていないようだった。

「仕えてるって、ダイクお前一体何者なんだよ!?」

散々ガキ、ガキとコケにしていたイセルが尋ねる。
それにはカシューナが代わりに答えた。

「ダイク様は、ポルトヴァの領主だったノルディック・ラカーサ様のご子息であらせられます。ノルディック様が無くなった今、唯一その座を告ぐ資格があるのがダイク様なのです」

「……りょっ！領主!?」

せいぜいどこかの貴族のドラ息子ぐらいにしか思っていなかった一同は、カシューナの言葉を聞いて仰天した。

領主などという種類の人々は、まだ駆け出し冒険者の彼らが気軽に会うことができるような身分ではない。
そんな身分の人に散々「ガキ、ガキ」と言い続けてきたイセルとスプは今更ながら後悔し、若干顔が青ざめているのが他の人たちにも分かった。

「……短い付き合いじゃったな」
「それじゃあね、骨は拾ってあげるから」
「惜しい人たちを亡くしましたね……」

などと、慰めの欠片も無い言葉をかける無責任な仲間たち。

「……ありがとう。死ぬ前にお前ら全員叩っきってやるよ」
「協力するぜ」

それに対して笑顔で返す二人だった。

「ははは、大丈夫ですよ。皆さんは恩人ですし、それに昔、父が言っていました。『厳しい言葉をかけてくれる者を大切にしろ。周囲の者が皆お世辞を言うようになったらおしまいだ』って……」
「いや彼らはただ単に馬鹿にモガモガ……」
「いやぁ～素晴らしい父上ですな、スプ君」
「全くですな。はっはっは」

グラムルの口を押さえながら不自然に笑う二人だった……。

野営地をそのまま後にし、カシューナが引き連れてきた部下たちの馬を借りて一行は街へと向かうことになった。
ちなみに、襲ってきたゴロツキたちを尋問してみたものの、奴らはポルトヴァの街の仲介屋に言われて襲ってきただけだった事が分か

った。
『ダイクというガキを連れて来い』という命令を受けていたらしい。
それ以上の事は何も知らないようだった。とりあえず、「狐目」という仲介屋の情報を聞いてその場を去った。
……このまま順調に行けば、明日の昼には目的の街に辿り着けるようだ。
今度はカシューナや御付の騎士たちもいるし、気楽な旅になるだろう。

（後は、どうやって報酬を吊り上げるかだな……）

邪な考えが一行を支配していた。

「そういえば、さっきお前どこに隠れてたんだよ。完全にダメだと思ったぜ」
「あぁあれは、あの闇の中にいるふりをして、そのまま通り抜けた所にある木のうろに隠れてたんですよ」
「へぇ～、いつの間にそんなもん見つけてたんだよ」
「食事の前に、何だか寝やすそうな所だなと思って見てたんですよ」
「ふ～ん……」
「……ダイク様、たくましくなられて……」

街道を馬に揺られて歩く一行に、眩しい朝日が差し込み始めたのだった……。

第7話　次なる街の掃除人

ダイクという子供を護衛してポルトヴァの町に着きました。
ポルトヴァの領主の屋敷、ラカーサ邸にて。

＊

中庭からは鋭い掛け声が聞こえてくる。

「やっ！」「踏み込みが甘い！」
「せやぁっ！！」「小手先に頼るんじゃないっ！」

そこでは、グラムルとカシューナが剣の稽古をしていた。
カシューナは相当の剣の腕を持っており、その腕前を認めたグラムルが空いた時間にと稽古をかって出たのだ。
実際に手を合わせてみるとカシューナの実力は計り知れず、駆け出しの彼らが敵うような相手ではなかった。イセルが思わず冷や汗をかいたのも納得できる。

そしてそんな二人を見ながら、シャルルはベンチのような所に座って日向ぼっこをして眠そうだった。
このハーフエルフは、一体一日何時間寝れば足りるのだろうか。……食うか寝るか。所構わずだ。

そしてしばらく体を動かした後、休憩時間に今回の事件についての話となった。

「と言うことは、そのラバン公爵とやらがダイク……様の事を？」

取ってつけたような敬語に返ってきたのは苦笑ではなく、屈託無く笑うカシューナ。

「ははは、私が言うべきことでも無いと思いますが、呼び捨てでも結構ですよ。

　このようなことになってしまい、ダイク様は本来ならば同じ年代の子供たちと遊んでいるのが当たり前だったのに、立場上それも難しくなってしまいました」

確かに、屋敷に帰ってからのダイクを見ていると、とても十二歳相応には見えなかった。

ある種の威厳を持つように保ち、それに従うように周囲の人々は合わせているように見えた。

グラムルも（一応）騎士だった時があるが、その時と比べても今のダイクの状況は堅苦し過ぎるようにも思う。

「代わりが勤まるとは思いませんが、私がノルディック様の代わりになろうとすることはできても、ご友人になることはできません。

　もうこの屋敷の中でダイク様のご友人になれるような者はいなくなってしまいましたからね……。

　なぜかあなた方にはお心を開いているようですので、どうか気兼ねなく接して頂いた方が助かります」

カシューナは一瞬、翳りのような表情を見せたが、それも一瞬だけの事だった。

その後には、いつもの通りダイクのお目付け役で近衛隊長としての顔に戻っていた。

グラムルはそこにカシューナの人柄のようなものを初めて見ることができ、微笑を浮かべた。

「そんな事言っても知りませんよ？ただ精神年齢が低いだけだと思いますから」

……あのドタバタ人間たちが、そんな事に気を使っているはずもないだろうな。

それだけは断言できた。

「こらーっ！待たんかーっ！」

「やーだよーっ」

一方その頃。

屋敷の裏庭では、ほうきを持ったおっさんとそれに追いかけられているスプの姿があった。

ポルトヴァの町についてダイクの屋敷に世話になることが決まってから、タダ飯を食らうのも申し訳なく、おっさんは自発的に屋敷の手伝いをし始めた。人間としては素晴らしいが、冒険者としては哀しい。

「はぁ。それではその式典が行われると、ダイク様は正式な領主様になられると……？」

「はい。急にこのようなことになってしまい、非常に残念です……。

先代のノルディック様は、この町がまだ大して大きくない町だった頃から町の発展に貢献してこられ、町のみんなの尊敬の的でした。

交易路を整備し、近くの遺跡も調査したり、周辺の魔物も退治してついには領主にもなられたのですが、まさかまだこれからという時に事故だなんて……。

ダイク様は非常に真面目な方ですので、まだ幼いながらも自分の立場など、その辺り十分に自覚なさっておられるようなのですが、それが返って不憫に思える事もあります」

「なるほど……」

そんなわけで、清掃業で仲良くなった庭師の老人と語りながら、落ち葉を掃き集めていたのだった。
その時、厨房の方から叫び声が響いた。

「泥棒ーっ！」
「むむっ！？」

清掃中には武器は持っていない。
おっさんは持っていた竹ぼうきを一振りすると、肩に担いで声の聞こえた方へと走って行った。

「うまそうな肉、頂きっ！」

駆けつけたおっさんが見たものは、裏口から逃げ出してきた男だった。
全身を隠すようなローブを身に纏い、フードをかぶって顔を隠している。いかにも怪しげな風貌だ。
おっさんはその逃走経路に立ちはだかり、ほうきを構えると泥棒に向かって怒鳴った。

「夕食をつまみ食いする奴は、落ち葉と一緒に燃やしてやるからな、スプ！」

泥棒は直角に方向転換すると、フードを取った。

「おいおっさん！顔も見る前から決め付けるなよな！」
「つまみ食いをする奴なんざ、お前かイセルしかおらん……多分」

……そして二人の追いかけっこが始まり、この後ゆうに三十分は続

いた。
おかげで二人とも、非常においしく今日の夕食を迎える事ができたのだった。

＊

さらにその頃。町ではベルとイセルがぶらついていた。

「ちょっと失礼ね。ぶらついてるわけじゃなくてちゃんと目的があるんだからね」
「分かった分かった。じゃあ俺はしばらくぶらついてるから。遅かったら先に帰っててていいぞ」
「全く、何のために来たのよ……」

そうぶつくさ言いながら、ベルは酒場の奥へと入っていく。盗賊たちのギルドに顔を出すためだ。
前回に手に入れた唯一の情報、『狐目の男』の正体を探るためだった。
ベルは普段、盗賊というよりも狩人のような技術に長けているのだが、他に向いている人物がいないため、盗賊の役割も果たすことが多かった。
……彼女が向いているかというのも甚だ疑問だったが。

イセルは一応知らない町だから、という理由もあり、それにくっついて町の見学をしに来たのだった。
居れる間はいつまでも住み着いてやろうと思っているが、いつ叩きだされるか分からない。
スプのつまみ食いにいい加減呆れられている頃だ。
そうなった時のためにも、町の様子を掴んでおくことは必要だった。

「へえ、そんじゃ今は、そのペ、ペヨン……？」
「ラバン・ジェイスン公爵」
「そう。そのラバン公って奴が領主代行してんだ？」
「ああ。まあそれも爵位継承の儀が行われるまでだけどな」
「ふ～ん……」
「なんでも、新しい領主は先代の息子の美形の騎士だって話だぜ」
「へ？……まだ幼いガキんちょじゃないの？」
「そういう話もあるな。でもその騎士は領主様の屋敷から出てきたって話だぜ？ガキなんて見た事もねぇよ」
「ほぉ～、そうなんだ……」

少ない所持金の中から一杯おごり、酒場を出る。どうやら町ではダイクの知名度はほとんど無いらしい。
領主が代わると言うのに、その人物を知っている人間はあまりいなかった。

（こりゃ何か起こるな……）

何人かの人物と話した結果、イセルの直感にピンと来る物があった。
それは、騒乱製作者（トラブルメイカー）としての直感かもしれない。この町にどことなく漂う雰囲気の危うさに気付いた。
それに、外からの人間が増えているという話もある。これは、事件が起こる前特有の雰囲気だった。

先代領主の不審死。
未熟な次期領主。
いい噂を聞かない対立候補の存在。

これらの要素は、この相次ぐ戦乱で不安定な世の中で、多少人生経験のある者たちからすれば、簡単に起こりうる事件を予測できる材

料だった。
ただし、その事件の結果がどうなるかは……関わった者たち次第だ。
そのこともまた、イセルはよく知っていた。

＊

そして夕食の時間。
彼らは特別に次期領主とカシューナが座るテーブルに同席を許されていた。
今日の夕食はパンときのこのスープ、それに川魚のムニエルと海草サラダ。
食後に用意されているのは南国のフルーツだった。
思わずスプが声を上げた。
「お前いつもこんなの食べてるのかよ！」
「今日は皆さんのために特別ですよ。いつもはもっと質素です」
屋敷に帰ってからはずっと勉強尽くしのダイクが答える。
疲れているだろうが、そんな表情は少しも見せなかった。
夕食が始まると、ダイクは話を切り出した。
「あの、皆さん……」
「おい、このスープうめぇぞ」「魚もうまい魚も」「あーこんな贅沢な食事いつぶりかしら？」
「……皆さん、話があるんです……」
「あーっ！あたいのご飯！」「お前はちっちぇえからいいんだよ。俺はでかいから足りないの」「ちょっと、小さい子相手にみっともないですよ」「そう？じゃあお前のもらお」「……あぁっ！何するんですかっ！？楽しみにとっといたのに！」

「みっ、皆……」

わいわいがやがやわいわいがやがや。

『皆さんっ！！！』

……シーン。

「……何だよ、メシ時にうるせえな」

「……。……いえ、いいです。後にしましょう……」

（ダイク様、頑張って……）

今日学んだ事／『食事時に話を持ちかけるのは自殺行為だ』ダイクの日記より

食後。

ダイクは次期領主の勤めがあるため、席を外していた。

「ちょっと聞いてよ！そんな金じゃ売れるネタは無いって言うのよ！？いくらこっちが貧乏だからって足元見ちゃってさ！じゃあいくらならいいのよって聞いたら、『今ラカーサ家の関係者にやれるネタは無い』だって！何よ！何様のつもりなのよ！」

ベルのテンションは沸点を超えたまま戻ってこない。今日のギルドで仕入れた情報の報告だった。

「おい。……おい、ベル落ち着けって」

若干引き気味の周囲の中、一人イセルだけがなだめようとしていた。

「なるほど。やはりそうですか……」

その中でも、カシューナだけは一人納得している。

「あれ？カシューナさん何か知ってるんですか？」

「カシューナさん、あんたはどうやら心当たりがあるようだな」

イセルも訳知り顔だ。他の皆は？？？な顔をしている。

それを見たカシューナが解説を始めた。

「ベルさん、そんなに怒ること無いですから。

……要するに、ギルドは既に何者かに依頼されてるんですよ。恐らく口止め料込みですね。

ギルドにとっては依頼者を裏切るわけにはいきませんから、遠まわしにそうやって断ってるんですね。

しかも、やはりというか、私たちが標的の何かが……」

「既に関係者だとバレてるようだし、俺たちの事ももう知られてるみたいだな。……それにしてもあんた、領主のお目付け役なんかにしちゃあやけに詳しいな」

「あ、いや、ええまあ。昔ちょっと……」

（昔ちょっと？）

全員の注目がカシューナに集まったが、彼はそれ以上何も言わなかった。

……彼にも色々あるらしい。

そしてイセルは、町で感じた雰囲気の事を簡単に説明した。

「なるほど。それでダイクが狙われてるってわけか」

「やはりそうでしたか……丁度良かった。食事前にダイク様がおっしゃりたかったのはその事なんです」

「その事？」
「皆様には、引き続きダイク様の護衛をしてもらえないかと」
「……なるほどね」

カシューナの依頼は、数日後に控えている領主継承の儀が無事に終わるよう、ダイクの護衛をしながら事件の事を探ってくれないかというものだった。
それを聞いた一同も、断ろうという者はいないようだ。事件が解決するまではこの屋敷に住まわせてもらうことを追加条件に、一行は依頼を引き受けることにした。

「そう言えば、ちょっとごねてみたら『狐目』って奴の事なら聞けたわよ。」
「『ちょっと』？その相手の奴も可哀想に」
「うるさいわね。何か最近見かけないんだってさ。丁度二、三日前から」
「行方をくらましたってことか？そりゃいよいよ怪しいな……」
「でも一体誰が……。ギルドとかチンピラに頼んでるような黒幕がいるって事でしょう？」
「そんなのは一人しかいないだろ？ダイクを狙う動機があって、一番得をする人物といえば……」
「ただ、証拠も無いのに追求はできません。今、私の部下が探っている所ではあるのですが……」

……ふむふむ。
なんだか怪しい臭いがしてきたな。
……さては明日の食事は、さらに豪勢な肉料理に違いない。
スプはただ一人、明日のつまみ食いの計画を練るのに忙しかった……。

第8話　お騒がせな暇人

領主継承の儀式まで、ダイクを護衛することになりました。

＊

特に何事も無く数日が過ぎ、領主継承の儀。
今日は朝から屋敷の全てが慌しい。
よって、いつもなら自由奔放に好き勝手に過ごしている一行も、今日ばかりは肩身が狭く、居場所に困っていた。

「よろしければ、皆様の分の着替えも用意してございますが？」

といって着替えを促してきたのは、身の回りの世話をしてくれているフェッケンという司祭だった。

「え～、このままのカッコじゃダメなんですか？」
「汚れた格好では困りますんで」

ちょっとごねてみたグラムルを、フェッケンは即座に切って捨てる。
一行ともここ数日でかなり親しくなり、彼を始め、屋敷で働いている面々とは気心の知れた仲になっていた。
そしてまあ護衛であるからには、近くにいないのもまずいからということで、全員着替えて儀式に参加することになったのだった。
一応正式な式なので、ということで何とか一同を説得し、フェッケンは全員を正装させることに成功した。

「ど、どうでしょうか……？」
「馬子にも衣装だな、うん」

「……げし」
「いてっ」

うん、見事にセオリー通りだな。
自信無さそうにおずおずとドレス姿を披露するグラムルに対し、容赦なく致命的一撃を叩き込むイセル。
ただでさえ自信の無さそうなグラムルの顔が、一気に瀕死の表情に近づいた。
横にいたベルがその様子を見て呆れる。

「ほんっとに気が利かない男ね！……いこ、グラムル」

……つかつかと近くに寄ってくると、靴のかかとでイセルの足を踏んだ。

「いってぇ！……ったく、だから言った通りじゃねえか。そんな暴力的なお嬢様がいるかよ」

それが世の中にはたくさんいるのだが、まだ若い彼には知るよしもない。うん。

「まあ、今のはしょうがないな、うん」

さらに横で見ていたスプが冷静に解説する。

一応、この女性二人とも、普通の男が見れば思わず振り返ってしまうほどにドレス姿はそれなりの魅力を発揮していたのだが、やはり普段からの中身を知っていると、反応も違うらしい。

「ちっ、まあいいや。俺が本当の育ちの良さって奴を見せてやるぜ。

……おいスプ、飯でも食おうぜ」
「もう食ってるよ」
その手には、一体どこから調達してきたのか、一皿分の食事が乗っており、既にその半分ほどが消費されている痕跡が見て取れた。
その様子を見て呆れてなのか羨ましいと思ったのか、すかさず会場へと足を運ぼうとする一行。
しかし突然、その前に大きな影が立ちふさがり、野太い声が降り注いできた。
「お主等何者だ!?」
立ちふさがったのは、身長2mに達しようかというほどの大男だった。どこまでが髪の毛でどこからがひげなのか分からない顔立ちをしており、一目で見て分かるほどの屈強な戦士という体格をしている。
「な、何ですかあなた。……私たちはダイク様の警護の者ですけど」
いきなりの無粋な物言いに、たじろぎながらもグラムルは返答するが、彼女のその美麗な格好からは想像もつかなかったのか、その声の主はあからさまに怪しんでいるようだった。
「なぁにぃ～……?本当か?」
「本当ですよ、ズーマン様」
「おお、フェッケン。そうだったか、失礼した。私はラバン公の警備隊長ズーマンと申す。警備の方はよろしく頼むぞ」
どうやら二人は見識があるらしく、その一言ですぐに収拾がついたようだ。

ズーマンという男は、警備隊長というその肩書きのためにか、見たことのない者にはこうして声をかけているらしい。
二言三言、ズーマンとフェッケンが何か言葉を交わしていると……。

『キャーッ！キャーッ！』

急に入り口の辺りから黄色い声が響いてきた。
それを聞いたズーマンが、明らかに苦い表情を露にする。

「ちっ、相変わらずカシューナの奴め」
「……おや？ズーマン殿」

カシューナと一言会話をしよう……あわよくば今夜のダンスの相手にでも……！と切実な顔をして群がってくる女性たちを、どうにかこうにかかき分けながらこちらへやってきたカシューナは、ズーマンを見ると軽く挨拶をした。
が、ズーマンはそれには大して取り合わずに、不機嫌そうな顔をしたまま、カシューナの視線からは顔を逸らしている。

「フン、それでは任務があるので失礼する」
「ええ、では」

そしてそのまますぐに足早に立ち去って行ってしまった。

「何？あの人。感じ悪いんだけど」

歩いていくズーマンに聞こえないように、ベルがこっそり呟く。

「まあ、腕は確かな人物ですよ。……評判はともかく、ね」
「悪人顔だわ」

どストレートな感想に、思わずカシューナは吹き出した。

「っははは！イゼベルさん鋭いですね。……それより皆さん、本日は素敵なお召し物ですね。本物の貴族令嬢と言っても通じそうですよ」

「あらほんと？おじょーずねー！ほほほ」

「いやあのそんな……」

図に乗るベルと謙遜するグラムル。……お世辞か否か、カシューナは続ける。

「どうですか？よろしければ一曲踊って頂けませんか？」

「「えっ！？」」

思っても見なかったという顔で二人が固まった。

（えーどうしよー踊りって食べれるのかしら？それよりおいしいのかしら？どうやって食べたらいいの？いやいやそうじゃなくてそれより……）

と、イセルは二人の心情を読み取ってみた。おそらくあながち外れてはいないだろう。

明らかにさっきまでと違い、笑顔が引きつっている二人。

「こここーゆーのはやっぱり騎士さんでしょ。グラムルさんどうぞ」

「ええいやあのその……、え、遠慮しておきます……」

「あら、そうですか。残念ですね。それではダイク様の所にいますので。ごゆっくりどうぞ」

「「……」」

慌てふためく二人を意に介さず、さわやかに挨拶をすると去っていくカシューナ。
それにやや遅れて、女性たちの群れがそそくさと追っていく。
一行はそれを無言で眺めていた……。

「うわ～……、ホントにあーいう男っているのね。驚きだわ」
「……ベルちゃん。本音出過ぎ」
「このフルーツ、おいしいよ～？」

（諸君、見た目に惑わされてはいけないぞ……）

そう願うイセルとは裏腹に、会場にいる男のほとんどが現れた二人（＋一名）を見て、何とかお近づきになれないだろうかと横目で見ながら噂しているようだった。
が、そんな男達の希望も空しく、どうやらこの二人には、会場に満ちている雰囲気は全く関係ない世界のようだった。
そしてさらに関係ない世界の住人であるシャルルは、完全に迷い込んだ子供と化していた……。

＊

後でベルが仲のいい使用人さんから聞いた話によれば、ラバン公の警備隊長ズーマンは元山賊の頭領だったとかで、その腕っ節を買われて今の役職に就いたらしい。
全くなんであんな人を……という不平ももれなく付いてきたそうだが、その手の話はベルの得意分野だったので、すっかり噂話に花が咲いたようだった。

「皆様には席が用意されていますので、着席してジッとしててくださいね！」
「え～っ」
「え～っじゃありません」

一行の性質をよく理解しているのか、フェッケンは強く嗜めると、自身も何かの準備があるらしく、どこかへ行ってしまった。
もちろんそう言われたからといってジッとしている彼らではないのだが、動き出す前に式が始まってしまったため、雰囲気的に大人しくするしかなくなってしまった。

どうやら先ほど簡単に聞いたところによると、相続権継承の儀式は、仕切る人が名乗って宣言し、それをお偉いさんたちが見届けることによって完了するらしい。
そしてその人数が多いほど名誉なことだとか何とかいう話だったが、おそらくあんまり……いやほとんど絶対関係ない彼らにはそれほど興味がない話だった。
それよりも、その後の宴でどんな豪勢な料理が振舞われるかどうかの方が、彼らにとっては一大事なのだ！
……とか考えていると、式が始まった。

「我が名はラバン・ジェイスン。これよりソーンダイク・ラカーサの相続権継承の儀を行うことをここに宣言する！」

壇上に上がり、猛々しくホールに響き渡る声で、言葉通り宣言した男に注目が集まる。

（あれがラバン公か……）

ほとんど料理のことしか興味がない彼らだったが、それでもその名前と顔だけはしっかりと記憶した。
妙にやせて背の高い引きつった顔の男だな……というのがグラムルの第一印象だった。
彼はこういった儀式には慣れているのか、彼女だったら噛み噛みになってしまいそうな長ったらしい台詞を、淀みなく喋っていく。
妙に演技がかったそのアピールが気になって見ていたのと、妙に窮屈なドレスの着心地の悪さのおかげで、儀式中もそれほど眠くならずにすんだグラムルだった……。

＊

「ったく、スプの野郎どこに行きやがったんだ？せっかく俺の育ちの良さを見せてやろうと思ったのに……」

宴も酣。
つつがなく継承の儀式も終わり、一応緊張して成り行きを見守っていた一同の肩の荷も下りたので、それぞれでこの宴を楽しんでいた。
といっても彼らは専ら食事に目と口を奪われていたのだが、会場では管弦楽団によるＢＧＭに合わせて、優雅に舞踏の席も始まっていた。
カシューナはターゲットされていた女性たちからの誘いを断るのに忙しく、同様にベルとグラムルは、とにかく必死でダンスの誘いを断りながら逃げ続けていた。……あれじゃあせっかくの料理も喉を通らないに違いない。……もったいねえな。
そんなことを思いながら、イセルはバルコニーに出て夜風に当たっていたのだった。
もちろん彼は踊るつもりなど微塵もない。

「……あら？先客がいらっしゃいましたのね」

その声に振り返ると、一人の女性が外に出てきたところだった。
同年代？……いや、少し上だろうか。

「あ、ええ。すみません。とても夜風が気持ち良かったもので……」
「そうですの。……あ、本当だ」
「良かったらご一緒にワインでもいかがですか？この風にとても良く合いますよ」

みんなの前ではとても口に出せない台詞をサラリと話すイセル。
昔は、こうしてよく女性を口説いていたものだったな……。そういえばダンスだってしてたっけ……。
少し前のことを、何だか遠い昔のことのように思い出してしまう。

「ええ、そうさせてもらおうかしら。ちょっと頂いて来ますわね」
「どうぞレディ」

自然に出てしまうその言葉に、若干の懐かしさを覚え、笑ってしまう。
まあ嫌いではないが、今となっては今の暮らしの方がやっぱり性に合っていると思う。
キョロキョロと辺りを見回し、こんな姿は絶対に奴らには見せれないなと思った。
……そう、特にあの暴走魔術師には特に……！

（『キザってのは気に障るって書くんだよ！』とか言って魔法でも飛ばしてきそうな……）

まさか、下とかにいたりしないよな……？
思わず身を乗り出してバルコニーの下を探ってしまうイセルだった。

その時……。

「……むっ！この邪悪な波動は……！？」

―＃％＃％

瞬間、その殺気を感じ取ったイセルだったが、気付いた時にはもう遅かった。

体制を立て直すまでも無く、強烈な睡魔に襲われる。

そしてそのまま……。

「う、……うわぁっ！」

一瞬の浮遊感の間に、何とか手に持っていたグラスだけは離れた場所に放ることに成功した。

そのグラスが、甲高い派手な音を立てて割れると同時に、イセルの体も地面に到着した。

ドサッ、ガシャーン！

「……っ！！！」

「キャーッ！」

「だ、誰か落ちたぞー！」

一階の入り口付近にいた人々の間から悲鳴が上がる。

落ちたイセルに、すかさず駆け寄ってきた影があった。

「い、イセルさん大丈夫ですか！」

「フェ、フェッケンか……？」

「一体どうしたんです！？今、誰か呼んできますから！」

（い、いや……アンタが癒してくれよ……）

司祭であるフェッケンには、癒しの魔法が使えるはずなのだが、どうやらそれほどでもないと判断されたらしい。

ヘンな角度に首が曲がっているイセルを一人残して行ってしまった。

が、それ以外にはパッと見そんなに外傷があるわけでもなく、板金鎧を着ていたならともかく、儀式用の簡素な皮鎧しか身に付けていなかった彼にとっては、二階から落ちたぐらいで致命傷になるようなやわな鍛え方はしていなかった。

しかし……。

「イセルさん！どうしたんですか！？」

フェッケンに呼ばれてきたであろうカシューナの真剣な顔を見ながら、イセルは体の違和感に気付く。

（あ……あれ……？打ち所……悪かったかな……？）

睡魔が残っているのもあるだろうが、どうやらそれだけでは無さそうだ。

目の前のカシューナの顔がぐにゃりと歪み、辺りに星がチカチカ点滅し始める。

やばい、これはやばいな……と思いつつ、カシューナに最後の伝言を残した。

「か、カシューナさん……。てき、敵襲……だ……ガクッ」

「「敵襲っ！？」」

その言葉に、イセルの言葉を聞いた二人ともが顔色を変える。

一瞬顔を見合わせて、呆気に取られた顔をするが、次の瞬間にはす

ぐにカシューナの口から号令が発せられていた。

「て、敵襲だーっ！であえであえーっ！」

その言葉に辺りが騒然となる中、騒ぎを聞いてバルコニーに駆けつけてきたグラムルは、目の前で呆然としている顔見知りの魔術師の姿を見かける。

珍しくこっちにも気付いていないぐらいの様子だったので、声をかけてみた。

「……どうしたんですか？スプ？（ポンッ）」

「（ビクッ）えっ！？……い、いや何でも……」

声をかけられたことに予想以上に驚いていたスプは、グラムルの問いかけを待たずして、会場の中へと小走りに戻って行ってしまった。

グラムルはおかしいとは思いつつも、まあ彼がまともな時の方が珍しいか、と一人納得して手すりの向こうへを意識を向ける。

一階では、何人もの人々が慌しく外へ駆け出していく所だった。

＊

「……大変です。最悪の事態が起きました」

一同を集め、カシューナが神妙な面持ちで話したのは、それから約一時間後のことだった。

イセルやスプを始め、何事かと固唾を飲み込んで待った次の台詞は、衝撃的なものだった。

「ダイク様がさらわれました」

「なっ……！？」

誰もが二の句を告げずに絶句する。

「えっ！？」

「ええっ！？」

（だって……あんなに人がいたのに……？）

各々の顔に、そんな言葉が見て取れる。特に、イセルとスプの驚きようは半端なかった。

確かに、不審者が入り込みやすい状況だったとはいえ、そこから誰かを……ましてや最も注目を浴びていた人物を連れ去るなど、人間業じゃない。

「カシューナさん、本当なんですか！？」

あまりといえばあまりの出来事に、おっさんが代表して尋ねてみる。ちなみにおっさんは、フェッケンの代わりにイセルの看護役となり、まだまだ飲み足りんのに……とかブツブツ言いながら、控え室の一つに篭っていたのだった。もちろんイセルも同様である。

「私も最初は冗談であってほしいと思いましたが、……事実です」

その問いに対して大真面目に答えるカシューナを見て、誰もそれ以上聞くことはできなかった。

もちろん最も責任が重大なのは彼なのだ。

「でも、どうやって……？」

「まだ捜査中なのですが、……おそらく内通者がいるようです」

「えっ！？」

再び一行の間に動揺が走る。
確かにそれなら納得ができた。あれだけの衆人環視の中でダイクを連れ去ることができるとしたら、内部の手助け無しには無理だろう。しかし、誰が……？という当然の疑問を口にする前にカシューナが答える。

「内通者は、現在慎重に捜査中です。残念ながらもうしばらく時間がかかりそうなので、待っている時間はありません」
「待っている時間……って、ダイクの行き先は分かってるの？」
「……それより、我々にそんなことまで話してしまっていいんですか？」

内通者、と聞いて不思議に思ったおっさんが尋ねる。……一応こう見えても、怪しまれそうな存在であるという認識は持っているのだ。

「皆様は元々偶然介入した部外者だと認識しているので、こうしてお話している限りです。それに、これからダイク様を連れ戻しに行く場所では皆様の力が必要になりそうなので」

さすがに今回ばかりは誰も『我々も、誘拐犯の仲間かもしれませんよぉ？』などと軽口を叩くことはできなかった。
それほどまでにカシューナの顔は切羽詰っていたし、こんな時に軽口を叩く代表人物のうち、一人のイセルは今回の事件の発端が自分にあるという責任から、そしてもう一人であるスプは何故かフードを深くかぶって口を開こうとしなかった……。
彼らはお互いに、目を合わせそうで合わせないよう、妙に意識している感じだった。
もちろん会話も無かったが、今のこの状況でそれをおかしいと思う人は誰もいなかった。

「じゃあもう、ダイクの居場所は分かってるんですか！？」
「それなら早く行きましょう！」

勢いよくそう言うグラムルとおっさんに、カシューナは少しの沈黙で答える。
何かを迷っているようだった。

「？」
「こうなった以上、もう隠しておいても仕方ありませんね……」

カシューナが重い口を開いた後に語った事実は、一同をさらに大きな事件へ巻き込んでいく流れを加速させていく。
そしてこれが様々な運命の分かれ道の発端となった瞬間かもしれなかった。

「ダイク様が狙われる理由は、もう一つ存在するんです」

第9話　目覚める炎

「ダイク様が狙われる理由は、もう一つ存在するんです」

その言葉に続いてカシューナの口から紡がれた内容は、否が応にも彼らの緊張感を高まらせるものだった。

『ダイク様の頭の中には、古代遺跡の魔法装置の起動パスワードが眠っているのです……』

そんな台詞で始まったカシューナからの説明をまとめると、以下の通りだった。

先代ノルディックがこの街を興す前に探索した周辺の遺跡内にて、幾つか眠っていた魔法装置を発見した。

だが無用な混乱をもたらさないよう、この事実をごく近しい関係者だけに止め、その起動のキーワードであるパスワードを本人とその後継者であるダイクの無意識下に封じたのだった。

同行していたカシューナはその事を知っていたが、どこからかその情報が漏れ、まだ遺跡に残っている魔法装置を狙った者の犯行に違いない、と。

一通り説明が終わった後、最後にカシューナは静かに口を開いた。

「……皆さん、ダイク様をさらった者達は『狂気と炎の眠る遺跡』へ向かっているようです」

＊

「あそこがその遺跡か」

その遺跡は街から程近い、半日ほどの距離にあった。
イセルが格好をつけて丘の上から見下ろしている。……もう事件のショックはすっかり無くなってしまったようだ。
目的の遺跡から少し離れた場所で、一行は様子を窺っていた。
既に探索しつくされており、目ぼしい物は全く無い……という情報だったのだが。先ほどの話を聞いた後では、また見る目が違ってくる。

「ええ、ちょっと待って下さい」

カシューナがそう言ったかと思うと、手を口元に当てた。

「ピーッ！」

同時に甲高い鳥の鳴き声に似た音が響き渡る。誰かに合図をしているようだった。

「わぁ、カシューナさん上手！」

単純に喜んでいるシャルルを横目で見ながら、イセルはやはり何かを感じていた。

（狩人（レンジャー）のスキルだと……！？やっぱりただ者じゃねぇな）

「カシューナ様」

突然、近くから声が掛けられた。
おそらく全員が誰かが来るのを察していたはずだが、その気配に気づいた者は一人もいなかったようだ。
相当の実力者であることは確かだろう。

「御苦労」

カシューナは全く驚いた様子もなく答える。
それに応じて、茂みの奥から一人の男が姿を現す。ベルはその男を見て、どことなく野生の狼を連想させる雰囲気を持っている人間だと思った。

「彼はクラウド、密偵です。ずっとラバン公の動きを追わせていました」

カシューナがそう紹介する。クラウドと呼ばれた狼的雰囲気の男は全く表情を変化させず、一同を一瞥しただけでさしたる興味も無いように話を続けた。

「気になることが」
「言ってみろ」
「何者かが奴らを追っています」
「！？」

クラウドの低い声がもたらした情報が、一同をより一層緊張させる。驚いた様子を見るからに、カシューナもその事は知らないようだった。そして何やら考え込んでいる。

「中々の手練れのようです。恐らく気づかれました。申し訳ございません」
「……それほどの者か」

クラウドに対する叱責も無く、カシューナは考え込んでいる。
クラウドという男をかなり信用しているようだ。

「魔術師もいると思われます」

少しの間、カシューナは腕を組んで考え込んでいたかと思うと、直ぐに顔を上げた。

「分かった。我らはダイク様を救出に行く。お前は引き続き調査を続けてくれ」

「ハッ」

そう短く返事をすると、クラウドという密偵は現れたときと同じように、周囲に溶け込むように消えていった。

「……どう思う？」

「カシューナさん、何か心当たりがあるんですか？」

「ない……ことはないんですが、現段階ではまだ可能性が多すぎて搾りきれませんね。もう少し情報を集めてみないと」

「そうですか……」

「それにしても、『狂気と炎』……ねぇ。あんまり嬉しくないネーミングだな」

「……全くです。正式名称は分かりませんが、そんな通称で呼ばれている所ですから、十分注意してください」

「君にゃあピッタリの名前じゃねーの」

「お前にだけは言われたくねーよ。この俺様が使うんならともかく、他人が使う炎なんてのはろくなモンじゃねーからな……」

イセルもスプも、大分いつもの様子を取り戻してきたようだった。

こうでなくては調子が出ないな。他のメンバーも、安堵半分、迷惑半分といった感じだった。

そしてそんなイセルの推測は、そう遠くないうちに現実化してしま

うのだった……。

＊

遺跡の入り口には、三人の見張りが立っている。

「どうする？眠らせるか？」

「……いえ、どうやら無駄のようです」

兵士たちはあまり慣れた様子では無さそうだったが、緊張感に溢れているのはありありと見て取れた。

……どうやら、追っ手がかかることは承知の上、といった風だ。おそらく、次の対策も練られていることだろう。

離れた茂みからその様子を観察していた一行は、どう切り込んでいくかを相談していた。

普段の迷宮探索とは今回はわけが違うのだ。

「結局、我々には時間があまりありません。多少危険でも突入するしか方法が……」

カシューナがそう言った後、言葉を濁す。

ダイクがさらわれてからの彼は、あまり休めていないようだ。

……一行から見ても、普段と比べてカシューナが焦っている様子が伝わってくる。

さらに、今回の事件に自分たちを巻き込んでしまったことに対して、責任を感じているらしい。

「責任を感じる必要はありませんよ。護衛である我々にも責任は同様にありますし、これぐらいの危険なら普段から覚悟しておいてしかるべきですから」

そういうおっさんの言葉に少しだけ安心したのか、カシューナはいつも通りの落ち着きを取り戻したかのように見えた。

「……ええ、では行きましょう」

全員で正面から進み、ある程度の距離まで進むと、代表してカシューナが声を張り上げる。

「ダイク様を返してもらいに来た！」

その言葉に、入り口のすぐ奥の暗がりから数人の兵士たちが出てきた。
どうやらやはり完全に待ち伏せされていたようだ。確かにこれでは、見張りを眠らせた所で意味が無かっただろう。
そのうちの一人、リーダー格らしい男が口を開く。

「やはり来たな、カシューナめ」
「……ほう、私も有名になったものですね。あなた方のことはさっぱり存じ上げませんが」
「ふふふ、その余裕面もいつまで持つかな？……こいつを見てからもな！」

その言葉に応じて、入り口の奥から引き出されてきたのは、大砲を一回り小さくして筒を細長くしたような形の物だった。
おそらく何らかの兵器であることは間違いないだろう。
二人がかりで動かすのがやっとの重さのようだ。
……そして、筒の根元辺りには何か操作盤のようなものが付いている。

そしてその前で、さっきから喋っているリーダー格の男が筒先を定め、もう一人の男が操作盤の前に陣取っていた。
何やら手に持った羊皮紙を見ながら盤を操作しているらしい。
そしてそれを取り囲む兵士たちが六人。両者の間は約三十歩ほど離れていた。

――。

緊迫する遺跡前でのやり取り。さっきと一転変わって、辺りを無言が支配する。
近くの茂みから鳥が飛んだのを合図に、先に動いたのはカシューナたちだった。
……奴らは追われる側。おそらく足止め目的の部隊だろう。
そう考えると、あまり時間をかけてはいられなかった。

「気を付けて下さい！何かあります！私が正面から様子を見ますので！」
「分かった！気を付けろよ！」

カシューナがそう言って謎の兵器の方へと真っ直ぐ突っ込む。それに平行してイセルも飛び出した。
遅れてグラムル。おっさんは少しずらして後から続くつもりのようだった。
おそらく周りの兵士たちの実力はそれほどではないはずだ。動作からして大体分かった。

……しかし不気味なのが、あの大砲のような存在だ。
戦場において不確定要素は常にあるが、それにしても未知の兵器というのは危険だ。いくらカシューナの実力を持ってしても、戦局はどう転ぶか分からない。

そしてさらに、カシューナには一行を巻き込んでしまったという責任感や焦りが若干見て取れた。……グラムルは若干そこが心配なのだった。

敵も四人が前衛として前に出てきた。
カシューナが正面の二人と接敵し、左がイセル、右がグラムルという布陣になった。
しかし明らかに相手は防戦的で、まるで何かを待っているかのようだ。
そしてそれはおそらく……。

「死ね！カシューナ！」
「！」「！」

敵リーダーが発したその言葉を聞くと同時に、前衛戦士たちの間に直感が閃く。
幾度と無く生死の境を潜ってきた戦士としての本能が告げていた。
……ヤバイ！と。
咄嗟に飛びのくカシューナとイセル。反応が遅れたグラムルを、カシューナがかばって倒れこんだ。
その瞬間。

ゴォウウウゥゥゥン……

それまでに彼らがいた場所を、直径２ｍにも程近い火柱が走った。

「がっ、ぐわあぁぁぁぁぁぁっ！！！」

背後からの悲劇に反応しようも無かった相手の兵士の一人が、あっという間に炎に包まれ、倒れる。

肉の焼け焦げる嫌な臭いが辺りに充満する。……即死だろう。間違いなかった。
そしてそのままイセルの右横を、カシューナとグラムルの左斜め上を火柱が走っていく。
その凶悪な炎の塔は横に長くそびえ立ち、おっさんのひげを少し焦がすぐらいの距離まで広がった。
唖然として一歩も動けないおっさん。
突如出現した火柱は、数秒後に一旦消え、その場にいた全員の注目の的となった。

「な、何だありゃ……！？」
「ふふ、わはははははっ！！！いいぞ！もっと撃て！早くだ！早く次を！」

仲間を一人焼き殺したというのに、それを見ていたリーダー格の男は高笑いを繰り返す。
あまりの出来事に、イセルもカシューナも動けずにいたのだが、同じように敵兵士たちもこの圧倒的な兵器に釘付けとなっていて、危うく隊列崩壊の危機は免れていた。

「魔法装置か……、既に起動させていたとはっ……！」
「……狂気と炎が……踊ってる……」

小さくシャルルが呟く。
この場には彼女にしか見えない何かがあるようだった。

「ひ、うわあああああっ！！！」
「な、何なんだよこれっ！？」

その様子を見ていた、敵兵士の二人があらぬ方向へ走り出した。

武器も投げ捨て、一目散に逃げ出している。
確かに、戦っている最中に後ろから丸焼きにされる様子を見せられては士気も崩壊するというものだろう。
その隙に前列は再び体制を整えた。

「スプ、アレを狙え！」
「言われなくてもっ！」

……結局の所、その兵器の一撃が皮肉にも戦いの幕を閉じるきっかけとなった。
イセルの指示により、えげつない火炎を放射する魔法装置に飛び道具が集中する。
スプの眠りの呪文にはどちらも抵抗したが、リーダー格の男にはベルの矢が放たれ、筒先の狙いが外れた。
そして奥の操作をしている男にはシャルルのウィスプが飛び、操作の集中を乱している。
その隙に戦士たちが接敵を試みる。

一人が焼け死に、二人が逃げたおかげで、残りは三人だ。
体制を立て直した前衛が、おっさんも含めて一対一で牽制する。
後ろの様子を気にしてビクビクしている兵士たちを相手にするのは、難しいことではなかった。
その隙にカシューナが敵陣へ突っ込む。
そして構える暇も与えず、わずか数撃でリーダー格の男を切り伏せたのはさすがだった。
他の兵士たちの実力はさほどでもないようだ。カシューナは周囲を見回し、ホッと安堵の息をつく。

（普段は喧嘩ばかりしていても、いざという時のチームワークはさすがですね……。いや、喧嘩ばかりしているからこそ、かな？……

思い出しますね、昔を）

残りの兵士たちをふん縛って尋問すると、「自分たちは足止めを命じられただけなので、中のことはよく分からない」らしい。
確かにそれ以上の情報は知らなそうだったし、それを確かめている時間も無さそうだった。

「おい、この魔法装置は一体何なんだよ」
「ここれは、火炎を噴射する装置です……この紙に操作方法が書いてあるからと渡されただけで、他には何も知りません……」
「そうなのか？スプ」

操作していた兵士を尋問するが、詳しい事情は知らないようだった。
たまたまこの男が古代語を理解できたので、操作役に選ばれたようだった。

「……う～ん……まあ、本当っぽいな。結構複雑そうだ」
「ちょっと、『これ使いたい』とか言い出すんじゃないわよね？」
「使いたいけどな～……、ちょっと重くて持ってけないし、難しくてめんどくさそうだからヤダ」
「おっ、珍しくまともな反応」
「てゆーか今はそれどころじゃないだろ？」
「！！！……さらにまともな反応だと？」

一同、驚いて呆気に取られる。
一瞬だけ普段の雰囲気に戻った一行だったが、それもまたすぐに緊張感のある表情に戻った。

「そそうでした！早く行きましょう皆さん！」

雰囲気に当てられ、危うく和みそうになったカシューナだったが、慌てて一行を促した。
結局、魔法装置の説明書きだけ燃やし、兵士どもは置き去りにして遺跡内部へと進むのだった。

（……カシューナさん、大分キャラが変わってきたな……）

一同はそんな感想を覚えながらも、それに続く。そこに今度は『狂気』が待っているとも知らずに……。

第１０話　目覚める狂気

ダイクを追い、遺跡の入り口で待ち伏せていた敵を倒して中に入りました。

＊

遺跡自体は、それほど深くも複雑でもない造りだった。二層からなるフロアと、それらを繋ぐ通路。
言ってしまえばそれだけの物であり、それ以上の何かはそこには無かった。
そして何より、朽ちてボロボロになった建物がそれ以上の人工物の存在を認めてはいなかった。

「おそらく、何かを奉っていたとかそういう類のモンだな、これは」

意外にも、多少こういうことをかじっていたというスプが解説してくれる。
その普段の言動から、どこまで当てになるものかは信じられない他のメンバーだったが、今回に関しては多少なりとも納得はできた。
あちらこちらに散見される、非常に凝らした造りの装飾の数々がそれを裏付けていたからだ。

そして辿り着いたのは、今までで最も大きい両開きの扉。
誰かがマッピングをしていたわけではないが、簡単に構造を覚えられそうなこの遺跡において、最も奥の中心となる部屋の前だった。
多少風化してはいたが、その扉に施された装飾は、文句無くこれまでで一番豪華だろう。

その扉を目の前にして、おそらく幸い……というわけではないだろうが、一行にひしひしと感じられる危険の予感めいたものがあった。
……これまでに、敵の妨害に一切会わなかったからだ。
先ほどのスプの言葉に対してふと閃いた直感を、ベルは思わず口にする。

「……もしくは、何かを封印していた……とか？」

その言葉には誰も答えず、イセルは無言で扉を開けた。

＊

扉の向こうには、またしても数人の兵士が待ち伏せていた。

「やはり来たな、カシューナめ！」
「その台詞はさっき聞きましたよ。ダイク様はどこです……！？」
「さあなぁ。私はただ、貴様らを抹殺しろと命じられただけだ」

軽い口調とは裏腹に、カシューナの表情は固かった。
兵士たちは何やら祭壇のような、少し高くなっている壇の上に皆立っている。
中でも、真ん中に立っている男が代表して話しかけてきたのだった。
おそらく隊長的な存在だろう。

（嫌な予感がする……）

うまく言葉にはできないその感覚に、カシューナの返答は鈍った。

「頭が痛い……」

普段はいつも目立たず、のほほんと一行に着いてくるだけのシャルルだったが、今回は珍しくこんな場面で言葉を発する。

（精神に干渉されている……のか？）

さっきから感じている違和感の正体はそれなのか。横に並ぶイセルの表情も渋かった。

「……ちっ、なんか雑音（ノイズ）が聞こえるな……」

（やはり……）

「……などなどの因縁はあれども、ここにこうして貴様に引導を渡すことができるのを神に感謝するぞ！」

おそらく誰も聞いていないが、さっきから何かを喋っているリーダー的存在の男と共に、横に並ぶ兵士たちが六人。

「我が名はユード。ズーマン様の優秀なる右腕的存在である」

「ズーマンか……あのやろ、会ったらタダじゃおかねえぜ」

「やっぱり悪人顔なだけあるわね」

くどくどと話すユードとやらの前に、時間が無い彼らはとっとと切り伏せたい衝動に駆られるが、さっきからの違和感にうまく突撃のタイミングをつかめずにいた。

「本当にズーマン様には感謝だな。ポルトヴァ一の剣士、カシューナをこの手で葬る栄誉を下さるとは。……さらに、この剣を使っても良いとまで仰ってくれた。ふふふ……さあお前ら、やってしまえっ！」

そう言ったユードが手に持っていた、怪しげな装飾の剣を抜き放った時――。

「ぅわっ！」

「きゃあああぁぁぁぁっっ！」

先ほどまでとは比べ物にならないほどの頭痛が彼らを襲った。

（オオオオオォォォォォォォッッッッ！！！）

それと同時に、何者かの叫びがその場にいた全員の頭の中に響き渡る。

（我に……我に……血を、血をよこせ……ッッッ！！！）

「なんだっ！？」

「こ、これが狂気の……刃……ッ！」

兵士の一人が頭を抑えてうずくまった。

「ふふ、ははは……はっ！？何だ……これはっ！？ま、待てっ！！！」

「！」

「ぎゃあああああぁぁぁぁっ！！！」

「！！！」

そこにいた誰もが目を見張った。

ユードと名乗った男が、抜き放った剣でそのまま隣にいた男に切りつけたのだ！

全く警戒していなかった隣の男は、バッサリと首筋に致命的なほどに深手を負って倒れた。
あれは……おそらく助からないだろう……。

「ゆ、ユード隊長！何をっ！？」
「し、知らんっ！この剣が勝手に！！！」

そのまま、逆の隣にいた男に切りかかる。隣の男はとっさに倒れこんで初撃を回避したが、体勢を立て直す間もなく次の斬撃にて、胸の真ん中にその刃を突き立てられた。

「うぎゃあぁっ……ごぼっ」

血を吐いてすぐに動かなくなる兵士Ｂ。
周囲にいた他の兵士は皆、一斉に後ずさりユードと距離を取った。

「な、何をしている貴様ら！早くかかれ！」

どうやら思考と口だけはまともなようで、本来の目的と思われる命令を口にしたが、依然としてその行動はおかしかった。
その獲物となる相手を探すように、剣先がウロウロと定まらない。
しかしそれでも、命令に忠実な二人の兵士たちが一行に向かってきた。
……それに対してイセルとグラムルが反応する。

「ちきしょう、こんなんばっかりかよっ……！」
「カシューナさん、あの怪しい奴を頼みます！」
「分かりました！」

別に得体の知れない物を押し付けるわけではなかったが、イセルは

あの怪しげな相手には自分たちの力量では分が悪いように思えた。
それはおそらくグラムルも同様だろう。
この中で最も実力を持った剣士であるカシューナが相手にならなかったとしたら、それはもう別の戦術を立てる他無い。……場合によっては撤退することすら考えねば。
彼がそう考えるほどに、あの剣は異質な存在だった。

幸い、残った二人は混乱しているのか足が竦んでいるのか、こちらにかかってこようとはしなかった。
ただ呆然と目の前の出来事に驚き、ガクガクと足を震わせながら立ちすくんでいるだけだ。
先ほどの兵士たちといい、どうやら彼らには実戦経験が少ないのだろう。
戦場に出る覚悟によって、対応に差が出ることがありありと分かった。

命令に忠実なだけあってか、挑んできた兵士たちは多少の腕に覚えはあるようだった。
後列の援護があれば負けることはないだろうが、それでも多少の時間がかかることは明白だ。
グラムルは少し焦る。
……何故なら、謎の剣を持ったユードに向かったカシューナが、防戦一方なのが見て取れたからだ。

そしてグラムルのその予感通り、当のカシューナも焦っていた。
剣を持っているものの実力と裏腹に繰り出される、異常なまでの強力で鋭い斬撃に、攻撃する隙が見えずにいた。
さらに、まるで攻撃の意図が掴めない。爪を持った獣と戦っている時のような感覚だ。
おそらく持ち手の意思とは無関係に動いているのだろう。

対人間を想定していたカシューナの剣士としての経験が役に立たなかった。
何とかそれを潜り抜けていられるのは、偏にポルトヴァ一と噂されるカシューナの剣士としての実力故だった。
自らの身体能力と直感に従い、剣を振るってきたその積み重ねに全てを委ねる。
……そうして何とか保っているだけなのだ。

だがさらに重なる悪条件として、さっきから続いているこの頭の中の雑音が酷かった。

（斬れ斬れ斬れ斬れ斬れ斬れ斬れ斬れ斬れ……っ！！！）

ただ一心不乱に響いてくる狂気に、カシューナの集中は乱れた。
それでも、格上の剣士に対して優勢になっているという意識がそうさせるのか、相手の男には満足気な表情が浮かんでいる。
これならあと一歩で倒せる……！そう思ったのか、まだどうしていいかわからずに立ちすくむ兵士に対して、隊長は命令した。

「貴様ら、加勢せんか！」

それを聞いた兵士は、多少まともになったと思ったのか、それとも既に思考が麻痺してしまっていたのかは分からないが、よろよろと剣を抜きながらカシューナに近寄ってくる。
……しかし同時にそれは、ユードの近くにも寄ってくるということにもなった。

「ああっ！何だっ！？」

突然、カシューナを向いていた切っ先が、近寄ってきた兵士に変わ

った。
またしても上官に裏切られた兵士は、為す術もなく、その凶刃に胸を切り裂かれる。

「ぎゃあああぁっ！！！」
（今だっ！！！）

その一瞬の隙をカシューナは見逃さなかった。
多分、防御するという概念が無いのだろう、狂気に囚われた刃は、その狂気の対象となる相手以外への注意は疎かになっていた。

「ぐわあぁぁっ！！！」

今度はユードが悲鳴を上げる番だった。剣を持っていた右腕を切り飛ばされ、その場にのた打ち回る。
……しばらくするとその失血のショックからか、気を失ったようだった。

「上官はやられたぞ。……まだやるのか？」

残った兵士たちは、完全に戦意を喪失していた。

＊

「一体なんだってんだ……？」

完全に大人しくなった兵士たちを縛り上げて尋問していると、イセルが一人、別方向へ歩いていく。
その先にあるのは、先ほど一行を窮地に陥らせた謎の剣だった。
どうやら彼は、斬り飛ばされたユードの右腕にまだ納まっている剣

に興味を持ったらしい。

「今度は何の魔法装置なんだよ……」

そう言って腕を蹴り飛ばした時。

「う……ぐっ！」

（血だ……もっと血を……っ！！！）

「イセルさん、何をっ！？」

一瞬意識が混濁した後、気付くとイセルは腕から離れた剣を手に取っていた。

近くには、倒れたままのユードがいる。

イセルは大きく剣を振り上げると――！

ズシュッ！

「がっ！……ぐぉっ……！ごぼ……っ」

倒れているユードの喉元に剣を突き刺した。

第１１話　目覚めた魔剣

敵は倒したけど、何だかイセルの様子が変です。

＊

「どうしたのイセル！」

その様子を見ていたグラムルが駆け寄ろうとする。

「血を……血をよこせっ……！」
「グラムルさん気をつけて！」
「きゃあぁっ！！」

近づいたグラムルに対して、イセルは横に剣を振り払った。
間一髪その太刀を避け、グラムルは距離を取る。……ハラリと落ちる、服の切れ端。
するとそれ以上は後を追わず、イセルはまたユードに刃を突き立てた。
まだその体からは、真っ赤な鮮血が滴っている。

「い、一体何なんだよっ！！！」

まだ縛る途中だった兵士が、悲鳴を上げて逃げていく。
が、それを捕まえる余裕は誰にも無かった。
さすがのイセルも、こんな笑えない冗談をする男ではないからだ。
彼の身に何か異変が起きたことは間違いなかった。
そして先ほど身を持ってそれを実感したカシューナは皆に警告する。

「気をつけてください。あれはもうイセルさんではありません……！」

カシューナの言葉に、一同の間に戦慄が走る。
まださっきのユードの凶行は、皆の脳裏に焼きついていた。
まさか自分たちが知っているイセルが、あんな風に殺人鬼のようになってしまうとは……！
ほら、何だか目つきもおかしく……は、なっていな……い？

「いや、一応みんなのイセルなんだが……」
「えっ！？」
「どういうことです！？」

呆気に取られて口々に質問する。
剣を刺しているのはそのままだったが、表情や口調などは普段のイセルそのままだった。

「なんか一瞬、誰かを斬りたくなってしょうがなくなったんだ。……けど、その後すぐ正気に戻った。……でも今は体が動かん。どうやら、こいつに体を操られてるらしいな」
「操られてるらしいな、じゃないわよ！一体どうなっちゃったかと思ったじゃんか！」

ベルがヒステリックに叫ぶ。
そして同時に引っ張った兵士を縛る縄がきつくなり、兵士はいてて！と顔をしかめた。

「でもそんな、一体どうしたら……？」

まだ若干身構えながら、グラムルが戸惑って剣を向けられずにいる

と、急にイセルは刺していた剣を引き抜いた。

「ぅわっ！気をつけろ！そっち行くぞ！」

「え！？ちょ、ちょっと！」

「なんだテメェ！」

そう言いながら、グラムルに対して剣を振る。

……が、何とかそれを、彼女は持っていた剣でいなして防いだ。

「自分で台詞言ってるじゃないですか！！！」

喋っているのを見るといつも通りのイセルだったが、残念ながら彼女に襲い掛かった斬撃も、いつも通りの戦闘でのイセルの太刀だった。……つまりは、本気のようだ。

（……本当に正気なの？）

今のでグラムルの疑いは残ってしまう。

「……いや、今のはこの剣に向かってだよ！」

慌てて弁解するイセル。

確かに納得できるが、まだちょっと怪しい。……一同の間に、疑惑の渦が広がった。

「グラムルさんどいてください！」

いち早く反応したカシューナが、グラムルとイセルの間に割って入る。

そのおかげで、操られたイセル？の目標は再びカシューナへと向け

られたようだった。

「俺は……俺は斬りたくないんだよっ……！げへへへぇ～！」

「！！！」

（怪しい……怪しすぎる……）

抵抗するイセルの頭を、徐々に狂気が侵食しているようだった。

本人の意思とは無関係に、下卑た笑いが浮かんでしまう……のだと思う。

多分本心ではない……はず。

いまいち疑念が拭えないが、カシューナは本人の狂気の心に同調してしまうのだと自分にいい聞かせて、防御に専念していた。

……そう、戦士には誰だって狂気の心が存在するのだから。

「さ、鞘……。鞘を……っ！」

さっきから響く頭痛を必死で抑えながら、シャルルが辛うじて呟いた。

精霊使いである彼女は、剣から発せられる狂気の精霊の気配と同時に、それが収まっていた鞘から発せられる闇の精霊の気配を感じ取っていたのだった。……おそらく、何かあるはずに違いない。

鞘は、最初にユードが立っていた祭壇の上に放置してあった。

いち早くそれに気付いたスプが駆け寄ってみると、鞘の中に不自然な漆黒が漂っている事に気付く。

（なるほど、この鞘に封じられていた魔剣ってわけか……）

「イセル！鞘だっ！」

そう叫んでイセルの方へ鞘をぽ～いと放物線を描いて投げる。
……これで奴がこの鞘に剣を収めれば、問題は解決だ。

……。

……あれ、何か忘れてる？

ぽと。

鞘はイセルの足元へ、そのまま落下した。

「だから動かねーんだよ！馬鹿！」

相変わらずカシューナに凄まじい斬撃を加えながら、イセルは投げたポーズのまま固まっている魔術師に向かって叫んだ。
言われた魔術師も負けじと言い返す。

「馬鹿とは何だこのバカ戦士！頭空っぽだからそうやって操られんだよ！」
「おいスプ！お得意の魔法はどうしたんだよ！」
「……悪かったな！もう打ち止めだ！」

打ち止め＝魔法を使える精神力が残っていない、ということである。

「こういう時に限って……！役立たず魔術師が！」
「今のお前が言える台詞か！ヘンな所だけ役に立ちやがってこの能無し戦士！」

こんなやり取りだけ見ていると、全くいつもの日常の喧嘩のようだ

ったが、残念ながら事態は少しずつ深刻になっていた。
イセルの攻撃を受けきれないカシューナが、少しずつ傷を負い始めているのだ。

「！」

一方、イセルとスプのやり取りを見ていて、グラムルの頭に閃いた出来事があった。

「能無し……つまり彼を峰打ちで気絶させれば、大人しくなるのでは？」
「確かに……意識が無くなれば操られることも無さそうですが……」
「……や、やっちゃいますか？」

やや遠慮がちに呟くグラムル。
……ちょっとだけ楽しそうな感じがしたのは、きっと彼女もこの場に満ちている狂気に汚染されたのだと思いたい。
それに気付いてか気付かずか、カシューナが慌てて答える。

「そそんなことできませんよ！それに今は受けるので精一杯ですし！」

どうやらあの剣の実力は、ある程度持ち手の実力が影響するらしい。
先ほどユードという男が使っていた時に比べて、明らかにその剣撃の精度や威力は上だった。……しかも先ほどからの防戦一方で、体力も徐々に削られつつある。
肩口を狙った一撃を何とかかわし……たつもりだったが、下半身がついて来れずに、太ももに浅く傷が走った。

（これは……まずいですね……！）

そんなカシューナの様子を見て、さすがに危険を感じたのか、グラムルも剣を抜いてカシューナの後ろに控える。
そして近寄ってきたおっさんが隙を見て、先ほど地面に投げ捨てられたままの鞘を回収した。
遠くではシャルルがウィスプを召喚し、いつでも飛ばせるように待機している。

「皆さん……あまり長くは持ちそうにありません！何とか対策を考えてください！」

剣戟の合間に、必死に叫ぶカシューナ。
それを聞いて、その横におっさんが進み出た。……その手には、例の鞘を持っている。

「来い！イセル！」

おっさんが鞘の入り口をイセルの方へ向け、真剣な表情で彼を挑発する。
……イセルはその眼差しを見て、おっさんが何をしようとしているかを瞬時に悟った。

（……分かったぜ！おっさん！）

幸いにも、イセルが目標を変更する自由は効いたように思えた。
それとも、単に切り伏せやすそうな相手を選んだだけかもしれない。
とにかく、その切っ先はおっさんに向けられ……！

「食らえ！おっさん！」
「よし！刺して来いイセル！」

剣先を真っ直ぐおっさんの構える鞘の方へ向け、突き出すイセル。
おっさんもそれに共鳴するように、真っ直ぐイセルの持つ剣に向けて鞘を突き出した――っ！

ぷすっ。

「いだあああああぁぁぁっ！！！」

おっさんの悲鳴が響いた。

＊

「やっちゃいましょう。リーダーとしての意見です」

ざっくりと右肩を刺されたおっさんがきっぱりと言い放った。
……もちろん、一度後ろに下がって自分で手当てをしている。
だが、この痛みはしばらく忘れられそうになかった……。

「だって自由が利かないんだもんよ～……」

そんな風に言い訳をするイセルも、徐々に先ほどまでの勢いが無くなってきていた。一応は操られている方も疲れを感じるのかもしれない。
しかし、それ以上にカシューナの体力は限界そうだった。

こりゃあ仕方ない……と、イセルも観念する。
後は仲間を信じて託すのみだ。

「……わかった。やっちまってくれ！」

そう言うイセルの言葉に頷いたグラムルと合わせて、おっさんもカシューナの横からイセルを挟み込む。

「わかりました。では三人で」

峰打ちで……とは言ったものの、彼の身に付けている板金鎧は、生半可な攻撃では貫通しそうも無い。

彼らは心を鬼にして、イセルに本気の刃を向けた……のだと思うが、ちょっと目はマジだったのは気付かない振りをしよう。何だかそうした方がいい気がする、とイセルは本気で思った。

さすがに三人がかりでは、謎の魔剣も捌ききれないらしく、何度か大剣や戦斧が命中することもあった。だが、やはりなかなか鎧の装甲を抜けて傷を負わせることは難しい。

（ここが……正念場か……っ！）

最後の力を振り絞り、カシューナが攻勢に転じる。

「せっ！……やぁあああっ！！！」

その渾身の一撃で、イセルの体勢が大きく崩れた。

「今ですっ！」

「はい――っ！！！」

こんな時でもバカ丁寧に返事をするグラムルが、全霊の力を込めて剣を振る。

何とかそれを受け止めようと、イセルの体は剣を掲げたが……！

ギィンッ！

……甲高い金属音と共に、剣はイセルの手から弾き飛ばされて転がったのだった。

そのまま勢い余って鎧に当たったグラムルの剣は、イセルの体にかすり傷は付けたものの、寸止めされてそれ以上には深手とならなかった。

自分が後でそれを治療する役目だとも忘れ、おっさんは（……チッ）と内心舌打ちをしたのは誰にも気付かれていないはずだ。……という事は君と僕との秘密だぞ？

＊

「い……やぁ～、悪かった……みんな」

そういうイセルの周りを、何とも言えない微妙な空気が包む。

ようやくこの防戦の嵐から解放されて、カシューナは一人ぜぇはぁ言ってへたばっていたが、それ以外のみんなはイセルを取り囲んでいた。……まだちょっと疑ってるらしい。

だがイセルの方も、既に体力の限界が近づいており、心身共に立ち上がる元気すらなかった。

「本当にマトモになったんでしょうね？……まあ、普段もあんまりマトモじゃないけど」

例によって冷たい台詞をベルが吐く。……しかし、フォローする者は誰もいない。

「わ、……だから悪かったって……。さすがに懲りたよ」
「……本当ですかぁ？」
「……」

グラムルもジト目でそれに続く。
おっさんに至っては、まだ怒っているのか無言だ。……さりげなくあらぬ方を向いて、右肩の傷をさすっていたりもする。

「本当だって。だから俺のせいじゃないんだってば！スプに見てもらえば分かるから！……てあれ？スプは？」

（……しまった！）

と、全員が思った時には既に遅かった。
この迷惑戦士と肩を並べる大迷惑魔術師は、皆の輪から一人はずれ、ある物に向かっていた。
それはもちろん――！？

「やめろスプ！」

イセルが叫ぶ。

「ちょ……待っ！！！」

みんなが一斉に手を伸ばして彼を止めようとしたが、もう既に手遅れだった。
彼は皆の目の前で、あっさりと剣を持ち上げ――！？

……その刀身を持っていた鞘に収めた。

「……えっ？」
「よし、これで安心！」

呆気に取られる一同の元にスプが近寄ってきて、みんなザザッと後ずさりをした時。
……全員の頭の中に声が響いた。

『――わ、悪かったから出してくれ――』

ん？不思議に思った一行が辺りを見回すが、どこにもそんな人物は見当たらない。
何度かキョロキョロした後、皆の視点は一箇所に集まった。

『――頼む、もう人は斬らないから！――』

「この……剣か？」
『――そうだ、若き戦士よ。もう暴れたりしないから、またこの闇の中に閉じ込めるのは止めてくれないか？――』

「うわ、剣がしゃべった」

素直に驚くシャルル。
……だが、先ほどから彼女だけが感知していた何かが、その可能性を何となく理解していたようだった。

「さ、さすが魔剣だな」
「大丈夫なの？スプ」
「へ？何が？」

スプは全く何のことか分からない、という風に答える。

グラムルが見た感じ、とりあえずはまともそうに見える。
……いや、まともというと語弊があるか。
『少なくとも、いつも以上のおかしさはないように』思える。
さっきから聞こえるこの声とも、何となく辻褄は合っているように聞こえた。

『――悪かった、長い間眠りにつかされて腹が減ってたんだ。もうあんな真似はしないよ――』
「……本当でしょうか？」

これが本当にこの剣から聞こえてくるのだとすれば、これは間違いなく≪知性ある剣（インテリジェンスソード）≫の一種らしい。
グラムルも噂でだけは聞いたことがあった。
何でも……ん？、な、何でも……ん？『高い』？……らしい。
……後は忘れてしまった。
あ、『珍しい』ぐらいだったかな。

でも知性があるってことは、この剣を売っちゃったら人身売買みたいなことになるんだろうか？
……あ、でも剣だから刀身売買かな……？
でもそれを言ったら刀身売買なんて普通にされてるし……。

そんな堂々巡りに陥り始めたグラムルを放置しながら、イセルが落ち着いて剣との会話を試みてみるようだった。

「まあまあ剣君よ。いくら俺が心の広い男だからって、さっきまでの出来事を水に流すことなんてできないぞ？あの様子を見れば、君が疑われるのも無理もないというものだよ。……なんせ、俺の大事な仲間を傷つけたんだからな」

その言葉に、イセル以外の全員がジーッと彼を見る。
……イセルの額に、冷たい汗が一筋流れた。

『――俺にはティルヴィンって言うれっきとした名前があるんだぜ？……見ての通り魔剣なんだがな。昔ちょっと悪さをして、ここに閉じ込められちゃったって訳だ。……なぁ、腕が立ちそうな戦士さんよ。俺を使ってみちゃあくれねぇかな――』

「いやいや、俺にはこの刀身が波打った素敵な大波剣（フランベルジュ）があるからさ」

急に何だか饒舌になって語りだすティルヴィンと名乗る剣。先ほどまでの凶行っぷりが嘘のようだ。
もしこいつが人の姿をしていたのなら、本人に悪気はなかったという様子が分かるのだろうか……？
ちなみに、イセルはこのフランベルジュという種類の剣に”フレイムスラスト”という名前を付けて愛用していたのだった。

「『腹が減った』って、何を食べるの？」

純粋に疑問に思ったのか、シャルルが尋ねる。
珍しくさっきまでは役に立っていたかと思えば、やっぱり緊張感ゼロだ。

「どこから食べるの？」

それに真似して乗っかって、イセルも尋ねてみた。
……決してみんなの重い視線をはぐらかそうとしたのではないぞ？

『――刀身からだよ。食べてるのは金属塩。それも鉄分の水溶液にたんぱく質が混和されたものがベストだね。銅塩はアクが強くていけねぇや――』

返事をしたティルヴィンに、（……ふ～ん……）という反応の質問者二人。
……よく分からなかったらしい。
しかしその言葉にスプが気付く。

「それって……、血のことだぜ？」

一瞬で青ざめる一同。ちょっと吐き気をもよおした者もいそうだ。

「やっぱりこんな剣、ぶっ壊しちまえーっ！（ガンガンッ）」
『――や、やめろ体が歪む～！――』

柄の部分を地面に叩き付けるスプ。
……が、さすが魔剣だけあってスプの手が痛くなったのと、地面が少し削れただけだった。

『――お前らだって人を斬ってるだろ！――』

ティルヴィンの反論に誰も答えられなかったが、唯一その筆頭とも言える戦士が口を開いた。

「……俺はな、悪者を斬ってるんだ。君みたいに見境無く斬ったりはせんよ」

（……おおっ）という感じにみんなが反応する。
珍しくこの戦士がいいことを言ったような気がしたからだ。

『――いや、あれは物凄い腹が減った時だけだから！さっきだってこの魔術師を操らなかっただろ？――』

「じゃあ腹が減ったらやるってことか……？」

と、尚も続く問答を聞き流しながら、先ほどの台詞に対してグラムルは一人突っ込んでいた。

（何だかまるで、いつもいつも正しいことをしてるような……）

……でも、とてもこんな事は言えないな。

言ったらきっと、あの戦士はいじけて「この剣と一緒に旅に出る！」とか言いそうだからなぁ……。

＊

まあそんな感じのどうでもいい会話をしばらく繰り返した後、イセルやカシューナの体力も戻ってきたことから、そろそろ出発したいというのと、もうキリが無いのでこの剣を持っていくかどうかを多数決で決めようという事になった。

結構これまでのやり取りで、一行の間には、さっきまでの惨劇を起こしたこの魔剣に対する不信感は消え、親近感や興味も湧いてきたようだった。

「じゃ、持ってくのがいいと思う人～」

リーダーが聞く。

それにはイセルとスプを除いた全員が手を挙げた。

……ちなみにカシューナは、彼らの自主性に任せようと思っている

ようだ。本当にそれでいいのか？
予想外の結果に（――おおっ！――）と期待を寄せるティルヴィン。

「じゃあ廃棄処分がいいと思う人～」

そして気配でその反応を察したイセルとスプは、こういうときだけ息ピッタリの思考で（こいつを調子に乗らせちゃならねぇ……）とばかりに、反対票に意見を投じた。
……でも、結局多数決で負けるということは想定済みだ。

「え～じゃあ、多数決の結果、この魔剣ティルヴィン君は持って行く事になりました」
『――よっしゃ～っ！――』

頭の中に響く声だけで判断すれば、無邪気に喜んでいそうな感じのティルヴィン。
……こうして、一行にまた新たな仲間が加わることになりましたとさ。
事件は全然まだ解決してないんだけどね。

「……しょうがねえな。じゃあ持ってくか。そんで旅の途中で路銀に困ったりした時があれば……」
「こいつを売って金に換える、と。……それだな」

『――それがいいっ！』

『――えっ！？ええぇっ！？――』

そりゃあナイスアイデアだとばかりに声を揃えて乗ってくる一同。
その時の皆のテンションの高さを見て焦るティルヴィン。

そんな魔剣の反応を気配で感じながら、（してやったり……！）と、
にやり笑った魔人間二人組なのであった……。

第１２話　目覚めた組織

遺跡で待ち伏せていた敵を倒して、生意気な魔法の剣を手に入れました。

＊

街道……とまではいかないが、これまでの長い間、多くの人間によって踏み固められてきたであろう森の中の道を、足早に歩いていく一団の姿があった。
ある者はガチャガチャと鎧が当たる音をさせ、またある者は杖をつき、ある者は転びそうになりながら集団についていく。
……やがて、少し拓けた場所が見えてきた。

「結局、奴らは一体何をしたいんだ？」
「今の所、魔法装置を蘇らせまくってますね。おそらく本物かどうか試していたんでしょう。そして多分、奴らの目的は……」

（カシューナよぉ、もし俺になんかあったとして、この遺跡にちょっかいを出す奴が現れたら気をつけろ。……きっとロクな奴らじゃないぞ）

カシューナの脳裏に過ぎる、しばらく前の記憶。

「……ここです」

カシューナの視線の先には、またしても風化しつつある遺跡があった。
どうやら、目的の場所に着いたようだ。

「奴らの目的が魔法装置なのだとしたら、装置がある場所に向かっているはずです」

そんなカシューナの推理によると、最終的に奴らが来るのはここ≪貝の遺跡≫だという。

何故なのかと聞くと、カシューナも先代のノルディックから聞いただけの話だが、と前置きをして答えてくれた。

この遺跡には、≪貝（シェル）≫と呼ばれる装置があるらしい。

しかしその実態は、ノルディックも教えてくれなかった。

ただとにかく、見つかった当時ここは封鎖しようかどうしようか迷ったほどの所らしい。

……結局、街の仕事の忙しさに追われているうちに、そのままになってしまったが、ノルディックが最も注意していたのがこの遺跡だという事だった。

＊

「当時その事を知っていたメンバーに、まさか悪用するような人間はいないと思っていたんですがね……」

装置を狙っているラバン公が一体どのような目的で今回の行動を起こしたのかは分からないが、そのやり口から見ても、まともな目的とは思えない。

……実際、既に復活させた二つの装置を使って、命を狙われた人間が言うんだから間違いない。

気になるのは、この情報が一体どこから漏れたのか？ということだった。

当時、ノルディックと共に遺跡を荒らし……じゃなかった、探索していたのは五人。
そして今も生きているのが三人。
その内の一人がカシューナだった。
残る二人のうち、一人が既に亡くなっており、最後の一人は未だ行方不明なのだった……。

まだ集まっている情報が足りなさ過ぎるため、現時点では当たりを付けることは難しい。
それよりもとにかく、目の前にある問題を解決しないことには。
魔法装置を起動させた後、用が済んだダイクを連中がどうするかは分からない。
……ただ、部下の兵士を使い捨てにするような奴らだ。
急ぐことに越したことは無いだろう。

「昔ノルディック様と探索した時の抜け道をまだ覚えてます。もしかしたら相手にも筒抜けかもしれませんが、装置の場所にも近いし、前回のように足止めを食らわされるのも癪なので、そこを使おうと思ってます」
「いんじゃねーの？ゴブリンの巣に入らなきゃゴブリンロードは倒せないってな。上等だぜ」
『――おおよ！腕が鳴るな！』
「おめーは使わねーよ」
『――何でだよ！冷てーな相棒！』
「流行（はやり）じゃあるまいし、勝手に相棒にするなって」
「安心しろって。俺が使ってやるから」
『――おめーじゃ意味ねーよ！』

イセルとティルヴィンとスプの掛け合いは、もう息の合った仲間同士のようだ。

トラブルメイカー同士？すっかり意気投合してしまった二人と一振りなのだった。
でもまだ戦闘で使うのは怖いらしい。

例の鞘に納められたティルヴィンは、イセルの腰にぶら下げられたままだ。
そしてどうやらティルヴィンの声が聞こえるのは、身に付けている者と付近にいる人間に限られるようだった。
後は本人？の気分次第らしい。
たまに休んでいる時など、他のメンバーに語りかけてくることもあった。

ちなみにティルヴィンの形状は、直刀というよりはカトラスのような曲刀に似ており、片手剣にしては少し長めの刀身を持っていた。
東の辺境に伝わる曲刀に最も近いと言える。そして鞘に加え、柄の部分にも凝った細工が施されていた。
……おそらく、それは牛を模った物だろうか？抽象的に描かれているので良く分からない。
そしてさらに、幾つかの宝石も埋め込まれている。
これを見た一行は、いざという場合のへそくりとして（笑）、ティルヴィンを重宝するようになったのだった。

「ここを登ると、遺跡の内部です。気をつけてください」

人が二人並んでいっぱいいっぱいの洞窟をしばらく進んでいくと、やがて縦に伸びるはしごが現れた。
もし待ち伏せをされていた時のために、最初にカシューナ、次にイセル、そしてグラムルと続く。
三人が出れば真ん中を囲めるので、その後に後衛が続いて外に出ることになった。

荘厳で静かなホールの奥には、数人の人影が一行を待ち構えていた。

＊

「やはり来たか、カシューナよ」
「何度目の台詞ですかそれ……」
「流行語大賞だな」
「悪党にも接客マニュアルがあるんでしょうか」
「何がだ？……まあいい。こんな所までのこのこやってくるとは、大した忠誠心だな」

顔を合わせて早々、皆から散々に言われたのは、一行の見知った顔だった。
抜け道から出た先のホールで待ち構えていたのは、先日の相続権継承の儀にて出会った、ラバン公の警備隊長ズーマンだった。
その横には、三人の兵士が付き添っている。

（……少なすぎるな）

直感でそう思うカシューナ。

「主に言われたからといって、こんな悪事にまで手を染めるあなたには敵いませんよ」
「ふふふ、まだその減らず口は健在というわけか……。これを見てもまだその元気はあるかな？……おい、出て来い！」

その言葉と共に、後ろに人が現れる気配がした。
後衛担当のグラムルとおっさんの前に、突然黒ずくめの兵士が二人浮かび上がる。

どうやら、物陰に隠れて待ち伏せされていたようだ。
それと共にカツカツと歩いてきたのは……ラカーサ家に仕える一員、フェッケンだった。

「どうも皆さん、お久しぶりです」

平然とした表情のフェッケンを見て、イセルは皮肉たっぷりに言う。

「こんな所に助っ人に来てくれたんですか」
「ええ、助っ人に来たんですよ」

さらに平然とした表情でサラリと返事をするフェッケン。
それを聞いた全員の額に、ピキッと怒りマークが浮かんだ。

（……相手のな！）
「やはり、内通者は……あなただったんですね……」
「いやぁ、そんな大した器じゃないんですけどね。私も」

カシューナの台詞にも、全く堪えた様子は無い。……どこまでいっても、飄々と食えない男だ。
こうして正体をバラされた後も、意外と言えば意外だし、納得といえば納得である。
だが、そんな飄々男にも初めて苦い表情が浮かんだ。

「全く、あなた方には計算が狂わされっぱなしですよ」
「……？？？」

一同は全く何のことか分からなかったが、約二名の間にだけはピンと来るものがあった。

「折角用意しておいた陽動事件も台無しになってしまいましたし。……まあ、結果オーライでしたけどね」

それを聞いて確信を強めたイセルは、ありもしない眼鏡をクイッと持ち上げる仕草をする。

この男が妙な演技を始めた時は、何かのスイッチが入ってしまった時だ。

……あ、長くなりそう。ベルはちょっと嫌な予感がした。

「なるほどな……謎は全て解けたぜ！――確かにあなたはあの時俺を介抱してくれた。……だがあの時のあなたの行動。それは多分、”早すぎ”たんだ」

イセルが指摘しているのは、相続権継承の儀において、彼が二階のバルコニーから転落した時の事だ。

真っ先に駆けつけてきたのは、このフェッケンだった。……詳しくは、第８話をご覧下さい。

「さすがイセルさん。ヘンな所で勘が鋭いんですね。気付いてたんですか」

「まあ残念ながら、確信を持ったのは今この時なんだけどな。……突発的な事件にしては、あなたはちょうどうまい位置に居過ぎたんだ。カシューナさんを呼んでくるのも妙に早かった。……まるで、”最初から誰がどこにいるかを把握していた”かのようにね」

「なかなか……見事な推理です」

フェッケンの顔に、少しだけ苦いニュアンスが広がったのが分かった。

きっと綿密に考えた作戦が看破されてしまったのが悔しいのだろう。

作戦は成功したというのに、その辺りは何かプロ意識みたいなもの

があるのだろうか。
まだ話し続けているイセルの言葉に、律儀に耳を傾ける相手一同。
そうしながらも、じわじわと間合いを計り、攻撃を仕掛けるタイミングを計っているようだった。

「おそらく、最初からあの辺りで陽動を起こすつもりだったんだろう。そして、その事件でカシューナを足止めしておく必要があった。その間に、内部の手引きによってダイクをさらうために、ね。……違いますか？」

イセルの推理が最後の幕を閉じると、フェッケンはパチパチとわざとらしく手を叩いた。

「いやはや……大したものです。ほとんど完璧に近い。さすがですよ。ただ、もう一つある仕込みは……まだバラす必要はありませんかね」
「まだ何か用意して……！？」
「……さあ、どうでしょう？さすがに私もやられっぱなしじゃ癪に障りますのでね。名探偵の腕前を期待するとしましょうか」

まだ何かを含んでいるフェッケンの口調だったが、どうやらここでそれは披露する気は無いらしい。
さっきまであんなに饒舌だったにも関わらず、そこでパタリと口をつぐんでしまった。

「もう気は済んだかな？……そろそろ冥土への馬車が出る時間だ」
「ズーマン……この……裏切り者め！」

フェッケンとの会話が終わるのを見計らい、ズーマンが仰々しい様子で告げた。

それを見て、何か言わなきゃ気が済まないとばかりに、ズーマンに対して叫ぶイセル。
だがその言葉は意外だとでもいうように、髭面の男は驚いて見せた。

「裏切るとは心外だな。元々の任務を果たしたというだけなのに」
「山賊の子分たちを裏切ったじゃないか！」
「……ん？子分たちなら今の部下にいるが？」

段々言っている事が支離滅裂になってくるイセル。
どうやら、何が何でも悪かったと認めさせたいらしい。

「……。お、俺たちを安心させといて、裏切ったじゃないか！」
「……まあそういうかもしれん」
「ほぉらっ！！じゃあもう……お前の……負けだよ！」

……子供かっ！
勝ち誇ったようなイセルに付き合いきれなくなり、ズーマンは子分たちに向かって命令する。

「もう何でもいいわっ！行け！お前ら！」

その締まらない掛け声と共に、一斉に敵兵士たちは動き出した。
どうやら今回は怪しげな魔法装置はどこにも見当たらない。全員が若干気にしてはいたが、実際の所それどころではなかった。

＊

前列のカシューナとイセルに襲い掛かってきたのは、ラバン公警備隊長ズーマン＋兵士三人。
後列のグラムルとおっさんに挑んできたのは、フェッケン＋兵士二

人だ。
このうちフェッケンは肉弾戦をするつもりは無いらしく、やや後ろに下がっている。……まあ司祭というのは本来そういうものだぞ、おっさん。

それはともかく、後衛の援護があるとはいえ、接敵している人間はほぼ二人ずつ相手をしなければならなかった。
人数は同じでも、実際には後列のうち、おっさんはほとんど回復役として動くことしかできず、戦っているのはグラムル一人と言っても良かった。

中列のベルとスプとシャルルは、前後の様子を見ながら、手薄な所のフォローに入る。
とにかく、挟み撃ちされている状況を打開しなければと、後列を崩しにかかった。
ベルが矢で狙い、シャルルはウィスプを召喚して飛ばす。
スプはまず、セオリー通り援護魔法≪魔法の楯（シールド）≫を唱えた。……珍しい。

これによって、敵の攻撃が当たりにくくなった。
こうした集団戦闘では、援護魔法の力が後々侮れなくなってくる。
それ故、冒険者たちはパーティーを組むのだ。
ようやくその事を自覚し始めたのか、おっさんも≪神の加護（ブレス）≫の魔法で援護する。
こちらは味方の攻撃を当たりやすくする効果があった。

後列に大部分の意識が集中している間、前列は何とか耐えなければならない。
さすが言うだけあって、ズーマンはそこそこの腕前だった。
相手をしているのがカシューナだから何とかなっているが、イセル

では割りと危ういかもしれない。
それほどの実力を持っている相手だった。

さらにきちんと訓練を受けた兵士が三人もいるため、若干前列は押されつつあった。
何とかおっさんの回復魔法が来ているので、前線を保てているが、おっさんの精神力もいつまでも続くわけではない。
補給が尽きる前に何とかしなければ、こちらが削り取られてしまう可能性は高いだろう。

「イセルさん……大丈夫ですか？」
「アンタこそどうなんだよ、カシューナさん」
「……余裕ですね！」
「そうかい。……俺もだよ！」

そういう口調とは裏腹に、二人の表情に余裕は無かった。
カシューナは最初、隊長であるズーマンを狙っていたが、横から割り込んでくる兵士に邪魔され、うまく狙いを絞ることができない。
それで今は先に兵士を倒すように目標を切り替えているようだった。
……だがそれは、今度は逆にズーマンの攻撃を許すこととなる。
カシューナの傷は増えつつあり、疲労の色も濃かった。

何せ、前回の遺跡での戦いから、ほとんど休息無しで連戦続きなのだ。
さすがのカシューナにも疲れが見えた。
そしてそれはイセルも同様であり、押し込まれてはいないものの、まだどちらも倒す所までは行けずにいる。
……強がりをまだ言えるところが、さすがといえばさすがだったが。

「ぐわっ！」

「……甘いぞカシューナ！」

ギャリンッ！

（まずいっ！）

狙っていた兵士の一人を切り伏せた一瞬の隙を狙われ、カシューナの剣がズーマンによって弾かれる。
やはり相当疲れが出ているのだろう。普段のカシューナからは考えられなかった。

相手が一人になったとはいえ、無手になってしまったカシューナをズーマンの剣が襲う。
カシューナは剣を取りに行くことを一瞬考えるが、結局その場を離れることはなかった。
何とかその一撃はギリギリ体捌きで避けたものの、そう何度も持ちそうには無いだろう。

（今、剣を取りに行けば、後ろの方々が……！）

見事に挟み撃ちの効果が現れてしまった。
まだ三人がいる相手側に対し、今ここでイセル一人に前線を任せてしまうと、後ろにいるベルやシャルルが危ない。
そう考えると自分が持ち場を離れるわけにはいかなかった。

（ちっ！私としたことが……！）

冷や汗をかくカシューナ。
その様子は隣にいたイセルにも伝わってきた。
そしてまた、ズーマンは剣を振りかぶる。

中段を横に薙いで、体捌きでは避けられないような攻撃をするつもりのようだ。

「……！」

考えている暇は無い！

そう思いつくや否や、イセルは突拍子も無い行動に出た。

「食らえ！ズーマン！」

手に持っていた大波剣を、ズーマン目掛けて投げつける。

だが意表はつかれたものの、受けられない攻撃ではない。

髭面の大男は、カシューナへの狙いを一旦外し、イセルの投げつけてきた剣を受け止めた。

……剣はあっけなく弾かれ、ズーマンとカシューナの間に落ちてしまう。

「……ふん、一体何のつもりだ？自分の身を挺して危機を救ったつもりかも知れんが、何の解決にもなってないな」

ズーマンは愚かな者を見下すような目でイセルを見つめ、鼻で笑った。……が、それを見てもイセルの表情は大真面目だった。

「計算どおーり！」

にやりと笑ってカシューナへ叫ぶ。

「カシューナさんそれを使え！！」

叫び終わる前から、アイコンタクトでイセルの意図を察したカシュ

ーナが動く。
ズーマンに向かって踏み込みざま、下段からイセルの投げた剣を拾ってズーマンへ突き出す――！
油断していたズーマンの腕に、浅く裂傷が入った。
……少しずつ、一行とカシューナの連携もできてきた瞬間だった。

「何をしている！そいつをやっちまえ！」

そのまま再び交戦状態に入るズーマンＶＳカシューナ。
ズーマンは素手状態のイセルを狙えと、兵士二人に命令を下した。
だがその言葉にもイセルは動じた様子は無い。
――そして、再びにやりと笑い、腰に吊るしてある剣に声をかけた。

「やるかティルヴィン！」
『――仕方ねえな！』

かつてイセルを操り一行を恐怖に陥れた魔剣は、イセルの呼びかけに対し、潔い返事と共に『シャリンッ！』と滑らかな音を立てて、漆黒の鞘から抜き放たれる。
「うおっ！」

抜刀と同時に斬りつけられた剣の鋭さに、思わず後ずさりする兵士二人。
その鋭さが増しているのは……おそらく気のせいではない。
前回とは違い、頭痛がすることも無ければ、体が勝手に動くようなことも無かった。
むしろ、動きたい動作にサポートがついたような軽さがある。
心なしか体全体が軽くなったようだ。
そして見た目とは裏腹に、ティルヴィンに見た目ほどの重さは無かった。

（これならむしろ……）

『――昔俺を使っていた奴は、両手に剣を持ってたぜ？――』

イセルの思考が読めるのか、ティルヴィンはイセルが考えていたことそのままを言い当てた。

半信半疑のまま、イセルは左手でもう一本腰に刺してあった≪波短剣（クリス）≫を抜く。

（これは――っ！？）

思った以上に、二刀流は様になっていた。

いや、完全に実戦レベルだったと言ってもいい。

これまでにイセルは、二刀流など遊び以外では全く練習などしたことが無かったが、ティルヴィンのサポートシステムのおかげか、考えている以上に自然と体が動いた。

瞬く間に一人を切り伏せ、残った一人も追い詰めていく。

これまでに一本だった剣が突然二本に増え、相手も明らかに翻弄されている。

倒されるのも時間の問題のようだった。

＊

一方、相手側の回復役だったフェッケンは、飛び道具隊に苦しめられていた。

間断なく襲ってくるベルの弓矢、シャルルの光の精霊、そしてダメ押しにスプの≪魔法の矢（エネルギーボルト）≫が、とうとう彼の生命力を削りきった。

「まさか、これほどの実力とは……っ！……様万歳……！」

最後はうまく聞き取れなかったが、何とか敵唯一の≪呪文使い（スペルユーザー）≫を倒すことができた。

これで援護や回復は望めなくなる。一行が地力で上回った瞬間だった。

グラムルも目立った活躍は無かったものの、地道に戦い続け、ようやくここで一人を倒すことができた。

……一番気の毒なのはおっさんだった。

折角久々に前線に出て敵と戦えるかと思いきや、それからはずっと回復の専門役だったからだ。

結局、今までずっと斬られては回復し、斬られては回復し……と、堂々巡りを行ってきたのだが、ここへ来てようやくそれから解放される時を迎えた。

ずっと構えていた戦斧を持ち直し、いざ刃の錆にしてくれん！と身構えた時。

「せやっ！」

ズシュッ！

横からのグラムルの一撃にて、相手は完全に戦意を喪失してしまったようだった。

武器を捨て、両手を挙げて跪く敵兵士を前に、グラムルをジーッと恨みがましい目で見つめるおっさん。

「……あ、ごめんなさい……」

グラムルは思わず謝った。

「どうやら後ろは片付いたみたいですよ？」
「おのれ、カシューナめぇ……っ！」

人数での優位も無くなり、完全に互角の状態となった今、さらに魔法の援護もあるカシューナは、ズーマンの敵う相手ではなかった。
何度かの剣戟の後、元山賊頭のズーマンはカシューナの刃の元に沈んだのだった……。

「か、カシューナ……貴様……貴様などに……っ！」

何か相当な怨恨でもあるのだろうか？
ズーマンのかなり恨みの篭った最後の台詞に（……二枚目になるのも考えものだな……）と思ったイセルだった。

＊

と言うわけで、全力を使い切ったものの、何とか敵一味を倒した一行だったが、まだここでゆっくりしているわけにはいかない。
肝心のダイクはここにはいないのだ。
生き残っている兵士を簡単に逃げられないようにだけしておき、奥にある出口へ向かった。

「この先が裏の出口です」

まだ息の上がっているカシューナが一行を促し、扉を開ける。と――
――？

「た、助けてくれ……！≪教団≫の奴ら……裏切りやがった……っ」

その瞬間、扉の向こうから血まみれの人間が倒れ掛かってきた。
全身血まみれのその人物は、一言だけいい残すとそのまま床に伏して動かなくなる。
一行は、それが知っている顔だと気付くのに時間はかからなかった。
――驚愕の表情のまま、息絶えているのは……ラバン・ジェイスン公爵その人だった。

「≪教団≫……だって!?」

その単語を聞き、驚きの声を上げるカシューナ。
何かその言葉に心当たりがあるようだった。

（……視線……？）

そのほんのわずかな違和感に気付いたのは、カシューナとベルだけだったろうか。
一瞬だけ、どこかから見られている……そんな気配を感じたが、すぐにそれは消えてしまった。

「おい、あそこだ！」

先頭に立っていたイセルが皆を促した。
……その先には、遺跡から遠ざかっていく馬車の土煙が上がっている様子が映る。
あれがおそらく、ダイクをさらっていった奴らであり、ラバン公が最後の言葉で残した……≪教団≫だろう。
直感でそれを悟った一同は、何とか逃がしてはなるものかと駆け出そうとする。

「は、早く追いましょう！……？」

――＊＋＊@

そう叫んだグラムルの意識が急に重くなった。……いや、グラムルだけではない。

その時急に、全員の頭の中に雲がかかった。

意識が混濁し、物事をうまく考えることができなくなる。

……この感覚は知っていた。しかも、とても身近で。

――≪眠りの雲≫の魔法だ。

先ほどの戦闘で疲れ果てていた一同は、突然降りかかってきた魔法の睡魔に打ち勝つことができない。

走り出そうとしたイセルを先頭に、意識が遠のいていく。

立っている事すらできない。それがこの魔法なのだ。

「……なっ！……スプ、お前もか……っ！」

次々に倒れていく一同が最後に見たのは、顔がフードで隠れたまま、にやりと笑うスプの口元だった……。

第１３話　囚われの帰還者

さらわれた先からさらにさらわれるという、器用なダイク。
それを追いかけようとしたら、スプが邪魔してきました。

＊

「ちくしょ～、またバッドエンドかよ。どこで分岐間違えたんだ……？」
「……さん、イセルさん。起きてください」
「あそこのあの台詞がフラグを……ん？」
「何ヘンな寝言言ってんですか。もうみんな起きてますよ」
「あ、あれ？俺何で……ってスプ！あのやろ！」

飛び起きたイセルの目に入ったのは、森の中の小さな広場と、そこで野営をしている仲間の姿だった。
起こしてくれたカシューナを始め、見回した所、誰一人欠けている者はいない。皆、いつも通り黙々と作業をこなしていた。
そこへのうのうと現れるスプ。

「お～起きたか、へっぽこ戦士」
「この通り魔術師が。いい加減てめーはティルヴィンのエサにしてやるぞ」
『――まずそうでヤだな』

剣を抜こうとしたイセルだったが、立ち上がろうとした途端にフラフラとバランスを崩し、杖代わりにティルヴィンを付いてしまう。
どうやら、まだ疲れが抜けていないらしい。

「まあまあイセルさん。彼にも考えがあったみたいですよ」
「なにぃ～？……よし、遺言として聞いてやろうじゃねーか」
「おう聞いてもらおうじゃねーか。……まず第一に、あのまま追いかけて、馬車に追いつけると思ったのか？」
「わかんねーじゃねぇかそんなの。向こうが止まる可能性だってあるし」
「じゃあ第二に、追いついたとしてまたさらに敵と戦うつもりだったのか？」
「そりゃそうだろうがよ。ダイクが後ちょっとで救出できたかもしれないのに」
「第三。……そんな体でか？」

スプが唐突に持っていた杖でイセルの体を押す。イセルは咄嗟に避けようとするが、避けきれない。
その上、急に膝の力が抜けて膝を着いてしまった。

「見ろよ。みんな同じように疲れきってる。あのまま追いつけた所で、あっという間に返り討ちだぞ」

イセルはこのアホ魔術師がマトモな事を言ってるのに驚いて反発しようとしたが、実際問題その通りだった。
確かに見回してみても、みんなこれまでの強行軍と連戦に疲れ切り、満足に動けているのは誰一人としていなかった。

「だからって、無理やり魔法使うことは無いだろ……」

イセルの呟きは、力無く野営の焚き火の中に消えていく。
……一行はまたしても、ダイクを取り逃がしてしまったのだ。

＊

「で、≪教団≫ってのは何なんだ？」

気を取り直してラカーサ屋敷へと戻る道すがら、イセルはカシューナに向かって尋ねる。

カシューナは、少しだけためらった後、一行に簡潔に説明してくれた。

「≪教団≫というのは、とある組織の総称です。正式名称はよく分かりません。ある程度昔から存在しているようなのですが、正確には記録されていないのでいつから存在しているのかということも不明です。

　現在の主要な信仰対象の神々ではない亜流の神々を信仰しており、元々は平和のための布教活動をしていたようです。ですが、段々とその中でも排他的で攻撃的な一部が組織化され、主流の神々を信仰する人々と敵対するようになりました」

ふんふんと頷く一同。確かにその話は少しだけ耳にしたことがあった。

だが商売柄、宗教的な部分にそれほど関わっていない彼らにとっては、あまり詳しくない情報だった。

唯一、おっさんは司祭だけあって聞いたことはあるらしく、納得した顔をして頷いていた。

……こう見えても一応おっさんは、商売の神を信仰しているのだ。

「あまりに過激なその活動に対して、主流の神々の司祭たちは次第に≪教団≫の信仰を弾圧するようになり、何度か大掛かりな掃討作戦も行われたそうです。その結果、残った一部の信徒は表舞台から姿を消し、闇の中へと消えていった……と言われています」

そこまで言ってカシューナは一旦口をつぐむ。
……確かに、聞いている方もあまり気持ちのいい話ではない。どこの国でも、宗教戦争は凄惨なのは代わりがないようだった。

「ただ、ここしばらくはずっと目立った動きも無く、噂も聞かなかったのですが……まさかこんな所に出没するとは」
「しかも、ラバン公と繋がっていたとは……な」

ちなみに、ラバン公の遺体はそのまま遺跡に放置してきた。
ダイクを誘拐した犯人を弔ってやる義理はないし、町に運んでくるというのも大変だ。……後で、関係者にでも引き取りに行かせればいいだろう。

それよりも、立て続けに執政者を失ってしまったポルトヴァの町はどうなってしまうのだろうか？
さらに一行にとっては、先を急ぐ方が先決だった。唯一残った執政者を取り戻すためにも。

「……そう考えると、ますますダイク様が心配です。皆さん、早い所出発の準備をしましょう」

ダイクの身を案じたカシューナが口にする。
……ちょうど、懐かしい彼らの見知った町の景色が見えてきた所だった。

＊

次の日。一行は気を取り直し、これからの方針について相談していた。
当初ダイクをさらったラバン公と、その一味であるズーマンやフェ

ッケンは倒した。
残った者も街の自治警団で捕らえている。……だが、肝心のダイクは戻ってきてはいない。
また一から仕切り直してダイクの行方を調べなければならない。

「我々は屋敷で出発の準備と今回の件の後始末をしておきますので、準備ができるまでの間、何か情報を仕入れてきてもらえませんか？」
「何かって何だよ」
「分かりませんが、奴らが動き出しているのなら、噂や情報が伝わっているかもしれません。私はここで部下の連絡を待ちますので、申し訳ありませんが動ける方々でお願いします」

……≪教団≫と言われる相手の正体を調べるには、もしかしたらしばらく時間が掛かる道中になるかも知れない。
それを見越して、一行は念入りに準備を行うことにした。

「よっしゃ分かった。ベル行くぞ」
「えっ！？私？」
「他に誰がいるってんだよ」
「そ、そうなの？」
「……シャルル、お前も行くか？」
「行く～！」
「じゃあ我々は準備を手伝おうか」
「そうしましょうか」

さすがのカシューナも、一人で全て手配するのは大変だろうと、おっさんとグラムルとスプが準備を手伝うことになった。
それに、旅慣れた彼らの準備は、自分たちで行った方が効率がいい。
ベルたちが情報を集めている間に、準備を済ませてしまえるよう、彼らは手分けをして動き始めた。

＊

イセルとベル、そしておまけのシャルルは街の酒場を何件か回ってみたが、それらしい情報は無かった。
先日からの、領主に加えて領主代行までもが失踪するという混乱の中、少なくとも一般市民の間にはそれほど動揺が広がっているわけでは無さそうだった。
先代領主の不審死から考えると、ここ最近のポルトヴァの市政は混迷を極めている。
だがさすがに市民はたくましく、自分たちで自治の道を少しずつ探っているようだ。

（ホント、人間ってのはたくましいぜ……）

活気溢れる下町の辺りを歩く度に、イセルはそう思う。
今は領主だなんだという騒ぎに巻き込まれてはいるが、少し前までは自分たちもそちら側の人間だったのだ。……政治がどうのこうのという話に大して興味はない暮らしを送っていたのだ。

だが、場所を少し変えれば、どこの町でもあるように、国政の行く末を憂う声や、続く内乱への不安の声も多かった。
国に縛られているわけではない彼らにとって、国政に関する話にももちろん興味は無かったが、それでもどこかの街に住んでいる以上、何かしらの情報は伝わってくる。
そして戦でも起きた場合は、それこそ関係ない話ではなくなってくるため、彼らも多少の情報なら知っていた。
それらの情報と酒場で集めた情報を統合してみると、大まかにはこの国は以下のような状況のようだ。

このランガルド王国はここ数年、王を巡っての内乱中であり、その当事者の一人である隣の街の大公ダスターが力を求め、軍事力を強化しているらしい。
そのやり口はお世辞にも正々堂々と言うものではなく、『手段を選ばず』といった方法で有名である。そして、ラバン公爵はダスター大公と仲が良いとか。
このような国政を通して、周囲の国々とは孤立した状態であり、同様に友好であるとも言えないという状況だった。

考えてみれば、彼らが国の情勢に関してこれほど情報をしっかりと集めてみたのは初めてかもしれない。この町や国を巡る状況がようやく理解できてきた一行だった。
だが今回の目的はそういうことではない。折角町に出た以上、それ以外の有用な情報を集めたかったが、こんな話ぐらいしか聞くことはなかった。

「昨日、かみさんとケンカしちまってよぉ……」
「分かる、分かるぜその気持ち！」

何軒めかの店のはしごの後、カウンターで店主に向かって愚痴っていた親父に対し、突然イセルが横から会話に入る。
親父は昼間から既に出来上がっているのか、いきなりの乱入者に対しても驚くことなく、すんなりと飲み話が始まった。

「俺もさあ、仕事でちょっとミスしただけなのに、それ以来仲間の風当たりが強くてよぉ……」

前回の失態以降、色々と根に持っているのか、仲間内の所々で思い出したように槍玉に挙げられるイセル。
この問題の嵐が過ぎ去るまでには、もうしばらく時間がかかりそう

だった。

そんな彼の様子に呆れたのか、ベルとシャルルは別のテーブルについてお茶をし始める。

イセルも、そのかみさんと喧嘩したという親父と意気投合し、そのままのノリで昼間っから酒を飲み始めてしまった。

（……長くなりそ）

ベルが半分諦めかけた時、ギギィッと音を立てて酒場に入ってくる者がいた。

それは魔術師風の壮年の男と、戦士風の格好をした体格の良い女性の二人組だった。

そして、入ってきても席に着くわけでもなく、辺りをキョロキョロと見回している。……おそらく人を探しているようだ。

この辺ではあまり見かけない組み合わせだったためか、酒場の中でもちょっと目立っていた。

その珍しい二人組は、カウンターにいる店主に話しかけようと、店の奥へと歩を進める。

「あの～……こちらに……あ、いたいた」

そう店主に話しかけようとした時、彼らにも全く気付かずに愚痴トークで盛り上がるイセルと親父を見つけ、真っ直ぐそちらへ近づいていく。

「あの～、お取り込み中失礼します」

その言葉にイセルたちはようやく二人に気がつき、振り返った。

「私、オルドーラスと申します。隣にいるのがリュミエールです」
「……はぁ」
イセルと親父は同時に返事をしたが、オルドーラスと名乗った魔術師風の男は、明らかにイセルの方を向いていた。
彼には全く心当たりは無い顔だったが、とりあえず飲みかけのジョッキを置いて、二人のほうへと向き直った。
「いきなりで失礼ですが、あなたのお名前を伺わせて頂けませんか？」
その唐突な質問に、急激にイセルの危険感知センサーに警告灯が光る。
咄嗟にイセルは、ふと頭に浮かんだでたらめな名を名乗ることにした。
「で、デブリーズ・フェアチャイルドと申します……」
「あれ、人違いでしたかね？確か私の情報によれば、あなたがイセルナートさん、そしてあちらのお二人がイゼベルさんとシャルルさんと伺ったのですが……」
と、そこまで言った時、イセルが話しかけられていることに興味を持ったのか、ベルとシャルルが近づいてきた。自分の名前が出たことが聞こえたらしく、話に割り込んでくる。
「何？何の話？」
「失礼ですが、イゼベルさんとシャルルさんですか？」
「え、そうだけど？」
「そうだよ～」

一片の疑いもなく即答する二人に、イセルは思わず右手で額を押さえる。

（あっちゃ～……）

その返事を聞いて、オルドーラスという壮年の魔術師はホッと胸を撫で下ろした。
イセルが偽名を名乗ったことにも気付いたようだが、特にその事を咎めるつもりは無いらしい。
そして三人に向かって、彼らがここに来た本来の用件を伝えたのだった。

「……実は、ちょっと私たちについてきてほしいんですよ。……隣町のお城まで」

＊

イセルとベル、シャルル、そしてオルドーラスとまだ一言も発していないリュミエールの五人は、改めてテーブルに座り直した。
改まって話し出すオルドーラス。

「実を言うと、あなた方に殺人容疑がかかってるんですよ」

なかなか人聞きの悪い話題をサラリと持ち出すオルドーラス。
周囲でそれを聞いていた数人が耳をピクッと動かした。
それに対して、女性二人組が無邪気に答える。

「そんな悪いことしてないよ～」
「私も私も」

（よくそんなにサラリと言えるな）

「い、いや～、覚えがあると言えばあるような無いような……」

そんな二人と対照に、過去の自分を振り返って、何だか曖昧に言葉を濁すしかないイセル。

（一体どれの話だ？）

……心当たりはたくさんあった。

最近巷で流行りの軽快詩吟英雄譚じゃあるまいし、倒した相手をみんな捕まえて牢屋に入れてめでたしめでたしというわけになどいかない。

もう既にイセルも何人もの人間を殺めているのだ。

……途中からその人数を数えることなど止めてしまった。剣を持つ者など、そんな因果な商売なのだった。

「そうなんですか？」

「まあ一応戦士なんで、商売柄これまでに結構な人数はやってますからね……」

「あ、いえいえ、そういうのではなくて……正直な所、ラバン公の殺害に関しての容疑です」

（やっぱりそっちか……）

概ね予想はしていたが、このタイミングで来るからにはごく最近の話だろうとは思っていた。

しかしまさか、つい先日のラバン公のネタとは……。何か少し怪しい臭いがする。

「まあ、権力に逆らうつもりはないからな。ついていくよ。……悪

いな親父。またゆっくり飲みながら語ろうぜ」
「おお、なんか兄ちゃんも大変そうだが頑張れよ！」

意外にも従順なことを口にするイセルは、さっきまで一緒に飲んでいた親父に別れを告げ、迎えの二人についていく事にした。
何せお城からの使者だというからには、あまり無碍にする事はできないだろう。
イセルが従ったことで、残った二人もそれに付き合う形になった。

「とは言っても、このまま行くのもまずいな。……ちょっと仲間に言伝を頼みたいんだが」
「分かりました。そちらにも他の者が向かっていると思いますがね。少しでしたら問題ないでしょう」

＊

一方、屋敷に残ったおっさん・グラムル・スプの三人は、それぞれ手分けをして旅支度と馬などの準備を行っていた所だった。

「馬を六頭調達したいんだが」

スプは厩舎へ行って、馬の世話担当の使用人にそう告げる。……カシューナも入れると一人分足りないのだが、その辺の詰めの甘さが彼らしい。
いや、もしかしたらシャルルは一人では馬に乗れないということを見越しての手配なのか？でもよく考えると、おっさんも彼自身も乗れないから四頭でいいはずなんだが……。
……もしかしたら彼なりの考えがあるのかもしれないが、良く分からないからいいか。
そのまま一緒に、鞍の準備や毛繕いなどを手伝っていた。

その頃、おっさんは厨房へ行って食事の手配をしていた。

「保存食の用意だ。三日……いや、五日分」

これぱっかりはスプやイセルには任せることはできない。
持ちきれなくなってダメにするか、一日で底を着いてしまうことも過去には多々あった。
それ以来、飯に関しては彼らには任せないことになったのだった。
……詳しくは第1話を参照して頂きたい。

グラムルが一行の荷物をまとめ、旅支度を整えていると、屋敷の入り口辺りで声が聞こえてきた。

「カシューナはいるかっ!?」

部屋の窓から外を見てみると、憲兵のような格好をした男たちが、入り口付近で大きい声で何かをまくし立てているのが分かった。

(何でしょうか……?)

その慌しい様子に、これは早めに知らせた方がいいだろうとカシューナの元へ急ぐ。
彼は執政室にて、ダイクの代理の仕事の処理を行っているはずだった。
グラムルが廊下を曲がると、ちょうど部屋から出てくるカシューナと出くわした。

「あ、カシューナさん。ちょっとこっちへ」

「……何でしょう?」

そのまま廊下の隅でこそこそ話を始める二人。

「何だか、カシューナさんを探している兵士たちが来ていますよ」
「……私を？」

グラムルがさっき見た様子を手短に説明するが、カシューナには心当たりは無いようだった。
確かに、それがあれば一行にも説明していることだろう。
そんな話をしていると、どうやら騒ぎを聞きつけたらしいおっさんとスプも現れる。

「カシューナさん、何事です？」
「なんか俺たちも呼ばれてるみたいだったぜ？」

この様子では、既に屋敷中にこの事は伝わっているようだ。
そのただならぬ状況に、これは直接聞いてみるしかないということになった。
四人で揃って屋敷の玄関へ向かうと、ちょうどそこに屋敷の使用人に連れられて、てててっと走ってくる小男がいた。

「すみませーん。こちらにヌニエルさんというドワーフの方はいらっしゃいませんか？」
「ん？わしがヌニエルじゃが？」
「あの～、私は町の酒場で働いている者なんですけど、イセルナートさんからの言伝を預かってきました。え～何でも『ちょっと隣のお城までさらわれてくる』だそうです。確かに伝えましたんで」
「さらわれる！？」
「……どういうことでしょう？」
「さあ……？ちょっと分かりませんね。……心当たりが無いことも

無いですが」

小男はそれだけ言うと、すぐにまたててっと小走りに戻っていってしまった。

元々のイセルの伝言も適当なものだったろうが、「隣町の城まで行ってくる」という内容が、伝言遊戯のように微妙にニュアンスが変わってしまったようだ。

それを聞いた一行の間に、ちょっとした動揺が広がる。

帰ってきて早々のこの様子。

おそらく今回の件と無関係ではないだろうということは想像が付いた。

また少しの間、物思いに耽る一行。

……だが、やはり結局は行ってみなければ分からない、という結論に達したようだった。

「行ってみましょうか」

「そうしましょう」

「あ、ちょっと待ってください。念のため、保険をかけておきますので」

そういってカシューナは少しの間、席を外す。

彼らはその間に、さらわれたという人たちの分の荷物もまとめて持って行く事にした。

そしてさっきから騒いでいる兵士たちにコンタクトしてみると、彼らも早々に馬車に詰め込まれ、隣町ヘルンデルクへと連行される事になってしまったのだった……。

第１４話　前向きな脱獄者

お城からの使いに連れられて、隣町へとやってきました。

＊

隣町ヘルンデルクは、思っていたより華やかな印象ではなかった。
それよりもどちらかというと『物々しい』『騒々しい』といった雰囲気で満ちていた。
辺りを見回すと、兵士や傭兵といった出で立ちの者たちが目立ち、お世辞にも上品な雰囲気は見当たらない。中にはゴロツキのような輩もウロウロし、場所によってはスラムと化している路地裏も所々に見受けられた。

そんな中、大通りを馬車に乗って揺られて、イセルたち一行はヘルンデルク城へと連行されていた。
城の前で全員降ろされると、オルドーラスに連れられて城門の前に並ばされる。
城門の前には門番が数人立っており、不審人物に目を光らせている者、入場の審査を行い、中へ通したり追い払ったりする者とで担当者が分かれているようだった。
オルドーラスは審査を行っている担当者へ二言三言何かを伝えると、すぐに中へ通されることとなった。
門番役の兵士が審査役の兵士から内容を聞き、通りすがりに声をかける。

「待て！……容疑者を武器も取らずに入場させようとしたのか！？」
「いや、それが容疑者というかそういうわけでは……」
反論するオルドーラスの声は何だか弱々しい。そういえば一体、こ

の人物は城内でのどのような立場なのだろうか？その事をすっかり聞き忘れていた。
自分たちを連れてくるような立場かと思えば、門番にも大きく出ることはできないというよく分からない立場だ。もちろん、本人の性格もあるのだろうとは思うが。

ともかく、門番の兵士はやたらと偉そうに一行に指示してくる。
「おとなしくしたまえ」
「してるじゃん」
「逆らわない方が身のためだぞ？」
門番風情の癖に偉そうな……と思ったのかどうか、ベルが小声で口答えをする。幸い、当の門番には聞こえなかったようだが、隣で聞いていたイセルは、ベルを軽く嗜めていた。
が、まさかそんなイセルが後ほど、ああも変貌するとは誰も思ってはいなかった。……ことはないかな。結構みんな（やっぱり……）という感じだったかもしれない。とにかく、この時はまだイセルは大人しく言うことを聞いていたのだった。

＊

「あー、貴様らがラバン公爵を殺害した者どもか？」
「……！？」

一行の前に現れた大公は、横柄に質問した。
仮にも一国の領主である人物なのだ、それなりの威厳や人格というものを期待していた彼らにとっては、目の前の玉座に座っている人間が、この地域を統治しているものだとは到底信じがたかった。
ダスター大公は、よく御伽噺に出てくる怠惰な王様の象徴として描かれるような、太目の体格に脂ぎった顔というような見た目はしておらず、むしろ逆に痩せ気味で骨ばった、疑り深そうなぎらついた

目つきが印象的の男だった。
ダイクという例外はあるものの、これまでに想像していた領主とのあまりのギャップに一同は驚きを隠せない。

「いえ、それがどうもそういうわけでは……」
「貴様には聞いておらん。私はこの者たちに聞いておるのだ」

当然ながらその事を知っていたオルドーラスは、いつもの事だとばかりに冷静な態度で、固まっている一行の代わりに返答した。
だが、その返事は相変わらず気弱だった。そのせいか、彼の言葉はダスターにあっさりと切って捨てられた。

「いえ、それは違います」
まだ領主のギャップから立ち直れていないベルとシャルルの代わりに、我に返ったイセルがきっぱりと答える。

「何ぃ～っ、嘘を吐け！血まみれのラバン公が倒れておる横に、貴様らがいる所をみた者がおるのだ！」
（あの時の視線はそれか……！）
ベルが当時のことを思い出す。何者かは分からないが、どうやら今回のゴタゴタの情報源はそこらしい。……もしや、これも教団の仕業なのだろうか？

「まあそれはいい。……それで、魔法装置とやらはどこへやったのだ？正直に答えるが良い」
「魔法装置？」
その単語を口にした途端、ダスターの目の色が変わったような気がした。どうやら、明らかにそれが目的で呼ばれたようだ。
（こいつもそれが目当てか……）
イセルは途端に、この領主に対する不信感が増幅してくるのを感じ

る。先日の兵士たちといい、行き過ぎた力を求める輩にはろくな人物がいないからだ……。

「……本当にこの人が領主なの？」

「……何か言ったか？そこの女」

同様の印象を持ったのか、疑わしそうにベルが他の二人に対して耳打ちをする。どうやら直接会話するのはイセルに任せているようだ。それを聞いて代わりに答えるイセル。

「彼女たちは、お話で聞くのと印象が大分違ったのでショックなのでしょう」

「ふん、ようやく喋る気になったようだな」

突然慇懃無礼な態度で話し出すイセルだったが、相手が口を開いたことで満足気なダスター。

イセルは続けた。

「大変失礼いたしました、大公。私、冒険者であるイセルナートと……」

「イゼベル」「シャルル」

隣に目配せをするイセル。渋々名を名乗る二人。

「……と、申します。今回の件に当たっては……」

「あー、貴様らの名などどうでもよい。さっさと魔法装置をどこに隠したか言わんか」

（カチン！）

ダスターは全く聞く耳持たないらしい。

折角領主への謁見の機会だからと気合を入れて話し出したイセルの額に、三つほど怒りマークが浮かんだ。

だが一応、表面上はそんな様子を見せずに続けて話す。

「魔法装置とは、何のことを言っているのか分かりかねるのですが

？」

「嘘を吐け！隠すとためにならんぞ」

「嘘ではありません。遺跡にあった物は、通りすがりの≪教団≫の者たちが奪って行ってしまったようなのです」

「そんな嘘を吐いてもダメだ」

さらに聞く耳を持たないダスター。取り付くシマもないとはこのことだ。

話し合いにもならず、イセルの返事にも少しずつ感情が篭ってくる。

「嘘だったら、もうちょっと信じられそうなことを言いますよ。従ってこれは真実の話なのです！」

「そんな言い分が通じるか！『何か信じられなそうな嘘だから本当ですよ』だなどと！」

何とかイセルは、『信じられなそうな嘘だから真実理論』を展開しようとしたが、そういう所はきちんと聞いているらしい領主に、あっさり退けられてしまった。

「でもホントだもん。そうそう、これからそれを探すとこなんだから」

応援をしてくれるシャルル。しかし説得力には欠ける口調なのはご愛嬌だ。……あまり援護にはなっていないようだった。

「大体、その容疑の情報元が怪しいですね。血まみれで倒れている人の側に立っていたら、殺人犯になってしまうのですか？」

「……そう見るかもしれん」

（おのれ……！）

さらに怒りマークが二、三個増えていくイセル。

何だか妙に切り返しがうまいダスターは、自分に都合のいい理論展開にかけてはさすがというほどの手腕を持っていた。

「そんな魔法装置なんて調べて、一体どうするつもり？」
「そんなもの、貴様らには関係ないだろ」
（プチッ！）
（あ……切れた）
横で見ていたベルは、イセルの表情があからさまに変わったのに気付く。
そして、（あーあーめんどくさいことになっちゃったな……）と、まるで他人事のように嘆息するのだった。

「……じゃあ俺たちも関係ないな。俺たちがどこで何を見ようと！」
さっきまでと打って変わって、乱暴な口調になるイセル。
折角ここまで来てやってるのに、関係ないなどと言われては堪忍袋の緒も切れるというものだ。だったら俺たちのことなどほっといてくれ！本当はそう言いたかった。まあ言った内容もほとんど変わってないが。

一気に黙秘を始める一同。……というより、相手の都合のいい話しか聞いてもらえないのだから話す内容も無い。
じれったくなったダスターも、次第に追及するのを放棄し始めたようだった。

「貴様らでは話にならんな……。そういえば、他にも仲間がいるらしいな。……そいつらに聞くことにしようか。それまで貴様らは牢屋にでも入っとれ！」

兵士に連れられ、城の牢屋へと連行される一同。彼らは牢屋などという所に入れられるのは、これが初めてだった。
貴重な経験かもしれないが、できれば遠慮したいものだ。しかし、どうやらそういうわけにも行かなそうだ。

オルドーラスたちも、何とも言えない表情でそれを見送っていた。

「てめえ、女に乱暴にするんじゃねぇ」
「うるさい、貴様に指図される覚えはない」

連行していく兵士に向かって噛み付くイセル。しかし領主が領主なら兵士も兵士だ。
イセルの言うことなど、全く聞く耳がないようだった。それに負けじと、さらにイセルは兵士に噛み付く。

「この無礼な野郎が！」
「……罪人に礼儀などいるかっ！」
（ブチッ！！！）

さらにイセルの額の血管が切れる音が聞こえたような気がした。
無実だというのにこんな扱いをされてはたまらない。炎の戦士イセルナートの瞳に、復讐の炎が宿った瞬間だった。
そんな彼の様子にも気付かず、兵士は淡々と職務を遂行していく。

一行は後ろ手に縛られた。

「ちょっとー、酷いじゃんか」
「どうやら貴様らの中には魔法使いもいるようだしな」
「私です！私が魔法使いなので、他の人は縛らなくてもいいでしょ」
「そうだそうだ」
ベルが自分から魔法使いに立候補する。
シャルルもそれを面白がって追従したようだ。

「お前ら怪しいぞ。本当かどうかわからんな。とりあえず全員縛らせてもらう」

「てゆーか、誰か手が自由だったら、そいつが他の人の縄ほどくだろ」

「……そりゃそうだ」

……三人は、冷たい牢獄の中へとぶち込まれた。

＊

「貴様ら何者だ」

一方、別の兵士たちに連れられてきたおっさん・グラムル・スプ、そしてカシューナも、城の前に着いた所だった。

率先して馬車を降り、城の中へと入ろうとする所を門番に止められる。

いつもだったらイセルが真っ先に話し出す所なのだが、生憎うるさい奴がいなかったので、しばしの沈黙が漂った。

意外にもそれを見かねてか、スプが話し出す。

「何でも我々の仲間がこちらに連れてこられたそうなので、一体どういうことなのか事情を聞きに来たんですよ」

さらに意外なことに、まともな事を話していた。

それに驚く他一同。……いつもこうだったらいいのに……そんなことを思ったかどうかは定かではない。

「なるほど、事情は分かった。では武装をこちらで預からせてもらおう」

一通り簡単に事情を聞き、同行した兵士からも事情を聞いた後、門番は武装解除を申し出る。

一行は大人しくそれに従った。
ちなみに、イセルが置いていったティルヴィンは、スプが持参していた。兵士がそれを取り上げようとした時、注意を促すスプ。

「あ、その剣を抜いてはいけませんよ？」
「……ん？何かあるのか？」
「いえ、ちょっと扱いにくい剣なので、危険なんです」

スプの台詞を素直に聞き、注意しながら一行の武器をまとめる兵士。
……こんな時、イセルがいたら無駄に騒いだことだろうとスプは胸を撫で下ろした。
その後、どうやら牢屋へ連れて行かれるようだった。
地下へと続く階段の前に、看守が見張りをしている。

「皆さんがイセルさんのお連れの方々ですか？」
「ええ」
「とりあえずお話させてあげようと思いましてね」

牢屋の前ではオルドーラスたちが待っていた。一行は、簡単に素性を確認される。
彼らがうまく取り計らってくれたのか、まずは全員で話をさせてくれるようだった。

……薄汚れた暗い牢屋の中では、後ろ手に縛られたまま、やたらと偉そうなイセルがいた。

「おう、久しぶりだな。『俺の』連れ共よ（笑）」
「……こいつ、やっちゃってください」

どうやら耳聡く、さっきのやり取りを聞いていたらしい。

……一瞬、そのまま帰ろうかと思った一行だった。

＊

全員揃ったとは言っても、特に相談することもなく、事の次第を簡単に聞いた後、再び領主ダスターの面前へと連れてこられた一同。まあ当然の事だが、ぎらついた目は先ほどと変わらず、ダスター大公は例によって横柄な態度で玉座に腰掛けていた。

「ん？人数が増えているようだな。ようやく揃ったか。……さて、先ほどの男では話にならんかったからな。他の者に聞くことにしよう」

イセルは先ほどのやり取りですっかり懲りているのか、ダスターの話など全く聞かずにスプに小声で伝える。

「ティルヴィンを奴に渡せ！そんで操らせるんだ」

……やっぱり。さっき武器を持っていってもらってて良かった。胸を撫で下ろしたスプだった。

「……。何をこそこそ喋っておるか。遺跡にあった魔法装置はどこへやったのだ！」

「魔法装置？あの遺跡にあった魔法装置なら、何者かに持ち去られてしまったので、我々にも分からないのです」

何故か今回はやたらと真面目な台詞を口にするスプ。他のメンバーは驚いたものの、代わりにあの領主と話すつもりはないらしく、そのまま彼に対応役を任せるつもりのようだった。

一方で、相変わらずのイセルはベルとこそこそと喋っている。

「おいベル」

「……何よ？」

「さっきのさあ、罪人に礼儀はいらんとか言ってた奴いたじゃんか」

「それがどうかした？」
「……あいつに向かってさあ、『〇〇さん！もう隠せませんよ！』とか言ったら怪しまれないかな？」
「でも、名前がわからんじゃん」
「そんなの適当に作ってさあ、『俺たちにはそう名乗ってたじゃないですか！』って」
「すごいこと考えるね、アンタ（笑）」
「悪知恵だけなら天下一品です（笑）」

「……全然信用できんな。貴様らの話など」
微妙に聞こえていたようだ。とうとう呆れたように呟くダスター。
「じゃあ聞いてもしょうがなくない？」
それを聞き、シャルルはあっけらかんと言う。慌ててそれを止めるスプ。
「ま、待てシャルル！」
「……そうだなあ……。それじゃあいっその事切り捨ててやろうか！」
「やっぱり……」

折角真面目に話しているのに、一部のせいでどんどん悪い方向へ向かっているような気がしたスプだった。
そんなことにも全く気付かず、いつもと立場の変わった迷惑戦士は気難しげに独り言を呟いている。

「頑固な人間が権力を手にしたときほど厄介なことはないな」

かなり真面目な表情で語るイセルだったが、誰も聞いていなかった。
……というか無視したようだ。
一通り先ほどと同じ質問をしても、やはり同じ答えしか帰ってこない一行に、もはや話す気も失せたのか、ダスター大公はブツブツと

何かを呟いていた。

「う～む……。こいつら本当に知らんのか？しかし……あの女の言うことにはな……」

（何だよその思わせぶりな独り言はっ！？）

微妙にそれが聞こえた一同は、思わず突っ込みたくなったが止めておいた。

「まあともかく、これ以上話しても時間の無駄だ！明日また聞くとしよう。正直に話さないのなら、今度こそ実力行使に出ることになるぞ」

最後にそう捨て台詞を残し、一行はダスターの前から下がらされた。そしてまた、さっきの薄汚い牢屋へと逆戻りさせられてしまうのだった……。

＊

牢屋へと続く階段再び。

先ほどと同じ兵士が、新たに縄をかける。今度は心強いことに、七人全員一緒だ。

この時を待ってましたとばかりに、勢い込んでイセルが吐き捨てた。

「罪人に礼儀はいらんのなら、よっぽどお前の周りは無礼な奴らが多いんだろうなぁ？」

「……え？何が？」

何の事？という顔をして問い返してくる先ほどの兵士。……狙い済ましたイセルの皮肉も、通じていなかったらしい。

当然ながらイセルの一言にも事態は特に進展せず、またしても一行は牢屋にぶち込まれた。

「あーあ、誰のせいだ一体」
「アンタのせいでしょ」
「……イセルさん、あなた話さないほうが状況が悪化しなくていいと思いますよ」
「うぉっ！カシューナさんいたのか！？」
「あんまり静かなんで分からなかった……」
「カシューナさん、あれだよ。……偉い人の前に出ると上がっちゃってダメなんだ？」
「……いえ、単純に下手なこと言わない方がいいと思っただけですよ……」

呆れた表情のカシューナ。でも大方予想はしていたらしい。こうなることはほとんど諦めていたようだった。……大分一行に慣れてきたみたいだ。

「でも、どうやらダスター公は話を聞いてくれそうにはないですね。さすが悪名高いだけある」
「このままじゃ、拷問されるだけかも……」
「……逃げちゃうか？」

そんな手段を持っているのかは分からないが、無責任に提案するスプ。
ようやくいつもの彼に戻ってきたようだ。ちょっと安心した一同だった。
それに対して、意外にもカシューナが答えた。

「……良かった。その事を皆さんと相談しようと思ってたんですよ。

やはり仕込みをしておいた甲斐があったみたいですね。おそらくそろそろ……」
そう言った時。

カツッ、コロコロ……

どこからか、小石が牢内に投げ込まれた。それは明らかに不自然だったため、全員の注目を浴びることとなった。
どうやら、それには看守は気付いていない。階段の上に陣取っているせいか、細かい小さなやり取りに関しては気付かれることは無さそうだった。

コンコン……

投げ込まれた小石に対して、外の看守の様子を確かめ、鉄格子を叩いて応えるカシューナ。
他のみんなは、それを不思議そうに見ている。

しばらく待つと、なんと彼らが囚われていた牢屋の一角の石が動いて、ゴトッと外れた。
驚いて声を上げそうになるシャルルの口を、グラムルが慌てて塞いだ。
「……！？」
そこから登場したのは、以前一度見かけた、ラカーサ家の密偵、クラウドだった。

「カシューナ様、お待たせいたしました」
「手間をかけて悪いな、クラウド」

まるで彼が来ることを知っていたかのように……というか知ってい

たのだろうが、冷静に返事をするカシューナ。
一行に挨拶をする間もなく、クラウドは手早く懐から小道具を取り出す。と、すぐさま慣れた手つきで鉄格子の鍵を外した。
さらにスムーズな動作で蝶番に対して油を差すと、音を立てないように扉を開けたのだった。

「皆さん……じゃあ、行きましょう」

当然のようにそう言うカシューナに一行は驚きを隠せなかったが、反対する者は誰もいなかった。
（カシューナさん、案外大胆だな……）
そう思う一同だった。

全員で牢屋を脱出し、音を立てないように入り口に向かって歩いていく。
不思議に思ったベルはカシューナ&クラウドに尋ねてみた。
「……どうしてここが？」
「いや実は……ここだけの話、私来たことあるんですよ、ここ」
「ええっ！？」
思わず驚きの声を挙げてしまい、慌てて口を抑える。
騎士であるにも関わらず、領主の城の地下牢にも詳しい。カシューナの過去は、さらに謎に包まれていくのだった……。

「皆さん、そんなことより早く脱出しましょう！」
そんなカシューナに連れられて牢屋を出ようとする一行。
階段の上で見張りをしていた看守は、素早く近づいたクラウドに絞め落とされ、悲鳴も上げることなく気絶させられてしまった。
「武器はこちらに保管されています」
クラウドの案内で向かった先の部屋に、彼らの武器が置いてあるとのことだった。

彼が見張りをしている間に、ベルが忍び込む。

『あったよ！』

小声で合図を送り、部屋の外に出た瞬間。

「ふぎゃっ！」

ベルの体を魔法の糸が絡み取った。

＊

「逃げてもらっては困りますねぇ～」

その間延びした声と共に物陰から現れたのは、彼らに最初に声をかけてきたオルドーラスだった。

「こんなこともあろうかと、位置探索の魔法をかけておいて良かったですよ」

同時に、付き添っていた女戦士のリュミエールが大剣を抜いて彼の前に立ち塞がった。女性とはいえ、体格のいいリュミエールが発する気合は、彼らを躊躇させるには十分だった。そして、イセルの直感からすると、彼女の力量は彼と同等か、もしくはそれ以上……のような気配がしていた。さすがに城に勤めるだけのことはある。

そして、最も頼りになる彼らの武器は、ベルと共に糸に絡みつかれたままだった。

「う～っ……」

悔しそうに呻くベル。這いつくばった状態のまま、地面に糸で貼り付けられている。

その格好は、彼女のプライド的にも許せなさそうだ。

そんなベルとオルドーラスたち、そして周囲の状況を見回してじっと考えるイセル。

……武器は無く、ベルも捕まっている。となると、有効そうな手段

は一つだけだった。

「……ここは何も言わず、見逃してはくれませんか？」

「……」

珍しく、真剣な表情でオルドーラスに語りかける。オルドーラスは答えない。

他の仲間たちの間でも、さすがにここで茶化す者は誰もいなかった。

「……とりあえず、彼女は解放しましょうか」

少しの間沈黙した後、オルドーラスは≪解呪≫の呪文を唱えて、ベルを解放した。

ベルは用心しながらも、すすすっと忍び足で仲間の元へと戻った。

「よっしゃ、逃げようぜ？」

これ幸いとばかりに、さっきまでの緊張感台無しにスプが駆け出そうとする。

さらに、ちょっと待てよ、とイセルが言おうとした側から、「はいこれ」とベルが皆に武器を配り始めた。

「……そ、それは戦う意志があるということですかね？」

オルドーラスの額に汗が一筋流れた。

「……おいおい、状況を悪化させるなよな」

空気を読まない仲間に対して、呆れた表情で呟くイセル。

相手にここまで譲歩してもらったのだから、ここは交渉しなければなるまい。……この流れであれば、次に来るのは相手からの条件提示のはずだ。

そのイセルの読みは的中し、オルドーラスたちからの敵意は感じなくなっていた。それを察して、剣を下ろすリュミエール。

「……そうですねぇ……。十日以内なら何とかしてみましょう。あなた方が嘘ついてるとは思えませんし」
「ありがとうございます」
オルドーラスからの条件提示に対して、素直にお礼を言うイセル。
何とか信じてもらえたようだ。
「あ、本当のことばっかり言ってるとも思えませんけどね！？」
それを聞いて慌てて取り繕ったオルドーラス。
……あれ？どうやら、かなり印象悪かったらしいな……。さっきまでの自分の行いを反省したイセルなのだった。

＊

「これを持って行ってください」
その言葉と共にオルドーラスが出してきたのは、小さな水晶玉がくっついているペンダントだった。
「位置探索の魔法がかけてあります。これがあれば皆さんがどこにいても分かりますので」
オルドーラスからそれを受け取るイセル。
（……こんな物を最初から用意してるなんて、もしかしたら、逃がしてくれるために来たのかも？）
と思ったが、彼らの立場を考え、それは胸の中だけにしまっておいた。

「それでは……よろしくお願いしますね？十日ですよ」
そう言うと、一行の脱獄が見つかったようで騒がしくなり始めた地下牢の方へ向け、叫んだ。

「こっちにはいないぞ！向こうを探せ！」
「よしみんな、ズラかろうぜ！」

その言葉を聞いて、一行もいち早く動き出す。クラウドの案内に従って、場外に向けて走り始めた。

「ズラかるってのがなぁ……」

何だかちょっと楽しそうに逃げていく一行を見て、オルドーラスの胸にもやもやとした雲が広がる。
一抹どころか、二抹も三抹も不安が残る彼らなのだった……。

というわけで、一行が指名手配されてしまうまで。……残り、十日。

第１５話　あてもなき探索者

横暴な領主の城から逃げ出した一同。
一行が指名手配されてしまうまで、……残り、八日。

＊

一気に二日も過ぎてしまい、その間彼らが何をしていたかと言うと……？
情報を集めようとしていたのだった。前回、カッコつけて見栄を張ったのはいいが、手掛かりが全くない！
オルドーラスはああ言ってはくれたものの、あの領主ダスターのことを考えると、追っ手がかかっていないとも限らない。
ポルトヴァの屋敷にて荷物と馬だけ調達すると、彼らは少し南に行った所の町で一旦相談していたのだった。
……そして行き詰る。

「もう逃げちゃうか～」

既に小一時間以上、どうするかを話し合っている。が、教団についての手掛かりがない上、最後に目撃したのが遺跡から遠ざかっていく姿だけだったのだ。まともな方針など立てられようはずもなかった。
元々頭脳労働は苦手な一行なため、普段から会議などしているはずもなく、カシューナを除いた全員の頭が疲弊しきっていた。
そしてスプが出した結論が上記の一言だった。

「それは待ってください、ダイク様が」
「カシューナさんをやっちまうか……？」

「……」

（たまにマトモになるかと思えば……。こいつも教団じゃねえだろうな）

小声で呟くスプを見る限り、この面子でこれ以上相談するのは危険だった。ストレスのあまり、どんな行動に走りだすか分からない。カシューナもその雰囲気を感じ取ったのか、とりあえずこのまま時間が過ぎていくのもアレなので、何か動こうということを提案した。

……ということで、東西南北へ行こうと決まった。

分からないのなら、全部調べてみればいい。

とにかく一刻を争う事態なので、まとまって行動するよりも手分けして情報を集めるのがいいだろうという結論に。

四グループに分かれて東西南北の各地にて聞き込みをし、二日後にはこの街に戻ってこようという話に落ち着いたのだった。

東はおっさんとスプ。

西はグラムルとシャルル。

南はイセルとベル。

北はカシューナ&クラウドという布陣だ。

「それでは皆さん、吉報を願ってます！」

カシューナは馬を走らせる。改めて、風になびく金髪が絵になる男だった……。

「……」

全員が無言で、去っていくカシューナを見送る。

「……よっしゃチャンス！逃げるか（笑）」

スプのその言葉に、ちょっとだけ心が動かされた一同だった。
いつの間にか、どんどんめんどくさいことに巻き込まれているような気がする。
（指名手配か……）
何でこんなことになってしまったのかと、思わず遠くを見つめてしまうグラムルだった。

「ックシュ！」
（何だか嫌な予感が……）

そして、一心不乱に馬を走らせながら、何だか妙な不安に後ろ髪を引かれるカシューナなのだった……。

＊

『南チーム　惑いの森』

焦る一行とは関係なく、森は新緑の気配を漂わせつつあった。

半日もしないうちに、イセルとベルは森のほとりにある小さな村に辿り着いた。
村というよりは集落に近いためか、かなり閑散としている。目にする人間もまばらだ。
二人は大した情報はないかもと思いつつも、とりあえず目に付いた人に、最近変わったことはないかと尋ねてみた。
すると何人かの村人からは、ここ最近は森のエルフの呪いで帰ってこなくなる者が増えたという話を聞くことができた。

「森のエルフの呪い……ねぇ」

イセルが横にいるベルを見ながら呟く。
それを見たベルは（……何よ、文句あるの？）とでもいうような視線を送ってくる。
こんな風に二人で並んで旅をするのも久しぶりだった。

念のため、二人は森の入り口まで来てみた。一応村で聞いた情報と、エルフの呪いという部分をベルが気にしたからだった。
確かにポルトヴァにいた時にも、この辺りには≪惑いの森≫という場所があって、時々迷い込んで帰ってこなくなる人がいるという噂は聞いたことがあった気がする。
森の入り口から奥を見てみたが、とりあえず特に変わった部分は見られない。ただ、あまり森の手入れが行き届いていないのか、森との境の部分の木に、ツルのような植物がたくさん絡みついていた。

そこで二人がしばらく森を見ていると、少し離れた所で森の中へ歩いていこうとしている子供の姿が目に入った。
「こらこら、少年よ」「おい、少年」
その様子を見て、二人同時に声をかける。

その少年は十歳ぐらいだろうか。ルークと名乗った。そしてここにいる理由を尋ねられると、次のように答えた。
「森から帰ってこなくなっちゃった母さんと姉さんを探しに行くんだ」
「まあ！なんて可哀想な！」
大げさに驚くベルに、逆に驚くイセル。
「……少年よ、外見に惑わされちゃいけないぞ？」
ベルを横目で見つつ、イセルは少年に話しかける。互いに相方のことはよく知っていた。
そんな相方を無視して、ベルも話しかける。

「やめた方がいいよ、君一人じゃ無理だから」
「で、でも……」
諭そうとするベルの言葉に、納得できないという少年。家族が帰ってこないのだから、確かにそうだろうとイセルは思う。彼も昔、そんな風に誰かを困らせたことがあった。

「お前、父ちゃんはいないのか？」
「うん、うちにはいない」
「そうか……」
あれこれと少年を引き止めるために説得しようとするベルの横で、何やらしばらく考えているイセル。
……やがて顔を上げ、真面目な顔で少年に語りかけた。
「……なぁ、少年」
「何？兄ちゃん」
その真面目な表情に、何かいい案を思いついたのかと、ちょっとだけ期待するベル。
ベルの視線を浴びながら、イセルはさらに真面目な表情で尋ねた。

「姉ちゃんってのはかわいいのか？」

ベルの顔にあっという間に縦線が入る。サァーッ……という音が聞こえてきそうだ。
その表情には、（こんな子供に何聞いてるんだか……）という感情がありありと表現されていた。

「……どうかなぁ？多分かわいいんだと思うけど」
「よっしゃ！この炎の戦士イセルナート様に任せとけ！」

「どーぞ一人で行ってください。帰って来れなくなっても知らないからね」

きっぱりと言い切るベルに、二の句が告げないイセル。
（こっちの気も知らないで……）
こんな時に他の仲間がいれば、多少はフォローしてくれるのだろうが、二人だけだとバッサリと切り捨てられたまま、誰も手当てをしてくれる人がいない。……イセルの心からは、血がドクドクと流れっぱなしだった。

一応、イセルにはちょっと思う所があったのだ。
確かにベルの言っていることは正論だし、森の怖さを一番知っているのは彼女だ。だからこそ、何か理由でもなければベルは少年を引きとめようとするに違いない。
そして、代わりにその理由を作ってやるのがいつものイセルの役目なのだった。あの高慢エルフは、どうせ直接言った所で聞きゃしない。多少強引ながらも事件に巻き込んでやるのが、最もうまいやり方なのだ。
……ただしそれには、ちょっとばかし俺が精神的ダメージを覚悟しなけりゃならないんだが……。
はぁ、少年も実際に森に入ってその怖さを知れば、諦めるかもしれない。そっちの納得させる理由も作ってやらないといけないだろう。
ふぅ、大人って奴は色々苦労するぜ……。

結局ベルには何と言っていいか分からず、俯き加減にフラフラと森の中へ歩いて行こうとするイセルと少年の後を、ベルはそっぽを向きながらも着いていく。
「……あれ？お姉ちゃん来てくれるの？」
「……」
少年の質問に、ベルは何かを言おうとして言えない。少し口をパクパクさせて何かを言おうとしたが、終いには黙ってプイッと横を向いてしまった。
『……バカッ！余計なこと言うな！』

小声で横の少年に向かって叫ぶイセル。
「ごごごめんなさい、余計なことを言いました（笑）」
慌てて弁解する少年。

何だかんだ言いつつも、やっぱりこのエルフのお姉さんは来てくれるつもりなんだ。
……そしてそれをこの男の人は分かってたんだ。
この二人の仲の良さを改めて感じ取った少年なのだった。

「仲が良いなぁ～……」
「なんか言ったか、オラ坊主」

こっちの気も知らないでと、少年を小突くイセル。
慌ててベルが少年を庇った。

「まあっ！こんな乱暴な人の側に寄っちゃダメよ？」
「……」

……まあ、いいけどな。

＊

『西チーム　砂漠の入り口の村』

乾いた砂混じりの風が、二人の体をさらおうと吹き付ける。

グラムルとシャルルは西へ向かっていた。
ヘルンデルク城からさらに西へ進むと、やがて辺りは砂漠地帯へと変わっていく。
その中に、ダスター公と内乱を繰り広げている別の国の一つがある

のだった。

砂漠の入り口の村と呼ばれていた小さな村に入ると、そこはやはり少し騒々しい雰囲気に満ちていた。
ざっと見た所の村の規模に比べて、鎧などを着込んだ兵士の姿が多く目に付く。隣のヘルンデルクと似たような感じだった。
……村全体に、鉄の臭いが辺りに漂っている。

女の二人連れ、さらにその内の一人は子供という目立つ風貌のグラムルとシャルルは、完全に周囲から浮いていた。
町を行く無骨な男たちや村人からさえも、ジロジロと見られて居心地の悪いことこの上ない。

それでも何とか情報を集めないと、自分たちが罪人にされてしまう。
その使命感から、二人は意を決して目に付いた一つの酒場へ入る。
……思った通り、中の全員から注目を浴びた。
（ひぃ～……！）
注目されるのは慣れていないのだ、とそんな情けないことをグラムルは思った。横を見ると、シャルルが目に付くおいしそうな食べ物はないかとキョロキョロしている。
ここは私が頑張らねば！……などと思うグラムルではなかった。

（しまった……班分けの時、間違えたな……）

後悔ばかりしているグラムルなのであった。

＊

『東チーム　始まりの町』

見慣れた町の懐かしさが男二人を包む。
少し辺りを見回せば、彼らの知り合いが道を歩いていそうだった。

もう一方、おっさんとスプは東へ向かっていた。
少し北に行けば、元いたポルトヴァの町だったが、そちらはカシューナたちが担当だ。
彼らはポルトヴァをさらに過ぎ、彼らが元々たむろっていた始まりの町にやってきたのだった。

「おう、お前さんたち、久しぶりだな」

『明日の風は明日吹く』亭の名物店主、エール親父が声をかけてくる。そんな通称で呼ばれるこの有名親父は、近隣でも適当な経営で評判だった。その有名っぷりと言えば、営業中から自分でエールを飲んだり、時には居眠りまでしているという始末だ。
しかしそんな適当さが一行とすっかり馴染み、ここをねぐらにさせてもらっていたのだが、ダイクからの依頼を受けて以降、パッタリとこの店には帰っていなかった。
「おやっさん、久しぶり」
軽く挨拶をする二人を、懐かしそうに見る親父。
彼らが新米の頃から面倒を見てきた親父は、再会の祝いだ、と一杯酒を注ぐ。こういう所が後でかみさんに怒られる所以なのだが、そんなことはお構いなしだ。……そういう面倒見のいい所が、この店の常連を増やす理由の一つなのだった。

「他の奴らはどうした？……まさか死んじまったわけじゃあるまい？あのうるせーガキとかよ」

その言葉が差しているのは、もちろんイセルのことだ。スプとイセルは、当然ながらこの店の問題児リストに入っていた。

親父も元々冒険者で、同じ戦士のイセルとはその辺でよく話が盛り上がっていたようだ。
結局古傷が原因で一線を退き、こうして店を開くことになったのだが、それを情けないだなんだと言われ、じゃあ腕相撲で勝負だとよくイセルと競っていたものだった。
まあ言う割には、結局イセルは一度も勝ったことは無いのだが。

「おやっさん、実は聞きたいことがあるんです」
そんな懐かしい想い出に浸る間もなく、単刀直入に用件を聞く。
だが、話し込むにつれて酒も進んでしまい、それを引き止めるスプの話にも耳を貸さないおっさんが本格的に飲み始めて、情報収集という目的は何だかグダグダになっていったのだった……。

今日も表では、『明日の風は明日吹く』という看板が気ままに風に揺れていた。

第１６話　親切な通行者

教団の情報を求めて、東西南北に散る一行。
西チームは砂漠の村へ。
東チームは最初の町で酒飲みへ。
南チームは少年の家族を助けるため、森へと入って行きました。

＊

南の森チームに戻ってきた。
簡単に支度を済ませ、乗ってきた馬をあまり目立たない所に繋ぐと、一行は森へと足を踏み入れた。
イセルは張り切って腕をぐるんぐるん回している。

「よし、姉ちゃんを探すぞ～っ！」
「姉ちゃん”を”探すの？」
「母ちゃんもなんだけど……」
鋭くベルが突っ込み、今頃になってちょっと不安になってきた少年もそれを補足する。
「そうだそうだ、母ちゃんもな」
そんな二人の心配そうな視線に全く気付かず、イセルは陽気に進むのだった。
一応、深い考えの末、少年に同行しているはずのイセルだったが、その様子だけ見ると本当にそこまで考えているのかどうか分からない。まだ見ぬ未知なる少年の姉ちゃんと会うのを、ただ純粋に楽しみにしているだけのような気がしてくるな……。そうではないと願いたいが。

さて、森は内部に入って早々に薄暗く翳ってきていた。

常緑樹が多く生えているらしいこの場所は、日光の通りも弱い。真昼だというのに、辺りは日暮れのような薄暗さだった。
それが幸いしてか、中までは入り口の辺りほどツルなどの植物は生えていなかった。
……ツル系の植物とイバラ系の植物が多い場所ほど、歩くのに困難な所はない。古くから森で暮らしていたベルは、その事をよく知っていた。

先ほど立ち寄った村は、この森で採れる薬草を交易して多少の収入を得ていると言っていただけあって、所々に人が入った跡らしき痕跡が残っていた。その林道に加え、獣道も利用しながら一行は森の奥へと入っていく。
ベルやイセルは慣れたものだったが、少年には少し大変な道のりのようだった。

（思ったよりも荒れてるわね……）
ベルはそんな感想を抱く。自分が幼い頃から暮らしていた村や、これまでに見てきた森の外れにある人間の町などは、ある程度人が入りやすいように手を入れているのが常だった。そしてそれにより、採取地には光が入ったり、場所によっては野営の跡などもよく見つかるのだった。しかしここにはあまりそういった痕跡が見つからない。あるのは時折、多くの人が踏み入ったと思われる、荒らされた採取地の跡だけだった。
……当然ながら、そこにあるはずの薬草なども見当たらなかった。

「……乱獲されてたのかもしれない」
「乱獲？」

ポツリとベルはそれだけ言う。イセルがその訳を尋ねてみると、ベルはその推理の根拠を話してくれた。

大体採集生活を行う者は、目当ての植物が絶滅してしまわないように、常にその収穫量を制限している。もしくは何箇所か採取地を決めておいて、順番にそこを巡っていくのだ。そうすることにより、最初の場所に戻った時にはある程度植生も回復しており、環境が劇的に変わらない限り、半永久的に植物を採取することができるのだ。しかし、ここの様子を見ていると、一箇所ごとに全て採取し尽くしてしまったのか、目当ての植物が絶滅してしまっているようだ。そうして、目当ての物が無くなってしまった後は人がその場所に立ち入らなくなり、こうして荒れてしまうのだとか……。

「なるほどな。それで人がどんどん森の奥に入るようになったって訳だ」

「最初は眉唾な話かと思ってたけど、これなら本当にエルフの怒りを買ってるかもしれないわね」

「でも、どうして急にそんな風になったんだろうな？ずっと昔からこうしてきてたはずなのに」

「……さぁ？私には人間の考えることは分からないわ」

時にはベルはよっぽど人間よりも人間らしい考え方をするような気がしたが、イセルはそのことはあえて黙っておく。

世の中には言わなくていいこともあるよな、うん。対ベルに関しては、結構その事を学習していた彼なのだった。

代わりに、少年に対して尋ねる。

「おい坊主。村では結構、薬草を取る奴は増えてたのか？」

「う～ん……？確かに今年とか去年とかは多くなってた気がする。それでみんな町へ売りに行って帰ってこなくなっちゃうんだ」

「やっぱりお金が目的なのね……最低だわ」

ベルのその台詞もやっぱりイセルはスルーしておき、納得した顔で答えた。

「……なるほどな。戦が始まるから、需要が増えたってわけだ。それで村にあんなに若者がいなかったのか」

確かに村にいたのは、老人子供が目立っていた。最初はみんな森から帰ってこなくなってしまったのかと思ったが、町に出ていってしまった者も多いのだろう。……こんな所にまで戦乱の影響が出ていることに気付いた。

……とか話していると、唐突にベルが警告の声を発する。

「……気をつけて！獣の臭いがする」

その瞬間、普段ならいつも遠くで聞こえているはずの遠吠えが、すぐ近くの茂みから聞こえてきた。

ベルの声を聞き終わる前に、イセルはティルヴィンを抜き放って前に出た。

……荒々しい息を吐きながら一行の前に現れたのは、野性の狼の群れだった。

「わあっ！どどどどうしよう！」

驚いてベルにしがみついてくる少年。

（だから言ったのに……）と思いつつも、しっかりとベルは少年を庇うように立った。

その様子を見てちょっとやきもちを妬いたのか、イセルが意地悪そうに言う。

「よし！ここは丸々太ったうまそうな肉を前に出して逃げようかな～？」

「うそっ！？ややややめてください～……」

「ちょっと大人気ないわね、やめなさいよ！それより、後ろにはいないみたい。四匹だけだからよろしくね」

想像以上に怯える少年を見て、ふと彼らのよく知る別の少年を思い出す。
……こんな時、ダイクだったらどんな反応をしただろうか？早くここを片付けて戻ってやらないとな。
イセルは改めて思い直した。

＊

グラムルたちの情報収集は、一向に捗っていなかった。
入る酒場、聞く人ごとに事情を尋ねてくるのだ。目立つ組み合わせだから仕方がないと言えば仕方がなかったのだが、毎回うまく都合の悪い所をはぐらかして答えるのに、結構な時間を取られてしまうのだった。
中にはシャルルを気に留め、ご飯をおごってくれるいい人などもいたが、残念ながらのん気にご馳走などされている場合ではない。喜ぶシャルルを引きずって、グラムルは何軒か店を回ってみた。

……しかし結局、目当ての情報は手に入らなかった。
手に入った情報といえば、ここから先の砂漠の街でも戦の準備を始めていること、この辺りに集っている傭兵たちは、両方の様子を見た上で、どちらにつくかを決めるというようなことだけだった。
後は、行き倒れの婆さんを助けたらやたらと大食いで困ったとか、近くの遺跡には、知性を持った伝説の魔剣が眠っているらしいが誰も見たことがないとか、どこかで聞いたような情報ばかりだった。

グラムルは、この先にある街にも行ってみようかと考えたが、どうやら着くまでには四、五日ほどかかるというのと、本格的に砂漠を越えるための装備を揃えなければ難しいという話を聞いたので、仕

方なく諦めた。
だが、何の情報も得ていないし、このまま戻るには少し時間が余ってしまう。
そのため二人は、ここからさらに南を経由してイセルたちに合流しようと、現在の村から南下し始めたのだった。

＊

おっさんたちは、まだ飲んでいた。
スプはどうやら真面目モードに変わったらしく、飲み続けているおっさんを放っといてあちこちを巡っているようだった。だがパーティーのリーダーであるおっさんはと言えば、珍しく酔いつぶれて役に立ちそうにない。
というのも、例の店に次々に昔馴染みの冒険者たちが集まってきて、エンドレスに酒を注がれ始めたからだった。
スプが店をあちこち回ったためか、噂が広がったらしい。

かなりいい感じに酒が回ったおっさんは、上機嫌で知り合いたちに対してこれまでの冒険譚を語って聞かせた。だが彼らのことをよく知っている馴染みばかりだったため、やれ領主と友達になったとか、やれ魔法装置を相手に死闘を繰り広げたとか、大げさに語るおっさんの話を話半分に聞いていた。
まあおかげで、指名手配されそうだとかいう話も、冗談半分の酒の席の話として聞き流してくれたのだが。

結局、頑張ってあちこち回ってみたものの、全て空振りで帰ってきたスプが見たものは、ジョッキに囲まれて泥酔したままカウンターで眠る、おっさんとエール親父の祭りの後だった……。

＊

一方で森を彷徨う、二人と一人。
わりと森でのこうした出来事に慣れていた二人は、危なげなく狼たちを撃退した。少年一人を庇いながらではあったものの、大分経験を積んだせいか、最初の頃よりもかなり実力がついていたようだ。
特にティルヴィンと連携したイセルの腕前は、あっという間に二匹の狼を切り伏せてしまい、残った一匹をベルの矢が射抜いた時には、もう勝負が決まってしまっていた。

「す、すごいね兄ちゃんたち……」
『――獣の血は、いまいち癖があって好きになれないんだよなぁ――』

そう愚痴をこぼすティルヴィンの声は少年には聞こえていないらしく、彼は素直に驚いている。
彼らにとっては慣れたものだったが、一人で森に入ったこともない少年には、きっと物凄いことのように映っているだろう。だがおかげで森の怖さというものを知ることができたかもしれない。引き返すのであれば、これで後はどこでキリを付けるかという事になるのだが……。
森の中で人を探すということの難しさを、彼らはよく知っていた。
そして、自分たちにはそれほどの時間の猶予がないということも。

軽く休憩をした後、さらに森の奥へと進んでいく。
ベルが一緒だからか、イセルは特に不安を覚えていたわけではなかった。こと森に関しては、このヒステリックエルフに敵う者はいない。一応、その辺の信頼はしっかりと置いているのだ。

「こんなに深い森、久しぶり……」

そんな風に思われていることにも気付かず、ベルは多少の懐かしさを感じていた。

いくら人間社会に家出してきたとはいえ、故郷の懐かしさは変わらない。別に森が嫌いだったわけではないのだ。……いや、人間社会に染まってしまった今だからこそ、自然に溢れた場所が懐かしいとも言える。

最初は薄暗かったものの、何だか徐々に明るく陽射しが差し始めているような気がしてきた。辺りを見ても、植生が少し変わってきているようだ。何だか、本当に故郷の様子に似ているかも。

「こうして一人でゆっくりできるのも久々ねぇ～……ん？」

……あれ？一人？

気が付くと、子供が二人ともいなかった。慌てて近くを探してみる。小さい方の子供は、すぐ近くでうずくまっているのを見つけた。ベルを見つけて、慌てて走り寄ってくる。

でもでかい方の子供は……？

「ったく、あいつらはぐれやがって……しょうがねえな」

その頃イセルは、一人で森を彷徨っていた。……まんまと迷ってしまった。ベルのことを信用しすぎたのがいけないのかもしれない。

そんなことを思いながらも、特に深刻な様子ではなかった。

問題なのは、ティルヴィンと二人で暇を持て余さないか？ということぐらいだ。

ほら案の定、彼女はすぐにこうやって見つけてくれたじゃないか。

「おっ、ベル！どこ行ってた……って待てよ？」

イセルの脳に、思い出した出来事があった。……そう言えば、ここ

は≪惑いの森≫と呼ばれる場所だった。
そうか、こうやって知り合いの幻覚を見せられて、みんな森の奥へと誘われていってしまうに違いない！

「……これは、森の呪いかもしれんな……」

難しい顔をして考え込むイセルに、何だか妙にリアリティと存在感のあるベルは、ずかずかと近づいてくる。
さすが、神は詳細に宿るとはよく言ったものだと感心している彼の目の前まで来ると……。

バチコンッ！

「ぎゃわっ！！！」

「何バカなこと言ってんの、早く行くわよ」
「ってぇ～！！！こ、この容赦ない痛みは……ベル、どこ行ってたんだよ～！」
「アンタこそどこ行ってたの。しっかり着いてきなさいよ」
「……はい、すません……」

少年は何か、見てはいけない大人の世界を見てしまったような気がしたのだった……。

＊

その頃グラムルたちも、南下した後に東へと進み、ベルたちが立ち寄った村まで来ていた。
そこでイセルとベルたちが来ていた事を知り、二人を探してみる。
すると、森のほとりに繋がれている馬を見つけたので、森へと入っ

てみることにした。

＊

おっさんたちは、酔いつぶれて寝ているので特筆すべき点はない。
省略。

＊

それからしばらく進んだベルたち一行の前に、他の木々に比べてより一層高くそびえ立つ広葉樹の姿が映った。

「もしかしてこれが……呪いの樹か……？」

イセルがそう呟くのも当然だった。
その木は、薄赤く光を灯していた。だが異様だったのはそんなことではない。その木の枝の先々には、中に人間が入った大きく実った果実がたくさんぶら下がっていたのだ！
半透明のその実の中には、老若男女問わず、たくさんの人たちが眠ったように閉じ込められていた。……これだけ目立っていたおかげで、何とかたどり着けたようだ。

「『共生樹』ね……。植物の精霊が強く人間に干渉して、この木と一体化しちゃってるんだわ。……多分、森で迷って生命力が弱った所を捕まったのね。おかげで衰弱死しているようなことは無さそうだけど」

冷静な表情でベルが解説する。その顔を見る限り、この木の事をベルは知っているようだった。ならば、何とかする方法も知っているのかもしれない。イセルは尋ねる。

「何とかできんのかよ?」
「私には無理だけど、シャルルとか精霊使いなら……」
そこまで言った時、隣にいた少年が突然叫ぶ。
「あっ!母ちゃんだ!母ちゃんがいるよ!」
少年が指差すほうを見ると、確かに面影が似ている女性が一人、枝の先にぶら下がっていた。
それを聞き、ハッと気がついたようにイセルは叫んだ。
「オイ坊主!姉ちゃんだ!姉ちゃんはどこだっ!?」
「姉ちゃん……あ!いた!あそこに姉ちゃんもいるよ!」
多分この時が、イセルがこれまでの話の中で最も真剣な表情をした時だっただろう。
残像が見えるほどの速度で少年が指差す先を見上げたイセルが見たのは、彼にとっては信じられない光景だった。
……そこには、ダイクと同じぐらいの少女がいた。年齢は十歳ちょっとぐらいか……。
「……」
「……残念だったわね」
「何がだよ……」
冷めた口調でそういうベルに、なんらショックなど受けていないといった表情で、無言のままのイセル。
……よく見ると、ちょっと鼻水が出そうになっていたが。
悔し紛れにイセルは呟いた。

「いやむしろ母ちゃんでもアリかな……」
「最っ低！！！」

バチコン！

「てぇーっ！」

森にこだまする平手打ちの音に、少年は再び驚き、同じく驚いた野鳥たちが茂みから飛び立つ。
……涙を堪えながら、イセルは少年の肩を叩いた。

「……良かったな、坊主（泣）」
「う、うん……ありがとう兄ちゃん」

色んな意味で、涙が出そうになった少年だった。

＊

グラムルたちは、散々森で迷っていた。

一応、森の話は村で聞いていたものの、こと森歩きに関してはシャルルの経験は全く役に立たなかった。
何とか森に住む精霊たちと会話し、帰り道が分からなくなるようなことはなかったが、何かの情報を得ようとしても、人間と精霊たちの感覚とは全く世界が違う。有用な情報を得られることはなかった。むしろ逆に、悪戯好きの精霊に間違った情報を教えられ、危うくかぶれる植物の群落に嵌ってしまう所だったりもした。

最終的には、森の中での活動の経験や技術が不足していたことから、

日が暮れないうちに戻ることにしようと早々に決めた二人だった……。

＊

「あれ？こんな所に馬と足跡が増えてる」

それに気付いたのはベルだった。
彼らは森のほとりへと戻ってきていた。
ベルによると、植物の精霊に心の奥まで干渉されてしまっている状態を何とかすれば、元の通りに戻るらしい。しかしそれには精霊使いの協力がいるということで、とりあえず少年の母ちゃんと姉ちゃんを枝から切り離し、ここまでおぶって来たのだった。

包まれていた実から体を切り離すのは容易だったが、外に出てもまだ二人の体はほんのりと赤く発光していた。……眠りから覚める気配もない。木から切り離してしまったため、おそらく急いだ方がいいだろうということから、若干ペースアップしてここまで戻って来た所だった。しかし繋いでいた馬の所まで来ると、来た時には無かった馬が二頭増えていたのが分かった。
それを見て、両頬が腫れ上がっているイセルが冗談っぽく呟き、森から出て肩の荷が下りたベルも、笑いながらそれに乗っかった。

「誰か俺たちを探しに来てくれたのかもな？」
「まさか、グラムルさんたちだったりしてね～？」
「はっは、でもさすがに足跡だけじゃわかんねーよな」
「そうだよね、何か目立つ流行の靴とか履いてたんならともかく……」
「むっ！この足跡は！？有名職人アシッ○スが作ったこの靴は、グラムルが愛用していた……とか？」

「あははははっ、無理無理」

ベルたち一行は、あっさりと新しい二頭の馬を置いて、和気藹々とその場を去っていったのだった……。

＊

「グラムルさんたち、そっちはどうだった？」
「な、何も無かったよね～っ！」
「ね～っ！」

妙に力強く頷き合うグラムルとシャルル。ベルたちが帰ってきた後、しばらくして彼女たちもこの村へとやってきたのだった。
どうやら森でのことは、他の人には伏せる方向で行くらしい。
何も無かったわりには楽しげだな……と、イセルは怪しんだものの、別に追求するようなことでもないかと気にすることは無かった。

シャルルの精霊の干渉を断ち切る儀式は、多少の時間はかかったものの、特に問題も無く終了した。時間をかければ、それほど難しいものではないらしい。
そうして儀式が終わり、目を覚ます少年の母と姉を見て、ベルはホッと胸を撫で下ろす。最初、森に入って行こうとしている時にはどうなることかと思ったが、こうして無事に連れて帰る事ができて良かった。
自分たちの状況がそれどころではないにも関わらず、彼女は純粋にそう思った。そして、そんなベルを見てイセルも（やれやれ……）とため息を漏らす。そんなに心配なんだったら、最初から手伝ってやればいいのに……。

ともかく、抱き合って泣きながら再会を喜ぶ家族を見て、自分たち

の役目は終わった。
そうと分かれば、元の役目へと戻らなければならない。イセルは少年たちに別れを告げることにした。

「他にもたくさんの人が囚われていました。誰か精霊使いの方の力を借りて助けてあげてください」
「申し訳ありませんが、私たちにはあまり時間がありませんので」
どうやらグラムルも我に返ったようだ。儀式に時間がかかったため、もうそろそろ戻らないと集合に遅れてしまう。
慌てて身支度を整え始めた。
「あんまり欲張りすぎるからこうなるのよ。あの木がむしろ助けてくれてたんだからね？」
「まぁまぁ……」
一件落着したと分かった途端、元通りの高慢エルフに戻るベル。それをイセルがなだめて、一行は元の村へと戻るために馬に乗った。
その頃にはもう、儀式で疲れきったシャルルは、イセルの前ですっかり眠りに落ちていた……。

＊

元の村で合流した一行は、互いに情報を交換し合う。……だが、誰一人として有効な情報を掴んだものはいなかった。
……さすがの一行も、焦りが浮かんでくる。

「お前ら飲んでただけじゃねーか」
「だってリーダーがよぉ……」
「……面目ない……」

珍しく神妙に謝るおっさん。酒が絡むと、どうもこのドワーフはダメだな……。

祈るように最後の一組を待っていると、店に入ってくる見知った顔があった。

「どうでした!?」

「……遅くなりました」

入ってきたのは、かなり汚れた格好をしているカシューナだった。出会った時の真っ白な鎧の印象など、欠片も残っていない。

「カシューナさん一人ですか?」

「ええ、他の者は調査のために残してきました」

「こっちは全然ダメでした……そちらは?」

「やはりですか……。実は、≪貝の遺跡≫で人の気配がしているそうなんです」

道中がどんな旅路だったのかは分からないが、カシューナの顔つきは別人のように疲れ切っていた。

しかし、彼によって最後にもたらされた情報は、一行を再びあの遺跡へと誘うこととなったのだった。

指名手配まで、残り……六日。

第17話　帰ってきた裏切り者

≪教団≫の行方を追って、元の≪貝の遺跡≫に戻ってきました。
指名手配まで、残り……六日。

＊

彼らは懐かしの≪貝の遺跡≫に戻ってきた。

「人の気配って、どういうことだよカシューナさん」
「ええ、どうやらラバン公の死体を引き取りに行った者たちが戻ってこないようなのです」
「!?」

彼らが遺跡に踏み込んだ時には、既に≪教団≫の手によって殺害されていたラバン公。
その遺体は一応カシューナが関係者に連絡して、引き取りに来させたはずだった。
直接≪教団≫と関係があるかは分からないが、確かに何かしらの手掛かりになりそうだ。……少なくとも異変が起きていることは確かなようだった。

「確かにな。これだけ聞いて情報の欠片も手に入らないってことは、奴ら意外と近くにいるんじゃねーの？」
「ラバン公とも仲良かったみたいですしね」
「ええ。あと、どうやら奴らは魔法装置その物は持って行ったものの、その動作の鍵となるキーをここに忘れていってしまったそうなのです」
「キー？」

「そんな大事な物忘れていったの？」
「起動パスワードが分かれば大丈夫と思ったんでしょうね。ですので、そのキーを我々が手に入れれば、奴らは必ずコンタクトしてくるはずです」
「ふ～ん……。よくそんなことまで調べましたね」
「優秀な部下がいるおかげです」

優秀な部下というと、それはやはり前回脱獄を手伝ってくれたクラウドのことだろうか？
確かにあの仕事っぷりは見事だった。どっかの盗賊もどきエルフに見習わせたいくらいだ。今はその姿は見えないが、またカシューナさんがピーとか合図すると、すぐ後ろ辺りから出てくるのかもしれない。……確かに、≪雲（クラウド）≫のような男だ。
思わず辺りをキョロキョロと見回すイセルだった。

＊

今度は遺跡を調査することが目的なので、前回とは変わって正規の入り口から入った。こちらは彼らにとっては初めて通る道だ。かなり朽ちかけてるとは言っても、念のため用心に越したことはない。慎重に歩を進めるカシューナ。
しかし、一行はその横をスタスタとあっさり通り過ぎていく。

「カシューナさん、歩くの遅いよ」
「え？え？」

慌てて一行の後を追うカシューナ。……あれ？いいの？そんなんで？
カシューナの顔に疑問符がたくさん浮かぶ。そんなカシューナにも気付かず、ズンズン先に進んでいく一同。
遺跡内部は、所々朽ちかけたまま続いていた。

しばらく歩くと、突き当たりで左右に道が別れている。

「どっちに行く？」

「ちょっと調べてみるか」

言われて、ベルが軽く周囲を調べてみる。この辺はようやく自覚が出てきたようだ。

程なく、彼女はちょっとした異変を発見した。

「はいはい……ん、何か床にこびりついてるけど。ちょっとスプ見てみてよ」

「ん～？……腐肉って感じだな」

「フニクって感じ？」

「ふにくって感じ？」

スプの発音がよく分からなかったのか、微妙にニュアンスが変わりながらつぶやきを繰り返す他のメンバー。

あんまりよく分かっていないのかもしれない。

「……なるほど。よし、そっちに進もう」

「うん」「そうだね」「そうしよう」

全員一致で決まったようだ。……て待て。

「ちょっとちょっとちょっと！」

「ん？」「何？」「どうかしました？カシューナさん」

「あの、何も考えないでそのまま進むんですか？」

「進まなければ何も変わらんでしょう」

一応リーダーのはずの酒飲みドワーフが断言する。

それに対して、カシューナは少し口をパクパクさせた。……大分キャラ変わってるぞあんた。

「……いやそうじゃなくて。何のために≪盗賊≫って職業があるんですか」

盗賊とは言っても、この場合は他人の物を盗む泥棒ではなく、≪宝探し屋（トレジャーハンター）≫のことを指す。
こうした遺跡の中では、侵入者除けのトラップを警戒して、常に先頭を歩いて偵察する……というのが常識なのだが。

「偵察して来いってこと？」
「あ、うん、まあ」
「やだよめんどくさい」
「へ？」

め、めんどくさい……て？

「じゃあしょうがない。行こう」
「おーっ」
「こんなに朽ち果ててるし、大丈夫でしょ」

しょうがない……て？そんなんでいいの？
彼らはいつもこんな風に進んでいるのだろうか？本当に彼らは大丈夫なんだろうか？
カシューナはかなり不安を覚えたが、わいわいと騒ぎながら先へと進む一行に何も言えず、黙って後を着いていった……。

＊

「そういえば確か、昔ここは魔術師の訓練場にもなっていたという話です」
「おいおいそういう重要な情報は先に言ってくれよ～」

腐肉の跡を辿り、そんなことを話しながら進んでいると、その先には扉が現れた。
スプだけには分かったが、扉には古代語で『？』の文字が描かれており、腐肉の跡はその先へと続いているようだった。

「よしじゃあ開けるか。……頼むぞベル」
「えー何で私なのやだよアンタ開けなさいよ」
「待て待て誰が扉開けろっつった。調べるんだよ鍵穴を」
「あーそう！そうね！調べないとね！うん、大丈夫だと思うよ！」

自分で大丈夫とは言いつつも、決して危険を冒さないベル。……お前はそういう女だよな。
イセルはもう既に何度も思っていたことを改めて心の中で呟いた。
そんなのはもう慣れていることだ。……悲しくなんかないぞ。

「何もしてねぇだろうが！早くやってくれ」
「え～……」
「お前ホントに盗賊かよ……」

一行の間を呆れムードが漂うが、特に被害を受けるのはイセルだけなので、みんな我関せずといった表情だった。
下手に何か意見を言って、ベルの怒りのとばっちりを食らう方が、罠にかかるよりよっぽど大問題だ。
そんなことはみんなもう既に理解して……、

バキャ！

ベルの手元から変な音がした。

「！！」「！？」「？」

「ほ、ほら開いたわよ」

「待ててめえ明らかに異常な音がしただろうが！」

「見事な破壊音でしたね」

「バキャっていったバキャって～」

「うるさいわねいいからとっとと開けなさいよ！でかい図体して小心者ね！」

「誰が小心者だ絶対やだね！責任取ってお前が開けろ！」

「私みたいにか弱い女の子に何かあったらどうすんのよ！アンタならちょっとやそっとの事があっても大したことじゃないでしょ！」

「あーやっぱりあるんだな！絶対何かあるんだな！」

「うるさいわねアヤよ！言葉のアヤ……」

「開けちゃえ～」

ガチャ。

何の躊躇もなくスプが扉を開けた。

「「「何ぃ～っ！！！」」」

「……」

「……」

どうやら特に何も起こらない。……そのままスプは中に入った。

「あー勝手に開けやがって。死んでもしらねーぞ？」

「私達も入りますか？」

「……いや待て。ちょっと様子を見てピンチの時に助けに入って恩を着せてやろう」

みんなの顔に名案だという表情とえ～めんどくさそうという表情が浮かぶ。
しかしどちらにしろ、スプの身を心配している者はいないようだ。

「そうした方が少しは懲りるだろ。それに、ここは昔魔術師の訓練場だったんだろ？魔術師のための試練とかあるかもしれないし、もしかしてそれに合格したら何か素敵なアイテムくれるかもしれないじゃん」
「なるほど」「そうか」「確かに」

その言葉には全員が頷いた。
……ちなみに、イセルのいう『素敵な＝高価な』という意味じゃないかと伝わってくるのだが。
多少警戒しつつも、スプは部屋の中央まで進んで行った。今の所、部屋はがらんとしていて何もない。

「別に何も無……」

特に何もないのかとスプが振り返った時、突然目の前に煙と共に幻影のじいさんが現れた。

『――力を求めし魔術師よ、よくぞ来た。まず一つ目の試練を受けるが良い――』
「「やっぱり～っ！！」」

現れたのは≪石の彫像の魔法生物（ガーゴイル）≫だった。
スプは一撃でやられた。

「死ぬ～……」

スプの首筋からは血がドクドクと流れ続けている。
あ、ありゃやばいな。死ぬな。

「あ～やっぱり駄目だったか。よし行くべ」
「お～ぅ」

ガーゴイルはそこそこ手強かったものの、みんなで寄ってたかったので普通に倒した。
しかし残念ながらスプは一命を取り留め、死にそうだったのがウソのように復活したのだった。

そのまま一行は探索を続け、所々こんな感じの出来事が起こりつつも遺跡の奥深くへと進んだ。
特に何も起こらずに時が過ぎる。何も無いし、人の気配もまだ無い。
どうやら、本当にどこもかしこも朽ちてしまっているらしい。彼らが言っていたことはそのまま的中したようだった。
後ほど、古代後で『?』と書いてある扉の部屋に入ったが、もう壊れてしまっているらしく、何も起こることは無かった。

まさに、この遺跡はかなり老朽化して探索しつくされた後のようで、ここにあったという魔法装置以外のほとんどの仕掛けはもう機能していなかった。所々にあるそれらしい装置や仕掛けも、もう既に風化が始まっていた。
そうこうしているうちに、前回ズーマンたちと戦った大きいホールへと辿り着く。
誰かが片付けたのか、そこにはズーマンたちの死体はなかった。

「いないね」
「……」

「無いね」と言わなかったのは、わずかに残っていた彼らの良心のせいかもしれない。
一行は思う所はあったものの、それを口にする人は誰もいなかった。
前回はここでみんな裏口へと出たのだが、今回は目的が違う。

「確か……ここです」

もう一つ、奥へと続く扉があった。
カシューナがそれを指し示す。どうやら、その先に例の装置のキーがあるらしいのだ。
彼らが追っていた腐肉の跡も、最終的にその部屋へ続いていた。

扉の前に立ち、意を決した表情でみんなの方を振り返るイセル。
勝手に一人でうん、とか頷くと、また勝手に一人で壁に指を突いて、いててて！とかパフォーマンスをしている。
一行の間に白けムードが漂い始めそうな時だった。

ガチャ。
その雰囲気に耐え切れなかったスプが、またしても懲りずに扉を開けた。

「あ～あ、また死ぬ気かよ」
「全く……」

幸いにして罠などは無かったが、扉の向こうには数人の人影があった。
……しかし、どこかおかしい。

「何だありゃ？」

「うわ、きも～い」

部屋の中にいたのは、見知った人だったモノの群れだった。

＊

その部屋には、見て明らかに分かるほどの魔法装置が備え付けられていた。ほとんど部屋前面を覆っていたと言ってもいい。先ほどのホールのような広さは無いが、そこそこの規模の部屋だった。薄明かりが灯っている所を見ると、どうやら装置は起動しているらしい。大きな空間の真ん中の上と下に連なって、塔の真ん中だけが抜け落ちたかのような形の魔法装置が設置されていた。

その抜け落ちた部分の隙間には、宙に浮いているひし形の石がゆっくりと回っている。直径二十？ほどの八面体のサイズだ。その石は青白く規則的な明滅を繰り返しており、それに合わせて他の装置も共鳴して光っていた。

「あれが、目的のキーです……」

カシューナは宙に浮く石を差して言う。……グラムルは、何だかその目がいつものカシューナとは違うような気がした。ほんの少しだが、陶酔や羨望……のような感情が伝わってきたからだ。

しかしそんな違和感も、すぐに目の前のモノたちによってかき消されてしまった。

「な、何者だぁ～」

その澱んで間の抜けた話し声にも、一行は驚くことは無かった。何

故ならその魔法装置の周りには、あちこちが腐りかけた、いや既に腐っている人間たちが集まっていたからだ。
その顔を見ると肌が剥げていたり、髪は抜け落ちていたり、明らかに致命傷なほどの傷があったりと、生きていないことは明らかだ。
そしてその中には、彼らのよく知った顔も含まれていた。

「久しぶりだなぁ、ズーマン！」

その正体は、この世界のほとんどの人間が知っている、≪死人（ゾンビ）≫だ。
その言葉にズーマンは返事をしない。
周囲には、よく見ればフェッケンもいるし、あの時の兵士たちもいた。
そして装置の前で何かを操作しているのは、ラバン公その人だった。
腐ったラバン公は、操作盤のようなものをあれこれいじっていたが、部屋に入ってきた一同に気が付くと振り向いた。

「おおお前らは誰だあ～」

どうやら記憶が混乱しているらしい。……いや、ただ単に脳みそが腐っているだけか？
あまり真面目に考えても埒があかなそうだったので、グラムルはそこで考えるのを止めた。

「……多少腐ってるが、間違いないな」
「そうみたいですね。あまり気分のいいものじゃありませんが……。この部屋は？」
「古代の魔法装置の一つですね。やはり奴らが蘇らせたんでしょう……詳しくはスプさんにでも聞いてもらったほうがいいかと」
「うむ、そうだなこれは……」
「そうか、分かった」

「まだ何も言ってないだろ」
「じゃあ何か分かるのか？」
「わからん！」
「帰れ」

この異様な事態にも慣れているのかただ神経が太いだけなのか、いつもの通りのテンションの一行。
それを見かねた、相変わらず一番偉そうなラバン公ゾンビが怒鳴る。

「おおお前ら、私を置いて話をするんじゃない！私はのけ者にされるのが大嫌いなのだ！」
「何だよ腐ったラバン公。略してくさラバ」
「略すんじゃな～い！……まあいい、私は今気分がいいのだ。そこの男、私の家来になるというのであれば見逃してやってもよいぞ？」
「誰がそんな腐ったおっさんのためにフレイムスラストを振るかよ」
『――え？オレじゃないの？』

ゾンビになって毒が抜けたのか、もしくはある意味毒だけになったのか、前よりも分かりやすいキャラで一行と絡んでくれる、腐ったラバン公、略してくさラバ。
イセルが彼？の申し出をあっさり断ると、今度は女性陣に目を向けた。

「でではそこの女達。私の側室になればこの場は丸く納めようではないか」
「いや」「やだ」「結構です」

口々にハモった。
こういう時だけはチームワークいいんだよな。

「おおおのれ許さんぞ！お前らやってしまえ！」
「あ～ぁ～」

分かりやすく切れたくさラバの命令で、襲ってくる手下ゾンビたち。
各自でもれなく腐肉を撒き散らしながら近寄ってくる。
思わず、引き金を引くと魔法の矢を撃ってくれるという片手用の携帯魔筒で打ちまくってやりたくなるが、残念ながら彼らは接近戦用の武器がほとんどだ。
気が進まないが、この手で斬るしかなかった。

『――あ、俺今日オフだから。有休でよろしく』
「うるさい。とっとと働け」

都合のいい時だけ文句を言うティルヴィンを嫌々従わせつつ、戦闘へと突入。
いつもの通り、イセルとグラムルが前に出て、おっさんが中列で援護、後は後列だ。
相手はゾンビが七体＋くさラバ。ゾンビたちはくさラバの命令に従い、イセルに二体、グラムルにズーマンゾンビ＋一体、おっさんに二体が向かった。珍しくカシューナは前には出てこず、一人離れた場所でフェッケンゾンビとやり合っていた。
一行は戻ってきた時の疲れた様子を思い出したのと、ゾンビたちは数は多いものの、動きは鈍いため何とかなるだろうと思ったため、特にカシューナを前線に呼ぼうとはしなかった。

「こいつら連れて帰れば、俺たちの容疑も晴れないかな？」
「どう見ても生きてるようには見えないけど……」

くさラバは後ろで一人、何やら魔法装置をいじくっているようだった。

と、その突如、空中に火の玉が現れる！

「ふ、ふはは、この私を怒らせたこと、後悔するがいい……食らえ！」

「か、≪火球≫だと！？」

「味方ごと巻き込むつもりかっ！」

「ふはははははっ！この私の力を見たか！！！」

「あ”ぁあ”～……」

これにより、前衛は大ダメージを食らう……が、ゾンビも各1体ずつ減った。

「結局、性格は死んでも治らないのか。相変わらず仲間に裏切られてばっかりだなお前ら。……ちょっと同情するぜ、ズーマン」

しかし……。

「あ、あれ？しまった！」

「またかい……」

「だからいつも、身の丈に合った武器にしろって言ってるのに……」

いつもの如くグラムルが失敗を犯し、武器を落とす。そこへズーマンゾンビの一撃が命中し、グラムル気絶。

後ほど、グラムルはこう思ったという……。

（血と腐肉の混じったのってどんなのだろう……？）

例によって、グラムルは深く考えないようにしたそうだ。

「やれやれ、また回復か……。すまんな戦斧（バトルアクス）よ」

「おい、シャルル。俺が援護行くからくさラバにウィスプ頼む！」

「はい！うぃすぷ！」

「な、なんだこいつは！？え～い、食らえ！」

……。今度は無反応な魔法装置。

「なんじゃと！？この役立たずが！」

「行け！ういすぷ！」

「お、おのれ覚えてろよ～……ぉ」（ドロドロドロ……）

ウィスプの働きにより、腐ったラバン公（略してくさラバ）はドロドロの泥と化した……。

結局それが決定的な流れとなり、残りのゾンビも程なく倒され、一行の勝利となったのだった。だが、知り合いを二回も切り倒すというのはあまり気分のいいものではなかった。

「精霊の方がよく働いてるじゃねえかよ」

『――いや、普通ありゃ気が乗らないだろ、イセル』

「まあそりゃそうだけどよ。……ふぃ～、火の玉来た時はどうなるかと思ったぜ」

「ホントホント。まあ大魔術師たる俺に言わせれば、あれはまだ出来損ないだったみたいだけどな」

「ホントかよ？……まぁ、だから俺たちでも耐えれたってわけか」

「か弱い私の方に来たら、ホント危なかったわよ」

「……ちっ」

「ちょっと何よその舌打ち！」

毎回、戦闘後の会話におっさんが加わらないのは、大抵がグラムルの手当てをしているからなのだが、今回も一時は結構火傷を負ったものの、グラムル以外は大して深い怪我を負う者はいなかった。

もはやあまり見たくない肉の固まりになりつつある倒したゾンビたちを見て、思わずイセルがため息を吐く。

「あ～あ、倒しちまったか。今度こそ俺たちがやったことになっちゃうかな」
「でももう死んでたでしょ」
「”死んでたから殺しました”って言うのか？」
「謎の言葉ですね」
「”死んだら生きて帰れない”みたいだな」

例によって軽口を叩いていると、さっきの戦闘中から一人無言だったカシューナが、パチパチと手を叩きながら一行に近づいてきた。

（こ、この拍手の仕方は……！？嫌な予感……）

既視感（デジャヴ）な一行。
既に、拍手の雰囲気でその後の展開が予想できるという、ある種の才能を手に入れつつあった。
以下、そんな一連のやり取り。

「……さすが、アルフ様が見込んだだけあるな。ちゃんと石は手に入れたか」
『……は？』
「どうしたんです？カシューナさん」

「ダイクはその石と交換だ。無くさないように持っておくんだな」

「その石？」
「カ、カシューナさんまでっ！？……なんか俺、もう誰も信じられなくなりそうだぜ」
「私も……」

「……」

「ここで裏切るなんて、どんだけ長い前フリなんだよ」
「あんなに一緒に死線を潜り抜けてきたのに……」
「何でわざわざこんなめんどくさいことするのかしらね？」

「……」

「あー可哀想ダイク。帰ってくる頃には屋敷には誰もいないかもね」
「実は屋敷の全員裏切ってたとか？」
「どんだけ壮大なドッキリだよ」
「実はお前も裏切りモンだろ！？」
「いやそういうお前こそ裏切ってんだろっ！？」

「……いやあのさ、そろそろ気付こうぜ？カシューナじゃないんだけど」

「こうなったら、俺たちだけダイクを裏切らないってのも、ある種裏切りだな」
「俺たちも空気読んで裏切るか」
「そうしてダイクは人間不信になっていくのね……」
「若いうちに世間の厳しさを知っておくのは大事かも知れん」
「誰も信じちゃいけねーよってな」

「いやあのさ、……聞いてる？」

「なんだよ裏切り者のカシューナさん。今ダイクの教育方針について大事な話をだな……」
「そうだそうだ」

「だあっ！もういい！ホントは分かってんだろが！『黒いリボン亭』

だ！ポルトヴァのっ！明日そこで待ってるからな！ちゃんと来いよ！」

「……何いきなりキレてんだよ、カシューナさん……」

「ホント、自分で裏切っといて……」

「だからカシューナじゃないのっ！……いいか！確かに伝えたからな！」

「あれ？石って何だっけ？」

「そこのその石！装置の真ん中に浮かんでるひし形の奴！……魔法装置の起動に必要な、重要な鍵となる石のことっ！！！」

「ああ、そうか。ＯＫＯＫ」

完全に相手を自分たちのペースに巻き込んだ一行。騙されてたけど、これでちょっと清々したかもしれない。

何か納得できんな～という顔で、自称カシューナもどきはそのまま裏口から去っていった……。

「だからカシューナじゃないのっ！自称カシューナなんだって……あっ！本物のカシューナは城にいるからな！忘れるんじゃねーぞ！」

「……あ、そう……」

わざわざ親切に教えてくれる見た目はカシューナの謎の男を、ぽかんとして見送る一同。

最後にイセルが一言呟いた。

「そういうとこは律儀なんだな……」

指名手配まで、残り……五日。

第１８話　悩める薄情者

一行の前に戻ってきたカシューナは偽者でした。
遺跡で手に入れた、魔法装置のキーとなる石をダイクと交換だと言われて逃げられました。
指名手配まで、残り……五日。

＊

一行は≪貝の遺跡≫を出て、野営をしながら相談していた。
心なしか炎は頼りなく、いつもよりも明るさを失ってゆらゆらと揺らめいている気がする。
なんとなく、一行も焚き火の近くに集い、少ししんみりとした時を過ごしていた。

この町に来た時から、色々と頼りになっていたカシューナがまさか敵の手に落ち、城に捕まってしまうとは……。
これまでにその実力を間近で見続けてきたため、簡単にはその事を信じられなかった。
かといって、本物のカシューナが裏切ったとも考えられない。当の本人もそう言っていたが、見た目はまるっきり本物のカシューナと変わりがなかった。

「まあ多分、魔法だろうな……」
「……そうなの？」

みんな同じ事を考えていたのか、スプが一人呟いた。そういう彼が知っている魔法があるようだ。
ベルがそれに答えたことにより、誰からともなく、いつものような

会話が始まった。
焚き火に集まってきたのか、近くにはホーゥホーゥという鳥の鳴き声が響き始めていた。

まずは本物のカシューナさんをどうするか、ということをグラムルが話し出す。何だか気にしているらしい。そのイケメンっぷりやダイクに対する育メンっぷりには全く反応しなかったというのに、一緒に前線で戦っている間に何か心境の変化でもあったのだろうか？
……一部気になった人はいたようだが、みんなその事については胸の奥にしまっておいた。
こういうのは熟成期間が必要だからね、うん。

「お城にいるって言ってたよね……」
「お城って、あの嫌な王様がいる所でしょ？」
「王様というか領主だけどな。……まあでも、城に行くのは捕まりに行くようなもんだな」
「……だよね」
「……」
「カシューナさんだってダイクを助けてほしいはずだし！」
「……そ、そうだよな！よし、決まり！」

あっという間に全員一致で、お城に捕まったカシューナは放置されることが決定した。みんな自分の身が大事らしい。話を振ったグラムルでさえ、満足気に頷いている。……あれ？勘違いだったか？
次の話題は、奴らがダイクと交換条件に提示してきた、魔法装置のキーとなる石の事だった。
今はとりあえず、駄々をこねて持ちたがったスプが所持している。
話題に上がったので懐から取り出し、焚き火の灯りに照らしながら、しげしげと石を観察してみる。

「この石が、魔法装置の起動装置なの？」
「そうらしいけどな……。スプ何かわかんないか？」
「これだけじゃ何ともな……。魔力はあるみたいだけど」
「石渡す？」
「でも悪の組織に渡すのはな……」
「……だよね……」
「何か似たような石無いかな？」
「ニセモノを渡す？」

あっという間に『身代わりの石を探せ！』とばかりに、全員で似た石を探し始めた。が、もちろんこれほど精巧な作りの八面体の石など、その辺には存在しない。それこそ石造りの家を作る職人でもない限り、これほどの物は作れそうに無かった。
そもそも、魔力を感知された時点で完全に分かってしまうはずだが。

「無いか……」
「まあ多分、バレると思うぞ」
「あーでも、これを渡すのはなぁ～……」

実際の所、これがどんな物でどんな魔法装置を蘇らせ、それを使った≪教団≫がどんな事を起こそうというのかすら分かっていないのだが、それでもこれまでの実績を見る限り、奴らにこの石を渡すというのは気が乗らなかった。……たとえ、ダイクと引き換えだとしても。
……それはむしろ、彼らの性格的に『相手の言いなりになる』ということが我慢できなかったからということもあるだろう。
そんな狭間で悩みながら打開策を考えていたのだが、ベルが突如突拍子も無い事を言い出した。

「だから、石も渡さずにダイクを取り戻そうよ」

「だからどうやってだよ。『ダイクの命が惜しければ石を渡せ！』とか言われたら？」
「そういうのは……知らないっ！」

どうやらあんまり考えてなかったらしい。
……この一言で、彼女はイセルに『理想主義者イゼベル』の烙印を押された。
段々と取れる手が行き詰ってくる中、明日の流れをトレースしてみる。

「……そもそも、明日ダイクを連れてくるか？」
「ん～、……来ないだろうね」
「よし、じゃあ俺たちも石を持って行かないぜ！」
「それはいいかも。……でも、実際交換する時の事を考えると何の解決にもなってないけど」
「……」
「だぁ～っ！ダメだ！やっぱり埒が明かん！」

やっぱり堂々巡りになるだけだ。
結局いつもの彼ららしく、最終的にはとにかく行ってみようぜ！ということになった。

＊

石を現場に持って行かない、ということにした事から、交渉組と留守番組の二手に別れる事になった。
当然の如く、誰がどっちに行くか、ということでしばらく揉める。
一行が揉めると、進行役を買って出るのが最近のスプのブームだ。

「交渉に一人で行ってみるってのは？」

「……人柱じゃないんだから」
「じゃあ俺一人で行こうか？」
「……そんなら、最初から失敗すると思ってた方がいいかも」
（グラムルさん……）

ついにパーティーの唯一の良心、グラムルにまで見放されてしまったスプに果たして未来はあるのかっ！？
以下次号……といった感じだったが、当然ながらその案は却下された。

結局交渉には、リーダーとしての責任感からおっさん・専門家としてスプ・後を尾行（つけ）られていないか確かめるためにベルが行くことになった。
さらに、何かあったときのためにと留守番組の中からグラムルが様子見に後からついていく事に。
イセルとシャルルはあまり役に立ちそうも無かったので、石でお手玉かなんかしながら、ボーっと昼寝でもすることにしたのだった。

翌日。とうとう指名手配まで、残り四日となった。
ここからヘルンデルクまでの道のりを考えると、一日はかかってしまう。となると、残された猶予は残り三日である。
この交渉で何とか糸口を見つけなければ、結構やばいかもしれない。

交渉組が黒いリボン亭に到着すると、奥の個室に通されてしばらく待たされた。話は通っているらしい。
後ほど彼らの部屋に入ってきたのは、盗賊のような格好をした者でも、昨日のカシューナもどきでもなく、意外にも初対面の鎧を着た青年だった。……妙に風格があり、想像していたような無骨な雰囲気は無い。そして、着ている鎧もそれなりの物だと、彼らにも分かった。

しかし、さすがに礼儀正しく自分の名を名乗る事などは無く、素っ気なく単刀直入に話を始めた。

「待たせたようだな。……例の物は持ってきたのか？」

「いや、アレはここには無い。……まずはダイクが無事かどうか確かめてからだ」

「……ダイクは生きているのか？」

「無論。信じられんかも知れんが、そこは『騎士の誇り』にかけて無事だとだけ言っておこう」

「……」

さらに意外な言葉が鎧の男から放たれ、一瞬固まる一同。

次の瞬間に全員の心に湧き上がって来たのは、単純なる〝怒り〟の感情だった。代表してリーダーが叫ぶ。

「騎士の誇りなんか信じられん！」

「ふっ、そうか。それは残念だな……」

その言葉には特に腹を立てた風も無く、自嘲気味に笑う男。

いくら領主とはいえ、子供を誘拐しておいて掲げる騎士の誇りなどあったものか。そんなものに比べたら、『冒険者の意地』の方がよっぽどマシだ。

「では、今度こそ本物のダイクを連れて行こう。明日の太陽が真上に昇った頃、北の廃墟がある草原で人質と交換だ」

男はそれだけ言うと、早々に席を立つ。

そのまま部屋を出ると、彼らの方を振り返りもせずに、とっとと店を出て行ってしまった。

「……大分自分に酔ってるわね」
「騎士っぽいといえば騎士っぽいけどな」
「なんかあんなのばっかりじゃな……」

残された部屋の中で、口々にさっきの男の批評を始める一行。
とりあえず、ここの支払いはしてもらったっぽいので、それぞれもう一杯飲み物をお代わりした。

店の外では、グラムルが店の様子を窺っていた。
さすがに中まで入ることはできなかったが、店に出入りする人間は入念にチェックしている。
その中で、少し毛色の違う人間が店から出てくるのを見かけた。

というのも、その男はまるで騎士でも気取っているような鎧を着ている。それどころか、店を出てからの歩き方といい、まるで騎士かのような素振りで、妙に背筋を伸ばして道の真ん中を歩いている。
……本当に騎士なのかな？
そんな事を考えていると、その男がこちらに歩いてきたのに気付き、慌てて身を隠した。
その前のほんの一瞬、男の顔がちらりと見える。
大丈夫だったかな、バレなかったかな……と心配するのと同時に、グラムルは何だか違和感を覚えた。

（……あれ？あの人どっかで……？）

何だか昔どこかで見たことがあるような顔だったが、思い出せない。
そのまま、男は路地へと消えていく。一瞬、尾行てみようかとも考えたが、そんな技術もない上に彼女まで捕まってしまってはみんなに迷惑をかけるだけだ。メンバーから後で散々文句を言われても嫌なので、グラムルは男をそのまま見送った。

そして、一体どこで見かけたのだろうか？とあれこれ考えを巡らせているうちに、交渉組の三人が店から出てきてしまった。

＊

とりあえず、交渉組は野営地に戻って出来事を報告した。

「尾行られてないか？」

いつになく真剣に聞いてくるイセルとシャルルのおでこや頬に、赤くなっている跡が付いているのを見て、（こいつらさっきまで寝てたな……）と確信を持つ他のメンバーだった。……石、盗られてないだろうな？

「多分大丈夫だと思う」

「そうか……。念のため、今日は野宿だな」

そういうと、勝手に各々に仕事を割り振り、生き生きとして作業を始めるイセル。

俺が水を汲んでくるから、ベルとグラムルは火を起こして野営の準備、おっさんは寝床の確保でスプは薪集め。シャルルは邪魔にならないように遊んでおいで？って感じにテキパキと指示をし始めた。

何が一体楽しいのか。まあ、いいけどね……。

ということで明日に備え、それぞれ早めに休む一行だった。

タイムリミットまで後三日と迫った次の日の朝。

一行は早く起きすぎてしまったので、下見も兼ねて朝から交渉現場へと向かった。

少し心配だったが、現場はすぐに分かった。廃墟とは言っても、今

は石組みの欠片しかほとんど残っていない。それ以外の材料は役に立つのか、誰かが持ち去ってしまった後のようだった。
周囲は見晴らしも良く、すねぐらいまでの草が辺り一面を覆っている。
実際の状況の事をイメージしながら、相手が立つであろう何箇所かを悪戯心で草を結んでみるイセルとスプ。面白そうだからと、グラムルとシャルルも参加した。

「相手は町のほうから来るだろうから、おそらくこの辺に……」
「よし、後はこの場所に合わせて俺たちが立ってればいいんだな」

最後にそう確認して、バミっておいた立ち位置に立って奴らを待った。
そして……。
太陽が真上に昇る頃、その一団は姿を現した。

＊

「あれが、≪教団≫か……？」

草原だったため、遠くからでも来たのが分かった。どうやら相手は昨日の鎧の男＋兵士三名。思ったより少数だった。
全員が馬に乗っており、その内の一頭の背には、猿轡をされ、縛られているダイクらしき人物が乗せられていた。
先に現地入りしていた彼らが意外だったのか、鎧の男は何気なく話しかける。

「貴様ら、早かったな」
「……俺たちは早起きなんだ！」

それに対して、後ろめたいせいか、意味のない事を力強く口走るイセルだった。
相手の頭には？マークが浮かんだようだったが、特に気にする者はいなかった。
まあそれどころではないと、交渉を開始する鎧の男。

「さあ、それでは石を渡せ」
「まだだ。そのダイクが本物であることを示してもらおう」

先日のカシューナの一件もあり、すっかり疑い深くなってしまった一同。
当然のことながらダイクが本物であるかどうかを疑い始める。

「ふん、そんな姑息な手は使わんと言った筈だが……。まあいいだろう、本人に聞いてみるが良い」

そう言って、男はダイクを馬から降ろし、猿轡を外した。
……ダイクはぷはっ、と息を吐いた後、懐かしそうに一行を見つめる。

「……皆さん、来てくれたんですね……」
嬉しそうにそう言うダイクだったが、肝心の一行はまだ怪しんでいた。……ちょっと悲しそうなダイク。

一行を代表して、イセルが質問してみることにした。

「ダイク！お前がまず最初に俺たちに会った時に言った台詞は何だった？」
「私はまず最初に自己紹介をしたかと思いますが？」
「……合ってるの？」
「……多分……」

真面目に尋ねるイセルの質問に、素直に答えるダイクと、何だかそれを聞いても煮え切らないイセル。
代わりに今度はスプが尋ねてみた。

「ダイクお前は今何歳だ！？」
「え？え～と、もうすぐ十三になる所です」
「……知ってんの？」
「……え～と……忘れた」

聞くだけ聞いておいて、ダイクの答えを聞いた後、イセル同様目を逸らすスプ。
どうやら他に聞く者はいないようだった。……一行と相手の間に、微妙な空気が漂う。
耐え切れなくなったイセルが叫んだ。

「よし！分かった！以上のことから、そいつは本物のダイクであるとは認められない！」
「ええっ！？」
「そうなの！？」
「ちょっと待って下さい！本物ですよ！！！」

必死に主張するダイク。なんかもう可哀想なほど必死だった。
仲間のみんなも含め、そこにいた全員が驚いた。

「あ、いや……間違えた。『本物であるかどうかは分からない』！」
「そ、そうなの！？」
「……それ以上に、俺たちにそいつが本物であるかどうか確かめる術が無いことが分かった（泣）」

（泣）じゃねーだろ……。情けない台詞を堂々と口にするイセルに、全員の肩がガックリと下がった。
大きくため息を吐いた後、鎧の男が口を開く。

「まあ、このダイクが偽者でないことは私が保証しよう。……『騎士の誇り』にかけてな！」
「……」
「うるせえとっとと交換するぞ！」
「望む所だ」

どうやら騎士の誇りは一行にとって禁句なのか、我慢できずに交換することを主張するイセル。他の誰も特に異論はないようだ。
スプが懐から例の石を取り出し、彼らに見せる。
……どうやら彼らは、それが本物かどうかという主張はしないようだった。さすが騎士の誇り。

というわけでトレード開始と、一行はその場に石を置く。相手も、ダイクをその場に寝かせたようだ。
「馬を放せ。途中で馬に乗って逃げる事が考えられる」
「……だからそんな事はせんと言っておるだろうに」
おっさんの指摘にももう諦めたのか、男たちは馬の手綱を放して、鞭で尻を叩く。驚いた馬はヒヒンと鳴いて、草原の向こうへと走り去っていった。

それを確認した後、ようやく安心した一同は揃って右へと回ろうとする。
ふと見ると、相手も向かって右側……つまりは同じ方向へ移動しようとしていた。

それに気付いた一行は、反対へと移動し始める。

また見ると、相手も同じように思ったらしく、またしても同じ方向へ移動していた。
そんなことをもう二、三回やった時、ついにイセルがキレた。

「おめーら焦れったいんだよ！こっちから回れこっちから！」
「うるさい貴様らの動きが挙動不審なんだよ！はっきりせんか！あとそこの魔術師も変なフェイントを入れて惑わすんじゃない！」

……ある意味、変な緊張感が辺りを覆っていたのだった。

「……ん？このままだと、俺たちが罠を仕掛けた方に行っちゃうんじゃないのか？」
そうスプが呟いた時。
「ぅわっ！」
相手の兵士の一人が転んだ。
足元の結んである草に気付いた兵士が叫ぶ。
「おのれ卑怯な！」
「何がだ！？適当な言いがかりをつけるんじゃない！」
あくまでしらを切るイセル。
「そうだ！どこかの子供が仕掛けたかもしれないじゃないか！？」
その言葉で罠の存在を知っているのがバレバレだと思うが、さらにしらを切るスプ。
「きゃっ！？」
そこでわざと転んだグラムルも、思ったよりノリノリだった。

「貴様ら、相変わらずわけが分からんな。全く行動が読めん……」
そう言いながらも、ぐるりと半周周り、石に辿りついた鎧の男たち。
「確かに頂いたぞ」
その頃、同時にダイクの所に辿りつき、おっさんやグラムルがダイクを解放する。

それを確認すると、男たちは一行に背を向けた。

「じゃあな」

そのまま男たちが帰ろうとした時、後ろから殺気が走るのが分かった。

振り返った男達の目に映ったのは、一人仁王立ちしているイセルだった。

「……待て。それを渡すわけには行かん（スラリ）」

一転、悪党となった冒険者たち一行は、武器を抜いて正義の≪教団≫へと踊りかかったのだった。

指名手配まで、残り……三日。

第19話　暴れだした加害者

このやろー！イセル組をなめんじゃねーっ！とばかりに悪役に踊りかかった一行。
もはやどちらが悪役なのかわかりません。

＊

「だってよー、ダイクも取り返したしよー、あの石渡すわけにはいかんじゃん。容疑を晴らさんといけないし、逃がしたらどこに行っちゃうか分からんくなるし……」／イセル後日談より

廃墟の欠片だけが残る草原。時刻は昼過ぎ。太陽がサンサンと照りつける爽やかな広場の真ん中で、一行は初めて『追いはぎ』というものを経験した。
相手はそれには特に動じず、鎧の男が兵士に向かって命令する。

「一発撃ってやれ」

「……みんな、行くの？」
明らかに乗り気ではないベルが呟いた。……どうやら他のメンバーも同じテンションのようだ。
「あたし、行く」
「グラムルさん、イカスぜ！」

唯一乗り気なグラムルとイセルが、剣を抜きながら奴らの方へ走っていく。……グラムルのキャラも大分変わったな。いや、もしかしたらこれが本性なのかも知れないが……。
ともかく、それを見た他のメンバーも、放っておけないと渋々戦闘

準備を始めた。ベルとシャルルはダイクの元で待機し、おっさんは先に走り出した二人に続く。
それに対して相手側は、鎧の男のみが前に出て、他の兵士たちは後ろに控えたままだった。

「お前たちは手を出すなよ。その石を守っていれば良い」
「フッ、大した誇りだな」
「貴様らの相手など一人で十分だ」
「よし、みんなやっちまえ～っ！」

完全に善悪が逆転した台詞で調子に乗るイセル。……まあ、なかなかそんな台詞は使う機会はないのかもしれんが大丈夫なのか？……相手は一人で二人を相手にするつもりみたいだぞ？

「後で吠え面かくんじゃねぇぞ？」
『――よっしゃ、ぶった切ってやるぜ！』

見事なまでの悪役の台詞を口にしながら、イセルが攻撃する。口元にはそれらしく悪そうな笑みを浮かべていた。
それに悪ノリして、ティルヴィンもやる気満々だ。
余裕の相手に対し、意気揚々と何合か斬り結ぶ。

「……むっ、なかなかやるな。言うだけのことはある」

悪役っぷりが性に合っているのか、いつも以上に剣捌きが冴えるイセル。相手もそれは予想外だったようで、浅くはあったものの、何度か傷を負わせる場面があった。思わず感心の台詞を口にする。
しかし、そんな余裕の台詞が言えるだけあって、その実力は彼らとは段違いだった。どうやら手加減すらされているらしい。
そこへグラムルも到着し、横から割って入る。

「き、君は……！？」
「へっ？」

その瞬間、驚いた顔をみせる鎧の男。
グラムルは、やはりこの男が昨日の店で見た男だと改めて分かったが、やはり何者なのかという事は思い出せなかった。
攻撃する事すら忘れ、間の抜けた顔でぽかんとしているグラムルに、男は少し残念そうに眉を寄せた。

「……忘れられてしまったか、無理もない」

その台詞の後の男の動作には、僅かではあったが先ほどまでとは差が現れていた。
明らかに、グラムルに対してためらいが見える。……動揺しているのだろうか？
本人もそれを自覚しているのか、改めてグラムルへと話しかける。

「私の名はダリウス。君の兄アルフレドの……まぁ幼馴染といった者だ。思い出してもらえただろうか？」
「……」
「……思い出してもらえぬのならそれでも良いが」

未だに懲りず、勢いよく斬りかかっているイセルとは対照的に、一歩下がって手が止まってしまうグラムル。
思いがけず兄の名を耳にし、大分消えかかっている幼い頃の記憶を手繰り寄せた。

（そういえば……）

記憶の中に、微かに兄と仲の良かった男の人の事が思い浮かぶ。……それが、この人なのだろうか？

ダリウス。……そう言われれば、そんな名前だったかもしれない。

そんな人が、何故今ここ目の前に……？

グラムルの頭の中が、グチャグチャと混乱してくる。

思わずグラムルは口を開き、『兄は、兄はどこにいるんですかっ！？』という感じに叫んだつもりだったろうが、実際には、「……アニは？」と小さく呟いた声しか聞こえなかった。

ダリウスと名乗った鎧の男とイセルとの激しい剣戟の音に、その小さな呟きはかき消されてしまうほどだったが、それでも問いかけた相手には届いたのか、ダリウスはしばらく沈黙を保っていた。

……その複雑な表情を見ると、何と答えていいのか迷っているらしい。

そんな状況も知らず、前衛にあえて手を貸すつもりはなく見守っている、一行の後衛メンバー。相手の後衛の兵士たちも、最初の一発以降、特にこちらに攻撃してくる様子は見られなかった。

しかしその時、草原の向こうから何頭かの馬がこちらに向けて走ってくるのが見える。次第に近づくに連れ、その少し上空を一人の人間が同時に飛行してくるのが分かった。

そのまま、相手兵士たちの元で停止する。聞こえた声は、女性のものだ。

「やれやれ、こんな雑魚ども相手に手間取っているのかい？」

「やっと来たか。待ちくたびれたぞ」

その様子を目の端に捉え、返答するダリウス。兵士たちも戻ってきた馬に騎乗し始めていた。

現れた女性は、少し派手なローブを身にまとい、目立つ杖を手にしていた。フードである程度顔を隠してはいたが、その裾から覗く長い髪は艶やかな黒色だった。その出で立ちと、登場時の様子からしても魔術師である事は間違い無さそうだ。
魔術師の女は、イセルとダリウスがやり合っている場所の近くまで移動すると、その上空数mで停止する。
その様子を見たダリウスは、今一度グラムルに話しかける。

「……グラムル。君の兄上は、今は我々と行動を共にしている。詳しいことは言えんがな」
（ん？あの人……）
「ダリ。そろそろ帰るよ」

待ち切れないとばかりに、女魔術師はダリウスに語りかける。グラムルは、この女性もどこかで見た顔だと思った。……もしかして、この人も昔……？
グラムルの記憶の答えが出る前に、その台詞から、奴らは逃げるつもりだと悟ったイセルがさらに追い討ちをかける。

「いくらグラムルの兄と知り合いでも、悪に味方するというのなら！」
「何を根拠に悪というのかね？」
（兄さん……）

全霊の力を込めた一撃を、うまくいなされて体勢を崩すイセル。その隙にダリウスは距離を取った。
思わぬ人間から兄の行方を聞かされて、動揺が隠せないグラムル。
その間に女魔術師がダリウスの側まで降りてきて、呪文を唱え始める。

「この野郎、待ちやがれ！」
「君たちが我々の前に再度立ちはだかるというのなら、また会うこともあるだろう。……グラムルよ、止められるものならば止めてみせよ、自らの兄を。そして炎のごとき戦いを見せる若武者よ。次に会い見えるときには、私が火傷するぐらいの炎となってみせよ！……楽しみに待っているぞ」
「ま、待てっ！」

イセルの言葉も虚しく、空を切った。駆けつけようとしたイセルの目の前で、その台詞の余韻だけを残し、女魔術師とダリウスは虚空へと消えたのだった。

「≪飛行≫に加えて≪空間転移≫かよ……」
その様子を見ていたスプが驚いて呟く。かなりの高位の魔術師である事は間違いないだろう。彼があとどれくらい修行すれば、あのレベルに辿り付けるだろうか。……想像もつかない。

「これを置いていってやる、一応命令だからな」

唖然としている一行を見ながら、残りの兵士たちが話しかけてきた。同時に、彼らが持っていた石をイセルの方へ向かってポイッと投げ捨てる。
「後はどうとでもするがよい」
口調からすると、持ってきた石とよく似た別の石らしい。
（くそ～、アイツにぶつけてやろうか）
足元に転がった石を見て、イセルは悔しそうに表情を歪める。だが、そんな事をしてもただ無駄なのは分かりきっていた。むしろ格好悪いことこの上ない。そのやり場のない憤りをどこにもぶつけられず、彼はその場にひっくり返った。

「……ち、くしょ～っ！！！」

太陽は相変わらず、明るく眩しい。
涙こそ出なかったものの、自分の無力さに歯噛みする。……まだ自分は、アイツを本気にさせることすらできなかったのだ。

『――……』

珍しく、そんなイセルを見てもティルヴィンは何も語りかけることは無かった。

＊

「皆さん、大丈夫ですか？」
「……久しぶりじゃな」
「そうですね。助けに来てくださってありがとうございます」

一方、緊張も去り、一行には束の間の再会の喜びが訪れていた。
多少やつれたような気はするが、健康そうなダイクに安心する一同。
それぞれ頭を撫でたり、軽く抱擁したりして無事を祝った。

「おいおいグラムル、どういうことだよ。アイツのこと知ってたみたいじゃねぇかよ」

気分を切り替え、立ち直ったイセルがまだ放心状態のグラムルに対して尋ねる。
だが、心ここにあらずといった雰囲気のグラムルは、うん……と言っただけで、詳しくは話そうとしなかった。その表情を見て、イセルもそれ以上はまだ追求しない方がいいだろうと、そっとしておく事にしたのだった。

その日はダイクの体調とグラムルの様子を気遣い、近くの村で休むことにした。
次の日の朝、一同がダイクを取り戻してホッと一息ついていると、イセルの首にかかっていた水晶玉のペンダントがピカピカと光りだした。

「……ん？」

全員の頭に疑問符が浮かぶ。一行はしばらくその記憶を辿って思いを巡らせた。

「……あ、やっべぇ」

一行の頭に、忘れていた記憶が蘇ってくる。……そういえば、城に戻らないといけないんだった。
そうしないと、脱獄犯として指名手配されてしまう。
よくよく考えてみると、この場所からではあの城まで一日半はかかる道のりだ。
すぐにでも出発しないと……マズい。

……残り、二日。

走れ、イセル！
走れ、みんな！

＊

「私の目が……曇っていたんですかね……」
「……」

ついに約束の十日目となった今日。
オルドーラスは城の中でも最も見晴らしの良い、城壁の上に立って街を眺めていた。傍らには当然のように無言のリュミエールが付き添っており、その背にはトレードマークの大剣も背負っている。
無表情のその顔からは、オルドーラスの事を気遣っているのか、それとも無視しているのかは分からないが、どちらにせよ、彼女には彼を元気付けるような情報をもたらす事はできなかった。
それは、あのわけの分からない冒険者の一味にしかできない事なのだ。リュミエールは、手の平が少し汗ばんでくるのが分かった。

「はぁ、……また左遷ですかね、私」

そんな風にオルドーラスが力なく呟いた時。

「たっ大変です！例の者たちが戻ってきました！」

階下から大声で叫ぶ兵士の言葉に、ローブの裾につまづきそうになりながらも、慌てて走っていくオルドーラスとリュミエール。
謁見の間へと続く絨毯の上では、武器も取り上げられ、乱暴に引きずられていく一行の横で、必死に「やめたまえ君たちっ！」とか騒いでいるダイクの姿があった。

何せ一回は脱獄をした面子だ。その扱いといったら酷かった。
槍の柄で小突かれるとか、こっそり蹴られるとかはまだしも、ベルなど髪の毛を引っ張られたりした時は本当にキレて何をしでかすか分からないような一触即発の状況にもなっていた。
そこにギリギリ駆けつけてきたオルドーラスたちによって、乱暴な扱いは止められたものの、その緊迫した雰囲気は解かれることは無かった。

領主の前に連れて行かれると、そこにはぐったりとしたカシューナの姿もあった。ボロボロの服を着せられたまま両腕を縛られ、僅かにのぞく範囲だけでも、傷だらけなのが見て取れた。かなり拷問されたのは間違いないだろう。

「お主等、良くぞのこのこと戻ってきたな」

「……ダスター大公、お話がございます」

そう言って話し始めたのはダイクだった。

彼はこう見えても、一応は隣の町の領主なのだ。事件はあったものの、その継承の儀式も済ませた。一行の潔白を証明する証人としては申し分ない身分を持っていた。

ダイクは屋敷での事件から順を追って、現在までの事をかいつまんで話す。その中でも、ラバン公が彼を誘拐した犯人であるという事と、ラバン公がその途中で≪教団≫という謎の組織に殺害された事を重点的に語った。

「……以上の事を、私ソーンダイク・ラカーサはこの身分と名にかけて証言いたします。大公におかれましては、何卒ご賢明な判断を賜りたく存じます」

（……ちっ、ガキが……！）

そんな事を言いたいような表情に見えたのは一行だけだっただろうか？

苦々しい顔を隠そうともせず、ダスターは一行に向かって吐き捨てるように言った。

「ラカーサ公よ。この度の受難、大変ご苦労な事であった。その方の証言、確かに聞き入れた。事件の重要な証拠となる物件はこちらにて預かろう。……大事を取られよ」

「……物件？」
「話は聞いておるぞ。魔法装置に関する重要な”モノ”を取りに行っておったそうじゃないか」
（話？誰だ……？）
「それは……これの事でしょうか？」

スプが、あっさりと懐から例の石を取り出す。それを見た瞬間、ダスターの目が細く輝いたのを見た。
そして妙に甘い口調で、一行に囁く。

「……ほぅ、”それ”か。ではこちらで慎重に取り調べようではないか」
「おい！誰もやるなんて言ってねーぞ！」
「……フン、これを持ってさっさと消えるが良い」

領主はめんどくさそうにイセルを見ると、横の兵士に金貨か何かが入っているらしい袋を放らせた。……地面に落ちた時の衝撃で、何枚か金貨が外にこぼれ出る。
そしてその後すぐに、興味はスプが取り出した石に戻ったようだ。
まるで一行など視界に入っていないかのように石を調べ始めるのだった。

「てめえ……っ！」
『いいって！アレは大したもんじゃない……』

小声で制すスプの表情を見て、激昂しかけていたイセルもその矛を収める事にした。……どうやらこいつは、アレが何だか分かったらしい。今はとりあえず、それを信用してやるか。
もったいない、と金貨を集めるスプを後に、一同は早々に謁見の間から去っていった。

オルドーラスや兵士に付き添われたまま、城の入り口へと見送られてきた一行。
今度は縄を掛けられることも無く、堂々とした態度だ。

「おい、罪人に礼儀はいらないとか言った奴、出てこいよ」

城を出てしまう前にと、やはり偉そうにイセルが言う。……どうやらしっかりと根に持っていたらしい。
それに反応して、例の兵士が進み出てきた。

「……何か言ったか？」
「おい、よくも今まで散々好き勝手やってくれたなぁ……」
「それがどうした」
「分かってないのか？俺たちは元々罪人じゃなかったんだが？」
「そうか。だからと言って、礼儀が必要な人間には見えんがなぁ……」
「てめえ……、いっぺんやられないと気が済まないみたいだな」
「おお、やりたいってんなら望む所……」
「二人まとめて寝とけ～っ！@$#&¥……」

突然のスプの動作に、咄嗟に反応する二人。

「貴様！何をしているっ！」
「余計な事すんじゃねぇっ！」

兵士がスプを羽交い絞めにした所に、すかさずイセルが何発かボディに拳を入れる。
……スプはすぐに悶絶して気を失った。

（むっ！なかなかいい突きだ……）
（てめえこそ、いい動きしてんじゃねえか……）
一瞬のアイコンタクトで視線の言葉を交わす二人。
「ふん、ケチがついた。この決着はまたの機会にしといてやるよ」
「貴様こそ、命拾いしたな……」
よく分からないが、とりあえずこの場は収まったようだった。
他一同、呆れて肩をすくめている。その一方で、オルドーラスが一行に近づいてきて挨拶をした。
「ちゃんと約束通り帰ってきて頂いて助かりましたよ」
「……ま、ね」
城を背に、面と向かって礼を言うオルドーラスに、照れているのか無口な一行。決して忘れていた事が後ろめたいわけではないだろう、多分。
そんな一同を見て、不思議そうに首を傾げるオルドーラスだった。
用意された馬車に乗り込み、ほとんど嫌な思い出しかないこの城を後にする。
……ようやく、全員揃って帰路につけたようだ。
＊
馬車で送られ、元のポルトヴァの屋敷に戻ってきた途端、玄関先でドドドッと倒れこむ一同。
「つ、疲れた……」

最初にこの街まで送り届けるだけだったはずの仕事が、いつの間にやらこんなにも長引いてしまった。
何だかやたらとあっちこっちに走り回らされ、気付けばおたずね者になりかけたり。

……ようやく久々に落ち着ける状態になった。今はとにかくゆっくり眠りたい……。
そんな感情が全員の心を支配していた。

「皆さん、大変長らく散々お世話になりました」
「ほ、報酬を頼む……」

何はともあれ、貰うものだけ貰っとかないと。
その根性は立派だ。
驚くダイクにそれだけ言うと、彼らは皆次々にその場に倒れて眠りこけるのだった……。

みんな、お疲れ様でした。
彼らの次なる冒険まで……？

残り……？日。

第０話　集まった放蕩者（前書き）

パーティー結成秘話。

第0話　集まった放蕩者

山あいと森のほとりの交わる場所。
両者から採れる僅かな資源を交易し、集まる市場が次第に発展して町となった。
田舎から出てくる者は、まず最初にこの町で何かを始めようとする。
名前はあるものの、誰もそんな名称では呼んでいない。

「はずれの町」とか、「はじめの町」とかそんな風に呼んでいる。

季節の変化の乏しいこの地域にとって、昨年は久々にまとまった雪が降り、農民は「精霊様のお怒りだ」などと悲鳴を上げ、普段より一層新芽の季節が待ち遠しくなっていた。
そろそろその季節を告げる一番芽が芽吹き始めようとする頃、町は次第に活気を帯びてくる。

ある者は手にした元手で一儲けしようと。
ある者はその実力で一攫千金を狙おうと。
そしてある者は世界を旅して回ろうと、この町に集ってくるのだ。

人が増えれば揉め事も増える。
市場では初物の取引が活性化し始めている頃、路地裏ではあまり素性の良くない者たちの縄張り争いの姿も見られ始めていた。

そんな路地の一角で、一人の子供がどう見てもまともな職業ではなさそうな男たち三人に囲まれている。
一人は口ひげを豊かに蓄えた男で、額の右側にある傷を隠す事も無く堂々と見せびらかしている。

一人は長い髪を肩の辺りでまとめた男で、その髪は洒落っ気というよりもただ切るのが面倒だったかのようにぼさぼさだ。
最後の一人は小男で、二人の周りをチョロチョロと行きかいながら、二人の台詞を後から繰り返している。
……どう見てもまともな世界の住人ではない、ろくでなしという言葉がピッタリの男たちだった。

一方で子供の方はというと、肩にかかるほどの少し癖のある栗色の髪が特徴的で、身長も長い髪の男の胸の辺りまでしかない。
くりくりと真ん丸の目は無邪気に輝きながら、薄い唇で一人ぶつぶつと何か呟いているようだ。
さらに目立つのがその栗色の髪の間から覗く耳で、人間にしては尖がっている。しかし長さはそれほどでもない事から、おそらく人間とエルフの混血、ハーフエルフであるようだった。
動きやすそうな簡素な服と、動物の皮をなめした素材で作った靴を履いており、簡単な荷物を持っていることから、この町の者では無さそうだ。

そのシャルルという名の少女は、うずくまって何かを観察しているようだった。
男たちはその視線の先を見てみたが、そこにはアリンコしかいない。
……だがどうやらこの少女は、本気でそのアリンコを観察しているらしかった。

「嬢ちゃん、腹へってないか？」
「減ってる～」
「うまいもん食わせてやろうか？」
「食べたい～」

さっきから男たちは、このように少女に呼びかけ、どこかへ連れて

行こうとしているようだった。
まだ明るい昼間のうちである事から、あまり目立つようにはしたくないらしく、大人しく猫なで声を使って誘惑している。しかし、その言葉に返事はするものの、少女はそこから動こうとする様子は無かった。

シャルルは物心ついた時には既に、旅の行商人や旅芸人の一座などと行動を共にしていた。
彼らは決まって、大きな町に着くと「君はどうする？」と聞いてくるので、彼女はその度に気まぐれに一緒に着いて回ったり、あるいは離れて気ままにブラブラとするのだった。
するとまた他の誰かが「一緒に行くかい？」と聞いてくるので、そうこうするうちにこの町へと辿り着いたのだった。

彼女には何となく、相手が裏があるかそうでないかを嗅ぎ分ける嗅覚が備わっていた。
折角雪が融けて最初に見つけたアリンコたちをじっと見ていると、この目の前のおじさんたちが何だかんだと話しかけてきたのだ。
もちろん彼女には、その言葉がただの建前である事を見抜いていたので、適当に受け答えしながら過ごしていたのだが。

「兄貴ぃ～っ、もう埒があかねえんじゃないっスか？」

相変わらず周りをチョロチョロしている小男が、いい加減待ちくたびれたようで、額に傷の男に対してぼやく。
兄貴と呼ばれた傷の男は、面子でもあるのか「う、うるせえなぁ……」とか言って黙ったままだ。
どうやら次の手を考えていたようだったが、しばらく待っても何も浮かんでこなかった時、渋々諦めたようだった。

「仕方ねえ、こうなりゃ力付くで……」

そう言ってシャルルの腕を掴もうとした時だった。

「待ちなさい！」

辺りに凛とした声が響き渡った。

「な、何者だっ！！！」……という言葉を用意していた男たちだったが、その言葉はすぐに喉仏の奥に引っ込んでしまった。

代わりに、ちょっと安心した声で、声をかけてきた主へと語りかける。

「勇ましいねぇ～、新しいお嬢ちゃん」

それもそのはず、男たちに声をかけてきたその主は、まだ若い女性だった。

身長は目の前の少女よりも高いだろうが、それでも傷の男よりは小さい。体つきもわりと華奢な方で、薄めのブラウンの髪を短く切り揃えている。意志の強そうな眉と瞳は整っているものの、淡い桃色の唇は少し自信無さ気にギュッと引き締められていた。

意外だったのは、その女性は薄汚れた鎧を身にまとっている事だった。

汚れてはいるものの、その鎧は男たちが見てもきちんとしたものだったが、ただ一つ、胸元の紋章が描かれている部分だけは大きく傷がついてよく判別できなくなっていた。

腰から下げている長剣を見て、もしかしてどこかの騎士かとも思ったが、こんな所にこんな格好で来ていることは無いだろう。

しかもその女性……少女?は、自分で思った以上に大きい声を出し

てしまったからか、その顔が傍から見ても分かるぐらい、真っ赤に紅潮していた。
そしてその女性……グラムルは、男たちが全く思った通りのことを考えていたのだった。

（グ……グラムル、頑張りなさい。あなたは騎士なんだから……！）

そう考える頭とは裏腹に、この先に何と続けたらいいのか分からず、グラムルの頭の中はグルグルと混乱していた。
少女を始め、男達の視線、さらには遠くでこの騒動を見かけた人たちも、遠巻きにこっちを見ている。

「あ、あの……その……お、女の子を……、ど、どうするつもり……なんですか……？」

先ほどまでの調子とは打って変わり、弱気でしどろもどろになってしまうグラムル。
その変わりっぷりに男たちは顔を見合わせて、ふっと笑う。

「どうするったって……なぁ？」
「そうですよねぇ？兄貴ぃ？」
「何だったら、お嬢ちゃんも一緒に……」

とそこまで言った時だった。

「ちょっと待ったぁっ！！！」

さっきのグラムルよりも大きく響き渡ったその声に、グラムルも含めた全員が振り向く。
またしても男たちは、「な、何者だっ！」という台詞を使う事はで

きなかった。
何故なら、振り向いたその先には、あからさまに妙なポーズをつけてこっちへアピールしていた男がいたからだ。
男たちに、一斉に呆れた顔が広がる。

「……全く、女性を見るとすぐこれなんだから……」

その横には、腕組みをしてため息をついている女性も付き添っている。
男の方は、斜め四十五度のポーズを保ちながら、左手を真っ直ぐこっちへ突き出し、手の平を大きく待った！のポーズで開いている。
右手は背中の大剣の柄へと回し、抜くのか抜かないのか分からないがそのまま静止していた。
顎を引き、目を瞑ったまましばらく溜めを作った後に再び口を開く。

「愛ある所に炎あり。炎ある所に我あり。……炎の戦士、イセルナート……参上」
「また一体どこでそんな台詞覚えてきたのよ……」

さっきから二度目のため息を吐いた女性は、どうやらエルフのようだった。
緩くウェーブがかかった長く透明がかった金髪を背中へと垂らし、風に揺られるままにしている。切れ長の目や色白の肌、ほっそりとした体つきは、大抵の男が見たら魅了され、見惚れてしまうだろう。
しかし彼女はそんな魅力を知ってか知らずか、特に着飾った衣装などは身に付けていなかった。
体にフィットした動きやすく柔らかそうな若草色の服、足音を立てないように毛がついたままの皮を使った靴、そして背中には小さめの弓矢を背負っている。

イゼベル、というその女性は、人間同士の揉め事には関わるつもりはないとでも言うように傍観を決め込んでいた。
一方で、イセルナートと名乗ったやる気満々の男の方は、台詞を噛まずに言えたことと、周囲の注目が全部自分に集まった事に満足したようで、決めポーズを解除し、背中の大剣を慣れた仕草で抜き放った。

「待ってろよ、フレイムスラスト。今暴れさせてやるからな……？」

剣に向かって話しかけたのか、かなり自己陶酔気味のこの男は、まるで砂漠でも渡るかのような出で立ちをしていた。
少し長めの金髪を、日よけになりそうなフードのような布で覆っている。かなりの長身に着ている板金鎧はガチャガチャとうるさく、それに見合ったがっしりとした体格をしていた。
男たちを見る目は悪戯好きの子供のような雰囲気をしており、得意げに眉尻も上がっている。そして口元をニイッと吊り上げると、男たちを挑発してきた。

「どうした？来いよ、悪党！」

いきなり登場した派手な男に、呆気に取られていた男たちだったが、相手が何の躊躇も無く剣を抜き放ったのを見て、懐から短剣を取り出して構える。それを見たグラムルも、慌てて腰に下げていた長剣を抜く。……ちなみに彼女がこの時のイセルの大剣を見て、真似して大剣に持ち替えるのはもうしばらく後のことだ。

何だかアリンコよりも面白そうな事が始まったと、シャルルもその場を離れてとりあえず女性騎士の後ろに隠れる。
それを見た男たちも、もはやそれどころではなくなってしまったと、シャルルはそのままにしておいた。だが、まだ男三人に対して女三

人、男一人だ。十分優勢だと認識したらしい。
男たちはゆっくりと散開し、じりじりとイセルに詰め寄る。
グラムルが横まで来るのを待ち、イセルが剣を振りかぶろうとしたその時。
「吹き飛べっ！！！」
「……な、何者だっ！」
今度こそと思ったその台詞は、何故かイセルが発したものだった。
無駄に驚いて振り返っている。
男たちは、もはや勝手にしてくれ……とばかりに傍観している。
イセルたちの前に現れたのは、杖を持った男だった。
ー＊？＃@
それと同時に、その場にいた一同を強烈な睡魔が襲う。
――魔法だ、と思った時には既にイセルとその前にいた傷の男が抵抗できずに、その場に倒れていた。
傷の男は小男が、イセルは隣にいたグラムルが慌てて起こす。二人が頭をフラフラさせながらも身を起こした時には、魔法を放った男は短剣（ダガー）を抜いて、男たちに攻撃しようと身構えていた。
「こっちはシカトかよ……」
そう呟くイセルが、新たに現れた男をしげしげと見てみる。
その男は比較的若そうだったが、細くて黒い前髪で半分顔が隠れて、表情がうまく読み取れない。その持っている杖や使用した魔法を見る限り魔術師のようだったが、もうボロボロになったローブの下に

着ているのは、まだ比較的新しい薄皮鎧（ソフトレザー）だった。
戦士……とは思えないが、魔術師……にしては似合わない。一言文句を言おうと口を開きかけた時、

「行くぞっ！」

男はわざわざ声をかけて、長い髪の男に踊りかかって行った。

「わ、わあああぁっ！」

まさか突然飛び入りの男が襲い掛かってくるとは思わず、長い髪の男は持っていた短刀を振り回して混乱する。少しでも実戦を経験した人間にはすぐ分かったが、こいつらはほとんどこうした状況に慣れてはいないようだった。つまりは、素人同然だ。
だが、そんな無軌道な刃の軌跡に無計画に突っ込んでいった魔術師風の男――スプは、見事にさっくりと左の太ももを刺され、その場に転がった。

「……む、無念……」

特に致命的ではない傷だったが、慣れていない人間には立ち上がることは難しいだろう。
スプは両手で太ももを押さえたまま、いってー……と顔をしかめてうずくまっていた。と、そこへ酒樽に似た人影が近づいてくる。

「全く、また手間を増やしおって……」

そうぼやきながら魔術師の手当てをし、回復魔法を唱え始めたのはドワーフの男だった。
背中には大きい戦斧を担ぎ、シャルルと同じくらいしかない身長で

ありながら、どっしりとした体格に豊かな濃い茶色の髭を蓄えている。……まさに、典型的なドワーフといっていい外見だった。
首から提げている聖印には、天秤の象徴図が描かれている。それは、公正と商売の神に仕える司祭であるという証だ。
さらによく観察してみると、少しだけ顔が赤いような気がする。……まさか、昼間っから飲んでる？

近くにいたスプには明らかに酒の臭いが分かったので、どうやら飲酒魔法だったようだが、神はその辺りには寛容らしい。元々それほど深くは無かった傷は、あっという間に治った。そしてまた懲りずに立ち上がるスプ。
回復を終えた司祭――ヌニエルも立ち上がり、まるで酔拳の使い手のように戦斧を振りかぶり……損ねてふらついた。

それに「危ねっ！」とか驚きながら、イセルも再び剣を構える。
隣には同じく剣を構えたグラムル。
……いつの間にか後ろではベルが短弓を構えており、最後にシャルルが悪戯でもするかのように、ニッコリ笑って光の精霊を呼び出した。

「ひ、ひいいいぃぃっっ！！！」

あまり締まらなかったが、それでもズラリと揃ったこのメンバー一同を見て、恐れをなした男たち。残念ながらお決まりの捨て台詞を吐く間もなく、あっという間にその場から逃げ去っていってしまったのだった。

「……ふぅ。で？何なんだお前たちは？」
「……何が？」
「何がじゃねーよ何がじゃ。いきなり人を魔法に巻き込んどいて何

がはねーだろ」
「それを言うなら、アンタが勝手にノコノコ出て行ったんでしょ！もう止めてよね、一人で暴走するの」
「えぇ～っ！？あそこはさぁ、戦士として出て行かないといけない所だろ～？」
「あ、あの……確かに……た、助かりました……」
「うっ、気持ち悪……飲み過ぎた……」
「わ、わわっやめろ！……き、気を確かに持つんだっ！」

……何だか面白そうな人たちだ。
シャルルはしばらくこの人たちについていってみようかと考える。
多分大変になりそうだけど、退屈する事は無さそうだし。特に、これから行く所も無かったし。

……それなら、旅路は賑やかな方がいい。

ともかく、集まった人々によりろくでなし共は撃退された記念に、折角なのでとみんなで食事をすることになった。
そして、何だかんだと騒いでいる内に意気投合し、みんなで金でも稼ごうぜ？……ということになるのだった。
早速自己紹介をし、町の酒場へと仕事を探しに行く一行。

その店には、『明日は明日の風が吹く』という看板が軒先にぶら下がっている。
辺りには少しずつ新緑の季節が近づいている頃。
今日の陽気に当てられて、二番目の若芽も芽吹き始めていた。

第２０話　『山羊と獅子と洞窟編』　復習と制裁（前書き）

推奨ＢＧＭ：ｚａｂａｄａｋ

謎は色々とそのままですが、とりあえずダイクと日常の平穏は戻ってきました。

第２０話　『山羊と獅子と洞窟編』　復習と制裁

「……結局、奴らが教団だって事でいいのか？」
「おそらく間違いないと思います。私が捕まっていた時、そんな話をしていました」

ダイクが戻ってきてから三日ほど経っていたが、例によって一行はラカーサ邸に居座っていた。
そしていつものようにスプがつまみ食いで怒られつつも夕食が終わり、食後の休憩中にこれまでの出来事をおさらいしてみようと言う事になったのだった。

ラカーサ邸での食事は非常に豪勢だった。
何せ主人であるダイクに加え、お尋ね者になりかけていたカシューナまでもが戻ってきたのだ。
救ってくれた一行にお礼をしなくてはならないと、せめてものお返しに大量の食事が用意される事となって、早三日が過ぎていた。

帰ってきた後は、丸一日全員が眠りこけていた。
久々のベッドでの落ち着いた睡眠だったからだろう、食事の時だけ起き出してきて、それが終わるとまたすぐに睡眠、後は湯浴みをする程度で一日が過ぎた。
ようやく三日目にしていつも通りの生活へと戻ってきたのだが、一応ダイクの護衛――途中から内容は大きく変わってしまったが――という依頼は達成したものの、もうすっかり一連の事件に巻き込まれてしまった一同。
とりあえずこれまでの経費と報酬をもらい、今後どうするかと言う事を改めて話し合っていた。

「そういえば、あのダリウスだっけ？……とか言った奴、お前の事知ってるっぽかったじゃねーかよ、グラムル」

食後のデザートとしてリンゴを齧りつつ、腹いっぱいのお腹を持て余すように椅子を傾かせてゆらゆらと前後に揺らしながら、イセルが尋ねる。

あの時の会話は、前衛にいた二人にしか聞こえていなかったため、他のメンバーも興味津々で身を乗り出してくる。

当のグラムルはまだ食事を終えておらず、もそもそと鶏肉を切り分けながら、ちびちび口へと運んでいた。……唯一グラムルだけが、屋敷に戻ってきてからも食欲がないままだ。

これまでは気を使って尋ねる事はなかったのだが、そろそろ聞かせてもらってもいい頃合だろう。

第一、隣でこんな顔で飯を食われた日にゃあ、飯が不味くなってしょうがない。

……いい加減、背負ってる荷物を降ろしてもらわないとな。

静かにナイフとフォークを置いたグラムルに、イセルが再び口を開く。

「……そろそろ教えてもらえるのか？」

「え？あ……はい……」

全員の注目が集まっている事に気付き、躊躇しながらも控えめに話し出すグラムル。

さすがにもう黙っておく事はできない……といった表情だ。

「あの人は……、どうやら行方不明になった私の兄の友人のような

んです」

食事の皿に目を落とすグラムルの頭の中には、回想シーンが挿入されているようだ。
その言葉と共に語られた彼女の過去は、一行にとっては初めて聞かされるものだった。

元々、五年前に滅びた王国『テムール』が彼女の出身地だった。
両親を戦で亡くし、それからは兄と二人だけの生活となった。両親の遺志を継いで騎士となった二人だったが、王国が滅びる時にグラムルだけが逃がされ、兄はそのまま王城に残っていた。
ダリウスと名乗った鎧の男は兄の知り合いであり、今は兄と行動を共にしている事、それしか分からない……と。

「後の噂で王城も陥落し、関係者は全員処刑されたと聞きましたが、その中に兄らしき人物はいないようでした。兄は次期騎士団長と期待されるほどの人物でしたので、簡単に死ぬような人ではないと思っていたのですが……」

「そうか、お前もあの時いたのか……」
「……あぁ、そういえばイセルもあの王国にいたんでしたね」
「俺も同じように逃がされた人間だからなぁ……。その気持ちは何となく分かる気がするよ」

珍しく、一行の間に重い空気が流れる。
……さすがに誰もそれ以上、聞く事はできなかった。
イセルが話題を変えようと、両手に果物を持ってかじりついている、果物かじり魔術師に話しかける。

「おいスプ、あの石は結局何だったんだよ」

スプはそのまま二口果物をかじり、咀嚼して飲み込んでからようやく、イセルの問いに答えた。

「……魔硝石だな。昔師匠に見せてもらった事がある」

魔硝石というのは、外部に魔力を溜め込んでおける媒体となる石の事だ。

魔法を使う者は、時にこれを使う事によって自分の魔力を節約する事ができるのだ。この世界における魔法の品物の中では、割とポピュラーな物だと言って良かった。

「ふ～ん……高いのか？」

「いやそんなに……大体あの大きさだと一万Gいけばいいほうじゃ――あでぇっ！！！」

ただ、もちろんその辺に転がっているようなものではなく、あれほどの大きさとなると……高いな、間違いなく。にも拘らず、前回ダスター大公から投げ付けられた金貨は、合計で……千Gちょっとしかなかった。

当然その事に気付いたイセルは、スプが言い終わる前に、全力の拳でスプの脳天をカチ割った。

スプは果物ごと舌を噛む。

気付けば他のメンバー全員も椅子から立ち上がり、ゴゴゴゴゴ……と炎の精霊でも呼び出したかのように背後に燃える炎を背負いながら、スプに詰め寄ってきている。

……スプ、かつてないプレッシャーを感じる。最大の危機だった。

「てめぇ……そんなモンをあれっぽちの金貨で手放しやがったのか

……」

「……万死に値する」

「逆さ吊るしの……刑ですね」

「ぬるいわ。市中引き回しの上、打ち首獄門よ……」

「やれーやれー」

修羅と化した一行が、逃げ回るスプを追いかけて走り回る。

シャルルもいつも通り無責任に応援し始め、いつの間にかグラムルもすっかり元通りになったようだった。

そしていつものようにドタバタが始まっていくかに思われた。その時。

「あの～……」

屋敷の召使いに連れられて、一人の農夫が案内されてきた。

第２０話　『山羊と獅子と洞窟編』　復習と制裁（後書き）

今回から、携帯でも読み易いように、一話の文字数少なめでいきます。

第２１話　農夫と依頼

いつものドタバタに呆れた顔をしていたカシューナが尋ねる。
召使いは答える。

「こちらの者が、どうやら皆さんに御用だったようで……呼んでも返事が無いようでしたから、案内して参りました。申し訳ございません」

その場にいた全員が、入ってきた農夫の顔に注目したが、どうやら誰も知っている人物ではないらしく、不思議な表情をして互いに顔を見合わせる。
おずおずと農夫は喋り始めた。

「あの～……、こちらにデブリーズ・フェアチャイルドさんという方はいらっしゃいますか？」

その名称に、疑問符を浮かべる人間と、視線がある人物に向かう人間とに二分された。
が、まだ特にその事には触れずに、続けて農夫の話を聞く。

「私、北にあるバドリーという村の者なんですけれども、最近、村に変な怪物が出て困っているんです……」
「変な怪物？」

農夫は、こういう豪勢な屋敷に入るのは初めてなのか、おどおどとした態度で自信なく話している。
イセルはそれよりも別のことが気になっていた。続きを遮って尋ね

てみる。

「……何でここに来たんだ？」

「この間、村に変な老婆が来まして……」

（ん……？）

”変な老婆”という単語に、一行の脳裏にはある記憶が蘇ってくる。

それはまさか……？

「……もしかして、行き倒れてたとか？」

「そうです！よく分かりましたね」

「それで助けてあげたら、やたらと食いモン食ってたでしょう？」

「そうなんです……まさかあんなに食べるとは……」

思った通りの人物像が的中し、急に農夫のテンションも上がったようで、一気に話題が盛り上がる。

「それでお礼に占いなんてやってあげよう……とか？」

「その通りです……そして、ここにあなた方がいる、と言って……」

（あの時に奢ったお金、高かったな……）

グラムルには、あの時の痛い想い出が蘇る。

ちなみにようやく、前回に貰った報酬でおっさんに対しての借金は払い終える事ができた。

おかげで、あんまり手元に残ったお金は多くなかったのだ。

あ～、何だか嫌な予感がするな。グラムルのあまり鋭くない危険感知能力が警告を発していた。

「あ、生憎……ここにはデブなんとかと言う方は……」

「そうそう、こちらのデブリーズ・フェアチャイルド様に任せてお

きなさい！」
「その名前やめて～……！」

依頼元に裏が取れたせいか、いきなり無責任に前向きな発言を始めるイセル。
それとは逆に、嫌な予感を感じて先手を取ろうとしたグラムルの言葉は完全にかき消されてしまっていた。
そしてやはり嫌な予感が的中し、彼女はかつてのあだ名でのからかい対象（ターゲット）と化してしまうのだった……。

「彼らに任せておけば、間違いなく安心ですよ！」
「報酬！報酬！」

それに追従する形で、他の面子も急に騒ぎ出す。意外だったのは、カシューナも率先してその渦に加わっている事だった。
どうやら、いつまでも一行がこの屋敷に居座られる事での様々な危険を感じ取っているらしい。特に、食費などの経済的な面において……。
そんな彼らの勢いに圧倒される形で、農夫は完全に面食らっていた。

「な、何だか大丈夫ですか……？」
「あなた達の村に平和が戻ってくるというのなら、喜んで引き受けましょう」
「はっ……何て立派な方々だ～。あのお婆さんの占いは当たってただ～」

リーダーであるおっさんの人道的な一言により、農夫は安心して依頼を任せることにしたようだ。
そしてその決定が下されると、すぐに彼らは依頼の具体的な情報収集へと移った。

戦闘だけでなく、情報収集に関しても切り込み隊長であるイセルが代表して口火を切る。

「……で、変な怪物ってのはどんな奴なんだ？」

「それはですな、すごくでかい山羊と同じくでかい猫のような首がくっついた、羽の生えた化け物なんです」

……これが、彼らが久々に受けることになった依頼の、新たな幕開けとなる一言だった。

第２１話　農夫と依頼（後書き）

推奨ＢＧＭ：ｚａｂａｄａｋ

第２２話　農村と昔話

「ここがバドリー村か」
「名前はちょっとカッコいいけど、中身は普通の村ですね」
「……まあそりゃそうだろうな。でも、なんか懐かしいよな～。こういう風景」
「そうなんですか？」

ということで、一行は早々にバドリー村へ着いた所だった。
元々、特に忙しかったわけではない。依頼に訪れた農夫に一晩休んでもらった後、次の日には馬に乗って出発し、街道を進んだその一日後には村へと到着していた。
バドリー村は、特筆して記述する事も無い、どこにでもあるような田舎地方の農村だった。

所々に偏在する家と、その周囲に広がる畑。
これから暑くなる季節を前に、新緑の季節に採れる菜花や葉物、一部の豆類などの片付け作業が行われていた。
その次には猛暑の季節に収穫できる、カラフルな果菜類の苗が植わっている。もう二～三ヶ月もしたら収穫できる事だろう。
そんな事を考えながら、一行は村の中心へと歩みを進めていた。珍しい客に興味津々なのか、作業中の農夫たちも手を止めて彼らの方を見物していた。

イセルはそんな彼らを懐かしそうに眺める。
……彼はこのような農村出身だったのだろうか？グラムルが記憶する限りでは、彼や彼女が育ってきた王国は割と都会であり、そこそこの広さまで発展していたはずだ。

それに加えて、あの辺りは渓谷が多く、この村のようにだだっ広い草原のような地形はあまり無かったはずだが……？

気になるといえば気になる話だったが、昔の話になると考えたくない兄の話をまた考えてしまいそうだったので、この話を追求する事は止めておいた。

今はこの新しい仕事に集中する事で気が紛れているのだから、そっちへ全力を傾ける事にしよう。

グラムルはそう気分を切り替えるのだった。

「良くぞ来て下さった、旅の方々よ」

「こちらが村長です」

村の集会所です、と紹介された建物に案内され、そこで待っていた老人を紹介されると、早速仕事の話になった。

建物の中の長椅子を勧められ、全員でそこに座ると同時に、温かいお茶が配られる。

それに手を付けながら、一行は村長の話に耳を傾けた。

「話は既にお聞きになっとると思いますが、最近妙な怪物が出て、家畜が襲われて困っとるんです。皆さん方、退治して頂けんじゃろうか？」

「被害にあってるのは家畜だけなのか？」

「今の所、離れたところで飼っている牛や豚、鳥だけなんじゃが、もちろん今後の事を考えると村人にも被害が出んとも限らん。今のうちに何とかせんとと思っとります」

彼らが思ったよりも若いからなのか、彼らに対してそれほど丁寧ではない口調で語りかける村長。……もしくはこういった状況に慣れているのかもしれない。

彼らも特にその辺りにこだわっているわけでもなく、逆に丁寧すぎると場違いになってしまう危険性もあるので、このような扱いはむしろありがたかった。
彼らも村長に対して、別段礼儀などを意識せずに話しかけることができるのだった。

「なるほど。……この辺りに怪物のねぐらになりそうな場所はありますか？」
「いや、それが心当たりが無いんじゃ。少し離れた所に遺跡があるぐらいなんじゃが、そこはもうほとんど屋根も無い廃墟となっておりますので……」
「遺跡？」
「ええ、三日月の丘というんですが。ここにはちょっとした歴史がありまして、まだポルトヴァの町があんなに栄えていなかった頃、ここにはまだ小さい集落しかありませんでした。その時にこの丘にある遺跡に≪腐銀犬鬼（コボルド）≫が大量に住み着いてしまった事があったのです」

尋ねたスプの表情に、少し驚きの感情が混じる。
……これと言って特に事件の無い、平凡な村かと思っていたら、余所者に聞かせられるほどの過去の事件があった所だったとは。……正直、この村の事を見くびっていた自分に気付いた。何とも失礼な話だが。
そして、その事件の続きに耳を傾ける。

「そのすぐ後に大勢のコボルドたちが村に攻めてきた事件があって、我々が全滅しそうだったその時、ラカーサ家のノルディック様一行がやってきて、コボルドたちを退治してくれたんじゃよ。そのおかげで、今までこうやってこの村も平和に暮らして来れたんです」
「へぇ～……そうだったんだ～……」

「確か、カシューナさんもいたんだよね？」
「ええ、確かにいらっしゃったのぉ。あの時のノルディック様たちと言ったら、そりゃあ絵になるような素晴らしい出で立ちでしたなぁ……。そういえば、ちょうどあなた方と同じような面子じゃったよ」
「……俺たちと？」

思わず間の抜けた声を出してしまったイセルだったが、考えてみれば当然の事だった。
確かにこの地域に偏在する遺跡を探索して回っていたのであれば、パーティーを組んでいたとしても意外ではない。……と言うより、そっちの方が自然だ。
なるほど、カシューナが身に付けている様々な技術は、その辺りの経験が元になっているのかもしれない。
彼の謎のヴェールに包まれた過去も、少しだけその正体が分かったような気がした。

「他にも、コボルドに両親を殺されて孤児になってしまった子達を、その時一緒にいた司祭様が連れて帰って育ててくれたり……。本当に素晴らしい方たちでしたな」

その言葉に、イセルの耳が一瞬ピクリと反応する。
……だが、その僅かすぎる反応に気付いた者は、そこには誰もいなかった。

第２３話　足跡と迷い子

「後は、子供が落ちて大怪我した穴とかならありますがなぁ……」
「分かった分かった。地理の事はもういいよ。後は、実際に魔物が出た所を見てみたいんですが」

そういうスプの提案に従い、一行は村長の後に着いて、村はずれの家畜小屋へと案内された。
そこは数分も歩けば森の中へと続く位置にあり、三十ｍ四方ほどの大きさの柵で覆われていた牧草地帯だった。
だが、夜間飼われている豚たちが休むであろう屋根付きの小屋の半分ほどが、無残にも破壊されている。
柱や屋根などの残った部分を見ても、古くなってはいるが、ちょっとやそっとの衝撃では壊れそうに無い。
その部分から見ても、相当な力が加えられたことは間違いないようだった。

悲痛な表情をしている小屋の持ち主が、荒らされた地面に残された一つの痕跡を指し示す。

「これが怪物の足跡です」

一つ……とは言うものの、実際には三種類の足跡が残されていた。
一つは、当然ながらここにいた豚たちの蹄の跡。そして残り二つのうち、一つはそれよりもさらに大きいの蹄の跡。
そして最後の一つは、……大型の哺乳類のような足跡だった。
一行は全員でそれを覗き込み、記憶を辿る。
やがて、スプが閃いた表情で周囲に説明した。

「なるほど……これは≪合成魔獣（キマイラ）≫だな、下位種っぽいが」
「いや、……これは山羊獅子（ヤギライオン）だぞ！昔、子供の頃に見た事がある！」

それに対抗して（？）同じくイセルが閃いた表情で熱く語りだす。
……しかし、『ヤギライオン』という動物は誰も見たことも聞いた事も無かった。ので聞き流す。

ちなみにキマイラというのは、魔法によって様々な生物を組み合わせて作られた、知恵を持つ魔獣のことだ。……この場合は、交配（かけあわさ）したという意味ではなく、文字通り合成（くみあわ）された獣（れた）だということだ。
古代の魔術師により研究された、魔法生物の一種だった。

大抵の場合、作られた者の命令に従って遺跡を守っていることが多いが、何らかの理由によりその制限が外れた場合、このように野良キマイラとなって彷徨う事もあるらしい。知恵はあるものの、基本的には獣の習性に従って暮らしているようだ。
獣の性質が強いということは、ある種の事件の黒幕として存在するような、策謀を巡らすほどの上位の魔獣ではない――と何かの文献で読んだ事があった。

その後、簡単な相談が始まる。
この足跡を追って森に入るか、このまま村にいるかだ。……端的に言えば、魔物を追跡するか、村で待ち構えるか、という二択だった。
しかしどちらとも言えずに迷っている一行に対して、村長からの助言が与えられた。

「怪物は毎晩出没するわけではなく、次はいつになるかも分からんので、探しに行ってもらえんじゃろうか？その間は村のモンには外にあまり出ないようにしろと言っておきますので」

「……よし、そいじゃ行きますか」

その申し出に対して、彼らが反論する理由はどこにも無かった。
一行は宿代わりに提供された空き家に不必要な荷物だけ置いて、探索の支度を整える。準備ができると村長に探索開始の旨を告げ、森へと向かう事にした。

「実際に怪物を目撃した、森に詳しいレイスターという猟師がおりますが、案内させる必要はありますかな？」
「いや、大丈夫でしょう。万が一、何かあった時に守りきれないので」

そう見栄を張ってカッコつけたのはいいが、そのしばらく後には、早くもそれを全員が後悔する出来事に遭遇していた。

追跡していた足跡が、森に入ってすぐにパッタリと途切れていたのだ。……そこには、何ら不思議な外的要因は見つからない。
一行は全員で顔を見合わせていた。

「……」
「……あ、そういえばキマイラ空飛ぶわ」
「先に言えよそういうのはっ！」
「いや、これはヤギライオンの不思議な力によるものだ……そう、あの時確かに俺も」

悪い悪い、とまるで大した事でもないかのように頭をかくスプに、他一同から一斉にツッコミが入る。
キマイラと言う魔物の大まかな部分は彼から説明を受けたものの、スプを含めてここにいる誰もが実際の姿を見たことはない。
まだうまくイメージを掴めていないのも無理は無かった。

そしてまだ一人、ヤギライオン説を主張するイセルには、誰も構うつもりは無い。

完全に途方に暮れる一行だったが、まだ森に入って数分しか経っていないこの状況で村に戻るというのは、依頼人の信頼を著しく損なう結果に陥らないとも限らない。……つまりは、カッコ悪い。

一行の間を沈黙が支配するのに耐えられなかったのか、スプが何気ない提案を口にする。

「どうする？遺跡行く？」

「何でだよ。……足跡がないと遺跡行くのか？」

「何言ってんだよ。遺跡だぞ？お宝……」

イセルからのつっけんどんな意見に対して、さも当たり前だとばかりにその根拠を主張しようとしたスプだった。

だが、用意していたその台詞を最後まで言い終わることなく、その一部の単語を聞いた途端、一瞬で目を輝かせ始めた他一同と、その筆頭であるイセルに台詞を奪われた。

「！！！い、いせっ、そうだ遺跡だ！……魔獣というのは本来遺跡に住み着いていたりするモンだろうと思う。従って遺跡だ」

その台詞の途中から、またしても指を顎に当て、妙なポーズで真面目に語りだしたイセル。

だが折角のその真剣な表情に答える者は誰もおらず、その途中で全員の頭の上に？マークがポコポコと浮かび始めた。

……何か、肝心な事を忘れているような……？

「……で、遺跡ってどこだ？」

「……」

「どこーーーっ!?遺跡どこーーーーっ!!!」

イセルの無様な雄叫びが、閑散とした農村の外れの森に響く。

……案内役がいれば、簡単に防げたであろうこの事態に、結局一行は体裁よりも実利を選んだ。

第２３話　足跡と迷い子（後書き）

推奨ＢＧＭ：ｚａｂａｄａｋ

第２４話　戦士と石屋

案内役を買って出てくれた猟師レイスターは、実にスムーズに遺跡まで一行を連れてきてくれた。

「ここが三日月の丘です」

そう言って指し示すレイスターの視線の先を見ると、確かに半円状に広がる丘と、それを三日月状に切り取る形で広がっている遺跡の姿が見て取れた。

だが、それはただの枠組みとしてだけの話で、実際には遺跡とはいっても、それは既に建物としての形状を失っていた。

風化が酷く、所々からその建物の下にあったはずの岩が露出している。もはやここは遺跡などではなく、複雑な形の低い岩山だと言った方が正解に近かった。

当然ながらここには彼らが望んでいたお宝などは無く、それ以前に建造物すら残ってはいなかった。

期待はずれの結果に一同は落胆し、しかしそれでも諦めきれないのか、あちこちを探って秘密の扉でもないかと探しまくっている。……未練だけが今の彼らのモチベーションだった。

「う～ん……」

「ん？こりゃ石灰石じゃねーか」

早々に諦めていたイセルが、尚もしつこく捜索を続けるスプ＋女性陣の後ろから覗き込むと、意外な台詞を呟く。

それが気になったスプとグラムルが、イセルの方を振り返った。

「知ってるんですか？」
「ああ、昔こういう所でよく遊んでたよ」
その言葉に続いて紡がれたイセルの台詞は、いつもの戦士としての素顔からはとても想像できないような知識が詰まっていた。
「いいか、石灰石ってのはな、水によって浸食されやすく、雨や地下水によって地下に空洞や洞窟ができたりするものなんだ。……これだけのでかさと、断面の層から見ると、おそらく……丘の向こう側ぐらいまでは同じ地層が続いてるだろうな」
一息でそこまで説明したイセルを見て、グラムルとスプだけでなく、今やその言葉を聞いていた他の全員もポカンとして聞き入っている。この単細胞（きんにく）で活動しているような戦士から、まさかそんなに学術的（アカデミック）な知識と言葉が出てくるとは思わなかったのだ。
しかし本人としては露ほどもそんなことは思っていないのか、唖然としている他の面々を不思議そうな顔で見ている。
そんな状況からいち早く脱したベルが、イセルに対してぶっきらぼうに言葉をぶつける。
「どうしてアンタそんな事知ってんのよ」
「何でって……昔、近所の石屋さんが教えてくれたんだよ。石の採掘とかにも一緒に連れて行ってもらったからな」
「ふ～ん……」
その言葉を聞いて、ようやく皆の心に納得の色が浸透していく。まさか自ら進んで勉強したわけではないだろうとは思っていたが……。
確かに、重要な石造りの建築物を建てる際には、石屋が必要になる。石の特性を理解していなければやっていけないだろう。

まあそれにしても、こんな特殊な知識をよく覚えていたものだ。少なくともそこだけは、大したものだと感心した一行なのだった。尚も、イセルの回想物語は続く。

「昔は石屋となるか戦士となるか迷ったモンだぜ……」
「石屋になっておけば世の中は平和だったものを……」
「……何か言ったか？」

ともかく、意外な才能を発揮したイセルにより、探索はもうしばらく続けられることとなった。しかし、それは次第にこの三日月の丘から場所を移動する事になり、彼が予測した石灰石の層に沿って北東へと場所をずらしていく。
石や地層の事などさっぱり分からない他の面々は、黙って彼に着いていった。

「やはりこの斜面の形からすると、この辺りにあるはずだが……」
「あ、なんかあったよ！」

ブツブツと呟きながら何かを考えているイセルが辺りを見回していると、シャルルが楽しそうに大きい声を上げた。

＊

「これが、前に子供が落ちて大怪我をした穴です……」
「……まさかそれが当たりだったとはな」

シャルルが見つけたものは、地下に真っ黒な口を開いた、洞窟の入り口だった。
レイスターを始め、村の面々はこれの事を知っていたらしい。
しかし今や安全面を考慮して、幾つか開いている穴の半分以上には、

木を組んで作られた橋が架かっていた。
そしてその一部の穴の周囲には、先ほどまで彼らが追跡していた、あの特徴的な足跡が残っていたのだった。

「……行ってみるか」

イセルの言葉に、一部を除いた面子がゆっくりと頷いた。
シャルルが呼び出した光の精霊に下を照らさせてみたが、割と奥深くまで続いているらしい。地上からだと、肉眼で下を見ることはできなかった。
仕方なく、近くの木を見つけてロープを張り、順番に下へと降りてみる事になる。
イセルがロープ降下の準備をしていると、心配そうな表情でベルが呟いた。

「ロープ切られちゃったりしないかなぁ？」
「誰に……？」
「き、キマイラとか……？」

自分でも納得しきっていない表情で、斜め十度ほどに首を傾げながら答えるベル。
まず村の者だったら、突然こんなロープを見つけたからといって切ってしまうことは無いだろう。むしろ、心配して声をかけてくれるかもしれない。そう考えると、他にこの辺りを通る可能性があるのは動物かキマイラぐらいだ。
ベルのその答えに対して、一行の頭の上に回想シーンならぬ想像シーンがポワポワポワンと浮かんできた。

ピンと張ってあるロープ。
そこへ通り掛かるキマイラ。

キマイラはロープを見咎める。

「――ガウ？（ザクッ）」

「……」

なんか違和感があった。

キマイラってそんなことするんだっけ……？

おそらく、そこにいた全員がその違和感を共有していた。――言いだしっぺのベルも含めて。

もしも空気に色が付いていたのなら、その場が真っ白になった様子が目に映っただろう。

ひゅるり～と季節外れの寒風が過ぎていく中、ベルを囲んで沈黙だけがその場に佇んでいた。

「ベル……」

「ま、まあキマイラは人の言葉分かるからな。無いとは言えんが……」

「ほらぁ！ほーらそうじゃない！やっぱり！」

真っ白く塗りつぶされた空気に耐え切れず、珍しくすかさずフォローを入れたスプの言葉に、水を得た魚人（マーマン）のように勝ち誇るベル。

幸いにも、それ以上この話題について突っ込もうと言う命知らずの勇者は、この場にはいなかった……。

第２４話　戦士と石屋（後書き）

推奨ＢＧＭ：ｚａｂａｄａｋ

第２５話　川と動く死体

「こういう場所は苦手なんですが……」
「俺も、なんかさっきの穴といい、嫌な感じがあるな……」

前衛二人が揃ってこんな事を言い出すと、後衛としては非常に不安になってくるとおっさんは思った。
閉所恐怖症だと言うグラムルはともかく、イセルは一体どうしたのだろうか？珍しく弱気だ。
こりゃあいざとなったら、自分が前線という選択肢も……あるんじゃないか？
久々にわくわくが止まらないおっさんなのだった。

穴の下に降りてみると、イセルの推測どおり大きな横穴が奥へと延びており、人が数人並んで歩けそうな道となっていた。
上に待たせていた猟師レイスターは、しばらく待っても戻ってこなければ一旦村に戻り、夕暮れ前になったらもう一度様子を見に来てほしいと伝えてある。
万が一、キマイラが現れた場合の安全確保と、ロープに何かがあって切れていた場合の保険だ。
一人であの場に残しておくのは危険すぎると言う判断だった。

真っ暗な洞窟の中を、シャルルの光の精霊とスプの魔法の光で照らしながら進んでいく。
それほど長い道のりでは無かったが、しばらく進むと水の音が聞こえてきた。
一行がその音を目指して歩みを進めると、今までよりもさらに大きい通路へと合流していた。

……そしてその真ん中には、水位は低いながらも川が流れていた。

地下であり、水も流れているためヒンヤリと肌寒い洞窟を歩いていく一行。

もはや歩けるほどの道幅は無くなったため、割と幅広い川の中をざぶざぶと進んでいった。

こういう場合の直感として……と、根拠無く上流へ向かう。水位はくるぶしの辺りだ。

ふと気になったイセルがスプに頼んで壁の辺りを照らしてもらうと、そこには何本もの筋が横に入っているのが分かった。

そのうちの幾つかは、彼らの頭の上よりも高い位置に走っていた。

一同は少し立ち止まって、この事から導き出される、ある悲しい現実について想像を巡らせてみなければならなかった。

「石灰石って、水で削れるって言ってたよな……？」

「嫌な予感が……」

「今日晴れてたよな？」

その後、全員の足取りがやや早足になったのは言うまでも無い。

やがて、道だか川底だか分からない通路は、地下に広がる巨大な空間へと繋がっていた。

そこは、例えれば巨大な神殿の儀礼の間に匹敵するほどの広さがあり、天井……というか地面と言うか地表からは、細い滝が中心部分へと流れ込んで、三日月のような形へと姿を変えて水を貯えていた。

同時にそこから差し込む太陽光が水に反射し、地下の空洞のあちこちに漂う光となって一行の目を魅了する。

「お〜、広ーい」

「綺麗……」
「ホント……ん？アレ何だ？」

全員が同時に気付いたのは、この広い空洞の反対側の先でちょこちょこと動き回っている、小さめの人影だった。
こんな所に住んでいる人間などいるはずも無く、おそらくまともな存在ではないだろうということは見当が付いていながらも、シャルルが光の精霊を飛ばして、その人影を確認してみる。

シャルルの悪戯心を反映しているのか、ゆらゆらと楽しそうに揺れる神秘的な光に映ったのは、よく見ると人ではなく犬の頭部を持った二足歩行の生き物だった。
さらに、所々におかしい部分があると思ってみてみると、どうやら体のあちこちが欠けていたり、腐り落ちているものもいるらしい。

「……コボルド？でも……」
「どう見ても死んでるな……」
「またアンデッドかよ……」
「いい加減、死んだら生きて帰れないのに気付けってんだよな」
「……あいつら、何やってんだ？」
「何か川に積み上げてますね……。堤防、でしょうか？」

確かに彼らの行動を観察してみると、川の一部に石をどこからか運んできて、積み上げているらしい。
そしてその結果、川の流れは本来の方向とはずれて、支流へと流れ込むような作りになっているようだった。
しかし、どうやらこうして話しているこちらには気付いていないのか、襲ってくる様子も無ければ、顔をこちらに向けることも無い。
ただ一心不乱に……いや、一身腐乱だろうか……？石を積み上げている。

「どういうことだ？」
「……さあ？おそらく……」
バササッ！
尋ねられたスプが何かを言おうとした瞬間、奥の物陰から飛び出してきた生き物の羽音と鳴き声に、その声はかき消された。

第２５話　川と動く死体（後書き）

推奨ＢＧＭ：ｚａｂａｄａｋ

第２６話　山羊と獅子

『……出たな。下等な魔獣め』
『下等な人間が何を言うか』

スプは返答のために用意していた台詞を、すぐさま挑発的な台詞へと変更して、飛び込んできた異形の大型動物へとぶつける。
その言葉をぶつけられたできそこないの数学の答えのような動物は、異形の口を大きく開いて悪意を投げ返してきた。

その異形っぷりは、事前に話を聞いていた彼らをも少なからず驚かせた。
さすがに、ヤギとライオンを足して二で割って、それにワシの羽根を加えて二乗し、ヘビの頭をマイナスした後に質量保存の法則に当てはめるというような姿はこれまでに見たことが無かったからだ。

『生意気な口を叩きやがって、このクソ野郎が』
『――人間如きに言われたくはない』

ちなみに、これらの台詞は全て他の人間には理解不能（チンプンカンプン）だ。
……何故なら、彼らは魔法を使う時に使用する、≪古代語≫で会話していたからである。キマイラという魔獣は、この古代語を介してのみ、人間と会話をすることができる。
パーティーの中で古代語を操る事ができるのはスプだけだった。
……ただし他のメンバーにも、彼が何やら下品な事を言っているということだけはニュアンスで伝わっていたが。

一方、会話ができるとはいっても、必ずしもそれは交渉ができると言う事にはならない。

何故なら、キマイラから彼らに対してビシビシと発せられているのは、紛れも無い殺意だったからだ。
キマイラの双頭のうち、獅子の頭を持った方が一声咆哮を上げると、その向こうでせっせと堤防を作っていたコボルドのゾンビたちがくるりと向きを変え、こちらへと近づいてくる。……どうやら、このキマイラに操られているのは間違いない。

「うぇ～、何か数多いな……」
「人間までいますね」
「昔の戦の跡ってわけかよ……」
「動きが遅いのだけが救いです」

キマイラは魔法を使う、というのも事前に聞いていた情報だ。それに加えて大型肉食獣の力と人間並みの知性を持つという。
その情報の通りなのか、ゾンビたちの主である合成魔獣キマイラは、その場から動こうとせず、代わりに数体のゾンビを一行へと向かわせた。

「野郎、偉そうな……」
「やっぱり、頭いいんですね……」
「ヤギさん、賢い」
「……ふん、偶蹄目だか何だか分からん奴が」

遅れじと一行も迎撃体勢を整える。ゾンビたちはどうやら合計で十体はいるようだ。
それを見たおっさんが≪聖別（ホーリーウェポン）≫の呪文をイセルにかける。不死生物に対して、絶大な攻撃力を誇る魔力武器に変える魔法だ。
イセルの持つティルヴィンと波短剣（クリス）が、ほんのりと青白く光り、心なしか神々しさを帯びて輝く。
続いてスプも、キマイラの魔法対策に≪魔力抵抗（カウンターマジック）≫の呪文を味方に

かける。その後におっさんの≪神の加護（ブレス）≫、スプの≪魔法の楯（シールド）≫の呪文がかかり、援護は出揃った。

その間にも、前線のイセル・グラムルはゾンビたちへ向かって突撃する。幸い……というのかどうか、つい先日の事件でゾンビ相手の戦いは慣れていた。

特に、≪聖別≫の魔法をかけてもらったイセルの対アンデッドパワーはかなりのものだった。

多くても三回、その攻撃が命中すればそれだけで一体を葬る事ができる。……彼自身の信仰心とは縁遠いにもかかわらず、恐るべし神の力だった。

さらに、ゾンビたちの動きは遅いせいか、十人いたとしても後衛に向かうまでの時間は十分に稼げそうだった。呪文をかけた後は自らに≪聖別≫をかけたおっさんも前線に加わり、前線の対ゾンビ戦は概ね順調だった。

一方で、≪聖別≫をかけられなかったグラムルは、キマイラと対峙していた。

……初めての魔獣相手に、ちょっと緊張する。

（こういうのって、イセルの担当じゃないの……？）

そんな弱気な考えが頭を過ぎり、慌ててプルプルと頭を横に振る。すーはーと慎重に息を整えて、しっかりと両手で大剣を構えた。

四、五歩先にいる魔物は、その獅子の顔を大きく歪ませ、威嚇をするためにグルルルル……と唸りを上げている。

しかし先に動いたのは、もう一方の頭である山羊の口の方だった。

『≪魔傷（トラウマイスタ）≫よ開け……！』

シュバッ！

彼女には理解できなかったその言葉と同時に、体のあちこちから血が吹き出る。

一瞬の激痛に、グラムルは苦痛の声を漏らし、顔を歪めた。

……どうやら、古傷が開いたらしい。しかし、それ以上の深手になる事は無さそうだったため、そのまま放置しておく。

お返しとばかりに切り込んでいくグラムル。

「――やぁぁっ！！」

十分な気合のこもった一撃は、残念ながら後ろに跳んでかわしたキマイラには届く事は無かった。傷のせいで、一瞬動きが鈍ったようだ。

すぐに剣を振る方向を翻してもう一撃加えようとした所に、今度は獅子の顔が急接近してくる。

その姿を目の端で捉えたグラムルは、振りかけていた大剣を振り子のように動かして、前のめりだった体を引き戻す。……そのおかげで大剣の側面が獅子の顔に当たり、危うくその牙が彼女に付き立てられる寸前で悲劇は回避された。

「そっちは頼んだぞ！グラムル！」

「いつもの奴だけはやめといておくれよ？」

地道に一体ずつゾンビを倒して回っているイセルとおっさん。今はようやく四体まで倒した所だった。前回のゾンビ戦と比べても、格段に葬り効率が良くなっている。――この魔法覚えといて良かった――とおっさんは胸を撫で下ろす。

今の所はまだ久々に前線で戦えている。しかも、≪聖別≫のおかげでかなりの強戦士になったような錯覚がする。

「ふふ……ふ、ふふふふ……っ！」

不謹慎ながら、しばし至福の時を迎えているおっさんなのだった。

第２６話　山羊と獅子（後書き）

推奨ＢＧＭ：ｚａｂａｄａｋ

第27話　女騎士と合成魔獣

グラムルは間合いを計りかねていた。
周囲を守るゾンビたちは順調に倒されているものの、肝心のキマイラに関してはまだ無傷だ。

彼女も野生の猪や狼ぐらいなら戦った事はあるが、これほどの大きさの獣、さらには鋭い爪を持った生き物との戦いは初めてだった。
しかもただの獣ではなく、気を抜けば牙と爪以外にも、山羊の角や終いには魔法まで飛んでくるのだ。
……残念ながら今の所は、他の前衛の援護も無い。
頼りになるのは後ろから飛んでくる飛び道具の援護だけだったが、未だ有効な決定打は打てずにいた。

ヒュンッ……ガキッ！

彼女の脇をかすめて、短弓の矢がキマイラへ伸びていく。が、それは難なく魔物にかわされて、後ろの岩肌に当たる金属音だけが響いた。ベルが小さく舌打ちをするような音が後ろから聞こえた気がした。

先ほど一度、シャルルが光の精霊を呼び出してキマイラへけしかけたが、精霊が傷を負わせるよりも早く、僅か一撃でキマイラに消し飛ばされてしまった事から、今は彼女は様子を見ている。
おそらくこちらの行動に合わせた援護をしてくれるつもりなのだろうが、グラムルは未だ有効な手を切り出せずにいた。

……シュバッ！

またしても、彼女の体から鮮血が吹き出す。先ほどと同じ呪文をかけられたようだ。
単発の威力は大きくは無いが、積み重なるダメージと出血の不安を考えると遠距離戦は得策ではない。彼女には剣以外の攻撃手段は無いのだ。
もはや、開き直って打ち合うしかないようだった。

「――はぁあっ！」

踏み込み様に横殴りに払った一撃を、キマイラは後ろに下がりながら羽ばたき、空中にて回避する。
……この魔物には空を飛ぶという手段もあるのだ。
そんな敵との戦いの経験の無いグラムルにとっては、さらにやりにくいことこの上ない相手だった。

しかし、空中では狙い撃ちされてしまう可能性があるからか、滞空するような事は考えていないようだ。
剣が届く範囲でならばまだ勝機はある。グラムルはさらに数歩踏み込んでいった。

ガギッ！

（――やった！手応えあり！）

と思ったのは一瞬だけだった。
やたらと固い反応に驚いていると、どうやら彼女の一撃は命中したというよりは「受け止められて」いるようだった。
剣の先では、そびえ立った山羊の角が彼女の敵意を阻んでいた。

「……！」

一瞬の間が命取りになった。
回避されたのではなく、受け止められたということは、まだキマイラは彼女の間合いの範囲内にいる。
剣を反すよりも早く、魔獣は距離を詰めてきた。

獅子の牙が彼女の太腿に噛み付こうとするのを、何とか避けようとした。だが、その意識は黒いざわめきによって乱される。
瞬間、バランスが崩れて避けるのが遅れた。

『≪惑い(グレムリン)≫よ……！』

山羊の口から発せられた言葉が、彼女の集中をかき乱す。
逃げ遅れた彼女の太腿に、意識を引き裂くほどの激痛が走った。

「ぐぅ……っ！」

何とかその声を上げるのはギリギリで押し留めた。歯を食いしばって、体を走る痛みの雷をやり過ごす。
右足をくわえ込んだ獅子の顔に睨みを利かせながら、グラムルは大剣を振りかぶった。

（せめて一撃……っ！）

残念ながら彼女のその望みが叶う前に、再度グラムルを衝撃が襲った。足を固定されて逃げ場の無い彼女に、横から爪の一撃が襲ってくる。
ギリギリでその間に剣を滑り込ませて直撃は避けたが、その強大な力に踏み止まれるほどの膂力(りょりょく)は彼女は持っていなかった。
……為す術も無く、地面に叩きつけられる。

「……っは！」

衝撃でどこか口を切ったのか、小さな血の固まりが吐き出される。

（……まずい、肋骨をやられたかもしれない……）

激痛に顔を歪ませながら、どこか頭の片隅でそんな事を考えた。
だがそれも一瞬の事。
そんな痛みは、やせ我慢という麻薬で麻痺させ、体を横に回転させて間合いを取ろうとする。
……しかしそれすら既に遅かったのか、彼女の目の端に、上から圧し掛かろうとする凶悪な魔獣の姿が映った。

（間に合わないか……っ！？）

「グォッ……！」

回避を諦めかけたグラムルの耳に、魔獣が怯む声が聞こえる。
転がって身を起こした彼女の目には、前足の肩口に矢が刺さって紅を散らす魔獣の姿が映った。

彼女はその隙を逃さなかった。
膝立ちのまま、痛みを堪えて大剣を振るう。
十分な遠心力を身にまとった刃は、魔獣の体へと突進し、その体躯を弾き飛ばした。

（今度こそ、手応え……あり）

グラムルが立ち上がって確認をすると、確かに魔獣の体には大きく

切り傷が残っていた。……確実にダメージを与えているのは間違いない。

……だが、彼女の方はそれ以上に酷い状況だった。

右足は重く、徐々に麻痺してきている。既に、きちんと立っているかどうかも自分では良く分からない。

構えようとした大剣も、いつもの位置まで引き上げるのに、キチキチと体の中心が痛んだ。

はぁはぁと、呼吸をするのもままならない。

息を吸って吐くだけで、全身に「痛み」という負の栄養素が駆け巡っていた。

さっき叩き付けられた時にぶつけたのか、額からぬるっとした感触が伝わってくる。

……それが血であると気づいたのは、左目の視界が覆われてからだった。

（ま……ずいですね……）

朦朧とした頭でぼんやりと考える。遠くでは、ベルが彼女の名を呼ぶ声が聞こえたような気がした。

だが、それも徐々に遠くなっていく。

この感覚は戦闘の度によく経験するものと知っていたが、今回は若干分が悪いような気がした。……あの魔獣の力は強すぎる。

今の状態で同じ攻撃を食らったら、まともにかわせる自信が無い。

（……そうなったら、この状態ではおそらく……）

一人絶望的な状況に考えを巡らすグラムルに気付いたのか、少し離れてこちらを見ている山羊と獅子の顔を持つ魔獣が笑った……気が

した。
ここまでか……とそんな予感が脳裏に過ぎった時。

「待たせたなグラムル。……よくやった」
「嬢ちゃん、気をしっかり持つんだ」

その瞬間、すぐ後ろから頼もしい声が聞こえてくる。
薄れゆく意識の中でグラムルが辺りを見ると、魔獣が引き連れていたゾンビを全て倒したイセルとおっさんが彼女のすぐ後ろに立っていた。

第２８話　戦士と合成魔獣

崩れ落ちるように膝を着くグラムルに、おっさんがすかさず駆け寄る。
その手元に灯る魔法の光を見届けると、入れ替わりにイセルは魔獣の前へと進み出た。
まだ魔法の光の残る魔剣を手に、ポンポンと気軽に肩を叩きながら緊張感の無い足取りで間合いを詰めていく。

思ったより早くゾンビ部隊が片付いたのは、ほぼおっさんの力によるものだった。
もちろん、イセルの手腕もあるだろうが、それ以上に対不死生物用（アンデッド）の魔法があったのが強い。
特に、≪死者返し（ターンアンデッド）≫は、一気に三体ものゾンビを倒すことに成功していた。
というわけで、グラムルが意識を失うより早く、対魔獣の戦線へと駆けつけることができたのだ。

……どうやらグラムルは間一髪、意識は失わずに済んでいるらしい。
イセルに向けて（気をつけて……）という視線を送ってきているのが、目の端にちらりと見えた。

「手応え無い相手ばっかりだったからな～、これでようやく本気が出せるぜ」
『――腐肉に比べたら、魔獣の方が全くもってマシだな』
「おお、悪いなぁいつも。最近こんなのばっかり（アンデッド）だってのは、どうにも神の悪意を感じるぜ」
『――確かに。俺に対する嫌がらせだな』

全くいつもと変わらず軽口を叩くイセルが、キマイラまできっかり五歩と迫った所で足を止め、両手の剣を構える。
その瞳には、揺らめく炎が宿っているような気がした。

「おいワン公。よくもうちの最後の良心（グラムル）を可愛がってくれたな。俺たちが悪党になったらどう責任取ってくれる」
『――もうとっくに悪党のような気もするが……。どちらかと言えば、ニャン公じゃないか？』
「どっちだっていいぜそんなの。とにかく、お礼はたっぷりしてやんないとな」
『――それには、大賛成だ！』
「――行くぜっ！」

沈み込みながら駆けていくイセルが、瞬きほどの時間にキマイラへと距離を詰める。
動きや武器などから先ほどの相手とは間合いが変わる事を察知し、魔獣は距離を取るために後ろへと羽ばたいた。

だが、それすらも予測していたのか、瞳の中に紅の炎を宿した戦士は近すぎるほどにキマイラへと接近し、両手を振るう。
瞬間的にキマイラは身を捻ってかわそうとしたが、間に合わない事を悟って爪を盾に受け止める。が、叩き切るタイプの大剣（バスタードソード）と違って、切り裂くタイプの曲刀剣（ティルヴィン）の刃の鋭さに、鮮血が飛んだ。

着地点を正確に予測していたかのようにイセルは魔獣へと肉薄し、全く間を置かずに追撃を開始する。最初から距離を空ける気は無いようだった。
そして、それと同時に魔獣の山羊の形状の後ろ足の付け根部分に、再度短弓の矢が吸い込まれる。
瞬間的にバランスを崩した魔獣へ、ここぞとばかりに攻撃を叩き付

けるイセルだった。

『おのれ、人間め――っ！！！』

山羊の口が何か発したと同時に、獅子の口が吼える。

「グオオォォッ！！！」

『来たれ、≪害虫召喚（バグズライフ）≫！』

殺気を感知して、咄嗟に顔を庇ったイセルの全身に無数の痛みが走る。

腕の隙間から辛うじて覗いた様子から察するに、魔法によって召喚された小さい羽虫の群れが彼の全身に牙を立てているようだった。

それに気付いたと同時に、イセルは横に転がって群がる虫たちを払い落とそうと暴れる。

しかし、さすが魔法で召喚された生物らしく、それぐらいでは離れるような事は無かった。その代わり、すぐにどこかへと消えていなくなってしまう。……魔法の効果は一瞬だけだったらしい。

だがそれでも、凶悪な顎によって瞬く間に全身を赤く染める事となったイセルの正面に、ギリギリ彼の攻撃が届かない位置で滞空するキマイラの姿があった。

獣の表情というのは良く分からなかったが、大体憎々しげな表情をしていることぐらいは分かる。

イセルが全力で攻撃した刃が何度か命中したにもかかわらず、どうやらキマイラはまだまだ元気なようだった。

（……ちっ、超過依頼（オーバーランク）だったか……？）

イセルの脳裏に、そんな言葉が過ぎる。

冒険者が依頼を受ける際には、事前に情報を調査して自分たちの実力に見合った物かどうかを確かめるという段階が必須だ。
そうでなければ、強力な魔物と対峙することになって簡単に全滅の危険性があるし、自分たちのパーティーがあまり得意でない種類の依頼を受けてしまう可能性もある。

以前であれば、店の主人や周囲の冒険者、それに町の人々から仕入れる情報によって取捨選択している彼らなのだが、今回は名指しで指名された事もあり、そういった事前判断は甘かったと言わざるを得ない。
……事実、このランクの攻撃をあと二度も受ければ、たとえイセルと言えども戦闘続行は不可能な傷を負う予感がしていた。そしてそれは、彼以外のメンバーには耐えられるものがいないということも示していた。

その事に気付いているのかどうか、魔獣はイセルを真っ直ぐに見据えている。
グラムルを戦闘不能（リタイヤ）に追い込んだ今、まるで後は彼を倒せばもうお終いだと考えてでもいるかのように。

「イセル……あまり無理はするな」

背後からおっさんの声がかかる。
この言葉のニュアンスは、予め打ち合わせておいた通り、『残りの魔力が少ないため、今後の回復は限られている』ということだ。
言い回しが若干違っている事から、もしかしたら敵のダメージに回復量が追いつかない……ということかもしれない。もしくは、その両方という最悪の状況ということも考えられた。

イセルの額に嫌な温度の汗が伝う。

（……上等だぜ）

心の片隅に巣食う戦慄を、無理やり強がりで閉じ込めてイセルはにやりと笑う。

こんなにゾクゾクするシチュエーションは無いよなぁ……などと考えている自分を自覚している辺り、彼はどこかで戦闘依存者（バトルホリック）なのかもしれない。

それはともかく、相手がやる気になっている以上、こちらが引く事はできない。

ちらりと後ろでぐったりと寝かされているグラムルを視界に入れ、彼は両手に持つ銀色の塊を再び構える。

おっさんも戦斧を構え、いつでも飛び出せる状態だ。

シュンッ

後ろから飛んできた短弓の矢をキマイラがするりとかわし、それを合図として再度接近戦に持ち込もうと急降下してきた時、再び戦火は花開いた。

第29話　ニャン公と悪党

獅子の顔が大きく口を開いて突進してくる。
その勢いを見て、避けるか受け止めるか考えているうちに、イセルの目の前に割り込んできた影があった。

ガィンッ！

突進してきた魔獣の巨体を受け止めたのは、ドワーフ神官の持つ戦斧だった。
それがおっさんだと認識すると同時に、イセルは横に飛び出し、ティルヴィンを振るう。
しかしその攻撃は予測されていたらしく、山羊の角にて受け止められた。

一瞬の硬直が広がる。

山羊の口が開き、彼らには聞き取れない言葉を紡いだ瞬間、イセルは警告を発した。

「おっさん！あの≪虫≫だ！気をつけろ！」

先ほどの威力を思い出し、思わず身を竦ませるイセルとおっさん。
二発目か……やばいな。そう覚悟したイセルだったが、予想していた痛みは襲ってこなかった。

「≪静寂（サィレンス）≫」

静かな声が響いたのは、そのすぐ後だった。ちらりとその声の主に目を走らせると、こちらに手の平を向けているシャルルの姿が目に入った。
風の精霊（シルフ）による口封じ。
その精霊の力を借りた魔法によって、魔獣はその力を持った呪文を発する事ができなかったのだ。
……それが魔法が発動しなかった原因だった。

「ナイス！」

確かにその時イセルの目には、驚愕して何かを喋ろうとしたヤギが、その言葉すらも口に出せずに焦った様子が見て取れた。
この魔法が持続する時間はもうしばらくある。
その間に勝負をつけようと、イセルは手に力を込めた。
同時におっさんも斧を振りかぶる。

魔獣は叩き付けられる斧を身を捻ってかわし、二刀流の内、ダメージが大きそうなティルヴィンの攻撃を尻尾で払って逸らした。
魔法が無くとも、まだまだやれるとばかりに威嚇する体勢で身構えながら、獅子が吼える……が、やっぱり声は出ない。

パクパクと無音で何かを叫んでいるキマイラを見て拍子抜けした一行の目の前で、魔獣はあっさりすっぽりと網に収まった。

「……あ、やっとかかった」

緊張感の無い声で呟いたのはスプだった。≪魔法網（スパイダーウェブ）≫の魔法だ。
魔力によって作った蜘蛛の糸により、敵を絡め取る。絡め取られた

相手は、思うように身動きを取る事ができなくなるのだった。

『――人間がっ！おのれぇっ！！！』

とでも言いたそうだったキマイラだが、やっぱり声は出なかった。
ついでに暴れるほどに糸が絡みつき、何だかわけの分からない体勢になりつつある。
さすがに焦った魔獣の目の端に、とてもすごく嫌な影が幾つか近付いて来ているのが見えた。

「「「うふふふふふ……」」」

「どうしたニャン公？もっと遊んでほしいのか？」
「そんな可愛い姿で誘惑しおって……」
「こんなにじゃれちゃって、ホント可愛いですね～……」
「ちょっと！私も混ぜなさいよ……！」

もし傍からこの様子を見ている者があれば、きっとこの哀れな魔獣に同情したに違いない。
悪魔のような複数の目に囲まれた、涙目の魔獣の姿がそこにはあった……。

＊

「やったーっ！俺が仕留めたーっ！！！」

そう大声を挙げたのは、何故かスプだった。その手には燃える杖が掲げられている。≪炎上武器（ファイアウェポン）≫の魔法だ。
……どうやらこれまでの数々の経験から、まずは相手を動けなくしてから戦う、という方法を学んだらしい。見事なまでに卑怯で強力

な手段だった。
そしてその作戦は見事大当たりし、ついに念願の止めを刺す事ができたのだ。まるで喧嘩に勝った子供のように無邪気に喜ぶスプ。
まあ今回は確かに手柄だったと、それに突っ込む者は誰もいなかった。

「ふぅ……、何とかこれで依頼は完了ってことか」
「そうみたいですね」

大喜びで山羊の角を切り取っているスプを放っておきながら、安心した一行は、周辺を探索してみる。
既に他のゾンビたちはいなくなっていた。
水の滴り落ちる音以外、何も聞こえない地底の池のほとりで、一同は少し休憩をすることにした。

辺りを調べてみた所、どうやら他にはこれといって何も無いようだった。
少し高い位置に、キマイラが住んでいたらしい巣のようなものがあったが、それ以外は何も見当たらない。……時に魔獣の類は、その巣に稀少な品物を溜め込んでいる事もあるが、どうやらこいつはそのタイプでは無かったらしい。
一同は非常にがっくりと肩を落としながら、元来た道を引き返し始めた。

まあ、元々そんな物を期待していたわけではない。きちんとした報酬だってあるのだ。
そんなに毎回毎回魔法の品物が手に入るようだったら、誰もがみんな冒険者をやっている事だろう。
そう自分たちに言い聞かせて帰りの道を歩んでいると……？

「ん……？水位が上がってきてない？」
「やべぇ……っ、何でだ！？」
「ダメだ、もう戻ってる余裕は無い！」
来た時は踝（くるぶし）だった川の水が、いつの間にか脹脛（ふくらはぎ）の位置まで来ていたのだった。

第３０話　脱出と危機

ついさっきまで脹脛（ふくらはぎ）だった水位は、あっという間に膝下へと迫っている。

キマイラを倒したことで、どこか他の場所で作業中だったゾンビたちが、土へと還ってしまったのかも知れない。……そのせいでどこかで堰き止められていた地下水の流れがまた元通りに戻ったのか？

……確かに、さっきの巣は、ちょうど水位が下がった位置を基準にして作られていた。だとしたら、故意的に水位を下げていたのも奴の仕業かもしれない。ならば……、ならば何だ？

「おいスプ！ボーっとしてんじゃねえよ！」

一行の殿を歩くイセルの声に、ハッと我に返るスプ。

そうだ、確かにこんな事を考えてたって仕方ない。今はとにかくここから脱出しないと。

戻って堤防を積み直すことも考えたが、水位が増して来ている以上、上流へと向かう事は自殺行為だ。

これから戻ろうとしても、水位が上がるほどに水の抵抗が増してしまう。

実際、彼だからまだ膝辺りで済んでいるが、身長の低いおっさんやシャルルは既に必死で先へと進んでいた。……彼らにはもはや、水位が腰ぐらいまで来ている。

一か八か……というよりは他に選択肢も無く、とにかく一行は急いで元の入り口へと進むしか無かったのだ。

来た時の事を正確に覚えていたわけではないが、おそらく現時点で半分ほどしか戻ってきていないはずだ。

シャルルの精霊魔法の力によって、水の勢いは多少抑えられ、歩き

やすくはなっているものの、水位の上昇は急激だった。

（これは……間に合わないか……っ！？）

全員の脳裏にその考えが浮かんだが、口にする者は一人もいなかった。

残念ながら、それは希望を持っていたからではなく、絶望したくなかったというただそれだけだ。

冒険者にとっては、襲ってくる怪物だけが敵なのではなく、その道中に含まれる全ての脅威が彼らにとって敵となり得るのだ。……特に自然の脅威という恐ろしい敵は、時に古代竜（エンシェントドラゴン）以上に恐ろしい相手だった。

先頭を進んでいたベルは、このままでは全滅の危険性が高いと確信していた。……そして、それを回避する手段について幾つか考えを巡らせる。

一つ。

このまま歩くのではなく、むしろ流れに乗って泳いでいく。……だがこれは、かなり危険の高い方法だった。

この先がどこに繋がっているのか分からないだけでなく、地下を流れている以上、そのまま地下に潜っていってしまうことすらある。

確か、この付近にはそれほど大きな川は流れていないはずだった。

……とすると、息の続く間にどこかの川に流れ出るという可能性は低いだろう……却下。

二つ。

シャルルに水の中で呼吸できる魔法をかけてもらい、戻って堤防を作るか、他の出口を探す……却下。

例え呼吸ができたとしても、水流を受けないわけではない。魔法の効果が切れるまでに元の位置まで戻れるかは分からなかった。

いや、正直言って無理だろう。

となると最後の三つ目。

来る時の途中にあった幾つかの支流に入って、別の出口を探す……という方法。これしか無さそうだった。

その先が行き止まりであるという可能性もある以上、危険性が高いのは否定できないが、逆に助かる可能性が最も高いのもこの選択肢だろう。

実際、この穴に入る前にも、周囲の幾つかの場所で同じように空いている穴が数多く見受けられた。

その内のどれかに繋がっているという可能性も十分にある。

……最悪、私一人で偵察に行けば、もしもの場合でもみんなは……。

そんな、柄にも無く殊勝な事を考えた時だった。

「……だ……っ」

彼女の耳の片隅に、誰かの声が聞こえた気がした。

「ちょっと静かにっ！！！」

歩みを急停止して、全員の動きを牽制する。

ビクッと驚いた他のメンバーは、ベルの言うとおり、石化魔法でもかけられたようにその場に固まった。

「ど、どうしたのベル……？」

心配そうに話しかけたグラムルを片手で遮り、聞き耳を立てるベル。

それに気付いたスプが、音を遮る魔法の力場を作り、聞こえてくる水流の音を弱めた。

徐々に激しくなってきていた水音が多少収まり、神経を集中したその合間に、微かにベルの耳にその声が響くのが聞こえた。

「こっちだ！」

「――誰っ！？」

叫び返すも、返事は無い。

ただ確かに、その声は横へと伸びている支流の先から聞こえてきた。

そしてその声は、他のみんなにも聞こえていたようだった。

ベルを始め、声が聞こえた他の全員がおっさんの顔に注目する。

全員の問題認識と、その眼差しが訴えかける意思は、全員一致で共通していた。

無言で問いかけてくる複数の瞳に対し、もはや腹までが水に漬かりつつあるドワーフの神官戦士は真剣な表情で答えた。

「……よし、行こう」

一行は、暗い闇が広がっている支流の先へと足を踏み出した。

第３１話　帰路と宴会

「……誰だ、さっきのは……。村の人か……？」
「まあでも、おかげで助かったぜ……」

結局、登ってから辺りを見回してみても、そこには誰の姿も見られなかった。
彼らが向かった支流の先にあったのは、上から差し込んでくる日の光と共に、天から伸びる蜘蛛の糸のように垂れ下がっている一本のロープだった。
迷っている暇は無いと全員が登った後に後ろから聞こえてきたのは、凄まじいほどの勢いで流れる水の音だった。
……おそらく、コボルドたちが積み上げていた堤防が決壊でもしたのだろうか。これでまた、遺跡の地下に眠る洞窟は、再び永き冬眠に入った事だろう。

「それにしてもイセル……良かったんですか？」
「何がだ？……ああ、まあしょうがないだろう。死ぬよりゃマシさ」

グラムルがそう言ったのは、イセルの格好を見たからだった。
先ほどまでの地獄の行軍で、みんな全身びしょ濡れだったのは同じだったのだが、唯一イセルに関しては格好が変わっていた。
いや、変わっていたというよりも、『無くなって』いた。
彼だけは、それまでいつも愛用していた板金鎧を着ていなかったのだ。

……実は、鎧を着たままロープを登ると、その重さにより縄が切れてしまいそうだったことから、彼だけは鎧を脱ぎ捨ててロープを登

ったのだ。
時間に余裕があれば、鎧も持ち上げようかと考えていたのだが、残念ながらその余裕は存在しなかった。
仕方なく、彼はこうして旅用の動きやすい服と鎧下のみでくつろいでいるのだった。

「ふぅ～っ……。久々に体が軽いぜ」

結構な値段もする物だったはずだが、いつものように軽口を叩くイセル。
確かに、命に代わる買い物などありはしない。……グラムルもそれは肝に銘じていたので、それ以上は何も言わずに同じくくつろいで横になった。
まだあちこちが痛むが、こんなのはいつもの事だ。
今はまだ、今回も自分と仲間の命が無事だったことの喜びに浸っていたい。そう考えて軽く目を閉じた。

夕暮れに差し掛かり、のどかな声で鳴く黒い鳥の鳴き声を聞きながら、眩しい日の光に目を細めて一同はホッと一息を吐く。
そんな彼らの目に映ったのは、辺りを警戒しながら、遠くからやってくる一人の男だった。

「おい……あれ」
「……ん？レイスターさんだな」
「「お～い！」」

大きく叫ぶと、村の猟師はこっちに気がついたようで、慌てて走ってくる。

「お～、アンタがた。こんな方にいたのかい！……無事だったかね」

「レイスターさん……何とか、依頼は達成しましたよ、ほら」

そう言って山羊の角を見せるスプを見て、猟師の顔にパッと笑顔が広がる。

「本当かね!?そりゃあありがたい。すぐに村で何かご馳走でもさせてもらうよ」

「ああ、ありがとうございます。それより……レイスターさん、さっきここで俺たちにロープ降ろしてくれませんでした?」

「……ん?いや、私じゃあないが……何かあったのかい?」

「そうですか……。いえ、大した事じゃありませんので」

イセルには、この目の前の猟師が嘘を言っているようには見えなかった。

じゃあ一体どこの誰がここにいたんだ……?

……結局、村に戻って聞いてみても、どこの誰かは分からずじまいだった。

分からなければしょうがない。

そんなことより、目の前のご馳走を楽しむ方が彼らにとっては重要だった!

「よし!じゃあ無事に解決した事だし、今日は宴会だっ!」

「「おぉ〜っ!!!」」

威勢の良い歓声が、一行だけでなく村の人々の間からも上がる。

これまでに怪物に怯えて外を出歩けなかった人々の顔は、これから日が沈もうとしているにもかかわらず、真昼の太陽のように輝き、一行の心を照らしてくれた。

皆口々に彼らの元を訪れては感謝の言葉を紡ぎ、手を取ってお礼を

述べ、次々にお酌をして回る。
単純に生活のためにやっているとはいえ、やはりこうして誰かに感謝される仕事と言うのはいいものだ。

急な開催だったにもかかわらず、村のほとんどの人が参加した宴会では、いつものように羽目を外す彼らの姿があった。
確かに、ダイクの屋敷で振舞われるような豪勢な料理もいいが、たとえ素朴だったとしても、こうしてみんなに感謝されながらワイワイと食べる食事の方がうまい。
それは彼らにとって共通の認識であり、少なからず、彼らがこうした職業を続けている原因の一つでもあった。
例によって調子に乗ったスプが魔法を放ち、巻き込まれたイセルが仕返しにスプを追い掛け回すといういつもの行事も始まったようだ。

満足した充実感に、ついつい一行の飲酒ペースも上がってしまうと言うものだった……。

＊

そして次の日の朝。
村人たちには惜しまれながらも、無事依頼を達成して帰る一行の中で、唯一一人だけ晴れ晴れとしていない顔の人物がいた。

「ヴえぇ～……、ぎ、気持ち悪い……」
「さあ、リーダー！行きましょうか！」
「や、やめてくれ～っ、耳元で叫ばないでくｒ＊＋＃＆％……」

最後の方は、もう何を言っているのかどうか、良く分からないほどだ。
ここぞとばかりにおっさんをおもちゃにする他全員。

特に、酒に潰れたドワーフの姿が珍しいのか、横から妙に絡んでいるベル。
一部の地域では、エルフとドワーフの仲が悪いという噂もあるせいか、こうして二種族の絡みを見るのは久々だとイセルは思った。
……なのでついつい調子に乗って、ベルに加担しておっさんをいじめる事にする。

「そんなに飲むからいけないのさ」
「おっさん、だ～いじょ～ぶか～……っ！」
「うぅ～っ、や、やめろぉ～……っ」

約一人を除いて、こんなにすっきりとした帰り道は一体いつぶりだろうか？
ポルトヴァへの街道に、冒険者たち数人の賑やかな笑い声と足跡だけが残っていた。

＊

「ふむ。……相変わらずわけが分からんな。ギリギリ不合格ではない……といった所か」

呟いたのは、旅人風の格好をし、フードを深く被った男。
何かを思い出すように中空を見つめながら、クククとくぐもった声で笑っている。
ピュイーッと指笛を鳴らして馬を呼んだ後、彼は一人、遠ざかっていく一行を丘の上から興味深げに眺めていた。

第３２話　訓練の日々

「み、皆さんそろそろ旅とかに出ないんですか？」
「……え？何が？」

引きつった笑顔でカシューナが一行に対してそう話しかけたのは、前回のバドリーという村から帰ってきて二週間ほど経った頃の話だった。当然ながら、彼らはまだこの屋敷に居座っていた。

カシューナとしても、教団だとか魔法装置だとか、まだ明らかになっていない問題が数多く残っているのは承知の上なので、本当に追い出すつもりは無いのだが、少なくとも今のまま、当たり前のように居候を決め込まれてしまうのは困る。
……額に血管を浮き出させた屋敷の財政担当者から小言を受けるのは、他でもない彼自身なのだから。
せめて……せめて何とか、滞在場所を町へと移してもらえたら。

現状、色々と負い目があるために、無理やり『用心棒』という名目で彼らを滞在させているのにも限界がある。
確かに、屋敷の敷地内から誘拐されるといった事件があったり、彼自身の不手際によって敵に捕まってしまったという前科もある以上、あまり強く言う事はできなかった。
ダイク様も人が好いので、彼らが滞在するのには文句は言わないだろうが、彼らの屋敷での態度を見ていると、早々長居もさせていられない……というのがカシューナの正直な意見なのだった。

「こらっ！待たんかスプ！」

今日もまた、全く懲りない魔術師とドワーフ司祭の追いかけっこが始まっている。……まるで子供向けの童話に出てくる、猫とネズミの知恵比べのような繰り返し（パターン）の日々だ。

最近では彼らの良心（リーダー）であるあのドワーフも最早諦めているのか、彼の掃除エリアに入ってきた時にしか反応しようとしない。

ラカーサ家内部では本当に、あの魔術師だけ食事を抜きにしようかという議題が上がっているのだが、まだそれを伝える事はできていなかった……。

「ちょっと！邪魔しないで下さいスプ！」

一方で、他の面々もただ遊んでいるというわけではなかった。大方の予想通り、周囲から遊んでいるように認識されているのはスプとイセルだけである。それ以外の人々はと言えば、空いている時間はきちんと訓練をする時間に充てているのだった。

その一人であるグラムルは、今日も剣の稽古に余念がない。

カシューナもたまにそれに付き合って稽古をしているのだが、最初に会った時に比べて、明らかにその実力は上がってきているように思う。

彼のアドバイスも確かに役に立ってはいるようだが、彼女自身の元々の剣の素質もあるようだった。

それでも実際の戦闘において中々活躍できないというのは、……どちらかと言えば、精神的な部分のせいだろう。

これまでに彼女と接してきて分かっていたことだが、彼女には気弱な面が多い。残念ながら、その性格は戦いには不向きだ。

いざという時に躊躇してしまうばかりか、もしかしたら相手に傷を負わせる事にすら罪悪感を持っているのかもしれない。……面と向かってそのような事を聞いた事はないのだが、節々からそう感じられる事はあった。

「おっ、スプこっちならいいぞ。間合いに入ってきたらティルヴィンの昼飯にしてやるから」
『――だから、困った時にアイツを喰わせようとするのは止めてくれよな』

グラムルとは全く逆なのが、あのイセルという戦士だった。
まだまだ戦い方には荒っぽい部分が多く見受けられるが、その隙を気質でカバーしている。時に戦においては、その士気が非常に勝敗に関わってくるものだ。カシューナも含め、彼らが常に強気の姿勢を維持しようとしているのは、そういった側面もあった。
……気持ちで負けた瞬間、戦いも負ける。
彼ら戦士には、その事が良く分かっているのだった。

ちなみにグラムルと手合わせをしているイセルが身に付けているのは、これまでの板金鎧（プレートメイル）ではなく、鉄鎖鎧（チェインメイル）だった。鉄を鎖状に繋ぎ合わせた鎧だ。
前回の依頼で鎧を捨ててくる羽目になってしまったイセルは、仕方なく新しい鎧を買い揃えたのだ。今はその新しい型（スタイル）に早く馴染めるように稽古しているのである。

「……やっぱり、大分前より軽い感じがするな」
「そんなに変わるものですか？」

しばらく前より二刀流にしてからというもの、時折イセルは鎧の重さについて不満を口にすることもあった。
以前持っていた大波剣は、その重さと勢いを利用して攻撃するという戦法が主だったのだが、ティルヴィンを持ってからは、手数と鋭さが勝負になってきた。そうなってくると、確かに以前の板金鎧は動き回るには不向きな重さだった。

鎧が軽くなったせいか、確かに前と比べてさらに動きが鋭くなったイセルだったが、その分今度は防御力に不安が出てくることは否めない。
これまでの経験で体力も大分上がってきているとは言うものの、その辺りもこれからは気をつけて戦う必要がありそうだった。

「それにしても、体以上に軽くなったのは懐だよなぁ……」
「はぁ、それを言わないで下さい……」

二人揃ってため息を吐いたのは、彼らの財産の心配のせいだった。
言うまでもなくイセルは、新しい鎧を揃えたから。グラムルはといえば、以前の借金を返し終わり、ようやく少しは貯める事ができるようになったのだが、まだ無駄遣いができるほどではない。
剣の手入れやら、その他必要な品々を揃えたらあまり余裕は無くなってしまったのである。

（……あの魔硝石（マジックアイテム）があれば……）

今はどこかへと消えてしまったあの魔法の品を思い、空に向かって涙をこぼしそうになるグラムル。その原因となったつまみ食い魔術師が、遠くで鶏肉を頬張りながらこっちの様子を眺めているのを見て、思わず石でも投げたくなってきた。
隣の戦士も全く同じ気持ちになったのかと思ったら、こちらは既に木の枝を投げた後のモーションをしていた。

「あーぶねっ！は～ずれ～っ！」

一体何が楽しいのかは分からないが、妙にテンション高くイセルをからかって逃げていくスプを見て、イセルは剣を収める。
そして、ふぅ～っと息を吐くと、振り返ってグラムルに告げた。

「よし、俺はこれから体力づくりに切り替える」

そうきっぱりと言い切ると、とても他の人には聞かせられないような暴言を吐きながら、スプの後を追っていくイセル。

その後姿を、グラムルはため息を吐いて見送るのだった……。

第３３話　新魔法のお勉強

グラムルとイセル以外の他のメンバーも、皆それぞれに自分の能力を高めようと訓練などをしていた。

ベルは弓の命中率を高めるために、いつもの通り、林で木にぶら下げた的を相手に特訓を。

そしてそれ以外の面々は、各自で魔法を覚えるのに忙しいようだった。

毎朝、食事が終わると皆揃って出掛け、スプは魔術師ギルド、おっさんは町の神殿、シャルルは町外れの森へと出かけていった。

魔術師ギルドは、魔術師の実力に見合った魔法を教えてもらえる所だ。

それ以外にも、魔術師や賢者と呼ばれるために必要な情報が色々と揃っている所なのだが、基本的に多くの魔術師は、魔法を覚えるためにここに来る。

所定の料金を払うことで、古代語の呪文とその効果・特性などを学ぶ事ができるのだ。それが済んだら、後は各自でご自由にどうぞ……という仕組みなのである。

例え普段の動向がどうであれ、スプもそれ以外の魔術師と同様に、幾つかの新しい魔法を教えてもらう事ができた。

おっさんが通う神殿は、この町には一つしかなかった。

この世界の主要な神々は、四種類存在する。神に対して種類分けをするのは失礼な話かもしれないが、四つに分類されるのは確かだった。

まず一神目は、正義と勇気の神であり、『東の神』と呼ばれている。

裁きを示す雷を象徴とし、戦士や騎士に信奉者が多い。
この世界では司法を司っており、レオンチエフ大司教の下、重大犯罪を犯した罪人に対する裁きの場が設けられている。
罪人は、基本的には東の神の司祭によってその罪の重さを決定されるのだった。
……しかし、地方や軽犯罪に関してはある程度地域の権限に任せられる所が多く、この神の信奉者である神官戦士や司祭、後は自警団によってその場で罪が決定される事も多いようだ。

二神目は、愛と平和を司る神であり、『西の神』と呼ばれている。
包容を表す波を象徴とした聖印があり、医者や船乗り、海辺の町などに信奉する者が多い。
ゴーチエ大司教を筆頭とした行政を司っており、大きい街などでは領主の下で民の窓口となったり、公共的な作業を取り仕切っていることがよくある。

三神目がおっさんの信奉する、商売と公正の『北の神』だ。
天秤を象徴としており、商売人や農夫に信者が多い。必然的に、この大陸では最も多いのが北の神の信者だろう。
シジズモンド大司教を中心に立法を司っており、多くの国の基本となる法には、この北の神の教えを取り入れたものが多い。
領民からの税を取り扱う人々の間で信仰される事が多いのも特徴的である。

最後の四神目が『南の神』である芸術と創造の神だ。特にシンボルは決まっていない。
芸術家や楽士などに信者を多く持ち、その中でも最も地位が高く、同時に世界でも有名な芸術家でもあるのがマウリッツ大司教だった。
建築家や、職人などに信仰されることも多いのだが、逆にどうしようもない遊び人たちが多く信仰しているのもこの南の神だった。

この四つが主要な神々として存在しており、それ以外に亜流の神々が多々存在する。
その中の幾つかの神を信仰し、逆に主要な神々を異教徒として排他しているのが≪教団≫なのである。
しかし、そうではない世界の大部分の人は、各々の信仰にそこまでのこだわりはなく、自分に関係のあることは各神に感謝し、関係ないことなら特には不干渉……というのが多くの人々の生活におけるスタンダードだった。

国の首都など、大きい街ではこれらそれぞれの神殿が別個に建てられているのだが、残念ながらポルトヴァはそこまでの町ではない。
そこそこ大きな一つの神殿の中で、幾つかのエリアや部屋に分かれ、そこにそれぞれの担当司祭が就いている……といった具合だった。
そのため、新たな神の奇跡――神聖魔法を覚えたいという者がいたら、数人が合同で教わる事ができる仕組みとなっている。
珍しくおっさんも神殿に訪れ、決められた時間数以上のお祈りと、幾ばくかの『お布施』を支払う事により、新たな魔法を習得する事ができるのだった。

そして最後にシャルルだが、精霊魔法に関しては教えてくれる機関は存在しない。
場合によって、自分以上の実力を持つ者を師匠として教わる事はできるが、そういった人物が存在しない場合は独学で学ぶしかなかった。
この場合、目的とする精霊との接触（コンタクト）を多く、深くする事で新たな魔法が使えるようになる。
そのためには、精霊が働く力の強い場所に行く必要があった。

そこでシャルルは町外れの森へと向かい、木に触れ、川に入り、火

を起こして時間を過ごした。そこに現れる数々の精霊たちと対話をすることにより、より結びつきを強めていくのだ。
この作業によって、彼女も幾つかの新しい魔法を覚える事ができるようになっていた。

第３４話　冒険の記録

「そういえばさ、暇だったからこれまでの冒険日誌を読み返してたんだけどさ」
「何よ、急に」

食卓でイセルがそう切り出してきたのは、ある日の昼の事だった。
今日も今日とてラカーサ家の税金や年貢で賄われている貴重な食料を思うがままに消費し、およそ半分ほどが無くなっていた頃だった。
前回の仕事以降、心配だったグラムルの食欲も順調に回復し、いつも通りに食べられるほどまでになっていた。やはり、気分転換をするのが良いのだろうと他の面々は安堵していた。

ここ最近の各自で訓練をしている間、珍しくイセルは部屋に篭って何かを勉強している姿が目に付いていた。
気になったベルが聞いてみた所、「久々に石の事を思い出したから、折角なので勉強している」という返事が返ってきたときには、半ば本気で最終戦争（ラグナロク）が起こるのかも知れない……と胸がざわついたものだ。
だがその後の「また前回みたいな事があるかもしれないし」という言葉を聞き、まあ珍しい事もあるものだと納得したのだが、どうやらその時に机の横にそれらしい書物が置いてあった事から、ついでに読み返していたのだろう。

意外にもイセルには、時間のある時に自分たちの行動を日記風に記録するという趣味があるのだった。
ベルはその事を以前から知っており、好奇心で一度見せてもらった事があったのだが、なんとゆーか、その時の気分や勢いに任せて書

き殴ったようなもので、文法やら描写やらましてや読者の事などほとんど考えられていなさそうな自己満足的な中身だったので、彼女はそれ以上に触れることは止めておいた。
……こういうのは、本人が満足していればそれでいいのだ。

ともかく、彼が主張しているのは、その日誌を読んでいた時に気になる部分があったのだという。
なのでついでに、ここらで振り返りの会議をみんなで行う事にした。
みんなとは言っても、ダイクとカシューナは仕事の関係で珍しくこの場にはいなかったのだが。

「……でだ。何か一部で『あの女』って言葉が見つかったんだけど、みんなどう思う？」
「あの女？」

悲しいことに、彼の主張したあの女の事を覚えている人間は、彼の他には誰もいなかった。……とはいっても、彼自身も日誌を読み返してはじめて思い出した事なのだが。
仕方なく、イセルは親切丁寧に説明する。

「ほら、この『第１４話　前向きな脱獄者』の中にさ……」

隣にいたおっさんに対して、わざわざ冒険日誌を広げて解説するイセル。そこに書いてある素人（アマチュア）全開の文章を見て顔をしかめながらも、おっさんは何とか記憶を呼び起こした。
もうかなり前の事だから、すっかり記憶から抜け落ちていた。他の面々にも伝える。

「あー……そういえばそんなこともあったの」
「でさ、この『あの女』ってのは、この前草原で戦ったときのさ、

途中から現れた魔術師の女なんじゃないかと思ったんだけど」
「……あ。あの時の？」
「そう。この『第１９話　暴れだした加害者』のここんとこな」
「あ、ああ。分かった分かった。いいよ覚えてるよそれは」

イセルが無理やり近づけてくる書物から、あからさまに目を逸らそうとしながら遠慮するスプ。
さすがに今度はみんな覚えていた。特に彼の記憶には鮮明だった。
あれほどの高位魔法を使いこなす魔術師には、これまでに一度しか会った事はない。もしかしたら、彼の尊敬する……というか恐れる……というか、まあそれはどっちでもいいや。とにかく彼にとって最も偉大で強力な、その一人目の人物にも匹敵するような魔術師かもしれないと思ったのだ。

「そんでさ、それをヒントに色々考えてみたんだよ。そしたら……あの占い師の婆さんいたじゃんか？」
「え……ええ」

毎回この話を出されると、グラムルの額に汗が流れるのだが、その事には触れないでおいてあげるのが人情というものだろう。
そこは食べ終わった皿と同様にテーブルの端っこにでも置いておいて、イセルは続ける。

「あの婆さんも、実は『あの女』なんじゃないかと思うんだよね」
「うそ～？」
「前回の依頼に関してもさ。何でこう俺たちの居場所が分かるわけよ？……何者かに監視されてるとしか思えないね」
「……私たちが？」

イセルの話が荒唐無稽すぎて、いまいち他の面子にはピンと来ない。

……第一、自分たち程度の冒険者が誰かから注目される理由が良く分からない。別にこれまでも大した事をしてきたわけではないのだ。心当たりなど、どこにもなかった。

「カシューナさんに化けてた奴の例もあるしさ。どうやら変装が得意な奴がいるんじゃねーの？そういう魔法とかあるだろ？」

「まあ……あるにはあるが」

「な？……だから、実はどこに誰がいるか分かんないから気をつけろってゆーことだよ。いくら知り合いとかでも」

どうやらイセルの最終的な主張はそういうことらしい。一行は今までの周囲の人間の事を思い浮かべ、しばらく考えてみる。

……今の所、怪しい人物と言えるような人間は誰も思い当たらなかった。

むしろ、怪しいといえば……？

バッチリのタイミングで、おっさんとイセルの視線が交差する。

「まさか……お前も『あの女』か？」

「お主こそ！」

「いやおっさんの方が怪しいな！」

「いやいやお前の方が怪しいぞ」

「お前（スプ）にゃあ言われたくねえよ！」

「皆様、ラバン公がいらっしゃいました」

「……ん？」

半分冗談を交えながら、いつものようにどうでもいいやり取りを始めようとした一行を、召使いさんの静かな声が遮る。

どこかで聞いたようなその単語に、一同は皆、ポカンと口を開けて顔を見合わせた。

第３５話　強敵の登場？

「ラバン公がいらっしゃいました」

聞き間違いでなければ、確かにそう聞こえた。これまでに散々聞き飽きたその名称は、誰もが記憶に残っていたからだ。

――相続権継承の儀において、ダイクを誘拐した領主代行『ラバン・ジェイスン公爵』の名は。

声をかけてくれた召使いさんにどういうことかと聞いてみても、「カシューナ様より申し付かっただけですので」と、よく分からないようだった。仕方なく、食事を早々に切り上げて応接の間に向かう一行。

……もちろん、怖いのでこっそりと物陰に隠れながらだ。

「まさか、不死身と書いてラバン公と読むとか言うんじゃねえだろうな……」

「……実は吸血鬼（ヴァンパイア）の家系だったとか？」

「え～っ、誰か銀の武器持ってましたっけ？」

「またゾンビになってたりして」

「ゾンビのゾンビ？……どんな屁理屈（パラドックス）だよ」

『――もうアンデッドは懲り懲りだぞ……？』

応接の間に向かうまでの玄関ホールにカシューナの姿が見える。どうやらダイクも同席しているようだった。

その二人の前で何事かを話しているのは、見慣れない人物だった。

……だが、何となく見覚えがあるような気もする。

先ほどの話からすると、あれがラバン公なの……か？

廊下の角から顔半分だけ覗かせて、状況を確かめる一行。
そんな中で唯一、一人だけ空気を読まない……じゃなかった、物怖じしない人間（まじゅつし）がいた。

「俺は堂々と行くぜっ！」

大股で胸を張り、自信に満ちた表情でダイクたちへと近付いていくスプ。その堂々たる姿は大したものだった。
……だが、残念ながらその威風堂々たる歩みは、目的地へと辿りついた後の方向性を、沈黙という形で失っていた。

「……あ、あの……」
「もしや、あなた方が……？」

眼前に無言で立ちすくむスプに何と声をかけていいのか戸惑っていたダイクに対し、すかさず状況を読んで声をかけてきた客人である青年という年頃を少し過ぎた男は、なかなかの者だという事ができよう。
その言葉に対してカシューナが頷くと、客人はスプの方に正対して丁寧に自己紹介を始めた。

「皆様お初にお目にかかります。私の名はラバン・ジェノア。ラバン家の二代目です。生前は父が大変お世話になりました」

聞く者によっては、非常に痛烈な皮肉となるであろうその台詞は、彼が使うと何とも洗練された社交辞令そのもののように聞こえた。
まるで悪意があるようには聞こえない。
ええ、とかああ、とか、何だか要領を得ないスプの返答に、不思議そうな表情を浮かべるラバン・ジェノアと名乗った青年。
ちらちらと後ろの方を振り返る挙動不審なスプを見て、カシューナ

が嘆息した。

「皆さん、そろそろ出てきたらどうでしょうか……？」

「……！」

「カッコわる……」

その言葉に、バツが悪そうな顔をしながら、廊下の角からぞろぞろと出てくる一行。……完全にバレていた。

傍から見えるであろう自分たちの様子に思わず呟いたグラムルだったが、曲がりなりにも騎士である君が一番言える立場じゃないと思うぞうん。お兄さん泣いてるぞ、きっと。

だがこそこそと全員揃った後は、イセルを筆頭に「何か文句あるか！？」とでも言いたげなぐらい開き直って堂々としている姿が素敵だ。

しかし人格がミスリル銀製ぐらいに立派にできているらしい二代目ラバン公は、そんな彼らの姿にも全く動じずに完全に無視（スルー）して話を続けた。

「あの、実際の所、あなた方が殺したんですか？」

「……？」

唐突なその物言いに、全員一瞬何と答えていいのか分からずに固まる。その台詞が、彼の父である先代ラバン公を指しているということはすぐにピンと来た。

実際、最も有力な容疑者として手配されそうになっていたのだ。息子である彼がその事を知らないわけがあるまい。

「いいえ、違いますよ」

無言で黙ってしまった一行を代表して、おっさんがきっぱりと答え

る。

質問をしてきた青年は、その答えにはあまり興味がないとでもいう風な雰囲気を醸し出しながら、小さくかぶりを振った。

「……実を言えば、父の死に直接関わっていた者がいたとしても、その事についてはあまり恨んでいません。息子である私が言うのもなんですが、父が死んで喜んだものの方が多かったでしょうから。……私がどちらとはあえて言いませんが」

この言葉などから、一行は良くも悪くもこの二代目だというラバン公が、先代とは全く器の違う人物であるという気配に薄々気づいていた。どうやらそれはダイクとカシューナも同様らしく、その表情の真剣さからしても良く分かる。

領主代行を務めていた男の息子は、深くじっくりと焼いた牛肉の深い色のような髪を短く切りそろえて、仰々しくもないこざっぱりとした紳士風の衣装を鮮やかに着こなして優雅に佇んでいる。……少なくとも外見を見る限りは、一部の隙もなかった。

そうして、再び短い儀礼的な挨拶を交わすと、新ラバン公は早々に屋敷を後にしたのだった。どうやら、それだけが伝えたかったらしい。

ダイクに聞いてみても、彼の今日の用件は、ここに挨拶がてら顔を出しに来ただけのようだった。

「新たな強敵の登場……か？」

ぽつんと取り残されたような気がした一行を代表し、イセルが遠くに去っていく馬車を見送りながら、緊張感のない呟きを放り投げる。何とも言えず、他一同は部屋に忘れられた帽子のような表情をして、互いに顔を見合わせていただけだった。

「……そうだ！皆さん、お仕事です！」

そんな一行を見て、突然思い出したように、カシューナが新たな物語の一幕を開くのだった。

第３６話　盗賊の依頼

「やあ、あんたらがカシューナの知り合いか？」

そう話しかけてきた男は、ハルミトンというそうだ。カシューナが斡旋してきた仕事の依頼人だった。

指定された酒場の個室に入ると、パッと見はどこにでもいる羊飼いだか靴屋だかの壮年の男といった風体の人物が待っていた。

大抵の一般人には普通の人に見えるのだろうが、多少なりともその筋をかじった者には、明らかに素人ではない……という微かな気配を感じさせていた。

「ああ、そうだ。アンタは？」

「俺はハルミトン。盗賊ギルドの者だ」

（……盗賊ギルドにも知り合いがいるだと？）

またしてもカシューナの交友関係の謎が浮上してきた。盗賊ギルドなんてモノは、関係者でもなければ普通はほとんど接する機会が無い場所だ。それは彼らのような冒険者であっても例外ではない。

たまに情報を仕入れに訪れる事はあるが、あくまでそれはビジネスライクな関係だけであり、向こうから依頼が回ってくる事などはほとんど無いと言って良かったのだった。

それに多少驚きはしつつも、いつもの調子で彼らは勝手に話し出す。

「実はな……」

「……そうだよなー盗賊ってのはやっぱりこういう雰囲気じゃないと」

「ちょっとそれどういう意味！？」

「まあまあ、よさんかお主ら。依頼人の話をだな……」
「どういう意味って別に深い意味はないけど」
「深い意味がないなら別に今言わなくたっていいじゃない！」
「やれーやれー」

――わいわいがやがやわいわいがやがや――

「じつわな！！！」
「……」

まるで結界の外の人物のように置いてけぼりを食らってるような気がした依頼人が、我慢できずに大声を挙げると、途端に静かになる一行。表情を見るだけでちょっとお怒り気味の様子なのを感じ、慌ててイセルがフォローに入った。

「聞いてるよ聞いてる。聞いてないように見えても実は聞いてるんだよ」
「ホントかよ……？まあいい。とにかく、お前たちにはある館の探索を依頼したいんだ」
「……」
（やりにくいな……）

今度は一転して、全員がシルフに見放されたかのように黙りこくっている。
それはそれでなかなか話しづらい雰囲気だ。しかしその程度の事など気にせずに、ハルミトンは話の続きを語りだす。

「バルディス、という男を知っているか？」
「……」
「そうか、知らんならまあいい。そいつは、ここいらじゃ大盗賊の

名で通っている奴だ」
「……（ふ～ん）」

相変わらず沈黙の持続時間が続く一行。
それはそれで、今度は何だかちゃんと聞いているのか不安になってくるハルミトン。

「今はもうこの世を去ったという話だが、奴は死ぬ間際に自分の財産をある館に隠したという噂が立った」
「……へっくし！」
「ちゃんと聞いてるか？……まだ見つかってはいないそのバルディスの館の情報を、俺は手に入れたんだ」
「何か……大海賊時代の幕明けみたいな話だな」
「何だそりゃ？知らん話だな。……とにかく、館の中を探索してお前らが財宝を見つけてくれたら、報酬を払おう。……一人二百でどうだ？」

何とかとにかくそこまで説明すると、冒険者たちの間で相談するような目配せが飛び交う。
まず最初に口を開いたのは、戦士風の体格の良い男だった。

「それってホントに大盗賊のなのか？アンタみたいなのにこんな簡単に見つかるなんておかしくないか？」
「遠慮を知らん男だな……。まあいい、これまでは魔法で隠されていた館が古文書により発見されたんだよ。詳しくは企業秘密だが……これでもかなり苦労したんだぜ？」
「ふ～ん。……いまいち信憑性に欠ける情報だな」
「まあ確かにそれは否定できん。だから、まずはお前らに頼んでいるというわけだ。俺はその財宝を手に入れてギルドの幹部を狙うつもりだからな……。そこの女盗賊なら、この情報の価値が分かるだ

ろ？」
「いや、あんまり」
「わかんねーのかよ！……まあいい。とにかく頼むぜ」

あまりに手応えの無い受け答えに肩透かしを食らうハルミトン。
てっきり交渉成立かと思っていた彼の言葉に、同業者のはずの女盗賊は顔をしかめた。戦士もそれに追随する。

「やだよ。他の幹部に恨まれちゃうじゃん」
「なれればいいけど、なれなかったら裏切りはきついぜ」

これは正直、彼にとって予想外の反応だった。そんなに悪くない報酬を提示しているはずだ。多少ごねる事はあるかもしれないが、それでもすぐに返答はもらえると思っていた。
しかし、ここまであからさまに拒否されるとは思っていなかった。確かに彼らの危惧している事もわからんではない。ただ、それは状況を少々誤解しているようだった。

「……そうじゃねーよ。誰かを引き摺り下ろそうとしてるわけじゃなくて、一つだけある幹部の空席を狙ってるんだよ」
「ふ～ん、それならまあいいか」
「頼むぜ……」
「それで、本職は行かないのか？」
「ああ、俺は外で待ってるよ」
「もし本当にそんな大盗賊の館だってんなら、本職も来てもらわないとうまく行かないかもしれないぜ？……それとも、その館には六人制限でもあるのか？」
「どんな館だよ！いや、お前たちの中にも盗賊がいるんだろ？そいつに任せるさ」
「もし鍵とか開かなかった時の為に、多けりゃ多いほどいいだろ？」

（ムッ……！）

……何だかこいつら、新米だという話のわりには妙に交渉に食いついてくるな。彼は計算を少々修正しなければならなかった。最初の予定では、すぐに商談は終わるはずだと思っていた。だが、予想以上に彼らの食いつきは悪い上に、背後関係の洗い出しや予想される状況のシミュレーションに対する回転速度は速かった。おいおい、聞いてた話と違うじゃねえか……。

「お金出すだけで幹部になれるんならさ～」
「新米の癖に中々言う奴だな……」
「待て待て新米とか関係ねーだろがよ。世の中実力社会じゃねえか？……現にアンタだって幹部に成り上がろうとしてるじゃねえか」
「むっ……じゃあ、一人二百十でどうだ」
「一人二百十ってことは……二・四・六……」

「……」

一行の目線が、イセルの腰に下がっているティルヴィンで留まる。

「いや～、実はこいつがいないと戦力ガタ落ちだって奴がいるんだけどよ」
「何？カシューナからは六人組だと聞いているが」
「人間はな。ただ、こいつが重要なメンバーなんだよ。……ほら、喋ってみろよ」
『――おう！任せろ！こいつらにゃあ俺がいないとダメなんだぜ』

突然聞こえてきた声にギョッとするハルミトン。
だがその場にいた者の視線がみんな一振りの剣に集まっている事を察知し、大まかに状況を把握する。

「そうそう。この剣が無いと、戦力が雲泥の差なわけよ」
「……言いたいことは分かるが、そんな剣が金貰ったって一体何に使うんだよ？」
『――まあ確かに、使い道が……』
「オホオホンッ！こう見えてこいつはかなりの綺麗好きでよ、手入れとか掃除とかに金がかかってしょうがないわけよ……」
『――まあ確かに、綺麗にしてもらうに越した事はないな（ただでさえ、最近対アンデッドが多いし……）』
「そうそう。一回機嫌が悪くなるともう手が付けられないしな」

どうやら、意地でもこの剣を一人分だと認めさせたいらしい。
若干悪徳に近いほどの無理矢理感が無いでもないかと思わなくも無かったが、今回に関しては特にシビアになることも無い理由がある。
まあ、本気になるほどのことも無いか……。

「……あーうるせぇ奴らだな！分かったよ！報酬割り増ししとくから、お前たちだけで行ってくれ！こっちは外で見張りとか色々あるんだよ！」
「イエーイ！」「いぇ～い！」

もうどうにでもしてくれと言わんばかりの表情で了承するハルミトンの台詞に、大喜びで手を打ち合うイセルとスプ。
……そのうちタイミングがずれてイセルがスプの頭を叩いてしまってからは、お互いに体の叩き合いへと発展していったのだが誰もそれを止めることなく諦観している。
一回毒を食っちまったら、皿まで食ったって構やしねえ……という顔をしていたハルミトンだが、段々と（やっぱり皿は食いすぎだったかな……）という表情に変わってくる。
思わず気になって、疑問の言葉が出てしまうのだった。

「……本当に大丈夫だろうな？」
「分かった分かった大丈夫だって。……まあ、庭でイモでも焼いて待っててくれよ」
（何で焼き芋なんだよ……）

ハルミトンはそう思ったが、もはやこの面子に対してまともに取り合うほうが面倒くさいという事にようやく気付き、首の後ろを掻きながら諦めがちに返事をした。

「……ああ、良い感じでデンプン質が糖に変わるようにしといてやるよ」

一行はそれには答えず、話は終わりだとばかりにぞろぞろと腰を上げる。
……唯一最後のイセルだけが、彼に片手を挙げて部屋を出て行った。

第37話　館の探索

翌日。
ハルミトンに連れられて行った森の中の空き地には、ダイクの屋敷など目じゃないくらいの大邸宅が建っていた。
魔法で隠されていたとか何とか言っていたので、てっきり入る前に何か行うのかと思っていたが、そうではないらしい。
依頼人である、青年をちょっと過ぎた盗賊に普通に玄関の前まで案内された。

「これがその館だ」
「さてと……それじゃあどうしますかね」

数段の石段を上がると、玄関がある。
重厚な木造の両開きの扉で、ご多分に漏れず豪華そうな獅子のドアノッカーが付いていた。
「どうする？」「いいんじゃねえの？」「一応礼儀として……」などと相談を繰り広げた後、結局ドアをノックしてから入る事にしたらしい。

（律儀な奴らだな……）とその様子を庭から見ているハルミトン。
しかし彼も言われた通り、本当に焼き芋を始めようとしている辺り、他人の事は言えない。
一瞬、返事があるんじゃないかとビクつく彼らに呆れた視線を送りつつ、予想通り何の返事も無いのを確かめてから中に入っていく一行を頼りなげに眺める。
「頼んだぜ……」と、誰にも聞こえない声で呟いた後、彼は心配そうに積もった落ち葉に火を点けた。

玄関ホールへ入った。
広さは、ラカーサ邸の玄関と同じくらいだ。
いざという時のために、入ってきた扉は開けておこうとしたのだが、どうやら傾斜が付いて勝手に閉まるようになっているらしい。
グゴゴ……と音を立てて閉まり始めた扉に、慌ててイセルが外から枝を拾ってきてつっかえ棒にする。……その際に外にいたハルミトンから冷たい視線が飛んできたのだが、この際それは無視しよう。
仮にも『大盗賊の館』なのだ。用心するに越した事はない。
イセルは横の、緊張しているんだかどうだか分からない相棒の女盗賊にチラリと視線を送った。

ホールには、これといった物ばかりがあった。
インテリアとして飾られている植物は、目を離すとにょろにょろと伸びてきそうな気もするし、壁に掛かっている誰のだか分からない肖像画なんかは、いかにも目がギロッと動いてこちらを睨んできそうだ。さらには階段の横に設置されているあの騎士用の鎧なんて、今にも動きそうでいや動かないはずがないむしろ動いてほしいぐらいだ……とかなり警戒されていたのだが、しばらく待っても何の音沙汰もないことから、

「適当に、右から順番に行くか」

といつもの通りに歩き始めた。
一応説明しておくと、吹き抜けになっている玄関ホールには二階への階段が付いており、それ以外にも左右に一つずつ通路が延びている。
右の通路に入ってすぐ、右側に扉があった。こちらも玄関と同じく、ウォールナット製の立派な扉だ。
一行は一歩後ろに下がり、代わりに前に進み出たベルが扉の様子を見てみる。

「……どうだ？」
「う……ん、特に罠とか鍵は掛かってないわ……」
その言葉に、イセルは無言で場所を入れ替わる。……さすがにここで「本当だろうな？」などと茶々を入れて、彼女の機嫌を損ねるような時間の積み重ねはしていない。
一度へそを曲げた彼女の機嫌を直すのは、どんなすごい大盗賊がかけた罠を解除するよりも大変な事なのだ。
イセルはそれを理解していたため、無言で扉のノブに手を掛けた。
しかし、ベルは実は何かその自分の診断に対して、違和感を感じていた。のだが、それが何かという事に気付くより早く、彼の戦士は扉を開けてしまっていた。
……いや、正確にはノブを捻っただけだったのだが、それだけで結果としてはもう充分に現れていた。
ガタゴトドチャッ！
イセルは、積み重なって倒れてくる家具の下敷きになっていた。六点のダメージ。
ベルは違和感の正体が分かった。……妙に、扉に圧力がかかっていたのだ。鍵と、それを開けた時に関係する罠の事に集中していたため、それ以外の状況に関しては見落としがちだった。……多少、緊張しているのかもしれない。
思わず被害者であるイセルに謝ろうかとも思ったが、よくよく考えてみると、この形の罠は原始的……というよりは子供騙し過ぎて、解除できるものではない。なので気付いてもどうしようもなかったと自分にいい聞かせ、黙っている事にした。

それに気付いたわけではないだろうが、積み重なった家具をどかせてもらい、立ち上がったイセルもいつものように怒鳴っては来なかった。意外なことにただ、

「……大丈夫だ、大した傷じゃない」

と答えただけで、すぐに部屋の中の探索に移った。

ベルは（何？気味が悪いわね……）とか思ったのだが、正直な所、イセルはこの程度の出来事は予想済みだったし、盗賊の館であるならば、この先もっと同じようなことが起こるに違いない。新米盗賊の部類に入るベルの失敗にいちいち目くじらを立てているようでは、探索は一向に進まないだろうと考えての事だった。

……簡単に言えば、完全に諦めていたのだ。

その代わり、頭に乗っかったモップを片付けながら、一人心の中で誰にともなく毒づく。

（なるほど、これがバルディスの原則か……。全くこんなにゴミを散らかしやがって。環境の事も考えてほしいぜ！）

ちなみに彼の予想通り、この後三回、彼は同じような罠にかかることになった。

第３８話　首無しの骸骨

右の突き当たりの扉を（今度は何事もなく）開けると、そこにはかなり大きい部屋が存在していた。彼ら全員で、ゆうに追いかけっこができそうなほどの広さだ。
そしてその中央には、獅子の顔から注がれ続けている小さな泉が蓄えられていた。奥には、あからさまな箱が二つ設置してある。
それほど新しい物ではなく、二つとも手の平を二つ広げたほどの大きさしかない。
それぞれ、またさらにあからさまに『一つ目に開けよ』『次に開けよ』と書かれた紙が貼り付けてあった。

一同は簡単に相談し、一つ目の箱にイセル、二つ目の箱にはおっさんが陣取る事になった。もし何かあっても死ににくいリストのＴＯＰ２だからだ。それ以外の理由は何もない。そしてそれは当の二人ともが分かっていたため、特に文句も言わず、合図をして順番に箱を開けた。

……警戒はしていたが、何も起こることは無かった。どうやら、順番通りで正解だったらしい。
宝箱の中には、赤と青の親指大の石が収められていた。
イセルとおっさんは、その石をしげしげと眺める。

「……」
「……」

そして二人とも、無言で手に取ってみた。

「「……っ！！！」」

そして無言で向かい合って、誇らしげに掲げてみた。

「ちょっとちょっと、意味わかんないから！」

珍しくベルからのツッコミが入り、さらに無言のまま恥ずかしげに石を収めた二人だった。

……微妙なトランス状態に入っていたらしい。

気を取り直して、二つの石を調べてみる一行。

「こいつ、あの泉のライオンの目にはまらないか？」

「……目には穴なんて空いてないぞ？」

「う～ん……、目じゃないのかもしれない」

「……鼻か？（笑）」

「なるほど。『苦しい！フンッ！』とかって動き出すんだな（笑）」

一応、ぐりぐりと石を目に押し付けてみたイセルだったが、当然ながらそこにはまる事はなかった。

その馬鹿力で押し付けられて、心なしか獅子が迷惑そうな表情を浮かべたのは気のせいだろうきっと。

もちろん、動き出す事も喋りだす事もなかった。

……一行の興味は、今度は泉へと移る。

「この泉は何なんだ……？」

「ちょっと臭いを嗅いでみるかな……」

気になったイセルが調べようとしてそう言いながら近付いていく。

「……」

ふと気付いて振り返ると、何故か地面に落ちた焼き芋を平気で食べる人を見るような目つきで、みんなが彼を見ていた。

「……な、何でそんな目で見るんだっ！？毒とか入ってたら臭いで分かるかも知れねえじゃねーかっ！」

どうやら近付いていくイセルを見て、彼らはイセルが泉に這いつくばって犬のようにフンフンと鼻を近づける姿を想像したらしい。

一方でイセルは、ただ近付けば危険な悪臭がしないかどうかを確かめられるだろうと、近くまで行ってみるだけのつもりだった。

だが今や、彼は周囲から犬以下の生物を見るような目つきでしか見られていないことに気付く。

何でだよぉ！と必死で訴えかけてみるが、それに耳を貸してくれる弁護側の証人はそこには一人としていなかった……。

＊

「お、骸骨だ」

イセルに対するみんなの視線は相変わらずだったが、とりあえず気を取り直して奥にあった扉を開けてみると、その部屋の中央には一体の首なし骸骨が直立していた。

そしてその周囲には、夥(おびただ)しい数の骨の一部が散乱している。頭蓋骨を始め、胸骨、肋骨、腰骨、大腿骨、背骨など、人の骨のフルコースだった。

骸骨は、唯一その頂点に存在するべき一種類の骨を欠いたまま、右手には剣、左手には楯を持ってその部屋に仁王立ちで存在している。

一行には間違いなくこの物体が何かのキーワードになる物だという確信があったが、まだこの時点ではその結論に至るまでの情報(パーツ)が足

りていなかった。

「近づくと動き出すんじゃねーの？」

骸骨と騎士鎧、そして石の彫像は、動き出す想像をしてしまう物体の三点セットだ。冒険者の職業病である≪冒険者症候群（ワンダラーズシンドローム）≫の一つだと言えた。

その例外に当てはまることないよう、お約束の展開を予想したスプだったが、さすがにそんなベタな展開はないだろうと恐る恐る近付いたイセルには、やっぱり骸骨は襲ってこなかった。もちろん、動き出す事もない。

それに安堵して調子に乗ったのか、ペチペチと骸骨を叩いてみるイセル。……やっぱり反応はない。ただのしかばねのようだ。

「ほらほら、これ見てよ（笑）」

嬉しそうに話しかけてくるイセルの方を見ると、右手の肘を右外に向けたまま、手の平を下にして頭の上（頭は無いのだが）に置き、反対の左手は肘を左外に向け、手の平を上にしてお腹の上に持ってくるポーズを骸骨にさせて喜んでいる。

足もガニ股にさせて、まるで「シェー」とか叫びだしそうな骸骨を見て、不謹慎ながらも思わず「ぷっ……」と吹き出してしまうベル。

それを見たイセルの目が妖しく光る。

「ふっ……これならどうだ？」

今度は両手で頭の上に輪っかを作り、その先端だけを下にへこませたポーズを取らせる。台詞を付けるとするならば、「ウッキッキ～！」という言葉がピッタリだろうか。

虚ろな骸骨とその無邪気なポーズとのアンバランスさがツボに入っ

てしまったのか、必死で横を向いて笑いを噛み殺すベル。……さすが旅の相方同士。その不思議な感性にはお互いに通じる物があるのかもしれなかった。

「うわ俺、こんな骸骨にだけはなりたくねー（笑）」

一人で骸骨を弄くり倒し、のん気な台詞を吐くイセルを、色落ちした着物のようにうっすらと白い目で見るそれ以外の一同。

やがて、スプがポツリと呟いた。

「……蹴り倒すか」

「……こいつ（イセル）を？」

……誰も骸骨に対して言っているとは、露ほども思わなかった。

＊

何だかやっぱり頭が無いと締まらんな～……とかブツブツ言いながら、ギリギリまで後ろに倒し（足首以下は動かなかった）、まるでブリッジを極めている格好になった骸骨に、その辺に落ちていた頭蓋骨をはめてみるイセル。

――その瞬間。

ブオンッ！

イセルの髪が二筋舞った。そしてツーと赤い雫が一筋鼻の上に垂れてくる。

どうやら、無理な体勢をさせていたのが良かったらしい。骸骨の右手に持っていた剣が一閃したが、イセルの首までは届かなかったよ

うだった。

それにしてもこの一撃。……かなり怒りが篭ってそうな感じがしたのは気のせいだろうか？

散々恨みが募っているであろう骸骨は、起き上がって彼らに襲い掛かってきた。

第３９話　ネズミの穴

骸骨があの体勢から、ぬうぅ～っと起き上がってきた時にはさすがにみんなびっくりしたが、その実力はと言えば、魔術師によって作られる≪竜牙兵（ドラゴントゥースウォリアー）≫ではなく、ただの≪骸骨兵（スケルトン）≫だった。

……なので、彼らは難なくこれを撃退する。

骸骨は骨ごとにバラバラになってその場に落ちた。

骸骨を倒しても何事も起きない事から、おそらく情報が足りないので、現時点では何もできないだろうと他の場所を探ってみる事に。

一同は引き返し、今度は玄関から見て左側の通路に入っていった。

右側の通路と対称的に設置されていた、入ってすぐの扉を開けてみると、そこはどうやら台所のようだった。

扉を開けた時に発動したっぽい包丁が飛んでくる罠を、例によってイセルが何事も無かったかのように二本ほど刺さりながら気にせず中に入ると、そこには幾つかの食材が常備されていた跡があった。

棚の上には、唯一食べかけのチーズが置いてあり、その歯型は人間の物ではなく、小さなげっ歯類のような動物の物だった。

イセルが辺りを見回してみると、隣の部屋へと続くであろう壁に、拳大の半分ぐらいの小さな穴が空いていることに気付く。

他の皆に問いかけてみるが、誰もがさあ？と不思議そうに首を傾げただけだった。

「何だこの穴？ネズミでもいんのか……？」

……気になったイセルが、ティルヴィンを穴の中に突っ込んでみた。

「やめろよ」

「おわっ！何かしゃ喋った！」

驚いたイセルが慌てて剣を引き、ちょっと離れてからそーっと中を覗いてみる。……真っ暗で何も見えない。

が、声が聞こえたということは、何か生き物がいるということだ。

イセルはもう一度ティルヴィンを穴に近づけようとした。

『――俺だよ。やめろって』

その瞬間、聞きなれた声が彼の耳に届く。

「お前かよ！ネズミが喋ったのかと思ったぞ！」

『――お前、ネズミがいたら血を吸わせようと思ってただろ』

「い、いやいや。そんなことは無いぞ？」

小さな穴の中に入れたせいで、声が違って聞こえたらしい。

そう考えると、どうやら刀身から声を出して喋っているのだろうか？……イセルはふとそんなことが気になってしまった。

穴からは何の反応も無かったため、隣の部屋へと続く扉に近づく。

台所の隣にあるのだから、まあ食料庫だろうな、と彼は思った。しかし先ほどの罠もあるので少し警戒して、ノブを捻って少しだけ開けてみる。真っ暗だった奥の部屋に、細い灯りの筋が伸びていった。

一行がしばらくそのままの状態で様子を見ていると、彼らの耳にどこからか物音が聞こえてきた。

その物音は小さくコトコトと聞こえていた状態から、徐々にトトトト……に変わり、それがドコドコと騒がしくなってきて、終いにはドドドド……と不吉な大きさと規模になってきたのが分かる。

何やら嫌な予感がしたイセルは、慌てて少し下がって扉を閉める。

が、それは時既に遅しといった雰囲気だった。

ドバンッ！！！

と扉がこちら側に蹴倒され、その向こうから現れたのは、ドワーフ大の大きさのネズミ二匹と、ネズミのような頭と顔立ちをした二本足で立つ毛むくじゃらの人間のような生き物、そして辺りを埋め尽くす小ネズミの数々だった……。

「ひっ！……いやあああぁぁぁっ！！！」

「おわっ！ベル、キャラに似合わんぞ」

「だ、駄目なの私……ネズミはまだいいんだけど、こういうウジャウジャしたのは……」

「へ～……意外だな。もうちょっと色気のある悲鳴だったら、尚良しだったんだけどな」

「い、いいいいから早く何とかしてよ！」

「へーへー」

ベル以外の人間は、特にネズミたちを見てもどうという事はないらしい。グラムルも顔をしかめている程度で特に拒否反応は示していないし、シャルルに至っては小さいネズミの一匹を捕まえようとすらしている。

まあ、怒っているのかこちらを食べようとしているのかは分からないが、襲ってこようとしているでかいネズミどもの様子を感じ取った一行は、無駄口を叩きつつも、素早くいつものように戦闘準備を行う。

後ろからスプが予備情報を知らせてきた。

「【巨大鼠（ジャイアントラット）】と【鼠男（ワーラット）】だな。アイツの攻撃は受けない方がいい」

「何でだ？」

「≪獣化症（ライカンスロープ）≫に感染する可能性がある。……あれも元々の住人かもな」

「……ライカンスロープ？」

敵が目の前にいるだけあって、必要事項だけ端的に説明してくるスプに質問を返すイセルとグラムル。

前線に立つ彼らにとって、敵の情報は何よりも重要事項だ。特に≪状態異常（ステータス）≫を引き起こす相手は厄介なのだ。麻痺や石化など、その一撃で戦線から離脱する可能性もある。

彼らはまだそんな状況を経験したり、そんな武器を持つ相手と戦った事はなかったが、周囲からの助言や、もはや都市伝説の域にまで近付いた恐ろしい怪物たちの噂話を耳にしていると、自然と相手の特殊能力には注意するようになっていた。

だが、スプの発したライカンスロープというその言葉には、どちらも聞き覚えはない。

「【狼男（ワーウルフ）】とかいるだろ？簡単に言えば、お前もネズミ男になっちまうってことだよ」

「へぇ～……確かにヒツジ男の伝説なら聞いた事あるな。……じゃあグラムルの場合は、ネズミ女になるのか？」

「へっ！？」

「そうだな。そもそもライカンスロープは魔法的な呪いの類だと考えられていたが、最近になって感染症の一種だという説も有力になってきた。……その理由は、切り傷を負わなければ問題ないという部分と、傷の回数や深さによって獣化の確率が変わってくるという検証からだ。傷口から≪悪玉菌（ウイルス）≫が入ってくるから、というその主張には確かに一理ある」

珍しくクドクドと語りだすスプの話を聞いていたのかは知らないが、少し考えていたらしく沈黙したイセル。

ちょうど相手が動き出す素振りを見せたのと同時に、一言だけ捨て台詞を残して敵へと突進する。

「よしっ！……グラムル任せた！」
「ちょっと待って下さい！……ヤですよネズミ女なんて！」
「まあそう言わずに」
「ああいうのはいつもイセルの担当でしょ！？」
「そろそろグラムル（おまえ）にも活躍の機会を与えないとなと」
「いいっ！いらないです！活躍なんて！」
「そんなんじゃ兄貴に負けちゃうぞ？」
「……」

おっさんぐらいの巨体を携えたネズミが、おっさんとは比べ物にならない速さでちょこまかと動き、なかなか的を絞らせてもらえない。素早いおっさんは……じゃなかった、おっさんぐらいのネズミは、短剣（ダガー）ほどもある前歯を剥き出しにして威嚇しながら、ピョコピョコ跳ね回って手や足に噛り付こうとしてくる。
だが、イセルだってそれなりの修羅場を潜り抜けてきた戦士だ。剣が命中しなければ、噛み付かれる直前に腕を叩きつけたり、動作の間に蹴りを組み込んだりしてうまく対応している。
だがグラムルは、その大剣という獲物（ぶき）の性質や実直なその戦い方から、微妙に苦戦しているようだった。……もしかしたら、さっきの台詞がグサッと刺さってるのかもしれない。

「わぁ～っ！」
「ひぃ～！」
「ちょっとちょっと！」

そんなグラムルに対して、ちょっと悪かったかな～とか思っているイセルの耳に、後ろから複数の悲鳴が聞こえてきた。

第４０話　フードの男

聞こえた悲鳴は、ネズミ男に襲われている後衛の皆々様方だった。

嫌々ながら中列で相手をしていたおっさん（顔に表情が表れていた）に敵わないと悟ったらしいネズミ男が、急に他の面子を襲いだしたのだ。素早さでは敵わないおっさんは、それをうまく止める事ができなかった。

憐れシャルルやスプ、そしてベルまでもが逃げ惑っている。……あ、スプがやられた。

（う～ん……奴がネズミ男か。ピッタリだな、フードも付いてるし……）

フードが何に関係するのかはよく分からないが、何故かそんな気持ちになりながら仕方なくイセルはそっちに向かう。これで放置していたら、後で何を言われるか分かったモンじゃない（特にベルに）。

それまで彼が相手をしていたでかネズミは、ついさっき彼の渾身の蹴りを食らって、ちょうど動かなくなった所だった。

グラムルの方は……まだ無理そうだな。

イセルはみんなに聞こえるように大声で叫ぶ。

「おいみんな！ネズミ男一気にやっちまうぞ！」

「分かったわい！」

「最初からそうしてよね！」

「おいで、【闇の精霊（シェイド）】～」

シャルルの周りに、辺りからゾワゾワと闇が集まっていく。……あ、そういえば館の中は、ほんのりと光る魔法の灯りによって照らされ

ていたのだった。特に精密な作業をするのでもない限り、行動に支障は無さそうな程度の明るさだ。

棚の下から、扉の影から、椅子の背もたれが落とす影や彼女たち自身の影からもジリジリと集まっていた闇は、気が付くといつの間にかこぶし大の球を作っており、曖昧な軌跡を残しながらネズミ男の方へと漂っていった。

どうやら、これがシャルルが新しく覚えた精霊魔法（シャーマンマジック）らしい。

「おわっ！……こいつは慣れるまで時間がかかりそうだな。……あ、どうもイセルです」

隣に漂ってきた闇（シェイド）に対して、微妙に律儀に挨拶をするイセル。一応シャルルから説明は受けていたので慌てる事は無かったのだが、やはりこうしてすぐ近くに来られるとちょっと驚いてしまう。一応、精霊は生きている物だと説明を受けていたので、初対面の際には粗相の無いように挨拶をしておくのが彼の流儀だった。

「ヂュギュギュ……ッ！」

イセルが闇の精霊に挨拶をした後、そう時間もかからずにネズミ男は倒れて動かなくなった。その腕前を見て、……ほっほう、さすが前の明るい（ウィスプ）のよりは頼りになる奴だぜと感心したイセルだった。

ご苦労様、とかいってシャルルがシェイドを送還している横で、一人離れて後方に下がっていたスプにおっさんが声を掛ける。

「大丈夫じゃったか、スプ？」

先ほどのネズミ男の攻撃に曝されていた事を心配しての台詞だったが、何故か戦闘終了後からフードを被ったままのスプは、明後日の方向を向いたまま「ああ……」とくぐもった返事しかしない。

その歯切れの悪さに怪訝な顔をしたおっさんだったが、本人がいいというのであればそれ以上に構う事はあるまい。何事も無かったかのようにくるりと元の方向に振り返る……途中でイセルと目が合った。

「よし、じゃあ次行くか」

そののん気な声に従い、ぞろぞろと扉を潜る瞬間。
カエルに跳びかかるヘビのようにイセルはスプへと襲い掛かる！
しかしその行動は予測されていたらしく、一歩手前で回避されてしまう。

「なっ！お前何する――」

と言いかけたスプの後ろから、手がにゅっと伸びてきて、彼の腰を拘束した。……おっさんだった。

「野郎、グルか……っ！」

自由になっている両手で何らかの魔法を唱えようとするスプの右手を、杖ごとがっしとベルが抱え込む。
そうして左手をグラムルが掴み、正面からはイセルがワキワキと怪しい手つきをしながらにじり寄っていった。

「――さて、スプ君。何で急にフードなんか被っちゃったのかなぁ……？」

きっと、大陸全土を恐怖の渦に叩き込む死霊魔術師（ネクロマンサー）だってこんなにいやらしい声は出さないだろう。
五つのニヤニヤとした表情に追い詰められながら、スプは塔の最上

階に囚われた姫君のような悲鳴を挙げるのだった……。

＊

「ぎゃはははははっ！！！」
「くっくっくっく……」
「うほほ、よう似合っとるわい」
「ホントですね！」
「かわいー！」

爆笑される中、一人憮然とした表情のスプの顔には、つい先ほどまでには無かったある変化が訪れていた。
……ピョコンと両方の頬っぺたから伸びたそれは、『髭』だった。
ヒゲと言っても、普通の人間などが生やすようなモノではない。彼に生えていたのは、明らかに犬や猫といった動物に生えているような、所謂三本ひげなのだった。
明らかにおっさんが生やしているようなものとは違うその『髭』を見て、腹を抱えて大笑いする一行。イセルなど、本当に床を転げまわって涙を流している。
……おのれ、今が仕事中で無かったら、確実に魔法の一発でもぶちかましてやる所だとスプは少し大人な事を思った。

「ひーひー、さっきの奴(ネズミ)か？ネズミ男……クッ」

自分で言っておいて、またさらに笑い出すイセル。どうやら何かのツボに入ってしまったらしく、しばらく別世界から帰って来そうに無い。そんな彼は放っておいて、一足早く落ち着いた他の面々が事情を尋ねてみた。

「……ふん。これがさっき言った感染症の初期症状だよ。幸い、一

撃だけだったから無事に済んだみたいだな。これなら風邪みたいなもんだから、しばらくすれば治るはずだ。……もし長引くようなら、神殿にでも行って治してもらうさ」

さっきから馬鹿笑いをしている戦士には目もくれず、諦めた表情で嘆息するスプ。

一応、町の神殿に行ってお布施を払えば、特に入信者でなくとも治療や施術を受けることができる。

残念ながら≪解呪（ディスペルマジック）≫や≪破魔（リムーブカース）≫の魔法では治せないのが、この症状が病気であるという根拠の一つなのだった。司祭の使う、≪内科的（キュア・デ）治療（イジーズ）≫でなければ駄目なのだ。

しかしまあ、この程度ならば自然治癒力で何とかなるだろう、というのが彼の見解だった。だが見つかったらこのように大騒ぎされるだろうという事は想像に難くなかったので、こっそり（でも無かったが）フードで隠しておこうと思ったのだが……。

見つかってしまった以上は仕方ない。奴が飽きるまではしばしの辛抱だ。忍耐忍耐……。

ただ、帰ってからは絶対何らかの仕返しをしてやるがな。

フードを被り直し、固く決意するスプだった。

第４１話　盗賊の仕事

さて、この辺りから一行の行動パターンには変化が訪れてきた。
……それはどんなものだったかと言うと。

（こういうの、得意じゃないのよね……）

そんな後ろ向きなことを思いつつ、鍵穴を弄繰り回していたのはベルだった。
元々彼女は、盗賊になりたくてなったわけではなかった。この面子の中では『他になるメンバーがいなかったから』というのが最も正しい。

彼女は狩人（レンジャー）に向いていると思っていたのだ。故郷である森の村には、彼女より優秀な精霊使い（シャーマン）である妹がいるはずだ。そんな妹に対する劣等感に耐え切れず、彼女は村を出た。
村にいるならば、精霊たちと会話し、協力できる精霊使いが最も尊敬される。自分には無かった素質を妹が持っているのを知り、さらにみんなからもちやほやされるそんな姿を見て、彼女は別の道を行こうと決めたのだった。

……念のために言っておくと、別に妹や村の人から嫌がらせを受けていたのではない。ただ、勝手に自分がそうした方がいいと思っただけだ。特にこうして人間社会に出てきてしばらく過ごした今の自分から見れば、尚更そう思う。
しかしそれを自覚しているからといって、また村に戻るかと言われればそんなつもりは全く無い。
例え自分の想像とは多少違っていたとしても、前と比べたら今の暮らしの方が何倍も合っているというのが、紛れも無い今の感想なの

だった。

（でも、さすがにこればっかりじゃなぁ……）

ガキッ、という音がして彼女の持っている細い鉄の棒が折れる。
鍵穴から棒を取り出し、折れた先端が地面に落ちると共に、ベルはハァ……と深く溜息を吐いた。

「ごめん、失敗」

短くそれだけ言うと、代わりにスプが進み出てくる。そして何も言わずに≪開錠（アンロック）≫の呪文を成功させると、再び元の位置へと戻った。
それを確認した後、ベルは再び扉の前に立ち、ごそごそと調べ始める。鍵を開けた後は、罠が仕掛けられていないか確認しているのだ。
館に入ってきてから、随時この調子だった。
既に開錠に失敗したのは、これが三回目だ。それぐらいになると、さすがに謝ろうという気にもなってくる。

そして、その様子を後ろから見ているイセルはと言えば、目の前にうまそうな肉が置かれているのに食べられない【食人鬼（オーガー）】のように落ち着き無く、つま先でトントンと床を規則的に叩いていた。

「……ちょっと、気が散るから静かにしててよね」

「……」

ベルのその言葉にも、イセルは全く聞いていないかのようにそわそわしている。
そして周囲がどうしたのか尋ねようとするより一足早く、がっしとベルの右肩を掴んで、真剣な表情をした顔を近づけた。
一瞬ドキッとするベル。

「……わかった。もういい、ベル。下がってくれ」

有無を言わせないイセルの迫力に負け、たじろぎながらも後ろに下がるベル。

彼女が下がったのを見ると、真面目な表情で沈黙したままのイセルは、しっかりとノブを掴んだ。

そして後ろを振り向きもせず、一言だけ告げる。

「もう、開けるぞ」

誰かが何かを言うより早く、イセルは扉を開けていた。……そしてそれと同時に、いや正確には一瞬遅れてなのだが、どこからか先っぽとお尻に危険と羽根がくっついた棒――つまりは矢が、イセルを目掛けて飛んでくる。

それを察知した瞬間、彼はカッ！と目を開き、飛んできた矢を手で受け止め――られるはずも無く、左手を掲げてその腕で矢じりを受け止めた。

ブシュッという音と共に鮮血が飛び散り、思わず女性陣は目を背ける。

左手から赤い液体を滴らせた戦士は、若干顔を歪めながらも後ろに振り返って強がった笑顔を向けた。

「ぜ、全然……余裕……」

ちまちまと罠を調べたり解除したりするより、さっさと開けてこうして自分が怪我を負ったほうがいい、という彼の主張に他の面々が納得したのは、そのすぐ後のことであった。

そもそも、こうした地味で繊細な作業は彼らには向いていない。……それは全員一致の感想だった。

そしてそれから後の探索については、とてもあっさりしたものとなった。

まずベルが周囲の安全を調べ、すぐに解除できそうな罠があるかどうかだけを調べる。その後、イセルが扉を開ける。開かなければスプが開ける。罠があればイセルが掛かる。

……そんなシンプルなパターンが定着したのだった。

幸い、最初の倒れてくる家具のようなレベルの罠がほとんどで、致命的な物は一つも無かった。……もしあったら大変な事になっていただろうが。

おかげで、何度かのおっさんの治癒魔法のみで、それほどの被害が出ずに一階の探索を終える事ができた。

一階の探索を終えると、今度は玄関ホールから二階へと上がり、二階の探索が始まった。

外から差し込んでくる陽射しを見ると、まだ昼にもなっていないらしい。窓の外には細く煙が上がっている事から、本当にハルミトンは焼き芋でも焼いているのだろう。

一行はお腹が空く前に依頼を終えてしまおうと、少し早足で進みだした。

第４２話　Ｏｈ！Ｎｏ！の戦士

二階に上がってすぐの扉を開けると、またしても広々とした部屋が存在していた。
そこには、一階にあったのと同じような泉が設置されていた。……ただし、今度は水を出しているのは獅子の頭ではなく、山羊の頭だった。前回の依頼を思い出し、ちょっと苦い顔になる一行。

また他のメンバーからひんしゅくを買わないうちに、泉の近くに寄って匂いを確かめてみるイセル。
どうやら、別段おかしな香りはしないようだった。……さすがに、今度は他の連中も変な目では見ていなかったのが救いだ。
一階と同じく、近くには小さな箱が設置されている。もはやベルが調べる前に、イセルはとっとと箱を開けてしまっていた。

チッチッチッ……ドパァン！

小さく定期的な機械音がしたと思ったら、箱は突然爆発した。
いきなりの出来事に顔だけを庇ったイセルが、軽く咳をしている。が、致命傷ではないようで、冷静に弾け飛んだ箱の中身を確かめていた。

「あーあ、髪がチリチリになっちまった……」

そう不満げにぼやいていたが、それほど深刻なようではなかった。むしろ、ちまちまとベルが調査している間、ただじっと後ろで待つよりかはよほどいいらしい。

中身が何も無いのを確認すると、立ち上がって先へと進む。そして

そこにあった奥へと続く扉を、またしても無造作に開けた。
キィンッと小さな音がして手元を見ると、細い金属の針が地面に落ちる所だった。
直前に僅かな衝撃があったことから、どうやらまたしても罠が仕掛けられていたらしい。が、それは解除しようとした盗賊を狙った物であるらしく、イセルが身に付けていた篭手にあっさりと弾かれて、床に撃墜されてしまったようだった。
もはやそんな彼の行動に口を挟む者は誰もおらず、自分の身が危険にさらされる訳ではないのだからと、無駄に頑丈な戦士の後に着いていくだけだった。

扉を開いた向こうの部屋には、一階の部屋と同じく夥しいほどの骨が数多く積み上げられていた。
だがそこにあったのは、全身の骨ではなく全てが頭蓋骨であるという部分だけが唯一異なっている。
部屋に入った一行はざっと辺りを見回し、それだけしかない事を確認すると部屋を出ようとした。だが、無邪気に頭蓋骨を投げて遊んでいたシャルルの声を聞いて、その足を止める。

「――あれ？何だこれ？」

一行が彼女の手元を覗き込んでみると、そこには古びた木製の立方体の繋ぎ目を金属で補強された箱が、頭蓋骨の下に埋められて隠されていた。
もはや当然のように何も確認せずに箱を開けてみるイセル。その途端、ブシュッと煙のような物が吹き出てきた。
後ろにいた人々は、毒性のある物を想定してすぐに飛びすさる。が、どうやらイセルはそれを吸い込んでしまったようだ。

「……だ、大丈夫？」

さすがに心配して声をかけてみるベルに、何やらイセルは緩慢な動作で振り返って頷く。
何だか、板金鎧を着たまま川を泳ぎ続けた後のようなその表情を見る限り、どう見ても大丈夫そうでは無さそうだったのだが、外傷が無い代わりに中身の神経的な部分などに問題がありそうだ、ということしかこの時点では分からなかった。
しかし、この後何度も彼が「あ～……だる～」と繰り返し呟いている所を見ると、どうやら体をだるくするような成分が含まれたガスか何かだったらしい。時折イセルがフラフラする事を除けば、それ以上の毒性は無いようだった。

箱の中に入っていたのは、周囲に転がっているのと同じような、一つの頭蓋骨だった。
しかし、その両目には妙にくっきりとした窪みと溝が作られている。だるそうにフラフラしているイセルの代わりに、おっさんが懐から先ほどの宝石を取り出してみた。

「お、こいつにならはまるぞい」

見事、頭蓋骨の左目に収まる赤い宝石。続いてイセルの懐からも青い宝石を取り出し、右目にはめてみた。……ピッタリと収まる青い宝石。真っ黒だったしゃれこうべの両目の闇には、今や輝く真紅と紺碧のオッドアイが出現していた。

二階の他の部分を探索してみた結果、でかい蝙蝠が襲ってきたぐらいで、後は倉庫やらなんやらと取り立てて特筆すべき所は無かった。
一行は再び、首なし骸骨がいた一階の部屋へと戻る。

「……なんだか、本当にこれが大盗賊の館なのか？って感じだよな

……だりぃ～」

「ええ、拍子抜けって感じ？」

「ニセモノ臭がプンプンしてくるな」

そうなのだった。正直な所、この館からは殺気を感じない。

それがイセルを罠の強行突破作戦に踏み切らせた一因であったし、それを他のメンバーが引き止めなかった理由でもあった。

これまでに仕掛けられていた罠には、どこと無く愛嬌のある物もあれば、本気で彼らを殺害しよう、という意識で仕掛けられた物がほぼ無かったのだ。

一階の探索の前半の時点で、彼らは既に何となくその雰囲気を感じ取っていた。……そしてそれは、残念ながらハルミトンの持って来た情報を悪い意味で裏切る結果になるとも予感していた。

とにかく彼らはそんな会話をしながら、先ほど完成させた煌びやかなしゃれこうべを取り出す。

こうして彼らの目の前にある通り、さっきの戦闘でバラバラにしたはずの骸骨が元通りに戻っている事などを見ると、仕掛けとしてはなかなかきちんと作られているらしいが、どうにも『これ』といった手応えが無い。

……そして何より、お宝も無い。

単調で退屈な室内探索に飽き飽きしながらも、最後の望みに賭けて調査を続ける一行。

これでとりあえず館内の全てを回ったはずだから、見落としさえなければ後はこの骸骨の仕掛け（ギミック）を残して終了だ。

イセルはだるそうにしながらも、振り返って仲間の顔を確認して頷くと、手に持っていたしゃれこうべを骸骨の首に設置した。

グガギギギ……

錆び付いたゼンマイ人形を無理やり動かしたような音を立てて、ゆっくりと骸骨の全身が動き出す。
当然警戒していたイセルは、二・三歩下がった位置で間合いを取って身構えていたのだが、どうやら襲い掛かってくるようでは無さそうなので、緊張を少し解いた。
眼球の代わりに輝く石で一行を睨んだ骸骨は、皮一枚も肉一切れも無いほどやせ細った顎を開いて、どこからか声を発して語りかけてくる。

『――良くぞここまで辿りついた。真実の扉へと誘おう――』

そう言うと、彼（彼女？）はくるりと後ろを振り返り、奥の壁へとゆっくり歩いていく。このままでは壁にぶつかる――と思った瞬間、壁の一部に僅かな線が浮かび上がり、そのまま長方形を形作った。
横方向に扉の形に開いた壁のその先を、骸骨はガチャガチャと歩いていく。そして奥の部屋に入った後、入り口の脇へと道を譲った。
そのまま門番よろしく中央を向いて剣を構えると、その白骨の案内役はピクリとも動かなくなった。

「おお～っ、これでもういいのか～？」
「やっぱりここが最後の部屋か」

ちょっとしたカラクリに一行が感動し、安堵の息が漏れる。
最後のお宝を前に、その番人か何かである怪物でも襲ってくるのではないかと思っていた彼らは、安心して構えていた武器を下ろした。
開いた扉の奥に見える、こじんまりとした机とその上にある物が目に入り、イセルが近寄っていく。

「……お、あれ何だ～？」

体だるいガスを受けていた影響もあったのかもしれない。いよいよ最後の部屋だと浮かれていた部分もあっただろう。罠に対する警戒心が緩んでいたのも否めない。
いつもなら誰かが気付いても良さそうだったある物に、一行の誰もが気付かなかった。
それでも最初に気付いたのは、途中から出番が急減少したベルだった。

「ちょっ……待っ！」

彼女が見つけたのは、不自然に頭上と足元に張ってある紐の一部だった。

バッシャーッッッ！

「！！！」
「うっぎゃあああぁっぁぁぁぁぁっ！！！」

イセルの頭上から大量の液体が降り注ぎ、辺りには大量の蒸気が舞い上がった。

第４３話　最後の仕掛け

「あぢっ！あぢぢぢっっっ！！！」

その叫び声から、他の面々は熱湯かと思った。だが、それは彼に近付いた途端、間違いだった事に気付く。

濛々（もうもう）と上がっている水蒸気だと思った物は、何らかの刺激臭がするガスだった。多少なりとも知識のあるスプとベルには、おおよその見当は付いた。

「――酸かっ！？」

「みんな、触っちゃ駄目よ！」

慌てて自らの鼻と口を塞ぎ、無情にも駆け寄ろうとする他の面子を手で制するベル。

触ったら火傷をしてしまう性質の物なのだろう。イセルの悲鳴からも推測ができた。となると、下手に触るのはまずい。

イセルの方は――？

「早く、さっきの泉に！」

咄嗟に記憶にあった景色を思い出し、彼に伝えるベル。あれがただの水であれば、冷やすのと酸を洗い流すのにちょうどいいはずだ。

彼女がそう伝えるや否や、イセルは最も大量に酸を被った部分である頭を押さえながら、泉へと駆けていく。一行は道を空けて彼を通した。

しばしの後、少し先からジャボンという音が響いてくるのが聞こえ

た。

＊

「わ、私の努力が足りないせいね……」
「く……くく……」
「ちょっと、わ、笑っちゃ可哀想ですよ……！」
「そういうお前だってにやけてるじゃ……プッ」
「う～む、これ以上は無理そうじゃの……」

まるで温泉にでも浸かっているかのように、のびのびと手足を広げながら、イセルは頭から獅子の口から垂れ流される水を浴びていた。
意外にも、この水には治癒効果があったらしい。最初は酸を浴びてかなり火傷したり、爛(ただ)れてとても見ていられないほどだった彼の皮膚が、今はもう元通りになっている。
だが、彼を見ている周囲の反応を見れば分かるとおり、元には戻らない部分もあるのだった。

それまではかなり極楽そうにしていたイセルだったのだが、仲間の反応とその視線の向かう先が気になって、その手でもって確かめてみた所、その違和感はすぐに発見される事となった。
……確かに、何だか今までとは感覚が違う部分が一つだけある。

「か……髪が無い……！」
「……」
「……ま、眉毛も！」
「……！」

もう我慢していられないとばかりに、他の全員が一斉に後ろを向いて顔やお腹を抑えている。

……悪いとは思うのだが、超真面目にショックを受けている劇画タッチのつるっぱげで眉ナシのイセルの顔を見ると、腹の底から込み上げてくる笑いを止める事はできないのだった。
そして、その事に気が付いてこの世の全てが終わったとでも言うような顔をしている彼の表情を見ると、またさらに腹の底のその下から込み上げてくる物を止める事はできなかった……。

＊

『ここはハズレだ。足元を見つめ直してからまた来るんだな』

机の上には、一通の封筒が乗っているだけだった。
そしてその中に入っていた一枚の紙切れには、ただその一文のみが素っ気ない字で綴られていた。

「はぁ……」
「出家の道もありますよ？」

イセルが無気力に溜息を吐いたのは、その手紙の差出人が『バルディス』ではなく『ガルディス』になっていたからなどではなかった。
一応おっさんに勧められるまま、念のために首から上全てに包帯をグルグル巻きにして、とぼとぼと入り口へ戻っている彼とそれをできるだけ見ないように先を歩く一行。

「グラムルよ、別に司祭はつるっぱ……剃髪する必要はないんじゃぞ？」

慰めだかなんだか分からないグラムルの言葉に、これまたフォローだか何だか分からない言葉を重ねるおっさん。
どうにもやり切れなさを感じるイセルは、一人俯きながらゴニョゴ

ニョと何事かを呟いていた。

「こうなったら、炎が吹き出る剣で東の国の伝説の人斬りと戦うしかないか……ブツブツ」

「……お、あれ？お前たちもう終わったのか？」

本当に庭先で焼き芋を焼いていたハルミトンが、玄関から出てきた一行を見て声をかける。……ちょうど芋はいい具合に焼けた頃合だった。

一人さっきの手紙を持って依頼人に説明を始めるスプを放っておいて、玄関の前にある石段をしげしげと調査し始める他のメンバー。唯一イセルだけは、燃えている焚き火に向かって近くの小枝をポイポイ投げ込み始めていたが。

「なるほど。事情は大体分かった……が、一体どうしたんだこいつは？」

「ああ、ほっといていいですよ。そのハゲは」

「……ハゲ？ん、それにお前のその顔……」

「い、いや！これも大したことは無いので……大丈夫です……」

顔を逸らし、若干スプの表情にも影が差したのには、どうやらあまり触れないほうがいいようだ。

屋敷に関する事情は分かったようだが、完全に鬱状態になっているイセルの事情が分からずに首を傾げるハルミトンだった。

それを聞き返す前に、スプはイセルが投げてくる火が燃え移った小枝から逃げ回り始め、石段を調べていたメンバーが地下へと続く階段を出す仕掛けを発見したために、質問の答えはうやむやのままになってしまった。

ともかく、これがどうやら最後の一仕掛けのようだと知ると、ハル

ミトンは焼き芋を中断して彼らと一緒に階段を降りて行ったのだった……。

＊

団体が去り、静かになった屋敷の前にて。
そこには、一人焼き芋の跡を始末する男の姿があった。

「……どうだった？トラッド」
「――お前か。ああ、さっき戻っていった所だ」
「そうか、手間をかけたな」
「……何と言うか……賑やかな……奴らだな」
「やっぱりか。他には？」

「ん～……、わけが分からん奴らだ――というのが正直な所だな。いくら調整したとはいえ、あの館をこんなに短時間で戻ってきた奴らは初めてだ」
「……なるほど」
「調整したせいで、解除するには手間がかかるが、発動してもそんなに痛手（ダメージ）は無いという罠（トラップ）を見抜いていたのかも知れん。または、無理に解除しようとするとさらに酷い罠が発動する部分を見抜いたか……どちらにせよ、解除した方がいいか発動させた方がいいか、最も効率のいい選択をしてきたのは確かだな」

「大抵の人間は『伝説の盗賊の館』ということで慎重になりすぎて失敗するんだがな」
「……かと思えば、一番簡単かつ一番致命的な罠の≪酸（バケツ）の雨≫を被ってるし……わけが分からんな」
「ふ～ん……」

「それに……」
「何だ？」
「……いや、何でもない……」

（やたらと金銭交渉に凄みがあった……）と言うのは、黙っておく事にした。

「芋、食うか？」
「ん……うまいな」
「ああ」

チュンチュンと小鳥がさえずる程好い昼下がりの日差しの下、二人の男だけが黙々と焼き芋を頬張って佇んでいた……。

第４４話　戦士の憂鬱

「あ～あ～、結局前回は大した仕事じゃ無かったよな～」
「そうね～、何だか妙に疲れたわ私」
「あの手の仕事はどうもワシらには向いとらんみたいじゃな」
「そうですね～。おかげでまだ一人、ダメージから回復できてないみたいですし……」
「イセル～、大丈夫～？」

馬車に揺られながら、彼らはいつものように雑談をしていた。
現在、とある場所に向かっている途中の街道の上である。

シャルルにまで慰められ始めたイセルは、前回の仕事以降、人格が変わってしまっていた。
包帯グルグル巻きはさすがにやめ、今は砂漠を歩く時の格好であるターバンを頭に巻いている。元々砂漠の近くで暮らす民のような服装をしていた彼には違和感は特に無かったが、トレードマークであった金髪が今はどこにも見えないというのは少し残念かもしれない。

ちなみにスプは、もうすっかりヒゲは無くなり、病気の心配も薄れたようだ。
……シャルル辺りはかなり残念がっていたが。

結局、大盗賊バルディスなどではなく、変わった魔術師ガルディスの物だったという話の前回の館には、財宝など隠されてはいなかった。
隠されていた地下への階段の先にあったのは、ガルディスの残した自伝……というか日記のような物だけだった。

一応、あれだけの屋敷を作った魔術師だったので、文献から役に立つ情報があるかもしれないとハルミトンが魔術師ギルドに本を持ち込んでは見たらしいのだが、つい先日聞いた情報によれば、そう大した物ではなかったらしい。
一応、多少の金にはなったと言うことで、約束の報酬は支払っては貰ったのだが、「これで幹部になり損ねたぜ……」と残念そうに帰っていくハルミトンがちょっと気の毒になった一行だった。

まあそれよりも、もっと気の毒な人間が彼らの目の前にはいるのだが……。

「イセルさん、あなたに耳寄りな情報を仕入れてきましたよ?」

屋敷から帰って数日後、そう言ってカシューナが話し出したのは、とある魔術師の話だった。
カシューナの知り合いに、変な品物ばかりを作っている魔術師のじいさんがいるらしい。
そのじいさんは、何やら怪しい薬なども色々作っているらしく、その中に体毛を変化させるような物もあったとか。
なのでその魔術師に相談してみれば、彼用(イセル)の毛生え薬も作ってもらえるんじゃないか?という心遣いもあったようだ。

一応、前回の依頼を持ち込んできたカシューナとしては、気に病む所もあったらしい。
屋敷の中の数人からは、「何だか静かになってつまらないわねぇ……」という意見もあったりしたためで、……まあ逆に「落ち着いていい」なんて意見ももちろんあったわけだが。

「知り合いってことは、カシューナさんも一緒に行ってくれるんですか?」

「……いえ、私はちょっと用事があるので。すみませんが皆様だけでお願いできますか？　私の名前を出せば通じるはずですので」

ということで彼らは今、カシューナの知り合いの魔術師のじーさんの所へ向かう旅路の途中なのだった。

「あーあ、また鎧買い替えかよ……」

そうぼやくイセルは、前回からさらに模様替えし、鉄鱗鎧（スケールメイル）を身に付けていた。

前回の嫌な記憶、あの酸の罠を被った際に、鉄鎖鎧（チェインメイル）がボロボロに錆びてしまったからだ。肉体的なダメージだけでなく、精神的なダメージを受けたのに加え、さらに懐にもダメージを受けるという散々な出来事だった。

通常の冒険や依頼であれば、なかなか鎧を買い換えるタイミングなど無い。

前回や前々回のような特殊な状況さえ起こらなければ、日々の整備で何とかなるような物なのだ。

もちろん店頭に並んでいる鎧は、それを見越しての値段設定になっている部分もあり、おかげでイセルの懐はほとんどすっからかんになってしまった。

思わず視線が腰の魔剣（ティルヴィン）に向かい、ティルヴィンが汗？をかいたのも頷ける話だと言えよう。

物凄く気持ちの分かるグラムルには、残念ながらかける言葉が見つからなかった……。

＊

魔術師のじーさんが住むという塔には、北にある洞窟を通って行か

なければならないようだった。
因縁の≪貝の遺跡≫よりさらに東、ポルトヴァから見て北東のドワーフの街方向へと向かう途中に、塔へと向かう細い道が延びているそうだ。
その洞窟まで来れば後はそんなに遠くなく、半日もかからないだろうということから、何事も無く洞窟に着いた後、一行は付近の開けた場所に馬を繋いで馬車を茂みに隠すと、徒歩で洞窟の中へと足を踏み入れた。

光の世界から一転、辺りは闇に包まれる。
先頭を進むグラムルが松明を灯した。いつもならそれはイセルの役目なのだったが、テンション低い彼が動かなかった事から、ちょっと気を使って代わりに彼女が担当を変わった。
油が燃える臭いと、煤が混じった臭いが一行の周囲に漂う。代わりに闇の世界に薄ぼんやりとした灯りが広がっていった。

補助的にシャルルが光の精霊を呼び出すと、視界がかなり開けた。
しかし、精霊の光でも壁や天井は見えない。少し辺りを飛び回らせて確かめてみると、洞窟はかなりの大きさだということが分かった。
まるで、ドラゴンが住んでいてもおかしくないほどだ。
誰かが蹴飛ばした石の音が、反響して遠くから聞こえてくる。その音から確かめてみても、珍しいほどにかなりの広さを持った洞窟だと言えるようだった。

折角明かりを灯した彼らだったが、大きさの割にはそれほど長い洞窟ではないらしく、それほど進まないうちに出口と思われる太陽の光が遠くに見え始めた。
安堵した一行が少し足を速める。

「何か、ホントにドラゴンでも住んでそうでしたね……」

そうグラムルがポツリと言った時だった。
――突然、周囲の空気が変わったのが分かった。
小さめの地響きと大型生物の息遣い。相当な頭上から響いてくる呼吸音は、否応無しに彼らの緊張感を高まらせた。
石が蹴飛ばされてガラガラと転がる音で、『何か』が近付いてくるのが分かったが、問題はその『石』が、彼らにとっては『岩』だと言ってもいい大きさの物だったという部分だ。
最初、灯りに映ったシルエットは、大きすぎて誰もその全容を確かめる事はできなかった。シャルルが精霊を動かしてみて、初めてその全容が分かり、その場にいた全員が息を呑む。

……一行の前に現れたのは、噂をしていたドラゴンだった。

その姿を目にした一行は、武器を抜いて構える。……って本気か？
ドラゴンだぞ？君たちには到底かないっこ無いんじゃないの？
そう心配する誰だか分からない視線のことなど気にせず、黙々と戦いの準備を始めた一同。

「――よし、行くぞ」

その声と共に動き出す一行。
シャルルが新たに呼び出した闇の精霊をぶつける。
ドラゴンは怯んだ。
ベルが弓を放つ。……普通に当たって悲鳴を挙げるドラゴン。
それを見た他の面々も、一斉に踊りかかっていった……。

第４５話　池のほとりの塔

……しばらくの後、彼らの前には横たわる一匹の【大蜥蜴（ジャイアントリザード）】の姿があった。

「こいつがドラゴンの正体か」

「ふぅ……。分かってたけど、やっぱりガッカリですね」

実は、ドラゴンは幻影で誇張されていたこのトカゲだったのだ。

その事を事前に彼らはカシューナから聞いていた。

「彼はかなりの偏屈な人物ですからね。普段は人払いをしています。洞窟の終わりには巨大なドラゴンが現れますが、幻影で変化させられたただのトカゲですから。遠慮なくやっちゃってください。それが通行証代わりです」

その台詞を聞いていなかったら、間違いなく騙されていたに違いない。

現れた竜は、それほどのリアリティを持って存在していた。思わず、幻影だと分かっていても怯んだほどだ。

これほどの幻影を作り出せるのであれば、かなり腕のいい魔術師である事は間違いないだろう。

ちょっとイセルの期待は高まった。

「でもまあ、ただのトカゲだったとしても、何かドラゴンを倒すってのは達成感みたいなモンがあるのう」

『――あーあ、トカゲかよ……』

そういうおっさんと頷く面々。
唯一不満そうだったのはティルヴィンだけだった。まあな、冒険者としてはな。
こうしてまんまと気分だけでも竜殺し（ドラゴンスレイヤー）になった一行は、洞窟を出て、再び光の世界へと戻ってくることになったのだった。

＊

薄暗かった洞窟の中から外に出ると、眩しい日の光が彼らを照らす。
もう時刻は昼に近くなっていた。焼け付く太陽の眩しさに目が眩み、思わず彼らは手で日除けを作ってかざす。
その目の先には、森から突き出た人工的な建物の姿が映ってきた。

完全に洞窟から外に出ると、開けた視界の先に、ちょっとした塔がそびえ立っているのがはっきりと分かった。
それほど大々的な物というわけではなかったが、おそらく四～五階建てには匹敵する高さで、特に目立つわけでも無く、ひっそりと森のほとりに建っていた。
塔の近くには小さな池もあり、思わずお弁当を食べたくなるような眺めのいい所だ。
壁には年季の入ったツタも絡んで繁茂しており、人工物であるながらも、いい具合に周辺の風景に馴染んでいた。

一行はそのまま塔を目指して進み、程なくして根元まで辿り着くと、辺りを観察してみる。
建物の周辺はちょっとした広場になっていたが、そこに人気は無かった。
ただ季節に合わせた色とりどりの花が咲いており、同じく色とりどりの蝶々も優雅に飛び回っている。
遥か昔に打ち捨てられた遺跡というのは、きっとこんな感じなので

はないかとグラムルは思った。

ぐるりと回って、塔を観察してみる。
塔には最上階の辺りに唯一窓があるのみで、他のどこにも外と通じる部分はないようだった。
他には何も無く、唯一彼らの目の前にある大きな両開きの扉だけが、塔の内部へと入るための入り口らしい。
扉には特に飾り気のないノッカーが付いていたので、一応イセルがそれを叩いてみる。
すると、少しの間が空いた後、どこからか声が聞こえてきた。

『――何じゃお主らは。何か用か』

めんどくさそうかつぶっきらぼうに響いてきたその声に、一行は少しだけ面食らいながらも返事をした。

「カシューナさんから紹介されてきました。……ちょっと相談したい事があるんですが……」
『――カシューナ？……ラカーサ家のか？』
「そうです。そのカシューナさんです」
『――……ふん、そうかい。ワシは忙しくて手が離せん。勝手にそこから入ってくるが良い』

控え目にも歓迎されているとは言い難い台詞の後、先ほどまでは彼らを拒んでいた扉がギギギィと開く音がする。
と同時に、条件反射で少しだけ身構えていた、彼らの視界が大きく開けた。
塔の中は、一階まるごとが広場になっていた。

そしてその広場の真ん中には、赤青黄色の三色に塗り分けられた魔

方陣と、同じく赤青黄色の三色の扉。
しばらくの間、それを見た彼らは色々と考えてみたが、浮かんできたのは？マークばかりだ。
思わずお互いに顔を見合わせた彼らと、唯一口元に笑いを浮かべるイセル。

「……勝手に入って来い、ね。分かりやすくていいじゃねーか」

ようやくいつもの様子に戻った彼が呟くと、彼らは塔の中に一歩を踏み出したのだった。

第４６話　赤い扉

一行はまず、赤の扉から調べてみる事にした。
まさか自分から招いておいて罠を仕掛けているとは思えなかったが、前回の教訓からベルがまず調査を開始する。……若干イセルは罠恐怖症になっているようだったので。
しかし、扉にはノブは付いているものの、鍵穴などはない。交替したスプが、扉に魔力を感知した事から、おそらく魔法的な仕掛けが施されているだろうという結論が出た。

イセルがおどおどして扉を開けたがらなかった事から、代理でおっさんが扉を開け――ようとしてノブに触った瞬間、一行の視界が変化する。
どこか別の部屋に飛ばされたのだと理解する間もなく、彼らは戦闘準備をすることになった。
目の前には、五匹の【巨大蟻（ジャイアントアント）】が、ギチギチと大顎を鳴らして待ち構えていたからだ。

「大層な歓迎みたいだな」
「カシューナさん、実は我々に罠仕掛けてるんでしょうか？」

罠にはあんなに怯えていたイセルだったが、こうなったら話は早い。口を開くよりも早く体が反応し、剣を抜いて巨大な虫へと踊りかかっていった。もちろん、他の面々もそれに続く。
以前、森の中で数匹のはぐれ大蟻と戦ったことがあったため、その実力は大体分かっていた。塔の中での最初の戦闘という事もあり、まずは魔法の援護は節約だ。後衛の魔法部隊は暇を持て余す事となった。

前に出たイセルとグラムルが二匹、中列にておっさんが一匹を受け持つ。
突然の戦闘で意表はつかれたものの、すぐに意識を切り替えて応戦したイセルは、ティルヴィンの一閃を右にいた蟻へと向けた。
そこそこ硬い外骨格を持つはずの蟻もティルヴィンの鋭さには敵わず、一瞬で真っ二つになってカサカサと足を動かすばかりだ。……
横を見ると、全体重をかけた一撃が決まったグラムルも、一匹を倒している。
おっさんは先手を取られた蟻の一撃をうまく受け流し、反撃へと移る所だった。

イセルの前のもう一匹は、隣の蟻が真っ二つになったのも気にせず、その鋭い顎を見せ付けるように彼へと噛み付いてきた。が、それを全く気にせずに、イセルはわざと左手で受ける。そしてそのまま左手をうまく固定し、蟻が逃げられないようにした所を横からティルヴィンで串刺しにした。そのまま腹の下まで剣を裂く。……程なくして二匹目の蟻も動かなくなった。

『――虫は……味がないリンゴ食べてるみたいなんだよな……』

リンゴを食べた事があるのかどうかは分からないが、ティルヴィンがそうぼやくのが聞こえた。

グラムルが相手をしたもう一匹には、後ろから飛んできた短弓の矢が腹部に刺さる。……前よりも命中率が上がってるな、とグラムルは思った。
その隙を逃さず、手にした大剣を思いっきり叩き付ける。切れる――というよりは叩き潰されるような感覚で、二匹目の蟻は動きを止めた。ぺちゃんこになった蟻には気の毒だが、この感覚は結構爽快

で病み付きになるのだ。

「――よっし！」

「みんな、大丈夫か？」

後ろを振り返ると、おっさんが蟻の頭と腹をドラマチックに生き別れにした所だった。……残念ながら、離れ離れになった二つのパーツは、あの世で再会するしかないだろうが。

何故かその横で杖（スタッフ）を持って攻撃しようとしていたスプはきっぱりと無視する事として、気を抜かず周囲を見回してみたが、こいつら以外の気配は感じられない。

……どうやら敵は倒したようだった。被害はほぼ無いようなので、ホッと一息を吐く一同。

全員が戦いの途中からは気付いていたのだが、その部屋には奥にまた一つ扉が設置されていた。

近付いたベルが、さっきと同じような物だと判断した事から、今度は全員が戦闘準備をしてから扉を開ける。

まあ実際はノブに触っただけなのだが、今回も同様、いきなり別の部屋に転送されたようだ。

一行の目の前には、【大百足（ジャイアントセンティピード）】が三匹現れた。

「ややややっ！早く何とかしてっ！」

「こーゆーのも駄目なのか？森にいるだろーがよ普通に……」

取り乱すベルを横目で見ながら、おっさんも含めた前線担当の三人が前に出る。……まあ確かに男の目からでも、どこからどう見ても可愛いとかは思えない容姿をしているが。特にあの波のように動く多数の足。

回復がしやすいように、おっさんを真ん中に挟んで一対一が三組で

きる。ドワーフの背の高さならば、ムカデが起き上がった時に弓で狙うのにちょうど良かった。ベルの嫌悪感はその命中率と比例するのか、ほぼ百発百中に近いぐらいに新しくムカデの足を増やしていく。

……あらら、真ん中のが最初に倒れて動かなくなってしまった。ほとんどおっさんは防御していただけだ。

イセルの方はと言えば、大顎で食らいつこうとしてくるムカデに対して、二刀流の片方でうまく受け流しながら、もう一方で器用に一本ずつ足を切り落としていく。十数本目を落とした時に、うまく起き上がれない頭に対してティルヴィンを突き刺し、ムカデはその動きを止めた。

『――また虫か……』

ティルヴィンの呟きには、もはや誰も耳を貸していない。

グラムルの方は、相手と攻撃方法が似ているからか、膠着状態だった。振りかぶって叩き付ける大剣に、頭を持ち上げて食らいつこうとするムカデがぶつかる。十分に勢いが乗っていないので、致命傷にはなっていなかった。

何度目かの打ち合いの時に、疲れからかグラムルのバランスが崩れ、前のめりによろける。その隙を狙ってムカデは襲い掛かってきた。辛うじて身を捩ったが、肩口に牙がかすめて出血する。

そのままムカデは横に頭をなぎ払い、直撃を受けたグラムルは横向きに転倒してしまう。追い打ちを予測したグラムルは、倒れたまま剣を正面に構えて衝撃を緩和させようとするが、……その追い打ちは襲ってこなかった。

ゆっくりと身を起こすと、おっさんがその身の丈ほどもある斧を叩

きつけ、またしてもムカデの体を綺麗に半分ずつ生き別れにさせた所だった。

「助かりました……」
「今日はなんだか斧が走っとるわい」
「おっさん、珍しく大活躍じゃねーか」
「ほっほっほ」

満足気なおっさんを適度にほめ殺しつつ、一行は次の扉へと向かった。

第47話　飲まれる者

さてお次は。
【巨大毒蛙（ジャイアントポイズントード）】二匹の登場でした。

慌てず騒がず、二手に分かれて早急な対応をお願いします。……はい、了解しました。
そんな感じに粛々と応対する前衛。魔法使い陣は非常に退屈そうだ。
だがまあそれはそれでいいのかもしれない。

少し毒々しい色をした二匹のカエルは、どうやって攻撃してくるのかと思ったら、突然飛び上がってイセルに向かって圧し掛かってきた。
上からの攻撃を想定していなかったイセルは、転がりながら何とかそれを避ける。しかし立ち上がる前に、カエルが伸ばした舌に右足を絡め取られ、噛みつかれてしまう。

「――ぐっ！」

カエルに噛み付かれても大したことは無いかと思っていたら、何だか足に焼けるような痛みが走る。
危険を感じたイセルはティルヴィンで切り払おうとしたが、すぐに逃げられてしまい、浅い傷しか負わせる事はできなかった。
自由になった足を見てみると、破れた布の下の皮膚が赤く腫れており、ヒリヒリと痛んだ。

「毒を持ってるぞ、気をつけろ！」

実を言うと、この時まで彼らは毒ガエルだということは知らなかっ

た。……スプがただの巨大蛙だと思っていたからである。
前回の教訓からも、やはり出会う怪物に対する知識は非常に重要であると悟った一件だった。

イセルの声を聞き、近付こうとしていたグラムルとおっさんの足が一瞬止まる。その隙を狙ったのかどうかは分からないが、もう一匹のカエルが動いた。
グラムルが「あっ！」と思った時にはもう遅かった。大剣を持つ両手首が、カエルから伸びてきた舌に絡まれる。
その射程距離は想像以上だった。もしかしたら、ここから後ろにいるメンバーにだって届くかもしれないと思わせるほどの。

自らの身長に届きそうなほどの大きくて重い剣を持ち、それで普段からのバランスを保っていたグラムルには、突然引っ張られる力に抵抗する自重は残っていなかった。前のめりに倒れた後、そのまま引きずられてカエルの口へと近付いていく。そして……。

……パクッ。

喰われた。

「ぎゃあああぁ～っ！！！」

……初めて本気の彼女の悲鳴を聞いたかもしれない。
その声に驚いて、発信元へ目を向かわせた他全員は、カエルの口から人間の足が生え、そしてそれが元気にバタバタと暴れる姿を人生で初めて目にすることとなった。きっとグラムルは、ハエの気持ちが痛いほど分かった事だろう。
唖然としたのは一瞬の事、早く何とかしないと窒息する恐れがある。
その事を瞬間的に悟った面々は、もう一匹を放置したまま慌ててグ

ラムルの救出に奔走することとなった。

まずは近くにいたおっさんが戦斧を叩きつけてグラムルを吐き出させようと試みる。だが、カエルはそれより一瞬早く跳躍し、その攻撃を回避した。

しかし体内にもう一人分の重さを背負っているため、それほどの距離を跳ぶ事はできなかった。着地点に素早くイセルが駆け寄り、剣を振る――が、中にグラムルがいる事を考えてつい手加減してしまう。その結果、与えた傷はまたしても浅かった。

代わりに続く攻撃で足元を傷つけ、逃げられないようにする。もう片方の足には、同じタイミングでベルの矢が刺さっていた。

動けなくなって地面に倒れこんだカエルｗｉｔｈグラムルに、後ろからおっさんが駆け寄ってくる。

そして「バチコン！」と斧の側面で後ろから思いっきりぶっ叩かれ、カエルｆｅａｔ．グラムルはカエルとグラムルに分離される事となった。

吐き出されたグラムルは、唾液まみれの上、見える範囲の皮膚が赤く腫れつつある。さらに精神的なショックのためか、その場にのべ～っと倒れたままだった。が、

「早く逃げんと、また食われるぞい！」

おっさんの叱咤の声にビクン！と跳ね起き、慌てて自分の剣を取りに行ったのだった。

その間に、グラムルを咥えていたカエルはイセルがティルヴィンで貫いており、気付けばもう一匹はスプの魔法の網で絡み取られている。……その周囲には闇の精霊も浮かんでいた。

残った一匹をスプが一人で叩きのめしている間に、イセルとグラムルの傷を治療するおっさん。
幸い大したことはない傷だったが、残念ながら毒による腫れは引かず、グラムルの顔はカエルの頬袋のように膨らんだままだった。

「……カエルの呪いだな。プッ」
「……カエル女？」
（む～っ……）

前回のお返しにと、ここぞとばかりに暴言という魔法を食らわせるイセルとスプ。何だかちょっとだけ気分がスッキリした顔をしている。
冒険者に女だとかそんなのは関係ねーぜ！と言わんばかりだった。

「しばらくカエル恐怖症になりそうです……」

顔を真っ赤に腫らせたまま、グラムルは残念そうに呟いたのだった。

第４８話　もがく者たち

「よし、次行くか」

後始末と準備も終了し、若干一部のチームワークに溝ができつつも一行は次の部屋へと進む。

そこに現れたのは、四匹の【巨大蛇（ジャイアントスネーク）】だ。

今度はイセルを中心にして右をグラムル、左をおっさんが固める布陣で迎え撃った。

四匹の蛇は、それぞれシュルシュルと二股の舌を出したり引っ込めたりしながら向かってくる。しかし各一匹ずつは部屋の壁沿いに向かってきたため、両翼の二名は壁沿いへと向かわなければならなかった。

その代わりにシャルルが闇の精霊（シェイド）をイセルの元へと向かわせる。ベルは回復役も務めなければならないおっさんの援護だ。

相手の数が多いことから、スプは≪魔法の楯≫、おっさんは≪神の加護≫を発動させた。

まずはいつも通りイセルの戦いから見て行こう。

シェイドが参戦したとは言いつつも、足止めには向いていない精霊のため、彼は二匹を意識しながら戦わなければならなかった。確か、ヘビは生物の温度で相手を見分けているはずだ。そんな事を聞いた事があったので、精霊では蛇の足？を止める事はできないだろうと見越していた。

先ほどのカエルと同じように毒々しい体表の色をしたヘビは、まるで幻惑するように体を波打たせながら、時折頭を持ち上げて間合いを計っているようだ。片方はシェイドが牽制してくれているものと信じ、先手必勝で攻撃を仕掛けるイセル。

二刀流と言うのは、剣の扱いに慣れてしまえば、かなり有効な戦法だ。
特に動物系の敵に対しては、片方の剣を牽制に使い、もう片方で傷を付ける目的で使い分けることができる。ティルヴィンも、動物相手でさっきの虫たちよりはやる気になっているのか、心持ち鋭さが増している気がする。
噛み付いてこようとする頭を波短剣（クリス）で牽制しながら、ティルヴィンを走らせて何撃かの傷を与えた。……だが、まだ浅い。

イセルはまだ自分の体力に余裕がある事を確認し、大きく打って出る事にした。
……彼は体の前で二つの剣を交差させ、ヘビに向かって突進する。
それを感知したヘビの頭が、矢のように一直線に向かってきた。
その様子に考えるよりも早く体で反応したイセルは、波短剣（クリス）を頭に叩き付け、無理矢理方向を変えた。そしてその首筋に向かって右手のティルヴィンを力の限り叩き込む。
……手応えあり！

相手の勢いもあってカウンター気味に命中した剣は、首の骨辺りまで届いたはずだ。大きく血が吹き出し、それを被らないうちにすかさず体を引く。のた打ち回るヘビに止めを刺すため、再びイセルは突進した。が、その直後に横から強い衝撃を受ける――。
何とか踏み止まって見ると、もう一匹のヘビが横面から牙を剥いていた。
左手の上腕部と腰の後ろ辺りに鋭い痛みが走る。

（――ちっ、また毒かよっ――！）

相手がヘビという所から、予感はしていた事だった。幸いなのは、

蜘蛛のように麻痺毒ではない所だ。
傷口で何度か破裂する魔法の矢のような痛みに耐えながら、さらに数歩進んで彼は一匹目のヘビに止めを刺した。
……あと、もう一匹。戦士の仕事は忙しい。

次におっさん……いや、グラムルに行こうか。
先ほど大失態を見せた女騎士は、今度こそ慎重に間合いを計っていた。

（ヘビも丸呑みするけど、ベロは伸びてこないはず……）

一生懸命、記憶を辿って安全策を検討する。……うん、おそらく大丈夫だろう。そう考えて今度は攻撃態勢に入る。
現在、彼女は右の壁際に沿って進んでくるヘビと相対している。ということは右側は壁であり、十分なスペースは存在しない。なので、自ずと剣の振り方も考える必要があり、いつもに比べてぎこちない動きになってしまっていた。……まだまだ精進が足りないようだ。

上から振り下ろした剣がかわされ、今度はその勢いを利用したまま左から振り抜く。しかし、またしても回避されてしまった瞬間、彼女の両手に強い痺れが走った。……外れた剣が壁に当たったからだ。

（……つ～っ！）

思わず落としそうになった剣を何とか繋ぎ止め、構え直そうとする。だが、その一瞬の隙を突かれてヘビは攻勢へと転じたのだった。
グラムルは思わず見つめた。その顎が大きく開かれ、彼女の頭から太腿辺りまで一気に広がる。ついさっきの恐怖が蘇った時、体が勝手に動いた。

「いやあああぁぁっ！！！」

目を瞑ってしまったグラムルがその両目を開けた時、ヘビの頭は彼女の眼前で止まっているのが分かった。

……力の限り突き出した大剣は、ヘビの顎を突き破り、その後ろまで通り抜けていた。

一方、左側のおっさんはと言えば、ヘビとにらめっこが続いていた。本人はカエルよりは威圧感はあるだろうと思っており、実際そのせいなのかどうかは分からなかったが、今の所まだ襲っては来なかった。

さっきから二本ほどベルの矢が刺さっているのだが、当たり所が悪いからなのか、大して効いているようには見えない。

こうして、シルシル……と舌が出たり引っ込んだりしているのを見ているだけではしょうがない。素早い動きは得意ではないが、攻撃しなければならないようだった。

そうでなければ、いつ他のメンバーが援護に来て、目の前のこいつを倒されてしまうかも分からないからだ。

久々に戦いを満喫しているおっさんにとっては、この問題はとても重要事項なのだった。

というわけで、軽くフェイントを入れて近付いてみるが、全く聞いているようには見えなかった。……鈍い性格のヘビなのかもしれない。

しかし途中で戻るわけにも行かず、そのまま斧を担いで突進するおっさん。呆気なく、上方向に首を持ち上げ、その一撃はかわされてしまった。

続いてさらに連続攻撃を仕掛けようとした時、右方向から聞こえてきた馴染みのある悲鳴に驚いて、一瞬動きを止めてしまうおっさん。
……悲しいかな回復役の職業病か、脳裏に回復魔法のことが浮かんでしまったのだった。

気付いた時には頭上に影が迫っていた。
上を向くのは危険だと咄嗟に判断した事から、体を丸めて固くする。
――そこへ巨大な顎が降ってきた。

「リーダーッ！」

後ろから見ていたベルが声を挙げる。――今度はおっさんが、ヘビに食われていた。
……ん？

「の、のおおおおっっ！！！」

その声と同時に、ヘビの頭に丸呑みされていたはずのおっさんが、なんと斧を振り上げ自力で口から脱出したではないかっ！？
力いっぱい斧を持ち上げたおっさんは、その腕力でヘビの頭を二つに引き裂いていたのだった。
……それにしても、今日のおっさんは真っ二つにするの好きだな。
まあ、そういう日なのかもしれない。

またしても出番が無くなったスプは、行き場の無くなった呪文で残ったイセルの前の一匹に≪魔法の矢≫を撃ち、止めを刺す。
これにて四匹のヘビは全て倒すことができた。

「……なんか楽しくないな」

最後にスプがつまらなそうに呟いた。

第４９話　青い扉

赤の扉の奥、ヘビを倒した最後の部屋には、奥に一つ水晶球が設置されていた。
何の飾りも無いシンプルな台座の上に、手の平よりも少し大きめの水晶が乗っている。
それ以外には、何も見当たらないようだった。

「ふう……。これだけか？」
「そう……みたいですね」

一通り、各自の状態を確認し、おっさんが癒しの呪文を唱える。まだまだ問題なく、万全の状態が戻った。
一応全員の様子を確認した後、イセルは水晶球に触ってみた。
すると、水晶球は淡い光を放ち出し、一瞬だけ眩い閃光を放つ。
……思わず目をつぶった一同がゆっくりと目を開けると、そこは扉を開ける前の元の部屋だった。

周囲を見回してみると、先ほどとは一部分だけ変化している部分があった。
中央にある魔方陣のうち、赤い部分だけが先ほどの水晶球と同じような淡い光を放っていたのだ。

「……ん、何となく分かってきたぞ」
「うむ。……次は青じゃな」

うっすらとこの部屋と、その周りに仕掛けられたカラクリが分かってきた。

誰も口に出しては確認しなかったが、各色の扉の課題をクリアすれば、中央の魔方陣に光が灯る、という仕組みのようだ。
皆の準備を確認してから、おっさんが青の扉に触ると、一行の体はまた別の空間へと移動する事になった。

今度は何が出てくるのかと身構えていた一行だったが、転送されたその場所には、怪物（モンスター）の姿は無かった。
何も存在しない緩やかに右へカーブしている通路が延びているだけであり、何かが起きる気配も感じられない。

少しの間、警戒していた一行だったが、何事も起こらないのが分かると、隊列を組んで通路に沿って進み始めた。
どうやら塔の外周に沿って通路が設けられているようだったが、どこにも窓は存在しないようだった。
代わりに、外壁とは反対側の塔の内側に向いた方向のちょうど首の辺りに、小さな窓が取り付けられているのを発見する。

「……ん？何だこれ？」

それに気付いたイセルが腰を屈め、窓から中を覗いてみると、……そこには幼い赤ん坊の姿が映っていた。
意味が分からずにしばらく眺めていたが、目の前の赤ん坊（もちろん本物ではない事が雰囲気で分かった）は、ただ真っ暗な中をひたすら這い這いをしているだけのようだ。
彼はすぐに飽きてしまい、窓から身を離す。

「……何だった？」
「さあ？赤ん坊がいたぜ」
「へ？赤ちゃん？」

その言葉を聞いたベルが代わって窓を覗いてみたが、やはり見えた映像は同じようだった。
気になった他のメンバーも順番に覗いてみるが、一人として別の姿が見えた者はいなかった。
……これだけでは意味が無いのかもしれない。
彼らは先へと進んだ。

そこからカーブに沿って十歩ほど進むと、同じように窓が設置されていた。
今度は先に見てみたいとシャルルが懇願し、仕方なくイセルは抱きかかえて窓を覗かせる。
すると彼女は、素っ頓狂な声で驚くのだった。

「ありゃ？……シャルル（わたし）だ」
「ん？どれ。……あ、俺の子供（ガキ）の頃が見えるぞ」

横から覗いたイセルには、自分の子供の頃が映っているのが分かった。体のあちこちに擦り傷を作って、生意気そうに駆けている。
おぼろげにしか覚えてはいないが、間違いなく幼い頃の自分だった。
続いてまた順番に見てみるが、どうやら窓の向こうには、覗いた人間の子供の頃が映っているようだった。
となると、もしかしたらさっきの赤ん坊も自分の小さい頃だったのかもしれない。
確かめるためにおっさんとベルに聞いてみると、確かに赤ん坊のドワーフとエルフがそれぞれ見えていたとのことだった。

何となくカラクリが見えてきた一行は、また先へと進んでみる。
同じように現れた覗き窓は、今度は大人になった彼らが映るものだった。
窓の向こうを見ても、ただ一人だけを除いて「なるほど」とすぐに

窓から離れる。
なかなか離れなかった唯一の人間が、髪の毛がフッサフサに生えていた頃の自分を見てしまったイセルだったのは……まあどうでもいいことだろう。

程なくして最後の窓が現れる。
そのすぐ先には、赤の扉の奥で見た水晶球が同じように、沈黙したまま彼らを見つめていた。

まずは窓の奥を見てみる。今度は、老人になった自分たちが映っていた。
イセルは剣を付き、それ以外の者も斧や杖など、持っていておかしくなさそうな物を地面に付いて歩いている。
それが全員の証言を総合したまとめだった。

シャルルだけが面白そうに何度も覗いている横で、う～んと考え込む一行。
だが例によって答えは出ないので、大人しく水晶を触って元の部屋へと戻った。

……予想通り、魔方陣の青い部分が輝きを発していた。

第５０話　黄の扉

今度は誰にも何の怪我も無かったため、一息だけ吐いて次の扉へと手を伸ばす。
――黄色の扉から転送された部屋には、またしても門番らしき相手が一つだけ存在していた。

「【木偶魔像（ウッドゴーレム）】だ。わりと強いぞ」

スプらしく端的に説明した台詞を聞き、少し警戒を強める一行。
その後ろには例の水晶球が見えたが、危険を冒して触ってみるよりも、まずは目の前の敵を倒してからにしようという意識は一致していたようだった。

この部屋に転送された瞬間には、ただじっとその場に佇んでいたウッドゴーレムだったが、前衛の三人が人形を囲もうと動き出した瞬間、人間で言うなら目の位置に設置されている小さなガラス玉みたいな物に光が灯った。と同時に、フィィィィンという音が聞こえ、ゴーレムの両腕が上がる。

その時には既に、彼らは包囲を完了していた。おっさんが右、グラムルが左、そしてイセルが中央を陣取る。
……ちなみに、先ほどのヘビの教訓から、グラムルは左側がいいと主張した結果の布陣だった。彼女の持つ大剣は、右利きの彼女が振り回すためにも右側が空いていた方がいいのだ。

人型サイズより少し大きいだけのゴーレムには、挟み撃ちならともかく、隣同士の人間が同時に攻撃するような充分なスペースは存在していなかった。

そのため自然と、グラムルとおっさんが同じタイミングで攻撃し、下がった瞬間にイセルが前に出て攻撃をする、というパターンに落ち着く。

まずは移動様、グラムルが構えた大剣を叩き付けた。だがその一撃を、想像以上の速さで動いたゴーレムの右手が受け止める。

その両手は相当頑丈なのか、大した傷は付いていないようだった。

……その様子を見たスプが、≪炎上武器≫の準備を始める。

イセルは上がったままの右腕の下の隙を狙い、ティルヴィンを繰り出す。だが体を捻った――というよりも上半身のみが回転するような造りになっているらしい――ゴーレムが、もう一方の手を突き出してその一撃を止める。

すかさず左腕に持っていた短剣を振るい、上半身に攻撃を命中させたイセルだったが、あまりの手応えの堅さに顔をしかめる。

……見た所、小さく傷がついただけのようだった。

「……ちっ、堅ぇな……」

彼のその呟きは、前衛の他の二人への情報にもなっていた。

彼らの中で最も攻撃力の高い（＝馬鹿力の）イセルの台詞に、改めて顔を引き締める二人。

ようやく自分のポジションに辿り着いたおっさんが、戦斧を振り回した。

だが今度は、音も無くスライドしたゴーレムの動きによってかわされてしまった。……足の裏に車輪かなんかでも付いているのかも知れない。実際は違うだろうが。

ともかく、その一連の動きによって、目の前の木造人形は見た目以上の機動力と装甲を備えている事が分かった。

息を吐いた一瞬に、イセルの剣が炎を吹き出し始める。――≪炎上（ファイア）武器（ウェポン）≫。

武器≫の魔法が発動したらしい。
後衛のスプは、続いてグラムルの大剣に≪魔力武器（エンチャントウェポン）≫を行う。
……これで剣の切れ味はどちらも増したはずだ。

早速勢いづいて攻撃しようとした時、彼らの目の前の人形が突然、上半身だけで回りだした。
回転はすぐさま高速になり、突き出していたゴーレムの両手によってグラムルとイセルは弾かれてしまう。
唯一、おっさんだけが斧を楯にしてその場に踏み止まった。
バランスを崩して倒れこんだイセルとグラムルに攻撃が行かないよう、おっさんは再び攻勢に転じる。
渾身の斧の一撃は、ゴーレムの腰の辺りに命中し、結構な損傷を与えたようだ。

真っ二つとまではいかなかったものの、明らかに見て分かる傷を残し、ゴーレムは二、三歩後退した。その隙にイセルとグラムルは立ち上がる。軽くおっさんに礼を言いつつ、再び構えを取った。
ゴーレムはすぐに体勢を立て直し、強烈な一撃を貰ったおっさんに対して突撃を行う。それに対しておっさんは斧を構え、正面からそれを迎え撃った。ガゴッといい音をさせてぶつかり合う一体と一人。

しかしさすが頑強な体を持つドワーフのおっさんは、それでもビクともしなかった。その機を見てすかさず攻撃を行う他二人。
イセルはクリスで相手の腕の動きを抑えつつ、ティルヴィンで足元に一撃を見舞う。足首周辺に魔法の炎の焦げ目と同時に切込みが広がった。……意外とこういう細かい戦い方するんだよな、奴は。
一方でグラムルは真逆だった。思いっきり大剣を振りかぶると、何も考えずにその得物を力一杯振り下ろす。よくそれで外して痛い思いをするのだが、今回はおっさんが足止めをしてくれているおかげでしっかりと命中した。脳天に一撃を貰い、頭部が半壊するゴーレ

ム。
そのせいか、急に動きがおかしくなり始めた。
その機会を逃すまいと、おっさんは一気にゴーレムを押し返し、ふらついた所に再び戦斧の一撃を横薙ぎに払う。
太腿周辺に命中したゴーレムは、片方の足を折られ、呆気なくその場に転倒してしまうのだった。
最後に反撃をする間もなく、おっさんが半壊した頭部に向かって≪神の一撃（フォース）≫を放ち、ガガピーとかいう音を立てて、木製ゴーレムはそのまま動かなくなってしまった。

「すげーな、おっさん……」
「大活躍ですね……」

その鮮やかな戦いっぷりを見て、思わず呟く二人。
ベルなど、一発も矢を撃つ隙が無かったというのに。……まあ当たった所でダメージを与えられたかどうかは分からないが。
そう話していると、ゴーレムの頭部と手足が音を立ててバラバラになり、胴体だけが残る。
それに対して一行の注目が集まった時、胴体がまるで箱のようにフタが開き、彼らの前に中にしまわれていたらしい金貨が現れた。

おおっと驚きながらも一斉に集結した一行がその金額を数えてみると、胴体宝箱の中には、１３２５Ｇが入っていた。
どうやらその他には何もないらしいという事を確認すると、黄色の部屋を後にすることに。
そして水晶にて戻ってきた一行を、全ての輝きを取り戻した魔方陣が出迎えてくれたのだった。

第５１話　偏屈魔法使い

赤青黄色の衣装をまとい、カラフルにしゃしゃり出てきた魔方陣。
今やその全てが光り輝き、まるで何かを待っているかのように眩さを増していた。

「大抵の場合、こういうのは上に乗ってみればいいはずだぞ？」

そういうスプの提案を採用し、せーので魔方陣に乗る一同。さっきまでの経験から、少しだけ身構えた全員だったが、今度こそ目の前に怪物が居るような事は無かった。
またしても一瞬の浮遊感の後、目の前は別の部屋の景色へと変わる。
冷たい石に囲まれた、小さな何も無い一室。奥にあるただ一つだけの扉。
一歩踏み出した彼らの前で、扉は音も立てずに勝手に開き始めた。

「……よく来れたな、お主達」

扉の向こうの部屋から、老人のものと思われる声が響いてくる。
その声に導かれるまま、一行は部屋の中へと足を踏み入れたのだった。

＊

部屋の中は、魔法の灯りと唯一外から見えた窓から入る日光で明るく照らされており、思ったより快適な温度が保たれていた。
だがそれとは逆に、少し広めぐらいの部屋の中は、その大半が何だか分からないガラクタ……に見えるもので埋まっており、その部屋の中央にある古びた木の机には、一人の老人がこちらを向いて座っ

ていた。……片眼鏡の奥に見える瞳がギラリと光る。

「あまり人がこれないようにしておるのだ」

誰が問いかけたわけでもないが、年季の入ったローブをゆったりと身に付けている老人は、室内に入ってきた一行に向けて勝手に話し出した。

……その両手には、よく分からない物を持ったまま、一行には顔も向けずに何やらいじくり回していた。

「――で」

「頼むじいさん！毛生え薬を作ってくれっ！！！」

「な、なんじゃお主はっ！？」

「おい待てハゲ」

まるで瞬間移動の魔法を使ったかのように、一瞬で老人の机まで移動したイセルが、血走った目をしながら必死に頼み込む。

その勢いに負け、さすがに少々取り乱す老人。

イセルの襟首を後ろからがっしと掴みながら、交替して真面目モードに入ったスプが事情を説明しだしたのだった。

＊

「……なるほど。大体事情は分かった」

自己紹介の言葉すら口にせず、何らかの品物をいじっていた手を止め、チラリと彼らの方を一瞥して一言だけ呟くじいさん。

そしてその事をさして気にもしていないイセルたち一行もさすがだ。

しかし、じいさんはそのすぐ後にまた視線を手元に戻し、手の動きも再開した。

しばらく無言の時が訪れ、彼らが何かを聞きだそうとするぐらいの時間が経った時、じいさんは小さく口を開く。

「毛生え薬なら作った事はある。……じゃがな、生憎なんじゃが、これまでに作った物たちは全て、この金庫代わりの頑丈な扉の向こうにしまってしまったのじゃ」

それと同時に奥に一つだけある扉に目を向けた。一同もそれに釣られて視線を移すと、少し大きめの扉が奥に備えてあり、手元の取っ手の少し上辺りには、魔法の装置らしいギミックが仕掛けられているようだった。

イセルは完全に待ちきれないようで、じいさんが喋り終わるよりも早く、次の言葉を紡ぎだしていた。

「じゃあ開けてくれ」

「待て。それができるんなら最初からこんな話など持ちかけておらん」

「ということは……」

「んむ。開け方を忘れてしまったのじゃ」

「何ぃっ!?」

あんぐりとでかい口を開け、ショックをまるで隠そうとしないイセル。

多分、この世の終わりが近付いたような顔になるまであと数秒後だろう。

そこへのんびりとしたシャルルの声が割り込んできた。

「じゃあこのままでいいんじゃない?」

「「いや待て待て待て」」

じいさんも含めて二人同時に突っ込むイセル。そこだけは同じ気分のようだ。

……そこからしばらく、この開かずの扉を巡る攻防が行われる事となった。

折角ここまで来たというのに、壁一枚隔てた向こうにある物に手が届かないではやっていられない。

一同は、何とか扉を開ける方法を探り始めた。

勢い込んでイセルが尋ねる。

「おいじいさん！何か開ける方法はないのかよ！？」

「もちろんある。だが、それにはパスワードが必要なのじゃ。ふぅむ……、覚えておるのは、確か４桁の数字と３色の色。それをこの扉にある装置に入力すれば開くはずじゃったな」

「……４桁の数字？」

「そのヒントとなる鍵を、下の塔の中に隠しておいたのじゃが……」

扉にある仕掛けに目を凝らしてよく見てみると、確かに言った通りの３色のボタンと０～９までの数字列ボタンが取り付けてあるようだ。

おそらく、これに当てはまる数字を押す事で、扉は開くのだろう。

「……間違えると？」

「扉の防犯装置が働いてな。中の発明品とワシは瞬間避難できるのじゃが、この部屋は……爆発する」

じいさんの眼鏡が、何故か得意げにキラッと光った。

そこにすかさず突っ込むイセル。

「何でだよっ！！！……そんな無駄な装置付けやがって……」

「こんな貴重な品物、悪用するために狙ってくる輩がおるかも知れ

んじゃろうが」
「……絶対いねぇ」

『貴重な品物』という台詞に、一同は辺りのガラクタ……としか見えない物を見渡してみる。
マシな物では、お皿や靴といった日用品から。そしてキリのほうでは、くしゃくしゃに丸めた紙やボロボロのカゴ、そして放置された洗濯物っぽい物まで散乱していた。
思わず呟いたスプにはみんなが同意していたが、さすがにそれを口にする者はいなかったようだ。

（ホントにこんな所に目当ての薬はあるんだろうか……？）

そんな疑問が彼らの中に浮かんだが、一人真剣な顔をしているイセルを見ると、そんな言葉を口にするのはちょっと遠慮してしまう。
今回、他の者たちはほとんど道楽のような旅路に近かったのだが、唯一今回の問題は他人事ではないと、必死に考え込んでいるイセルが何やらブツブツと話し始める。どうやら、溺れる者は藁をも掴みたがっているらしい。

「４桁の数字ね……。心当たりあるか？」
「う～ん……」

全員で、苦手な頭脳労働に精を出す一行。だが、冒険者にとってこの手の謎かけはよくあることだ。
仲間内やギルド内で伝わっている噂などから、ケースやノウハウなどの情報は一応学んでいた。
それらを参考に、検討してみる。

「黄色は金貨の金額じゃない？」

「そうだろうな」
「１３２５Ｇだっけ？」
「えっ？そうだっけ……？」
「そうだよそう。スプ辺りがネコババしてなければ」
「してねーよ」
「ホントかよ。……じゃあ跳んでみろ」
「……ちっ、バレちゃしょうがねえな」
「ホントに盗ってんのかよ！てめえやる気あんのかっ！？」
「無いッ！！！」

イセルとスプの取っ組み合いを放置しながら、他人の塔の内部で軽く円を囲んで話し込む一行。
結局金額は上記の額で間違いないようだった。

もはやワイワイと話し始めた彼らの意識から、じいさんは置き去りにされている。
当のじいさんはといえば、何故か先ほどまでいじっていた品物を置き、熱心に議論を交わしている一同を興味深そうに見ていたのだった。

第52話　宝の扉

依然として、宝の部屋を前にした鍵開け会議は続いていた。

「青は何？あれ」
「赤ちゃんとか子供とか、老人とか？」
「ん～……、何か古い文献であったな。そういうの」
「私も聞いた事あります。足の数じゃなかったですか？」
「最初は赤ん坊？ハイハイしてたから4本か？」

冒険者たちの間で伝わる謎掛け（リドル）の解法は、時に噂話に耳を傾けていれば手に入るものもある。
映った姿の足の数が答えとなっている怪物からの謎掛けの伝説は、いつだったか聞いた事があるのをスプとグラムルは思い出していた。
一応教養があると言われる職業だけあるな。

「次が子供？2本って事？」
「その次も普通に歩いてたし、2本だよな」
「4……2……2……同じボタンって押せるのか？」
「……最後は？」
「3本じゃねーの？杖ついてたし」
「俺はティルヴィンだったな。ベルは？弓？」
「私は何か木の棒だったわよ」
「おっさんは斧？」
「うむ」
「……じゃあやっぱり3本か」

相変わらず熱心なイセルが進行役となり、青のボタンの答えはまとまったようだ。

全員の顔を見回して異論が無いのを確認した後、念のため整理してみる。
ちなみに分かっていないシャルルは、当然無視だ。

「４２３ってこと？」
「同じ数字もアリなのか？じーさん」
「確か大丈夫だったような気がするのぅ」

どこか他人事のような雰囲気を漂わせながら、とぼけたように返事をするじいさん。
その怪しさに若干の不満を感じながらも、すぐに次の議題へと話題を変えるイセル。
この久しぶりの謎々に興味が刺激されたのか、周囲も乗ってきたようだ。

「じゃあ残りの赤は？」
「やっぱり足？」
「足だとすると……」
「アリの６本、……ムカデ？ムカデって足何本？」
「まさか……１００本とかか？ボタンどうやって押すんだよ」

実際に数えたのかどうかは知らないが、一般的にムカデには足が百本あるという俗説が通っていた。

「それ以外はカエルの４本と……？ヘビって何本？」
「無いよな……ヘビには？」
「０ってことか？」
「えっ！？そうなの？１じゃなくて？」
「足は無いだろ」
「地面に立ってるものの数とかじゃないの？」

「何だよその答えが曖昧な問題は」
「だってわかんないじゃんかー！」
「そんなこと言ったら、カエルだっておたまじゃくしの合いの子みたいなのも一匹いたぞ？」
「ホントかよ！？」

白熱する議論。それぞれがそれぞれの意見を主張し、まとまらなくなってきた。
アリとカエルはまだいい、問題はムカデとヘビだった。
この二種類の生物の足の数を何本とするかで、一行がうーんと唸って考え込み、煮詰まってしまってからしばらくした時のことだった。
考えている振りをしながら、シャルルがうとうとし始めるのを横目で見ていたイセルが、鼻を摘まんでやろうとすると、逆の隣にいたスプがポツリと呟いた。

「ん？足の数なのか？……部屋にいた数じゃねーの？」

その言葉を聞いた瞬間、全員の頭の上に稲妻の魔法に似た光が迸った様に見えた。
闇をもたらす魔法が切れたかのような表情で、一斉に顔を上げる一同。

「……ん？」
「そうか……、そうかも！」
「何匹だった？」
「アリは……たしか５匹？」
「次はムカデだっけ？３匹いたよね」
「カエルは２匹だったな。グラムルが食われた奴」
「その話は忘れて～」
「お前ら真面目にやれよな。ヘビは何匹だよ？」

「そういうならアンタが考えなさいよ。４匹だってば」

急に話がサクサクと進み始める。いつだって謎が解けるときというのはそんな物だ。

一行は初めて村の外に出たときのようなワクワクした顔で、あーだこーだと再び話が弾む。

どうやら概ねこの解答で落ち着いたようだ。

「５３２４で合ってる？」

「本当か？」

「だから疑うんならアンタがやりなさいよ。ちゃんと扉も開けてよね」

「……」

いつもの調子でイセルに言い放ったつもりのベルだったが、返事に少しの間が空いた事で若干の違和感を感じる。

……もしかしたら、この前の事件のことを思い出してしまったのかもしれない。

また今回も罠があったらと、トラウマを刺激してしまったんだろうか？

前回の悲劇に対して、少なからず罪悪感を持っていたベルは、ちょっと申し訳ないような気分になった。

もう少し私に実力があれば……と彼女が反省モードになりかけていた所に、イセルの意外な声が聞こえてきた。

「む……まあ仕方ないな」

「ワシらは外に避難しておくから」

「普通にひでえな」

「大丈夫だ、俺は残るぜ！」

「まあ好きにしろよ」

（何か妙に素直ね……？）

思ったよりも何でもないかのように引き下がったイセルに対して、ベルは少しだけ引っ掛かる物を感じた。

が、それが何かと言う所までには思い至らず、結局イセルとスプを残して、安全策を取った薄情な他一同は、塔の外へと避難を始めたのだった。

「……」

他の一同が塔の外へと移動するだけの時間をたっぷり待った後、イセルは盗賊が屋敷に盗みに入る計画を立てているような顔でにやりと笑い、スプにこっそり頷く。

頷かれたスプは一瞬呆けた顔をしたが、そのすぐ後にニヤリ顔の意味する事を理解し、同じ顔をして頷き返した。

……とりあえず、二人ともとてもワルそうだ。

「おいスプ、いいか？おっさんたちが戻ってくる前に、あちこちに隠す所用意しとけよ」

「了解だ。何なら俺が≪施錠（ロック）≫を掛けるぜ」

「グッジョブだ」

それだけで男二人の意志は通じたらしい。

イセルは袖を少しまくって意気込みを見せると、扉の前に陣取った。

そして慎重にボタンを押す。

一つ一つのボタンを押すたび、仄かな魔法の光が灯るのが分かる。

そして程なくして全てのボタンを押した後、振り返ってスプの顔を確認した。

「よし、いいか？」

振り返られたスプも、無言で頷き、返事を返す。
イセルは前に向き直って、そろそろとドアの取っ手に手を伸ばした。

ガチャ
『ピー』

何だか妙に魔法的な音がした後、イセルが取っ手を捻ってみるが、動く気配は無い。
少し待ってみるが、どうやら扉には何の変化も無いようだった。

「……失敗したようじゃな」
「え？何で？なんか違うのか？」
「オイお前、順番違ってねーか？」
「ん？赤が『４２２３』青が『５３２４』黄色が『１３２５』だろ？」
「赤が『５３２４』じゃなかったか？青は何か赤ん坊とか爺さんとか映ってた奴だろ？」
「……。そういうのは先に言えよ！」
「言う前に開けるからだろ！」
「分かった落ち着こう。まだ一回失敗しただけだ」

緊張のあまりか、入力する数字を間違えていたイセル。だが相変わらずいつもの調子でやり合い、あまり反省している様子は無かった。
まだ後二回の猶予があるのだ。そうだ慌てる事は無い。
イセルは片手で取っ手を持ち、もう片手でボタンを押すために手を伸ばそうとした。

ガチャ

『ピー』

「なんでっ！？」

「あーそういえば、ボタン押す前に取っ手に触ると反応しちゃうぞい」

「だから先に言えって！」

「……」

「後一回じゃな」

もはや言葉を失うスプと、さすがに慌て始めるイセル。

何故か一番冷静なのがこの塔の持ち主であるじいさんなのだった。

「……」

「自動的に逃げれるのならじいさん開けてくれよ」

「それは無理」

にべも無く即答される。

「……くっ、仕方ないか。俺の毛のためなら……な」

いよいよ腹を括ったのか、イセルは観念してボタンを押し、三度目の手を伸ばした。

ガチャ

『ピー』

……そして、一瞬にして血の気が引いた二人の耳に、既に二度も聞いた無情な音が鳴り響くのだった。

第５３話　扉の中身

だがその音とは裏腹に、普通に手にした扉は開いたのだった。どうやら音は関係ないらしい。
ギギギ……という音は立てなかったが、彼らにとってはまさに迷宮の最後の宝物庫が開いたことのように見えていた。
奥へと開く扉の隙間からは、まるで朝日のような後光が差してくるような錯覚さえ覚える。

扉が全て開く前に、彼らの目がきらりと光り、そのまま恐るべき素早さで行動へと移っていた。

「とうっ！（ガサガサガサガサ）」

二人は加速魔法でも使ったかのような速度で、倉庫の中へと滑り込んでいった。

＊

「しまった！あいつら宝を独り占めする気だわ！！！」

塔の外でベルの叫びを聞いた他一同は、何だかわからないながらも『宝を独り占め』という台詞に反応し、それがただ事では無いという事を直感していた。

「あ、あいつらって！？」
「た、宝って！？」

驚いた後に、劇画のような表情でベルにその真意を尋ねるおっさん

とグラムル。
同じく劇画のように深刻な表情で振り向いたベルは、額から一筋汗を垂らしながら、今の叫びの真意を説明した。

「どうりで素直に引き下がったと思ったのよ、あんな事があった後なのに……。あの怪しい目の輝きは、間違いないわ」

ベルの推理によると、イセルたちが二人だけ残って扉を開けようとしたのには、どうやら裏があるらしいとのことだった。
安全策でここまで避難してきた彼らだったが、その事について彼が食い下がってこないのはおかしいと。
いつもなら、どうにかこうにかごねて他の誰かを身代わりにしようとする所なのに、何故か今回に限っては素直に引き受けていた。
もしかしたら自分の毛生え薬がかかっているのだから、渋々承知したのかと思っていたが、奴が果たしてそんなタマだろうか？と。

もし失敗して爆発が起こったのなら、外にいる彼らにもすぐに分かるだろう。……だが、もし開錠に成功したら？
扉が開いたことなんて、外にいる彼らには分からない。それこそ「なんとか開いたぜ～」とか言いながら、彼らが教えに来てくれるまでは。
……奴はそのタイムラグを狙っているのだ。

開錠が成功する方に賭け、もし開いた時にはその場に他の人間がいない事をいい事に、何か自分だけいい物を強請るつもりだろう。
もしくは一番いい物を聞いて、とにかくそれを自分の物にしようとするに違いない。
これまでに仲間の身代わりをさせられたと散々愚痴っていた彼が、今回、毛生え薬という報酬だけで満足するはずが無い。
必ず＋αの何かを求めるはずだ。

世にも珍しい劇画顔のエルフの説明を聞いた他のメンバーは、皆まで聞くことなく塔の中へと走り出していた。
そう、彼らだって誰だって、報酬は独り占めしたいのだ――！

第５４話　お礼と報酬

ヒュンッ

「待たんか」

文字通り部屋の中へと飛び込んだ二人が、片っ端からその辺にある物を手当たり次第に懐へと入れ始める瞬間、目の前に現れた人影によってその盗人の手は阻止された。
彼らの前に登場したのは、ついさっきまで後ろの部屋で傍観していたはずのじいさんだった。

（……瞬間移動の魔法だ）

後から入ってこれないように扉を閉めようとしていたスプが呆気に取られる。こんな所にこんな高位の魔法を使える人間がいるとは……。その顔は、そんな表情に違いなかった。

「実は騙し取ったんじゃよ」

その一言を聞いた時、イセルの頭は摩擦熱で火でも起こせそうなほど高速回転し、……そして全てを悟った。

妙に他人事のようなスタンス。
落ち着き払ってヒントを出していた素振り。
できすぎた設定の宝物庫の罠。
……彼らは、試されていたのだ。これまで全て。

「じいさん、アンタ……性格が悪いな」

「ワシの素晴らしい発明品を狙う輩は多いからな」
「絶対いねぇ」

目の前のじいさんに踊らされていただけだと知った時、彼らは辛うじてそう言う事だけが精一杯だった。
何だかそれ以上口にすると、……涙でも零れてしまいそうだったから。

「おい、じーさん。毛生え薬はどこだ？」
「あ、ああ……、これじゃこれ」
「よっしゃ！」

また何かしら騙されてはたまらんと思ったのか、手短にそれだけ聞くとじいさんの手からひったくるように薬のビンを取るイセル。
そしておもむろにフタを開けてそれをゴクゴクと飲み始めた。
あっという間にじいさんの顔が真っ青になる。

「馬鹿モン！それは飲むんじゃない！患部に塗るんじゃ！」

ブフッ！と盛大に薬を吐き出すイセル。吐き出した薬がかかりそうな位置にいたスプが、思わず跳び退った。

「馬鹿！アブねーだろうが！」
「そういうことは早く言えよじーさん！オエッ！オェッ！！！」
「ったく、馬鹿モンが……。中和剤も探さにゃならんくなったろうが……」

……そのしばらく後、部屋には頭部からピタピタと何だか淋しい音を立てるイセルの姿があったのだった。

＊

「待ちなさい！」「待つんじゃ！」「待って下さい！」

手の平を開いたまま、片手を前に突き出した格好で三人が入ってきたのはその時だった。

彼らの想像の中では、てっきりしたり顔のイセルとスプがにんまりと笑いながら、「遅かったな」とでも言いたげに待ち構え、彼らからの追求を悠然と交わす様が思い描かれていたのだが、どうやらそれは外れたようだ。

彼らが見たものは、どこか燃え尽きたような表情で座り込むイセルと、納得がいかないような憮然とした表情で胡坐をかいているスプの姿だった。

「こっちは……終わったよ。全部な」

何だか髪が真っ白にでもなったかのように見えるイセルがそう呟く。

……まあ、実際は髪など生えてはいないが。

呆気に取られながらも、彼らはそう頷く事しかできなかった。

良くは分からないが……イセルたちの野望は阻止されたようだ。その事だけは十分に理解できた。

さらにその台詞からすると、どうやらお目当ての毛生え薬は手に入ったらしい。さっきからしきりに頭の感触を確かめている事からもそれは分かる。

部屋は幾分、先ほどの作業部屋よりかは片付いていた。まあそれでも片付いているとは言いにくいが、少なくとも大きな棚が幾つか設置してあり、それぞれラベルなどが貼ってあるビンや物、それから薬でも入っていそうな袋が雑多に並んでいた。

彼らが少し期待していたような、武器や防具といった品物は残念ながら見当たらない。
ベルがキョロキョロと見渡していると、何故か、先ほどより少しスッキリしたように見えるじいさんが朗らかに語りかけてきた。

「お主等、世話になったな。何か礼に欲しい物があれば言ってみるが良い」

イセルやスプとは全く対照的な表情なのが気になったが、どうやら私たちは、あの魔法使いに好印象を与えたようだ。
少し安堵した後、言われた通りの欲しい物を考えてみた。……が。

「え？え～と……。グラムルさん、何かある？」
「えっ！？いや……特にはない、かな？」
「ふむぅ、そう言われてみると……ないな」

そうなのだった。今回、ただ何となくイセルに付き合わされてここまで来たのだが、欲しいものと言われても急には思いつかない。
誰かが何かを独り占めするような事態は阻止したいとは思ったが、じゃあ自分が何が欲しい？と言われてもな……。

「炎が吹き出る剣！」
「魔硝石か魔法の発動体になる剣！いや指輪とかでもいいぞ！」
「お主等は黙っとれ」

……あんな風に、欲望一直線なのが羨ましいな。半ば本気でベルは思った。
本当なら現金が貰えるのが普通に嬉しいのだが、この状況でなかなかそれは言い出しにくい。一瞬、何か適当な物を貰って現金に換えようかとも思ったのだが、さすがにそれはあんまりな気がした。

「何があるんですか？」

グラムルがそう朴訥に聞く。じいさんはそれに自慢気に答えるのだった。

「ほほう、知りたいか。ではまずはこれだ。何とこれは『食べた者の大きさを一回り大きくする薬』よ。さらにはこっちが……」

「へー」

素直に驚いているグラムルを尻目に、（これを豚屋に売ればいくらに……）などと即座に考えてしまう自分の頭を振り払うベル。

残念ながら、現金化する以外に何ら興味のある物ではない。

「さらにはな、これに盛り付けると何でもニンゴーの実の味がする魔法の皿よ」

「それは……欲しいようでいらないな」

「あたしそれ欲しいー！ニンゴー好き！」

うーむ、何だか事態はほのぼのした方向へ向かっている。こりゃ大した実入りは期待できないな……と悟ったベルだった。

仕方なく、塗ると肌に艶が出るとか言う怪しい薬をもらったのみで満足する事にした。ちょっと怖いけど、他の人のが効果ありそうだったら、使ってみてもいいかもしれない。

横を見ると、リーダーが『見た目の十倍酒が入る樽』を手に、ほくほくしている。これは普通に便利だな。

「じゃあ、『飲むたびに味が変わる魔法のコップ』なんてのは？」

「む～、残念ながらそりゃ無いな。だが……面白い！次はそれを作ってみるかな」

どうやらシャルルはさっきの皿をもらって嬉しそうだし、何だかグラムルもじいさんと作品のアイデアについて盛り上がっているようだった。

さっきから相変わらずなのは、……最初に入った二人だけのようだった。

第５５話　魔剣の秘密

結局グラムルは、自分で提案した『飲む度に味が変わるコップ』を作ってもらう事で合意し、これでイセルとスプ以外の報酬は決定した。
まあ金額的には全く儲かっていないが、それぞれ本人たちが満足する物をもらって納得したようだ。
そして残るは、ふてくされている二人だけとなった。

「お、お主呪われとるな？」
「……やっぱり？」

スプを見て、突然変な事を言い出した老魔法使いだったが、意外にも言われた本人であるスプは、驚いたようにその言葉を肯定する。
何だろう？何か心当たりでも……。
ベルがそう思った時、いつものうるさい言葉が横から割り込んできた。

「そうなんだよ、こいつ。じーさん、何とかしてくれよ！」
「うるせえよお前は！……じいさん、後でちょっと話がある」
「何だよ話って」
「お前にゃ関係ねぇよ」

素っ気ないスプに噛み付こうとするイセルに対して、じいさんが仕方ないとでも言うように声をかけようとした時、イセルの腰にぶら下がっている物を見て、目を見張った。
一瞬、驚いて何かを言いかけ……たが、それを一旦止めると、再び何でもないかのように言い直す。

「……お、それはティルフィングじゃないか」
「じーさん、こいつの事知ってるのか？」
……残念ながら、その事に気が付いた者はこの場には誰もいないようだった。
若干自棄になっていたイセルだったが、思わぬ話題が意外だったのか、話に食いついてくる。
じいさんは遠い昔の事を思い出すかのように、少しの間、目を閉じた。

「……ランスロット・ハロウィーの剣じゃな」
「ら、ランス……？何だって？」
「大昔のとある英雄じゃよ。大きな戦を止めたと言われておる」
「戦を……止めた？」
「うむ、詳しい内容は伝わっておらんが、彼が戦場でその剣を抜いた時、輝きと共に戦は収まったそうじゃ。本当かどうかは分からんがの。そんな伝説が伝わっておる」

イセルはしばらくの間考え込んだ後、ポツリと呟いた。

「……悪い性格を吸い取るのか？」
「どういうこと？」
「こいつの性格がかなり悪くてさ……」
「使ってた人の性格がいい、と」
「そう。だから周囲の悪意とかを吸い取ったせいで、こんな奴になっちゃったんじゃないかと……」
「え、でも前にこの剣持ってた人が暴れたりしたじゃん」
「……あ、そうか。溜め込んだ悪い性格を発散したくなったんだきっと」

どうしてそんな結論になったのかは分からないが、突拍子も無い推理をするイセル。
普段ティルヴィンを使用している持ち主として、何か感じる物があるのかもしれない。
そんな噂話をしていても何も言ってこない、腰に下がっている彼の相棒に対して、イセルはぶっきらぼうに声をかけた。

「おい、どうなんだよ」
『――』

そういえば、何故か当事者（？）であるティルヴィンは、いつもの威勢はどこへやら、さっきからずっと沈黙を続けている。
多分、この部屋に入ってからずっとだ。
剣にも機嫌とかそういうのがあるんだろうか？……あるんだろうな。
いつもの文句の数々を考えてみれば。
イセルはそんな風に理解し、特にティルヴィンを追及することは無かった。
その代わりに、じいさんが口を開く。

「そう言われればそうとも言えるかも知れん。……とにかく、お主はその剣を使いこなす事を考えるんじゃな」
「使いこなす？どういうことだよ？」
「お主にも分かるように簡単に言えば、色んな物を切りまくれってことじゃ」
「確かに分かりやすいけど、……なんだよそんな意味深な事をいいやがって」
「……難しい話を聞きたいのか？」
「いや、いい」
「……」
「……」

その場に沈黙が流れる。
じいさんの額に、苦笑いと共に一筋の苦汗が流れた。
一応、答える準備はあったらしい。

「……お主等、もっとこう……『モチベーション』みたいな奴は無いのか？」
「ん～……、無いな」
「『ら』って言わないでくれないか？こいつだけだから」

目の前の戦士と一緒くたにされたことが、さも不満そうにスプは言う。

「本当に……ワシの知ってる奴によく似ているわい」
「……」

何かを待っているようなじいさんと、全くそんな事を気にしていないイセル。
またしても沈黙が流れた。

「……聞かんのか？」
「聞いて欲しいのか？」
「……もうええわ！さっさと帰らんかい！邪魔じゃ邪魔！」

いい加減に我慢の限界を超えたじいさんが何かを振る素振りを見せると、その一瞬後には仄かな輝きを残してイセルの姿は消えていた。
どうやら瞬間移動の魔法をかけられたようだった。
さっきまで彼がいた位置に、一人分の空間だけが残った。

「……さて、うるさい奴もいなくなった所で、飲むたびに味が変わ

るコップを研究してみるかな。……そろそろお主等も帰らんか」

取り乱してしまった姿をみせたため、じいさんは少し気恥ずかしそうな素振りを見せた後、コホンと咳払いをして静かに一行に語りかける。

その言葉を聞き、一同は大人しく帰る準備を始めた。

そうしてじいさんの研究室を後にする他の面々。……まあ、何だかんだで面白かったから良しとするか。

そんな満足気な一同なのだった。

ただ、先ほどの話の続きをするためか、スプだけが一人、部屋に残っていた。

一体何の用なのかは分からないが、魔法使い同士何か気になることでもあるんだろう。

おっさんを始め、特に気にせずに先に帰る一行なのだった。

第５６話　真紅の剣士

「ぅわ～ぁ～……！」

ぽて、と言う音がピッタリの雰囲気で塔の前へと瞬間移動させられたイセル。
バランスを崩して仰向けに倒れながら、そのまましばらくじっとしてさっきのじいさんの言葉について考えてみた。

「使いこなす、ね……。おい、そろそろ機嫌直ったか」
『――』

相変わらずティルヴィンの返事は無い。……相当へそを曲げたのか？
そう思ったイセルはキョロキョロと辺りを見回してみると、ちょうど塔の入り口付近に、オオトカゲが丸まっていることに気付く。
どうやら、普段じいさんが門番代わりに飼っている奴だろうと当たりをつけると、ずかずかと近付いていった。

「ほら、こいつの血でも吸って機嫌直せよな」

そう完全に危ない奴発言をすると、腰からティルヴィンを抜き放つ。
大人しく眠っているらしいオオトカゲは、まだ反応していない。
イセルが少し剣を振り上げ、数秒後には鮮血の悲劇が訪れるのかと誰もが思った時、後ろから慌てて声がかかった。

「おいおい、そんな所で弱いものイジメをしちゃいかんぞ」

本当に切るつもりだったのかは分からないが、振り上げた手をそこ

で止め、振り返るイセル。
その視線の先には、妙な男がこちらに歩いてくる姿が見えた。
どうやら似たような格好をしていることから、おそらく冒険者だろうか。
鉄鎖鎧（チェインメイル）を身にまとい、腰には剣を提げている。顔立ちを見ると、彼より少なくとも一回りは上の年代のようだった。

「……誰だお前？」

イセルがぶっきらぼうに尋ねると、無益な殺生を見なくて済んだことにホッとした男は、ややどうでも良さそうに答える。

「君に名乗るような名はないが……」

その言葉と同時に、男は腰に下げた武器を少しだけ抜き、眩いばかりの真紅の刀身を持った剣をチラリとこちらに見せてきた。

「そうだな、『クリムゾン』とでもしておくか」

「……」

自分で名乗った名前に満足そうな目の前の男とは逆に、その勿体つけている上にどうやら偽名らしいその男の言い回しにカチンと来たイセルの額に、あからさまに血管が浮き出る。
……どうやらさっきまでの一連の事件で、色々と溜まってたものがあるらしい。
ついに無事目的の物を手に入れたことで、ちょっと理性が緩んでしまったようだった。突然ムキになって言い返し始めるイセル。

「何を根拠に弱いものイジメと？」
「無抵抗のものをいたぶるのは趣味じゃないからな」

「いたぶってないじゃないか」
「明らかにいたぶろうとしてただろ」
「何で分かるんだ。むしろこっちの方が弱い者かもしれないじゃないか」
「そうは見えんがな」
「……試してみるか？」
「……弱いものイジメは好きじゃないが、まあ稽古をつけてやらんこともないな」

完全に上から目線のクリムゾンと名乗った男の言い方に、カッチーン！とグラムルが空振りをして壁に剣を叩き付けた時のような音を立てたイセルは、男に挑発された通りに剣を構える。
やれやれ……とばかりに同じく剣を抜いたクリムゾンは、やる気も無さそうにだらりと真紅の剣先をぶら下げていた。

「てめえ、ほえ面かくんじゃねえぞ！」

またもやお得意の悪党台詞を口にしたイセルは、即座にクリムゾンに対して切りかかる。が、目の前の相手は二度三度と切りかかった斬撃を難なく避けた。
驚きながらも、イセルは徐々に本気を出して切りかかっていく。
しかし、クリムゾンは余裕の表情で息一つ乱さずに彼の剣を受け流す。
そしてそれとは対照に、力を使いすぎたのか、ついにイセルは肩で息をし始めてしまった。
辛うじて、憎まれ口を叩く余裕だけはまだあるようだ。

「た、多少はやるじゃねーか……」
「口ほどにも無い奴だが、口だけは達者だな」
「う、うるせぇ……」

それからしばらく、同じようなやり取りが繰り広げられた。
決して手を出すことなく、たまに少しだけ剣を使って受け流す以外、一撃も食らうことの無いクリムゾンの腕前は驚嘆に値する物だった。
一応こう見えてもパーティーの中では一番の近接戦闘実力者である彼が、一発も攻撃を当てる事ができないなど、かのカシューナですら不可能な事かもしれない。

（な、何だこいつ……？）

突然降って湧いたキャラクターにそのあまりの実力の程を見せ付けられ、唖然とするイセル。だがああまで言ってしまった以上、自分から引き下がる事はできない。
もちろんただ悔しいだけというのもあり、せめて一撃与えられればという一心で剣を振り続ける彼であったが、残念ながらその野望は果たされる前に決着が付くことになってしまった。

「いい加減にしろ」
「おわっ！」

……というわけで、いつもの見覚えのある魔法の網に絡み取られたイセル。
同時に、塔の入り口からは同じく見覚えのある顔ぶれが順々に出てくる所だった。

第57話　英雄には、幸運という意味はなく……

「全く、何やってるんだか……」
「すみません、うちのハゲが何だか迷惑をかけたようで」
「も、もうハゲじゃねーぞ……！」

ベルとスプの声に反応し、動けなくなった目の前の剣士を確認した後、クリムゾンはその剣を収めた。
ふぅと一息だけ付くと、一行の様子を一通り眺めて値踏みする視線を送った。
その視線の右斜め下から、負け惜しみの声が聞こえてくる。

「てめえら、何しやがる」
「うるせえぞお前は」

動けなくなっても暴れるイセルに対して、スプが捨て台詞と共に蹴りを入れる。もちろん本気ではないので怪我するような事は無いが、げしげしと音が聞こえそうな素振りに、イセルの負けず嫌い根性に火が点いたようだ。……後はきっとさっきまでのストレスもあるのだろうが。

「うわ～っ！助けてそこの剣士さん。弱いものイジメされる～っ！」
「……」

明らかにさっきまでのクリムゾンの言い分に乗っかり、わざとらしく皮肉っぽく叫ぶイセル。
……どうやらクリムゾンは、呆れて言葉もないようだった。他の面々も、いつもの事とばかり口を出すつもりは無いらしい。

クリムゾンは小さくため息を吐くと、辛うじて一言だけ呟く。

「……まぁ、動けない相手に攻撃を加えるのは……良くないな」

「助けてー！」

「もう恥ずかしいから引きずって帰ろ」

「……そうするかの」

「それじゃすいません、お邪魔しました」

「あ、ああ……」

何だかよく分からないままにズルズルとイセルを引きずって帰る一行。もううるさいからと、人質代わりに毛生え薬も取られてしまった。

急にその瞬間からイセルは、大人しく引きずられるままになる。

クリムゾンは何だか置いていかれたような気がしながらも、特に声はかけずにそれを見送っていたのだった。

しばらくした後、魔法の持続時間が切れて自由になった瞬間、勢いよく飛び起きるイセル。どうやら今までは、死んだふりをしていたようだ。

俺の毛生え薬を返せっ！と叫ぶが、大人しくしないと返さないわよ！とベルにあっさり言い返される。

しばらくガルルルル……と遺跡に住み着いた下位種のキマイラのような唸り声を上げていた両者だったが、そのうちにイセルの方が折れた。

諦めて後を着いてくる……のかと思ったら、彼はトボトボと無言で塔の方へと引き返していく。

「もう……ほっときましょ」

呆れてため息をついたベルの意見に反対する者は、誰もいなかった。

＊

「おわっ！また来たのかお前！」
「じいさん、毛生え薬作ってくれよ……」

一人塔へと戻ったイセルは、まるで魔法装置によって蘇らされたゾンビのようにじいさんの背後に現れると、恨めしそうにぼそぼそとお願いする。
完全に意表を付かれたじいさんは、さすがに驚いて声を上げた。
ちなみに、今度は一階の魔方陣からすぐにじいさんの研究室へと転送されることができたのだった。

「さっきやったじゃろうが。ありゃどうした」
「仲間の奴らに奪われた……！頼むっ！今一度」
「いいからはよ帰らんかい」
「うわ～ぁ～……！」

またしても瞬間移動の魔法をかけられたイセル。
最後にちらりと目の端に見えたのは……クリムゾン？の姿だった気がした。
確かにあんな場所で彼と会ったということは、もしかしてじいさんの知り合いだったのだろうか？
結局声もかけられずに飛ばされることとなってしまった。

ともかく、今度到着したのは、洞窟の入り口付近のようだった。
遠くで仲間たちが馬車を準備しているのが見える。
どうでもいいが、魔法に抵抗しないのかよ？……そう簡単に他人にかけられる魔法じゃないはずだぞ？
そんな何者かのツッコミも無視して、イセルはため息を一つ吐くと、

仲間と合流するために歩き出した。

＊

そうして今回も何とか無事ラカーサ邸へと帰りつき、大事な毛生え薬も取り返したイセル。そしてそれに付き合っただけの他一行。だが彼と仲間との間に生まれた溝は未だ消えず、彼は居場所を求めて、夜な夜な酒場に繰り出すのであった。

「聞いてくれよマスター……。俺は仲間のためを思ってよぉ……」
「……今日もか？飲み過ぎは良くないぞ」

もうすっかり常連となってしまった彼に、口ひげを生やしたダンディなマスターが気遣いの言葉をかける。
まあそう言いながらも、空になった彼のジョッキに、自然な仕草でエール酒を追加するのだが。……商売上手だな。
多少は悪いと思ったのか、今日も完全に目が据わりかけているイセルに対して、マスターは少しは慰めようと思ったようだ。

「そんなお前に、昔の英雄が言ったといういい言葉を教えてやろう」
「お、何だよ？」
「いいか、『英雄という言葉には、幸運という意味はない』んだそうだ」
「ふ～ん……」

マスターの言葉を聞いた彼は、その気の無い返事とは裏腹に、少しの間、言葉の意味を噛み締めるように間を置く。
どうやら、多少は心動かされる何かがあったようだ。

「その気の効いた台詞は誰の言葉だ？一体」

ダンディなマスターは、拭いたジョッキをコトリと置いた後、彼の質問に答えた。

「ん～……たしか、ランス何とかいう……」

「おかわりっ！」

イセルはその続きを聞く前に、目の前にあるジョッキを一気に飲み干した。

＊

――彼らがカシューナが失踪したという情報を知ったのは、その夜のことだった。

第５８話　パジャマパーティー？

「その夜、イセルはこっそりと忍び込んでいた……」

と勝手に一人で呟きながら、彼はそっと扉を開ける。
最近はすっかり油断して、鍵などかけていないのは既にリサーチ済みだ。
一体どこでそんな技術を学んだのか、すんなりと音も立てずに扉は開いた。

部屋の中は薄暗いが、窓から差し込む月明かりによって、辛うじて室内の様子は分かる。
シンプルな調度品の数々と、四つのベッド。
その内の三つからは、すやすやと穏やかな寝息が聞こえてきている。
間違っても、いびきや寝言なんかは聞こえてくるはずが無い。
そういうことにして、彼は一つのベッドの近くへと足を忍ばせていった……。

（くくく、幸せそうな寝顔をしてやがるぜ……）

最近、さらに悪役っぷりが染み付いてきた彼は、またしても悪そうな顔をしながら内心そんな事を思う。
月影が目の前で眠る彼女に差し込まないように気を付けながらベッドの脇まで移動し、懐からゆっくりととある物を取り出した。

少し開いた窓からは、涼しい夜風と虫のさえずりが聞こえてくる。
そんな静かな夜に似つかわしくない、凶悪な笑みを浮かべた一人の男。

その魔の手が、麗しい一人の女性を毒牙にかけようと伸びていたのだった……。

＊

というわけでご存知イセルが懐から、ギラリと輝くガラス瓶を取り出し、その栓を静かに開ける。
中には何らかの液体が入っているようだった。
そこへ小さな羽根を差し込み、ブラシ代わりにたっぷりと液体を付ける。
そしてそのまま、ゆっくりと羽根を目の前の人物の顔へと近づけていくのだった。

目の前で小さな寝息をたてていたのは、見目麗しきエルフの盗賊、イゼベル。
盗賊だと言うのに、忍び寄る魔の手には気付かずに寝こけているのがいい所だ。完全に気が抜けているらしい。
若干の寝相の悪さはありながらも、まあ美しい寝姿だと言えよう。
隣で寝ているグラムルなどは、上着がはだけてへそがチラリしていると言うのに。……それはそれでセクシーだと言えなくも無いが。
だがしかし、彼はそんなサービスカットなどには目もくれず、息を殺しながら羽根を伸ばす。復讐のために。
そして……。

ピチャ

「うわっ！何っ！」

寝姿とは裏腹に、全くの色気もない声と共に飛び起きるベル。
と同時に目の前の人物の暗い影を見て声をあげそうになるが、そこ

は暗視能力が鍛えられている彼女。
そこにいるのがいつも慣れ親しんだ彼女の相棒だと分かり、そして同時にその男がこらえ切れない笑みをこぼしている顔を見て、……何か嫌な予感がするのだった。
そしてその予感と同時に、自分の口の周りが何やらぬるっとベタッとひんやりとしていることに気付く。
シーツを掴んでいた左手でその正体を触ってみて、何かの液体が付いている事が分かった。
当然、この男の仕業だろう。

「……何したの？」

結構ドスを効かせてみたつもりだったのだが、どうやらこの男には効果が無かったらしい。

「……くっくっく。これで、世にも珍しい『ひげエルフ』の誕生だぜ……」

これ見よがしに見覚えのあるビンを見せびらかしながら、そういうイセルのにやけ顔が見えた瞬間、ベルの中の理性は絶対零度で凍りついた。

シュカッ！……ビィーーーン……

刹那の時すら経たぬ時間と共に、イセルの顔の数ミリ横に短弓（ショートボウ）の矢が刺さった。

＊

「なっ、何でベッドの横に弓置いて寝てるんだよっ！？」
「……大人しく死になさい」

そんな声で起こされたグラムルが見たのは、隣のベッドに仁王立ちして弓を構えるベルと、何故か暗くても分かった顔面蒼白で逃げ場を探すイセルの姿だった。
だが彼女の寝起きは悪く、また頭がボーっとしたままうまく働いていない。
ぺたんことベッドの上で上半身だけを起こしながら、口を半開きで目をこすっていた。……飛び出た寝癖がちょっと可愛い。

だがそんなグラムルの覚醒を待つことなく、隣の修羅場は最高潮を迎えようとしていた。
人って本当に怒ると感情が表面に出てこなくなるんだなということを実感している間もなく、第二発目の超至近距離からの矢を、戦士の勘というか必死の生存本能というかで察知したイセルは、何とか部屋の外へ逃げようと転がりながらかわし、扉の方へ近付く。
しかしその拍子に、何故かガラス瓶が彼の手から離れ、スローモーションで宙を待って、そのままグラムルの頭の上に着地した。

ベシャッ！

「冷たっ！……なんですかこれ？」
「ああっ！グラムルが全身毛むくじゃらになってしまうっ！！」

そのイセルのリアクションで一気に頭脳が超高速回転し、全てを理解し覚醒したグラムルは、ベルと同じくベッドの隣に手を伸ばして

愛剣を掴もう……としたがさすがにそこには置いてなかったので、代わりに何だか重そうな置物を手にした。

「やっちゃっていいですよね……」

「いいわよ。心ゆくまで」

「……」

さすがに女性二人の変貌っぷりに冗談じゃなく命の危険を感じたイセルは、扉を背にしながら、それを開けられずにいた。

開けようと動いた瞬間、やられるっ！？……そんな予感が頭から離れない。

右手に鈍器のような物を持ちながら、妙にゆっくりと近付いてくるグラムルを目にして、さすがにここまでだと観念するイセル。

「いや、実はな……」

右手をパーにして体の前に出し、ちょっと待ってくれという意思表示をしようとした時だった。

それができたのは、まさに奇跡だと言ってもいい。

これが神の仕業だと言うのなら、今日から入信してやってもいいぞと思うぐらいの奇跡の力によって、彼はパーにした右手の指の間から飛んできた『モノ』に反応した。

ドシュッ

「わーっっっ！！！」

……瞬間的に左に避けた彼の右肩に、短弓の矢が刺さった。

（反応してなかったら……ど真ん中に……刺さってた……！？）

傷は浅いと言うのに、イセルは全身から血が抜けていくような感覚を覚えたのだった。
もはや一刻の猶予もないとばかりに彼は二人にまくし立てる。

「だぁーっ！分かった悪かったよちょっ、ちょっと待ってくれ！」
「……何？言い訳？」
「許しません。遺言なら聞きます」

取り付くしまもない二人。
諦めずにイセルは続ける。

「待ってくれよ！おどかしてやろうと思って水を付けただけだ。毛生え薬じゃないんだって！悪かったから……殺さないでくれ……」

ようやくその言葉に、二人は動きを止める。
人間、どうしようもない恐怖の前には笑うしかないんだなと知ったイセルは、うな垂れたままがっくりと膝を着いて罪を自白したのだった。

「じゃあ何でベトベトしてるんですか……？」
「さ、砂糖水だって砂糖……」
「あ、ホントだ甘い……」

「……今度やったら承知しないわよ……！」

ベルが武器を下げた瞬間、イセルは敗走するゴブリンのように扉から慌てて出て行った。
おそらく治療するために起こされるであろうリーダーに少し同情しながらも、これで奴も多少は懲りるだろうと、体に付いた砂糖水の

後始末にかかるベルとグラムル。

唯一、シャルルだけがベッドに逆さまになりながらも、未だ寝息を立て続けていたのだった。

第59話　なんかね、ヒゲもじゃになった夢をみたよ

「なんかね、ヒゲもじゃになった夢をみたよ」

そんなシャルルの言葉で始まるいつもの朝の食卓。
しかしそこには、唯一いつもと違う光景がある。……いつもの定位置、ダイクの隣にはカシューナの姿は無かった。

「全く、イセルよ。夜中に血まみれで起こされる方の身になってみろぃ。……寿命が縮まるわぃ」

そう文句を垂れながらも、上品に朝食を口に運ぶリーダーことおっさん。
……あれ？本名は何だっけ？最近はみんなに忘れられがちだった。
さすが元貴族だけあり、時折上品な振る舞いを見せる事もあるが、一体どんな貴族時代だったのか？ということについては誰も触れられないままだ。

「……」
「……」
（だって、殺されそうになるとは思わなかったんだもんよ……）

そう思ったが、さすがにまだ口には出せないイセル。ビクビクとしながら食事を進める横で、まだ被害者の女性二人は口を聞いてくれなかった。
当初の計画段階で、鍵がかかっていたら魔法で開けてくれないかと持ちかけられていたスプも、一切その話には触れていない。
……何故その時に止めなかったのか？と、とばっちりが来るのは目

に見えていたからである。
心底、協力しなくて良かった……とホッとしているスプなのだった。

「どうしたんですか？イセルさん。大怪我をされているようですが……」
「え？いやああ、ちょっと色々あってな……」

心配そうに尋ねてくるダイクに、大人の事情を匂わせながら誤魔化すイセル。
さらに誤魔化しに追い打ちをかけるように、話題を別の方向へと転換させる事にした。

「そういえば、カシューナはいいのかよ。連絡取れないんだろ？」
「……」

彼の言葉に、皆の意識がここにいないいつものもう一人に移っていく。
どうやら、彼の目論見は十分成功したようだ。

「ええ、カシューナなら大丈夫でしょう。私は彼を信じていますから」

一瞬だけ口をつぐんだものの、すぐに顔を上げてそうはっきりと言ったダイクを見て、一行はダイクのカシューナに対する信頼感を垣間見た気がした。
なのでそれ以上は特に追求する事も無く、いつも通りの日常に戻っていく。
……約一部を除いては。

「おいおい、雇い主なのにそんなんでいいのかよ？愛想尽かして逃

げられちゃったんじゃねーの？」
「まあ、どっかでのたれ死んでるだろうから、大丈夫だよ」
前者の言葉を発したイセルには、（愛想尽かされたのはお前だろ……）と。
後者であるスプには、（いっそお前がのたれ死んでくれれば……）というツッコミが誰かから入ったかどうかは定かではないが、全くダイクの心中を察しない二人の言葉に、いつもと違う風景でも、いつもと同じような雰囲気が戻ってきたのは確かだった。

「そんな酷い事言わないで下さいよ。きちんと挨拶はしていってくれましたし。きっと彼には彼のやる事があるんでしょう」
「ホントかよ～？」
尚も食い下がる二人の諫言にも、ダイクの意志は揺らがない。以前からしっかりしていた印象はあったが、ここ最近、またさらに雰囲気が大人っぽくなってきたような気がする。
そうして少しずつ領主の貫禄を身に付けてきているようで、一行は（こうして少年は大人の階段を登っていってしまうんだな……）と、少し頼もしいような淋しいような気分を味わうのだった。

しかしそんな落ち着いたダイクとは裏腹に、逆に他の使用人たちの落ち着かなさといったら無かった。
カシューナ不在の際に何か起こったらどうしよう？……と、そわそわしているのが、外部の人間である一行からも丸分かりだったからだ。
特に明日からは、大切な来客が控えているらしい。
今日も朝から、部屋の外は準備で忙しくしているはずだ。
そんな中、一人の女性使用人――いわゆるメイドが部屋の中へと入

ってくる……途中でドアにつまづき、屋敷の人々の慌てっぷりを見事に表してくれた。

「あ、あの……。お客様が見えています」

「何？もういらっしゃったんですか？明日ではなかったのですか？」

「え、いえ……！あの、皆様に会いたいと、お一人のご老人が……」

『老人？』

皆の声が揃って唱和される。全員が知り合いの顔を次々に思い浮かべてみたが、ここに尋ねてくるような知り合いはいないはずだ。

……唯一、最近会った老人といえば……？

「おう、ワシじゃ」

そんなフランクな挨拶と共に登場したのは、前回も登場したあの塔に住む魔法使いのじいさんだった。

第６０話　やなネーミングすんな！

「おぉ、じーさん。一体どうしたんだよ？」

そんな風にフランクな挨拶返しをしたのはスプで、まるで本当の親族かのような親密さだ。

前回一体あれから何があったんだ？……そんな疑問を感じさせる仲の良さだった。

「いや実はな。例の魔法のコップが完成したから、それを届けるついでにここに知り合いが来るというんでな。ちょっと挨拶に立ち寄ったんじゃよ」

そう言いながら、勝手に椅子に腰掛けるじいさん。ついでにデザートの柑橘を一つ頬張る辺り、結構適当な性格なのかもしれない。

さてはツンデレだな。一回仲良くなった相手にはフランクになるんだ。

そんなじいさんを普通に受け入れている辺り、さすが彼らだな。

ダイクもすっかりそんな空気に馴染んでいるようだった。

そろそろ食事を終えるイセルが、じいさんに話しかける。

「この家の関係者に知り合いがいるのか？じーさん」

「おお、毛生え薬の戦士よ。その様子を見ると、効果は順調そうじゃの」

「やなネーミングすんな！」

絶対に呼ばれたくない肩書きで呼ばれたイセルはといえば、貰った

のは本当に効果のある薬だったようで、早くもうっすらと髪が生えてきており、短めの坊主という出で立ちになっていた。もちろん、丁寧に塗った眉毛も戻ってきている。
どうやら毛生え薬の効果は、塗った所に生えるというよりも、実は元々の肉体の器官を再生させるというような効果があるようだ。
まあおかげで何とか包帯グルグル巻きだった鬱イセルは過去の存在となり、いつも通りの彼が戻ってきたと同時に、屋敷の人間に再びうざがられている毎日も戻ってきたようだ。

「実はそうなんじゃ。何でも明日ここに来るそうなんじゃがな。昔からの古い付き合いじゃ」
「おじいさん、ということはネーランド様とお知り合いなんですか？」

先ほどの問いに答えたじいさんに、ダイクが再び尋ねる。
ネーランドというのが明日来るお客の名前らしい。

「お主がラカーサの後継ぎか。……確かにノルディックによう似とる。……いや、似とらんかな？性格は母親似かの」
「はい。……そうですか、父と母ともお知り合いなんですね……」
「うむ、古い付き合いよ。ネーランドはこの町が発展する当時からの付き合いじゃ。まだ若かったワシの作った魔法の品を仕入れてくれる常連でな」

少し遠い目になるじいさんとダイク。故人の事を思い出しているに違いない。

「仕入れ？……商人なのか？」
「うむ。少々変わった奴でな。変わった物が好きなようなんじゃ」

変わった奴、と言う言葉に反応し、『これ以上変わった奴はやめてくれよ～』という顔をする人間が約二名。
そしてそんな二人を見て、『あんた達にそんな風に思われたくない……』という顔をする他の皆だった。
しかしそんな風に思いながらも、変わった物という言葉に反応してしまう一同。

「……変わった物？どんな？」
「う～む、まあ色々じゃな。悪い奴ではないんじゃが、自分の趣味となると周りが見えなくなる奴でな……」

商人と聞いて、少し興味が出たらしいおっさんが尋ねてみる。
そういえば、全く忘れてたけどおっさんが信奉する神様は、商売を司る神でもあったんだよな。
多少商売人っぽい顔になりながら、色々と考え始めるおっさんなのだった。

「そういえば、あのコップができたとか？」

食事を終えたグラムルが身を乗り出してくる。
そんなに『飲むたびに味が変わるコップ』のことが気になるのか。
そんなにいい物じゃないような気がするんだが……。

「おお、そうじゃった。ほれ、これじゃ」

そう言ってじいさんが持ってきた袋の中から取り出したのは、見た感じは何の変哲も無いただのコップ。
女性用だからか、持つ所がちょっとおしゃれにＳ字に湾曲している所がニクいね。
底にＶを模ったサインみたいなものが付いている以外は、特に飾り

気も無い器だった。

「うわ～！ありがとうございます！」

もう一度言うが、そんなにいい物じゃない気がするコップに、やたらと嬉しそうにお礼を言うグラムル。

作り手冥利に尽きるというもんだが、問題は味だろ、味。

一体どんな味がするというのか。

当然、続いての話題はその味についてだった。

「の、飲んでみてもいいですか……？」

「もちろんじゃ。腹がはちきれるぐらい飲むが良い」

あえてなのかどうなのかは分からないが、コップの機能を説明せずに勧めるじいさん。

そして同じくそれを尋ねずに試飲してみるグラムル。

近くにあった水差しから水を注ぎ、しげしげと眺めてみる。……見た目に変化は感じられない。

「見た目は何も変わらんぞ。ほれ、飲んでみい」

「い、いただきます……」

その場の全員の注目を集める中、一口見た目は水の液体を口にしてみるグラムル。

さすがに一気に飲み干す度胸は無いらしい。

「う、これは……！」

グラムルの顔が、巨大蛙を見た時のようにぐんにゃりと歪んだ。

第６１話　最初の人をヒュッて避けて、後ろの人に当たる弓とかならあるぞ？

「ま、まずい……」

ここが外なら思わず吐き出したくなるような顔をしたグラムルが、べ～と舌を出しながら呟く。
見た目は水なので、他の連中はそれが一体どんな味なのかは分からない。

「なんじゃと？どれ、ワシにも貸してみろ」

じいさん自らが直々に飲んでみたいらしく、グラムルからコップを受け取る。
特に水を足したりはしないことから、本当に『飲むたびに味が変わる』効果があるらしい。
……あ、これって間接キスじゃないか？

「……なんじゃ、うまいじゃないか」

そんな事を言っている間に一口飲み、満足そうな顔で頷くじいさん。
とてもグラムルと同じ味の物を飲んだ顔とは思えない。
それを見た他の人々も、こぞって回し飲みが始まるのは目に見えていた。

「なんかニンジンの味がしたんですけど……」
「ん～微妙だな。セロリ味は飲めなくは無い」
「リンゴジュースだ！おいしー！」
「私は遠慮しとくわ……」

「おえっ！こりゃ何だかさっぱりわからん！ぅぇっおぇっ！」

まあそんな感じで、いつもの朝の食卓がちょっと賑やかになったのでした。

全員が飲んだ後、じいさんから簡単に説明を受ける。

それによると、このコップは何でも入れた物の味を変化させ、それは取っ手を持つ度に変わるということだった。

へーとかほーとか感心した台詞を口にしながら、満足そうにそれをしまうグラムル。

……何度も言うが、これってそんなに……いや、本人が満足してるんだからそれでいいか。何も言うまい。

一通り落ち着いた所で、再びじいさんがイセルに向かって何かを取り出した。

「ほれお主。この間は自分だけ何も貰えずに不満そうだったじゃろ。代わりに新しい物を持ってきてやったぞい」

そう言いながらテーブルの上に出したのは、またしても薬のようだった。

今度は錠剤らしい。そのビンに皆の注目が集まる。

「お、マジか？気が利くね～じいさん」

「筋力増強剤じゃ。これを飲めば、しばらくの間筋力が増える。……代わりに知能が下がるがな」

「いらねーよ！俺を幼児並みの知能にする気か！？……せめて何か武器とかねーのかよ」

どうやら、じいさんなりに考えて戦士に役立つ物と思って作ったようだが、残念ながらそれは本人のニーズとは違っていたらしい。

一行を代表する戦士は、現状の筋力に満足しているようだった。

確かに、単純な力に関しては彼に敵う者は滅多に見当たらない。……その割には細かい戦い方をするんだが。

「そうか……不満か……。武器はあまり作っておらんのじゃが……う～む、そうじゃ。『最初の人をヒュッて避けて、後ろの人に当たる弓』とかならあるぞ？」

長い名称の弓の話を聞き、みんなが宙を見上げてその様子を浮かべてみる。

……使い所が難しいな。というかどんな時に使うんだ？

しばらく考えていたが、誰もその効果的な使い方を閃く事はできないようだった。

「……使えねー……。まあいいや。じゃあ筋力上がるヤクでも貰っとくわ。……多分使わんけどな」

「あ、じゃあそれ俺使う！」

イセルの代わりに、嬉しそうに手を挙げたのはスプだ。

まだ前線で戦う気満々らしい。懲りてねーな、完全に。

やれやれという顔をしながらも、躊躇せずに渡すあたり、一応貰ったイセルも完全に使うつもりは無かったらしい。

前回はかなり不満を持っていたようだが、彼としては、毛生え薬の効果がしっかり出てきただけで満足のようだった。

「お、そうだ新米魔術師よ。例の『アレ』ができ……」

「じいさん、俺が町を案内してやるよ！よし行こう！早速行こーぜ！」

じいさんがスプにそう言いかけた瞬間、それを大げさに遮って話題を変えるスプ。

そして、慌てたようにまだ柑橘を頬張っているじいさんを連れて部屋を出て行こうとする。……怪しい。
怪しいが、かといってそれを問い詰めようという気も起きない。
まあ奴に関しては放っとくに限るな。
下手に関わって巻き込まれるのも嫌だし。

そんな風な考えに全員が落ち着き、じいさんとスプは早々に屋敷を出て行ったのだった。

＊

というわけでいつものように、おっさんは屋敷の掃除をし、グラムは剣の稽古。
シャルルは森へと遊びに行き、イセルとベルは町をブラブラと出歩くのだった。

しかしそこにはやっぱり、困った顔でいつもいるはずのカシューナだけがいないのだった。

第62話　あの子からのテレパシー

そんな風にいつもの一日が過ぎ、次の日の夜が明けると、ラカーサ家は忙しさの喧騒に包まれた。
いつもより幾分早く物音で起こされた一同が目にしたのは、いつもより一層綺麗に片付いた屋敷と、急に増えた警備兵の数。
使用人の数も普段の倍近く増え、使っていない部屋にあれこれと物が運び込まれている様子だった。

「うむ、今日は一段と綺麗に片付いているな。よしよし」

昨日も、妙に真剣に玄関掃除をしていたおっさんが満足気に呟く。
もう最近では、すっかり玄関掃除担当として屋敷の人々にも認知されているようだった。

「ああ、皆さん。そろそろ到着されるようです。申し訳ありませんが、ネーランド様がおられる間はかかりっきりになってしまうので……」
「ああ、了解りょーかい。適当にしてるわ」

お昼が近くなってきた頃、ダイクからそう連絡を受ける。
とはいっても、普段も大してダイクに用事は無いんだが……という台詞は喉の奥に押し込んで生返事を返すイセル。
いつも通り、律儀なダイクなのだった。
しばらくして外が騒がしくなってきたのが耳に入り、みんなで屋敷の外に出てみることにした。
屋敷の前の片隅に陣取ると、ちょうど隊商の最初の馬車が入ってく

る所だった。
どうやら、あれらがネーランドとやらいう商人の物なんだろう。
ラカーサ家の面々はお出迎えでズラリと整列し、丁寧にお辞儀をしている。
一行はと言えば、もちろんそんな中に参加するつもりも無く、端っこの方でまるで野次馬ですよと言わんばかりに傍観を決め込んでいた。
……さすがにその辺りの邪魔をしたり、悪い噂が立つような、恩知らずな事はできない。
そうすれば即刻出て行かされることは間違いないだろうし。
その部分は、いつものトラブルメーカー二人にも共通の認識なのだった。

そんな感じで、ほへーとばかりにぞろぞろと入ってくる馬車を左から右へと見送っていた時の事だった。

『――助けて！』

突然、そんな声が聞こえてきた。

正確には、それが聞こえたのはイセルとベルだけであり、その声の主は女性が発したもののように思われた。
二人は一体何のことかとキョロキョロしてみたが、どこから聞こえてきたのかも分からない。
空耳だったのか？と訝しんでいた時、

『――助けて！ここです！』

もう一度同じ声が聞こえた。
そしてそれと同時に、ぼんやりと目の前を通る馬車の中が透けて見

え、その中に檻に囚われている少女の姿が見えたのだった。

ベルは、この光景が見えているのは自分だけかと思い、隣にいたスプを見てみた。

……が、スプはいつも通りのアホ面をしているだけで、全く興味が無さそう……と思った時、その向こうにいたイセルの顔が見えた。

そして、ベルは何だか嫌な予感がして目を逸らした。

イセルは、明らかに『自分今何かすごいヘンな物見ましたよ！』という驚愕の顔でプルプルと震えている。

大きく口を開けたまま、スプとはまた違ったアホ面で馬車の方をじっと見ているため、（……あ～、多分……見ちゃったんだな……）という何故か残念な気持ちをベルに起こさせる。

少しの間迷ったが、ベルは他に同じ物を見た人は居なさそうだったので、仕方なくイセルに小声で話しかけた。

「ねえ、……今、見えた？」

「みみみ見た！見えたよ俺！」

思わずそんなキャラクターだったか？と突っ込みたくなるようなリアクションで答えたイセルは、ぶんぶんと何度も頷きながらベルの問いに答える。

その様子を見て他の面子も気になったのか、周りに集まってきた。

ちょうど全ての馬車が敷地内に入った事から、ちょっと場所を変えて話そうという事になり、彼らの自室へと戻る事にしたのだった。

＊

「――というわけなのよ」

と、使い勝手のいい台詞で皆に説明したベルだったが、実の所そんなに説明できるような情報は無かった。
何せ、助けてという声と姿が幻影のように見えただけだったのだ。
今の所、それしか分からない。
さらに、一緒に見たのがイセルだけだというのも微妙だった。
スプなど完全に信じていなかったし、他の仲間も半信半疑だというのが正直な所だろう。
もしこれが彼だけだったなら、ベル自身も絶対信じていなかったに違いない。

結局、正体を確かめるためには、馬車の中身を調べてみるしかないということになった。

「よし、じゃあ私ちょっと行ってみるわ」
「じゃあ俺も近くまでは付き合うわ」
「ならワシは商人の方を当たってみるかな」
「私たちも色々聞いてみましょうか」
「よし、じゃあ俺はじいさんと話してくる」
「なんでだよっ！」
「いや、何か知ってるかもしれないじゃないか」
「何かお前、やたらとあのじーさん好きだな……」
「べっ別にそんなんじゃないぞ！」
（！？……別の意味で怪しい……？）

何だかよく分からない方向性もありながらも、彼らにとっては珍しい、ミステリの事件が舞い込んできた瞬間だった……。

第６３話　ダイクさまはあちらにいます

ベルとイセルは、この問題の発端である馬車を確かめに行くことにした。
十数台あった馬車のうち、例の少女が見えたのは後列付近の物だったはず。
そんな記憶を頼りに馬車の足跡を辿った。

隊商が引き連れてきた馬車は、屋敷から少し離れた場所にある倉庫などが並んでいる場所に停まっていた。
ここは町の備蓄倉庫なども兼ねており、周囲が全て囲われている上、常時警備兵も立っているような場所だった。
もちろん彼らだったとしても、特に用も無く立ち入れるような場所ではないため、二人は少し離れた所の茂みの中から様子を探っていた。

当然、ここからでは馬車どころか中の様子も見えない。
イセルがどうしようか考え込んでいると、突然ベルが急に、

「私、ちょっと行ってくるわ」

そう言って立ち上がった。
一体どうするのかと見ていると、少し離れた場所からキョロキョロと地面を見ながら、フラフラと警備の人間が居る方へ近付いていくではないか！

（おいおい、一体何する気だ……？）

額に一筋の汗を垂らしながら、イセルはその様子を見守る。
しばらくの後、当然ながら警備兵が気付いて彼女に声をかけた。

「あれ、ベルさん一体どうしたんですか？こんな所で」
「え、ああちょっとね。この辺で落し物しちゃって……」
「あ、そうなんですか！大変ですね。一緒に探しますよ。何ですか？」
「あ、ああ、ゆ……指輪なんだけど。大丈夫よ一人で探すから」
「いえいえ、そういうわけには。どの辺ですか？」

（……まあ、アイツならそんなモンかな……）

遠くから見ていて、明らかにそのまま指輪とやらを探しながら中に入ろうという魂胆だったらしいが、まあもちろん一人でそんなこともできるはずも無く、さらに相手は完全に善意で手伝ってくれると言っているので、断るわけにもいかず困っている……という様子が簡単に思い描かれた。
しかもアイツは……。

「おお、ロイじゃないか。真面目に働いてるか？」
「ああ、イセルさん。お疲れ様です」

警備をしていたのは、彼らとも顔見知りのロイという青年だった。
まあ結構長い間滞在していれば、ほとんどの従業員と知り合いにもなるってものだ。特に年代が近いイセルは彼とは割りと親しかった。
彼らがいた町の近くの村出身という事で、色々と話が弾んだのだ。

「俺は別にいつも通り、お疲れってほど働いちゃいねーよ。それよりベル、見つかったのか？」
「えっ？」

「え？って指輪だよ指輪。大騒ぎしてたじゃねーか、俺まで呼んどいてさ」
「ああ、ゆ指輪ね指輪。そうそう、それがまだ見つかんないのよ～！」
（大丈夫かこいつ……？）
「そうらしいですね。ちょうどこっちも落ち着いたようなんで、今一緒に探してる所です」
「そうか、俺は面倒だからもう帰るからよ。適当に手伝ってやってくれよ」
「ちょっと！適当にって何よ！」
「じゃあな～」

後ろ向きに手をひらひらと振りながら、イセルはその場を去っていく。

（あの様子じゃ大した成果は期待できないだろうが、まあ大体の様子は分かった。帰って対策を練らないとな。
それに、意外にああ見えて、うちの女どもは屋敷の男どもからは人気あるからな。
奴の正体も知らずに、ロイのあの張り切りようと言ったら……）

まだ右肩の傷跡が疼くような気がする。一昨晩の事を思い出し、彼は再び鳥肌が立つのが分かった。
だが、前に話した時にやたらと羨ましがってたロイだ。こうしてたまには気を利かせてやってもいいだろう。
何だかんだ言っても、一応本職がやる気になってんだ。

（まあ、こっちはベルに任せるさ……）

そう思いながら、イセルは倉庫を後にするのだった。

＊

イセルが屋敷に戻ってくると、おっさんが玄関を掃除していた。
あれ、商人を当たってみるんじゃなかったのか……？

「おっさん、何掃除なんかしてんだよ」
「何モンだ！」

普通に声をかけたイセルを、まるで不審者を見つけたかのように警戒し、ホウキを持って威嚇してくるおっさん。
これはノッてやらなければなるまい……。

「ちっ、覚えてろよコノヤロー！」

そう言って、突然悔しそうに走り去るイセル。
……一体何やってるんだか……。
きっとカシューナがいたら、そう呟いた事だろうな。

おっさんは再び、目を光らせながら玄関掃除を続けるのだった。

＊

「ダイクさまはあちらにいます」
「な、何やってるんですか……？」

グラムルが屋敷の人たちに聞き込みをしていると、何故かイセルが屋敷の玄関付近でじっと立っていた。
しかも、特に出かける用事も無いというのに、フル装備でカッコよく剣まで構えている。

不思議に思って声をかけてみると、抑揚の無い口調で脈絡も無く急にそんなことを話し始めたのだった。
だが、それだけですぐに黙ってしまうイセル。

「いや、別にそんな事聞いてないんですけど……」
「ダイクさまはあちらにいます」
「知ってますって。だから……」
「ダイクさまはあちらにいます」

グラムルは、もはや何も言わずにその場を立ち去った。

＊

屋敷の別の部屋に滞在していたじいさんを呼びに行ったスプが戻ってくると、ちょうど全員が部屋に戻ってきた所だった。

「お、みんな戻ってたのか。どうだった？」
「あ～ごめん、駄目だった。警備の人がいて」
「ワシもまだ駄目そうじゃな。今ダイクと話しとるわ」
「屋敷の人も今はまだ忙しそうですね」
「俺も駄目だった。警備兵のフリをすれば、向こうから話しかけてきてくれるかと思ったんだが……」
（あれは警備兵のつもりだったのか……）
「じいさん、ちょっと聞きたい事があるんだが」
「一体何じゃ？全員改まって」
「あ、何かおいしそうな匂いがする～」

そこへ、ちょうど屋敷の使用人が部屋に入ってきた。
軽く礼をすると、一行に告げる。

「今夜は歓迎の宴が開かれます。よろしければ皆様もご出席下さいと、ダイク様からの言づてです」

……それは、一行の目の色が怪しく輝いた瞬間だった。

第６４話　あ、何やってるんだあの馬鹿は

色々と残念な思い出もあるが、宴会と聞いて彼らが黙っているはずも無い。
完全臨戦体制で、その夜の宴会を迎えた。

「私パス。警備の人がいなくならないか、またちょっと見張ってるわ」

そう言ってベルは早々と部屋を出て行ってしまう。

（そう簡単にいなくならないから警備兵なんだと思うが……）

イセルはそう思ったが、あえてそこには触れない。
万が一、もしかしたら、まさかとは思うが彼女には彼女なりの考えが何かあるのかもしれない。
そっとしておいてやるのが思いやりという奴だろう。放っておく事にした。

その間に、現在の状況と今回の概要をざっとじいさんに説明する。
ついでに、ネーランドという商人について話を聞くことにした。

「ほお、そんなことがなぁ……。実際に見てみないと何とも言えんが、まあ自分の欲しい物のためには手段を選ばん奴じゃったからのう……。古い付き合いということもあるし、何とも言えん」

じいさんの話では、とにかく熱心な収集家（コレクター）ということらしい。
しかも、ただ集めるだけでなくそれらを売買するのが好きだという。

……ネーランドは色々商売人だぞ。目を付けられたくなければ、その魔剣（ティルヴィン）は隠しておいた方がいいぞ、との助言も貰った。

結局、それ以上に親しい間柄ではないため、詳しい事は分からないという所までしか聞けず、そうこうしているうちに宴会の時間となってしまった。

皆、そこそこに改まった格好をして宴会に出席する。

当然、そこに出される料理や酒が目当てだ。それ以上に何かを求めるような格好をするはずが無かった。

唯一、おっさんだけがこの機会にネーランドに接触してみようと、それなりに商人に見えるような格好をして出席していた。

ネーランド歓迎の宴会は普通に、特に誰かが襲われるとかさらわれるとかいった事件は起こることなく進んでいく。

またも楽団の演奏が始まった頃、イセルはテラスに出て昔を懐かしむのだった。

（またあの時と同じ状況かよ……。何だか遠い昔の事のようだな）

手すりにもたれかかって室内を見ていると、何だか既視感（デジャヴ）にも襲われるが、以前と違うのは、スプがじいさんと話しこんでいることと、念のため昔の事件を考慮して、ダイクに警備が厳重に付けられている事だった。

（これならまあ何か起こることも無いか……）

そんな風に考えつつも、念のためふらっと辺りを回ってみることにするイセル。

どうやらこの機会に乗じて、おっさんはネーランドと話す機会を狙っているようだし、グラムルも情報収集をしている。

シャルルはたらふくメシ食ってる。ベルは……まだ戻ってきてないか。
ついでに様子を見に行く事にした。

「……全くあの馬鹿、まだ見張ってるのか？」

昼間と同じ場所で、じっと親の仇でも待っているかのように潜んでいるベルの様子を近くまで行って確認すると、仕方ねーからとちょっと陽動でもして手伝ってやる事にした。……やっぱりノープランだったらしいし。

＊

「あ、何やってるんだあの馬鹿は」

茂みで息を潜めるベルは、イセルが遠くから（まだ警備をしている）ロイの元へと歩いていく所が見えた。
少しふらつきながらも、片手には何やら樽を持っている……いや、両手だな。両手に持っている。
あ、いや違った。さらに懐にも幾つか小さいのがあるらしい。
そして、見知った警備兵に近付いて声をかけた。

「おーい、ロイ。やってるか？」
「あれ、イセルさんまた来たんですか？」
「おお、向こうで見なかったから、まだ仕事してんのかと思ってな」
「そうなんすよー。今日はお客が来て荷物を預かってるからって、このままずっと夜勤です」
「ふっふっふ、そう思ってな。ほれ、酒の差し入れだ」
「わっ！ちょちょっと多すぎじゃないですか！？」
「いーんだよいーんだよ！屋敷の奴らには黙っといてやるから。ほ

ら飲めよ！」
「え、ええ、……いいんでしょうか」
「いいって。向こうだってみんなしこたま飲んでんだからよ。まあ遠慮せずに」
「そうですか？じゃあちょっとだけ……それよりイセルさん、聞いてくださいよ！ベルさんがですね……」

あーあー、いたいけな青年をまた悪い道に誘い込んで……。
何だかちょっと気になるような会話内容になったのにも気付かず、気の毒そうにベルはその様子を見ていた。
そしてようやくイセルが意図する所が分かったようで、来たるべきチャンスに備えて、再びじっと我慢して忍ぶ。

『ぐうぅぅぅ……』

（それにしても……お腹減ったな）

ちょっとだけ、宴会に出なかった事を後悔したベルだった。

第６５話　安請け合いしちゃったかな……

（あらららららら……）

そのしばらく後ベルが見たのは、最初は二人だけだった飲み会の場に現れた他の警備兵たちが、混沌の渦に巻き込まれるようにどんどんと飲み会に参加し始め、段々盛り上がっていきながら、ついには四、五人の普通の飲み会になってしまっていた光景だった。
完全にイセルは、捜査のことなど忘れているに違いない。
……そんなに盛り上がるような話題があったのかな……。

一体どんな事を話していたのか気になるベルだったが、さすがに詳しい内容まではここからでは聞こえない。
それよりとうとう今度は、集まったメンバーで王様ゲームが始まったようだった。
ちなみに『王様ゲーム』とは、ランダムに決められた王様役の人間によって、決められた番号の他の奴隷役の人々に無理難題を要求して実行させるという、圧制を行う権力者気分が体験できると共に、そんな権力者への皮肉も込められた庶民たちの遊びである。主に小規模の宴会で行われる事が多い。
……どうも最近、この町で流行しているようだった。

（全く、一体何やってるんだか……）

男同士で腕相撲をしたり、おでこに口付けさせられたり肩を揉ませたりしながら盛り上がっている連中を見て、久々に人間って分からないわ……という気持ちが湧き上がってくるが、それはそれとして今がチャンスだ。

完全に周囲への注意は怠っている今、忍び込むには絶好の機会だった。

ベルは踊る松明の灯りに照らされぬよう、闇にその金色の髪を隠しながら、夜風と共に紛れ込んで、馬車を囲う壁を越えた。
まるでしなやかな体躯を持つ女豹のように音も立てずに着地すると、そのまま身を低くして馬車へと近付いていく。
遠くから聞こえてくる馬鹿笑いを聞く限り、異常は気付かれていないようだ。
警備の人間がいる場所からは離れているとはいえ、十分に注意しながら、一つ一つの馬車の様子を探っていった。

もちろん、馬は現在厩舎に移動させられているため、馬車周辺には何の生き物の気配も無い。
彼女は幌の外から、中にいる生物の気配だけを探っていく。
途中、何だか分からないモノの気配も感じたが、湧き上がってくる直感によってその荷台はスルーし、数台目まで来た所だった。
彼女がよく知る、人の衣擦れのような音と微かな呼吸音を聞きつけ、ベルは足を止めた。

そのまま少し様子を見て、中の様子を感じ取る。
さらに微かではあるが、少し前に彼女が見た光景にもあった、金属の鎖が揺れる音がする。……間違いない。
辺りに人が近付いてくる気配が無い事を確かめると、ベルは幌の端を静かにめくり、外の小さな明かりを中へと誘い込んだ。
彼女の暗視能力があれば、その小さな明かりだけで大体の様子は分かる。
差し込んだ光によって見えたものは、やはり昼間と同じ檻の中に捕らえられた、少女が横たわる姿だった。

少女が小さく動いている事は確認できたため、小声で呼びかけてみる。

「ちょっとあなた、聞こえる？」

「……はい」

明かりが見えたことで気付いていたのか、少女の側も身を起こし、小声で返事をする。

さて、一体この後どうしたものか……と考えていると、少女の方から話しかけてきた。

「あの、来てくださってありがとうございます。呼びかけた甲斐がありました」

「やっぱり……あなたの仕業だったのね？」

「……ええ。私にはあのような力がありまして、それを知ったあの商人の人に無理矢理捕まってしまったんです」

「えっ、そうなの！？」

「最初は何とか逃げられるかと思ったんですが、この首輪をされた途端、魔法の力が使えなくなってしまい、何とか最後の力を振り絞ってあの時助けを求めたんです……」

「なるほどね……」

「この首輪にこんな力があるなんて、完全に誤算でした。……お願いします、首輪を外してくれませんか？どこかに鍵があると思うんですが」

「……そう、分かったわ。助けてあげるから、もうしばらく我慢してね」

そこまでの話が済むとベルは再び幌を閉め、闇の中に身を溶け込ませる。

それからもう一度辺りの様子を見て、人気の無い事を確認すると、

壁を乗り越えて敷地の外へと身を躍らせたのだった。
元の茂みの中へと戻り、一息つくとさっきの話を確認し、整理する。

（助けてあげるなんて、安請け合いしちゃったかな……）

彼女の囚われているあまりにも無残な姿を見て、咄嗟に正義感で返事をしてしまったベル。
相変わらずの馬鹿笑いをしながら、警備兵たちとどんちゃん騒ぎをしている約一名を見ると、この後どうしたものかと一抹の不安が過ぎるのだった……。

第６６話　そりゃあ……大変だ

とりあえず今の出来事を報告しなければと屋敷に戻ったベルは、屋敷に戻り、パーティーに出席して近場にいたメンバーを集めると、少し離れた場所で事情を話す。

「そりゃあ……大変だ」

抑揚の無い口調でそれを聞いていたおっさんだったが、これで改めて商人ネーランドから事情を聞く理由ができたわけだ。
おっさんは身なりを正し、会場へと戻ると、改めて商売人の装いでようやく話しかけられるようになったネーランドへと近付いていった。

「どうも。楽しんでおられますかな？」

そんな風に当たり障り無く話しかけながら、さりげなく胸元の聖印が視界に入るよう誘導する。
商売を司る神のシンボルマークが描かれたこの聖印は、関係者であるならば、その事がすぐにピンと来るはずだ。

『私は商談を求めています』

そんな合図だった。
当然、チラリと視線を走らせたネーランドもこちらの意図する事に気付いたようで、ほんの僅かな変化ではあったが、表情を商売人のそれへと変化させた。

「ええ。今日はまた盛大に催して頂いたようで。これはしっかりとこの町で恩を返させて頂きませんとな」
「それは楽しみな話ですな。私にも何かいい話があるといいんですが」
「もしご希望であれば、今回の品は充分にご期待に添えるのではないかと思っておりますが」
「それは心強いお返事ですなぁ。ただ……」
「ただ？」

おっさんはそこまで言うと、豊潤な髭を撫で付けながら、たっぷりと含みを持たせてから先を続けた。
中々堂に入った仕草じゃないか。……遠くから見ていた仲間たちは思っていた。

「私の趣味も少し変わってましてな。予てより、貴殿のお話は伺っておったものですから。……今回、何か興味をそそるような、変わった物はございませんかな？」
「変わったものですか……。そうですな、ここでおおっぴらに話すわけにはいきませんが、私が今まで取引した中でも一番といっていいほどの上物があるにはありますが……」
「では、よろしければ今夜にでもお部屋にお伺いしたいのですが……」
「いや、しかし奴は危険だ……」
「奴？」

気になる単語に反応し、怪訝な顔をするおっさん。
眉間の皺に合わせて、豊潤な眉毛がぐにゃりと曲がる。
ネーランドの方も、深く詮索されてはいけないと思ったのか、慌てて手を振りながらその場を取り繕った。

「いや、何でもありません。とにかくアレは軽く扱えるものではありませんのでな。少し考えさせて頂きたい」
「そうですか……、だが何とか話だけでも聞かせてもらいたいものだ。少し興味がありますな」
「分かりました。また詳細が決まり次第、ご連絡させて頂きますよ」
「どうも、よろしくお願いします。それでは、よい時間を」
「はい、それでは」

まるで普段のただの酔っ払いっぽさを微塵も感じさせず、凄腕商人のような会話を繰り広げるおっさん。
……どうした？キャラを間違えてないか？
自分たちがこの屋敷に滞在している事を教えて、さりげなく離れていく。何とか、重要な情報は聞き出せたはずだ。
やはり、ネーランドはあの少女の事を知っていると見て間違いないだろう。
粗方食べる物は食べ、飲む物は飲んでいた他のメンバーを自室に集めるおっさん。
宴会にちゃっかり参加していたじいさんも一緒に。

「……というわけじゃった」
「ほら、やっぱりね」
「誘拐事件ってことですか」
「むぅ……、まさかそこまでするような奴じゃったとは」
「おいじいさん、付き合い方を考えた方がいいぞ？」
「そうじゃのう……」

おっさんからの報告を受け、改めて考え直すじいさん。何やら腕組みをしてうーんと唸っている。
……どうでもいいが、『おっさん』とか『じいさん』とか、適当な呼び方ばっかりの連中だな。

「それより、あの子が言ってた鍵ってのを探さないと。一応少し見てみたけど、普通の鍵じゃないわね。魔法がかかってるみたい」
「そうか……、多分あの商人が持ってるんだと思うんじゃが」
「ああ、それなら多分心配いらん。きっと奴が使ってるのは、昔ワシが作った『魔獣封じの首輪』に違いない」
「じいさん知ってんのか？」
「まあな。あれならワシの魔法で解除できるはずじゃ」
「おお、そうか。頼りになるぜ！」

じいさんの頼もしい台詞に、喜びを隠せないスプ。
何だか妙にじいさんの肩を持つのは何でだろうか。単純に力のある魔術師と知り合いになれて嬉しいというわけではないだろう。
まさか、そんなことで奴が喜ぶはずはないと思うのだが……。

「よし、それじゃ今度は救出計画を練らんとな」
「そうよ！早速助けに行きましょ！」
「いや、待て待て。なるべくダイクの坊ちゃんに迷惑がかからんようにせんとな。あと今日はイセルに巻き込まれた警備の人間にも迷惑がかかるじゃろうし。少し相談せねばな」
「ああ、そうか……。あいつはどうでもいいけど、ロイ君は指輪を探してくれたいい人だからな……仕方ないか」

イセルの隠れた陽動作戦の事などちっとも気にせずに言い放つベル。
それよりも、騙してしまった警備兵のロイ君の事を気に掛けているらしい。良心の呵責という奴だろうか。
そうして、イセルがいないので、代わりにおっさんが話をまとめる役となる。

「今日の所は、怪しまれない程度に色んな情報を集めておくことに

するかいの。ワシはもう一度宴会に出てくることにしよう。……まだ飲み足りんしな」

「わかった。私も少し出て情報収集してみる。（……お腹減ったし）」

「シャルルも果物食べに行く～」

「イセルはまだ戻ってこないんですかね。ちょっと様子を見に行ってきます。（……あのコップを試してみたいし）」

「おいじいさん、その首輪の事ちょっと教えてくれよ」

「おおええぞ。あれは若き頃のワシの中々の傑作じゃったな」

特に他の描写が必要ないほど、珍しくスムーズに相談は進み、何だかんだで少女を助ける方向へと決まった一行。

今日の所は解散ということで、各自それぞれの任務へと付いたようだった。

第67話　死霊退治が死霊に

おっさんはその後、宴会会場へと戻り、さっきまでの真面目さの分まで、普段の自分を取り戻すかのように酒を飲みだした。
まるで商人の雰囲気など微塵も感じさせない、見事なまでの飲んべえっぷりだ。
ベルは充分食事を堪能しながら、近くにいた知り合いの使用人の人と世間話を繰り広げる。

「いつまであの商人いるのかしらね～？」
「そうね～、ちょっと胡散臭い物も取り扱ってるみたいだし、あんまり長くいてほしくはないわね」
「え～そうなんだ。ヤな感じね～」
「多分ダイク様とはその辺の話ができないし、すぐに出て行くでしょうけどね」
「あ～その方がいいわとっとと出て行ってほしいな～」

エルフでありながら、噂話は人間以上に得意な彼女だった。……さすが、人間界に帰化しただけはあるな。
当然、その横でシャルルはブドウを頬張り続けている。

一方、グラムルはといえば、イセルが未だ陽動し続けているはずの倉庫へと向かっていた。
何故か、その手にはじいさんから貰った魔法のカップを持参している。
近くまで来ると、まるでこちらでも宴会が開かれているかのような喧騒が聞こえてきた。
……完全に周囲にバレそうなもんだがな。

「わはははははっ！そいつはいい！」
「だろー？それにグラムルと言ったら……っておい！グラムル！」
「あ、イセル。まだやってたんですか」
「ちょーどいい所に！ほらこっち来て飲めよ！」
「グーラムル！グーラムル！」
「何だろうこの入りづらい雰囲気……」
「何ごちゃごちゃ言ってんだよ！剣に魂を捧げた者同士、熱く酒を酌み交わそうじゃないか！……あれ、コップあるかコップ」
「あ、大丈夫です、一応自分の持って来たんで」
「お、いいねーその積極的な姿勢。さすがカエル女と呼ばれるだけあるな！」
「その話はもうやめて～……」
「分かった悪かった！よし、仲直りの印だ！ほれ」
「え？じゃあ、ちょっとだけ……」

と一杯貰ったのが運の尽き。死霊退治（レイス）が死霊になる運命を辿るグラムルだった。
じいさんから貰ったコップは中々気が利いているらしく、味の変化はそのままに、さらにアルコールが含まれている場合はそれもそのままの飲み物にしてくれるようだった。
かくして、ニンジン味の酒やらセロリ味の酒（これは意外とさっぱりしてイケた）を飲むことになり、すっかり悪酔いしてしまったグラムル。半目になって顔を赤くしながら、

「うぅ……きぼちわるい……」

そのまま、パッタリとその場で寝てしまった。

「おいおい、しよーがねー騎士さんだな。おい起きろ！起きないと

チューするぞ！」
「やめて下さいイセルさん！我々のグラムルさんに不埒な真似は許さない！」
「ロイ、お前ベルの事はどうなったんだよ～？この浮気者め～！」
「いいんです！ベルさんにはベルさんの良さがありますから！対照的に、グラムルさんのこの朴訥で純情そうな感じはたまらなく……」
「はい！グラムルが飲んでいたコップがあります！誰か飲む人！」
「はいはいはいはいっ！」
「節操ねえな～お前……」

その後、グラムルが持参した凶器（コップ）により、次々と悪酔いをして倒れる者が出始める。
そうしていると、今度はじいさんとの話が終わったと思われるスプが、遅いグラムルを心配して迎えに来たようだった。
当然、哀れ酔っ払いたちの群れに巻き込まれていくことになる。
こいつらはそこらのゾンビよりも怖い集団だぜ……。
すかさず、近付いてくるスプを目ざとく見つけたイセルが、宝目当ての罠にかかった冒険者たちを見つけた『干（ママ）からびた者たちの王』のような目を彼に向ける。

「おっとここで二番、スプ君の登場です！彼は何と言っても魔法使いですからねー。一体何をやってくれるんでしょうか！？」
「おぉ～っ！（パチパチパチ）」

電光石火の先制攻撃（むちゃぶり）を受けたスプは、攻撃可能な間合いに入る間もなく立ちすくんでしまった。

「さあさあ、中々もったいぶっていますねー。これは期待できそうですよ？」
「スープ！スープ！」

すっかりいつの間にか司会進行役を始めてしまったイセルが、彼の退路を断ち、追い詰めていく。
いつの間にか十人近くなっているこのはぐれ宴会の参加者の視線を一点に集め、スプの緊張感は最高に張り詰めていた。
……無意識に、いつも慣れた動作を始めるスプ。そして……。

バシュゥゥゥゥッ！

≪魔法の矢（エネルギーボルト）≫の花火が上がった。

「おお～っ！」

何とかウケたらしい。
酔っ払いと書いてゾンビと読む者どもの≪電光（ライトニング）≫の魔法よりも鋭い期待の視線をかいくぐり、ホッと一安心したのも束の間、司会はさらに追い打ちをかけてくる。

「さて続いてはっ！？」
「えっ……！？」
「……」
「……」
「……」
「……寝てろっ！」

余りのプレッシャーに追い詰められたスプは、自爆覚悟の得意魔法、≪眠りの雲（スリープクラウド）≫を発動させたのだった……。
効果範囲の中に自分もいたスプは、真っ先に倒れて眠り始める。
アルコールが入り、抵抗力が弱っていた残りのメンバーも、次々と意識を失って倒れていった。

中には、飲みすぎのせいなのか何なのか分からない感じの人々もいたが。
当然、イセルもそれに巻き込まれ、倉庫の入り口のはぐれ宴会は、収拾も付かないまま唐突に幕を閉じたのだった。

ヒュウ～……と音がしそうなほど、辺りは静まりかえってしまう。
……おいおい、いいのかこのままで？
そんな誰かからの問いに答えられる者は、この場には誰も残っていなかった。

第68話　だって、ちょっとぐらい飲みたかったんだもん

「ほれ、起きんか」

イセル、グラムル、スプ、それに他の面々が起きたのは、どうやら迎えに来てくれたおっさんのおかげだったようだ。
余りに遅かったため、心配になって来てくれたらしい。
何だか寝る前の事をうまく思い出せないほど泥酔していた面々。……ただ、とりあえずこのままではいけないという事はわかった。
イセルがロイの肩を揺すって起こす。

「おいおい起きろよロイ」
「え……あれ？イセルさん」
「お前飲みすぎだよ～。こんな所で寝ちまって。……ほら、持ち場に戻らないと怒られるぞ？」
「あ……寝ちゃったんですか僕。すいません、ありがとうございます」
「いいってことよ。他の連中には内緒にしといてやるから。……じゃあな、頑張れよ」
「はい。おやすみなさい」

集まってきた面々も次々に起こし、場を解散させる。
何とか大事（おおごと）になる前に撤収できたようだ。……まあ、さっきまで既に大事だった気もするが。
ちょっとふらつきながらも、仲良く自室へと戻っていく一行だった。

「あてて……。ちょっと飲みすぎたなー」
「完全に普通の飲み会になってたじゃないですか。もうとっくにべ

ルは戻ってきてましたよ」
「その通りじゃ。……まさか、グラムルまで一緒に飲んでるとは思わんかったがな」
「……俺も」
「……す、すいません……」
「いやいや、大目に見てやってくれよ。俺は今日ちょっとグラムルを見直したぜ？まさか『騎士様』が酔っ払って寝ちまうなんてよ。あれはいいノリだったぜ」
「……だって、ちょっとぐらい飲みたかったんだもん……いいじゃないか……」

ブツブツといじけながら呟くグラムル。何だかストレスでも溜まっているのだろうか？
そんな風にみんなで寄ってたかってチクチクとグラムルをイジメながら、宴会の夜は更けていった……あ、いやむしろ明け始めていた、かも。

＊

次の日、一行の半数が二日酔いとなるコンディションの悪い中、部屋に集まった一同は昨日の報告と、改めて今後の方針を話し合う事にした。
……その中には、じいさんの姿もある。
しかしその内、イセル・グラムルの二人は、時折「うぅ～……」とか唸って頭を押さえていた。……完全に飲みすぎだ。
イセルはベッドに寝転んだまま、グラムルはその横の床に体育座りをして唸り声を上げていた。

「全く、やれやれ……」
「さて、じゃあ昨日の情報の確認をしてみるか」

呆れた顔のおっさんと、進行役モードになったスプが話を切り出す。
いつの間にか満場一致で捕らえられた少女を助ける方向性になっているようだが、さすがにそれに異論を唱える者はいないようだった。
いるとすれば、それはダイクを始めとする関係者に迷惑をかけることが無いように、という部分を気にする者だけだ。
中には、誘拐と人身売買を理由にひっ捕らえようかという案もあったのだが、元々取引があったラカーサ家まで疑われてはまずいだろうという意見が出た上、おそらくダイクやその父であるノルディックなどはそうした取引とは無縁なようなので、きっとすぐにここは去っていくだろうという推測から、まあそこまでしなくていいか！
……むしろちょっとめんどくさいか！という結論から、『少女を解放する』までが目的となった。

どうやら聞き込みの結果から得られた情報は、商人ネーランドはこの町の領主と昔からの取引があったのだが、ラカーサ家となってからはそれほど親しかったわけではないらしい。
今回は、ダイクに挨拶をするために顔合わせに寄ったぐらいなのではないか、という話だった。
というわけでこの少女救出作戦だが、すっかり仲の良くなった塔のじいさんに救出の協力を依頼することに。
スプが代表してお願いをする。

「……というわけなんだが、じいさん手伝ってもらえないか？」
「うむ、ワシが作ったあの首輪が関わっている以上、無関係というわけにはいかんようじゃな。おおっぴらにというわけにはいかんが、少しばかり協力してやろうか」
「そうか、悪いな」
「して、どうすればいいんじゃ？首輪を外すぐらいなら造作も無い事じゃが」

「問題はそこなんだよな～……」

じいさんから持ちかけられた問いに、全員揃って首を捻って考え込んでしまう。

ラカーサ家の敷地内で知り合いが警備をして荷を守っている以上、うまくやらなければ、ラカーサ家の信用問題になってしまう上、下手したらロイたちと戦ったり、屋敷を追い出されてしまうはめになるのだ。

一同は狭い部屋で顔を突き合わせて、少女救出作戦を練り始めたのだった。

第69話　別に犯人を作るってこと？

一同は、少女救出大作戦を練っている所です。

「じいさんのガラクタの中に何か使える物無いのか？」
「ガラクタとは失礼な！」
「そうですよ！」

何故かすかさずグラムルがフォローする。……そんなにあのコップが気に入ったのだろうか。
早速昨晩、それで痛い目を見たというのに。
その熱意に、むしろじいさんの方が驚いていたぐらいだった。
代わりに隣でごそごそとしていたスプが、懐から何やら怪しいビンを取り出した。……彼が取り出すと、普通の水でも怪しい液体に見えるのは何故だろうか？
これと同じ事がイセルに関しても言えるのだが。

「仕方ない、今回作ってもらったこの爆薬を使う時が早くも来てしまったか……」
「そんな物騒なモン使わなくても、睡眠薬ぐらいならすぐできるわい」

呆れた表情でそれを押し止めて、じいさんが遮る。
『アレ』っていうのはこのことだったのか？……全く、ろくなモン頼まない奴だな……。要求に応えるじいさんもじいさんだが。
奴に渡す事がどれほど危険なのか分かってはいまい。

そのじいさんは睡眠薬を持参しているのかと思ったが、どうやら即席で作る事ができるらしい。

何でも、材料さえ揃えばそれを魔力でうまく調合して物を作るというのが、じいさんの得意とするジャンルのようだ。それを物体に恒久的に定着させるという段階が難しいのだなんだ……と、くどくどと話してくれた。まあスプとグラムル以外は真面目に聞いていなかったのだが。

「まあワシも、少しはその道で名の通った魔法使いじゃ。必要なら明日中に作っておこう」

「そうか！それをあの『味の変わるコップ』で警備兵に飲ませれば……っ！」

「そうだな！どうやって！？」

何やら次々に名推理で町の怪事件を解決していく大人気の冒険者物語の主人公のように閃いたグラムルの台詞に、その助手のようなノリで突っ込みを入れるイセル。

魔法で外見だけ子供にされてしまった冒険者が、色々な怪事件に巻き込まれてその謎を解いていく子供向けの冒険譚は、誰もが子供の頃、一度は耳にする物語だ。

彼らが全く姿を見せずに飲ませることができればいいのだが、残念ながら「差し入れでーす」と持って行った所で完全に顔が割れてしまう。かといって詰め所の方に持ち込んだとしても、歩哨をしている警備兵に飲ませることは無理だろう。

結構いいアイデアだと思ったのに、あからさまにシュンとしてしまうグラムル。

……そんなにあのコップを使いたかったのか？

入れ替わりにスプが一つ提案をする。

「陽動事件を起こすってのがオーソドックスなパターンな気がするけどな」

「そうか！俺が近くに行った所で魔法で眠らされて、『敵襲だ……』とか言えばいいんだな？」

発案者を見ながら、イセルがちょっと根に持ったように続ける。……この件に関しては、第８話を参照して頂きたい所だ。

結局あの事件に関しては、あれからもお互いにうやむやにしたままだった。

その後すぐにそれ所ではなくなってしまったため、実は二人にとっては非常に都合の良い出来事だったりもしたのだが。

「別に犯人を作るってこと？」

「少なくとも、俺らが犯人だとバレたら屋敷に迷惑がかかるだろ？」

「まあそうだけど。じゃあ誰かが犯人役やるの？」

「結構素早い人……って言ったら、ベルしかいないよね？盗賊だし」

「え～私やだよ～っ！本当に捕まっちゃったらどうするの？」

「待て待て。何も本当に犯人を作らなくてもいい。『犯人がいた』ってことにしとけば」

「なるほど。結構私たちあの辺ウロウロしてるもんね。怪しい人物を見たんだってことにすれば……」

「ちょうど辻褄も合うってことだな。見事な伏線の張り方だ」

「ＯＫ。それで警備の人たちはそいつらに眠らされたってことにすればいいわけね」

うんうんと頷くベル。

何度も倉庫へと足が運んだ甲斐があったと満足そうだ。……それを見て、若干イセルが苦い表情をする。

だがそんなことにも気付かず、コツコツと杖を叩きながらスプが問題提起をした。

「でも問題は、どうやって警備兵を眠らせるかってことだよな」

「睡眠薬？」
「……でも結局、飲ませる方法が無いじゃんか」
「欠伸したとこに投げ込むとか？」
「無茶言うな」
「じゃあやっぱり魔法かな……」
「効かなかった場合がやばいぜ？ピーって応援呼ばれるんじゃない？」

ピーというのは要するに呼び子だ。警備兵は、何かあった時に仲間を呼ぶため、常に首から提げているはずだ。
先ほどのロイとの話の際に、その辺は確認済みである。
隠密作戦において、仲間を呼ばれてしまっては、その瞬間にほとんど作戦失敗だと言ってもいい。
何とかそこを避けて無力化しなければならないのである。

「あれ？そういえば警備兵って一人だけ？」
「表に二人いて、裏は一人だったわよ。あんまり厳重とは言えないわね」
「じゃあ当然裏からだな。一発で寝てくれれば問題ないんだけど……」
「問題は抵抗された場合か」
「あれ？そういえばじいさん魔法使えるんだろ？」
「おう、≪眠りの雲≫ぐらいなら当然使えるわい」
「おおっ！やるじゃねーかじいさん！」
「それぐらい初歩の初歩だって……」
「よし、それじゃあもし一発目が効かなかった場合は、続けてもう一発魔法をかける、と」
「二発目も駄目だったら？」
「……」
「……どうしようもないな。強行突破か？」

「完全にバレるけどね」
「う～む……」

こうした展開にはあまり慣れていない一同。……計略系というか、謀略系というか。
基本的に、計画性と実行力に結構な差があるんだよな。その辺は、第１８話辺りを見てもらうと分かりやすいかと思います。

色々と計画は練ってみたものの、はてさて、うまくいくのかどうか……。

第７０話　救出大作戦だ！

「よし、救出大作戦だ！」

何とか半日ほど話し合って、作戦は決定した。
裏口から侵入し、一人いる警備兵はスプとじいさんの魔法で眠らせる。眠らなかった場合は……その時考えようという、いつも通りの行き当たりばったり作戦だ。
というわけで、一行は夕暮れを待って、ベルが潜伏していた倉庫の裏口近くの茂みに身を隠していた。

「……ロイの奴、全く運が悪い奴だぜ」

一同の視線の先には、すっかりお馴染みとなった警備兵のロイ君が見張りに立っていた。
この一連の騒ぎで何度も顔を合わせているイセルは、この余りに運の無い男に少し同情し、隣にいたベルをチラリと見る。

「……おいベル。これが終わったらアイツと一緒に食事でもしてやれよ」
「何で私がそんな事しなきゃなんないのよ」
「そりゃ何でってお前……」

理由を説明しかけて、言葉を濁すイセル。この脈の無さ……駄目だなこりゃ。
あいつには悪いが、遠くで見てる今ぐらいの方が良さそうだ……。
何故か少し不機嫌そうな顔のベルから目を逸らし、重ね重ねロイに同情するイセルだった……。

その後、全員で固まっていても身動きがとりづらいため、三箇所に分かれながらタイミングを計る。
日が傾きかけ、少し離れたらもう人の顔の判別はし辛くなっている。
……作戦決行の時だ。

「じゃあいいな。……行くぞ！＄＋＆％＃……」

そう言って、スプが呪文の詠唱に入る。ここからなら姿も見えず、声も聞こえないはずだ。
事前にじいさんに視力を強化する魔法をかけてもらい、魔法の有効範囲ギリギリから得意技≪眠りの雲≫を発動させた。

一同が息を呑んで成り行きを見守る中、ロイは急に訪れる眠気に耐え切れず、膝を折る。
そのまま倒れるか……と思った時、片膝のまま踏み止まった彼は、首に下げていた呼び子を手に取った。

（――やばい、しくじった！？）

そのまま口元に手が伸び、皆が応援を呼ばれるかと思った瞬間、ロイは口元に呼び子を近づけたままの姿勢で前のめりに地面に倒れこんだ。……そしてそのまま動かなくなる。
ホッとした一行が振り返ると、そこにはじいさんが杖を振りかざした姿勢で立っていた。

「……やれやれ、何とか間に合ったかの」

絶妙のタイミングで同じ魔法を発動させたじいさんの力により、何とか警備兵は無力化した。

そして間を置くことなく、走り出す一同。
シャルルが呼び出した闇の精霊により、詰め所との間の視線を遮る。
闇に紛れて、ベルとイセル、そしてスプとじいさんが走り出した。
他のメンバーは見張り役だ。

荷馬車は前回ベルが忍び込んだ時と配置は変わっておらず、一直線に駆けつけた一行が幌をめくると、中には以前と同じままの檻が設置されていた。
そして、微かな物音を聞きつけていた少女が、彼らを待っていたのだった。

「お待たせ。大丈夫だった？」
「はい。来てくれたんですね」

例によって短く会話だけしている間に、スプが≪開錠（アンロック）≫の魔法を唱えて檻の鍵を開ける。
この暗闇ではベルの鍵開けは無理だという事で、もう一度続けてスプの魔法により、足枷を外した。
その間にじいさんが少女に掛けられている首輪を調べると、ふむと頷き、小さく呪文を唱える。
そしてカチリという小さな音と共に、少女を拘束していた首輪が外れ、彼女を束縛する物は何も無くなったのだった。

「よし。合言葉は変わっていなかったようじゃな」
「遅くなったわね。これでもう自由よ」

ベルが優しく少女に話しかけると、少女は強くベルの手を握ってきた。

「ありがとう。お礼をしたいので、ここから北西に行った所にある

リュムカって村に来てくれませんか？」
「いいわよ、お礼なんて。それより、一人で帰れる？」
「大丈夫です。首輪さえなくなれば。……それより、必ず来てくださいね。待ってますから」

そう言うと、少女は何やら呪文を唱えた。
呆気に取られた一同が我に返った時には既に、少女は彼らの目の前から消えていたのだった……。

「しゅ、≪瞬間移動≫……？」
「む、あれはもしや……！？」

驚いた魔法使い二人が、思わず感嘆の言葉を漏らす。
だが、少女の姿は紛れも無くそこから消えていた。我に返ったベルが、慌てて逃げましょうと他の面子を促した。
用事が終わればここにはもはや用は無い。素早く来た時と同じように場を去る全員。
倉庫の敷地から出ると、予め打ち合わせしておいた通り、自室に戻るメンバーとここに残るメンバーに別れて行動をし始めた。
少し時間が経った後、ロイの所へ駆けつけたイセルとベルが、まだ呼び子を持って眠ったままの彼を揺すって起こす。

「おい！ロイ！起きろ！」
「あ、あれ？イセルさん……何だか昨日も同じような……って、え！？」
「荷馬車だ！誰かが中に入って行った！」
「ほ、本当ですか！？」

ピィィィーッ！！！

突然のイセルの台詞に驚きながらも、即座に反応して呼び子を鳴らすロイ。
静かだった夜の倉庫周辺に、似つかわしくない甲高い音が響き渡った。
その音を聞きつけて、倉庫の表と詰め所から、ワラワラと警備兵が現れる。
そしてイセルから手早く話を聞くと、手分けして荷馬車を確認し始めた。

「おい！檻が開いてるぞ！」

程なくして、そんな声が周囲に響き渡ったのだった。

第71話　テーマは演技派

辺りは騒然となり、手が空いている警備兵の全てが総動員されて、敷地内やその周辺に怪しい人物がいないか捜索され始める。
だが、当然いない者は見つかるはずも無く、捜索は全て空振りに終わるのだった。

「くそ、全く見つからないとは……。一体どんな奴だったんですか？」
「うん、中肉中背であまり特徴の無い感じだったな。暗くてよく見えなかったし」
「そうですか……。イセルさんたちはどうしてここに？」
「いや、その怪しい奴を見かけて、追いかけてきたらここに来たんだよ」
「そうだったんですか！捕まえられなくて無念です。……一体どうしたら……」
（すまんな……ロイ）

イセルの説明に、特徴が無いのに怪しいとはどういうことか？とか突っ込み所は色々あるにもかかわらず、責任感からそんなことにも気付かないロイ。
この後に言い渡される処遇や、自身の力の無さに嘆いているようだった。
もちろん、責任を負わせてしまった側のイセルは、何か処罰があるようなら庇ってやるつもりだったのだが。

そこへ、屋敷の方から騒がしい集団が現れた。声を聞く限り、どうやら話を聞きつけたダイクとネーランドたちのようだ。

数人の取り巻きと共に、こちらの騒ぎを聞きつけてあれこれ報告を聞いている。

「あっ、俺あいつに会わないようにするからな！頼むぜ！」
「あっ、アタシもアタシも！」
「ワシらも退散しておいた方が良さそうじゃな」

その姿を見るなり、イセルとベル、それにじいさんたちは居心地が悪くなったのか正体がバレないようにする為なのか、急にその場から離れていった。
残りの面々はそのままそこにいると、ネーランドの方が誰かを見つけてこちらへ駆け寄ってくる。
ずかずかと一行に近寄ってくると、おっさんに向かって息巻いて叫んだ。

「あ！アンタ！アレの事を聞いてたのはこういうことだったのか！？」
「……え！？まさか、あなたの馬車だったんですか！？」
「しらばっくれるんじゃない！アンタの仕業だろ！」
「落ち着いてください！何のことですか？……私はただ、こちらで事件があったというので様子を見に来ただけなんですが……」
「本当か？……くそ、一体誰が……っ！？」

ネーランドはかなり慌てているらしく、冷静沈着でポーカーフェイスなおっさんの言い分にすんなり納得して、あれこれと思い悩んでいる。……もしかしたら、他にも心当たりがあったのかもしれない。
意外にもおっさんは、ポーカーフェイスを全く崩さずにそのまま演技を続けた。

「というと、もしかして先日話していた……？」

「……そうだ。なんてこった……あれが盗まれてもおおっぴらに探すことはできん」
「よく分かりませんが、さっき見た所、檻のようなものがあって空いていましたが」
「くそっ、まずいな……」
「私も色々当たってみますので、もし何か分かったらお知らせしますよ」

そこまで言うと、降って湧いた災難に巻き込まれた商人は、慌しく馬車の荷台の方へと駆け寄っていく。
残されたおっさんと他の面々はそ知らぬ顔だ。

「おいおい、何だか今回みんな演技派だな～……」
「テーマは演技派じゃな」

こっそりと戻ってきたイセルたちがひそひそと話す。
何だか彼らにしては珍しいタイプの事件だが、思ったよりうまくいった気がする。
あまりに真面目な顔をして言うおっさんに、一同は顔を見合わせてくすくすと笑った。

＊

「皆さん、大変な事になってしまいました……！」

一通り荷台の様子を見て戻ってきたダイクが一行の所へ来てそう言うと、難しそうな顔をして悩んでいる。
確かにそれはそうだ。何せ、お客様の大切な荷物が自分とこの敷地内で盗難にあったのだから。
通常なら責任問題だ。しかし……。

「どんな事をしても弁償するつもりなんですが、何故かネーランド様は公にしたくないそうで……」

聞いてみると、このことは内々で済ませて、もし犯人が見つかったら教えて欲しいというぐらいの対応だったそうだ。
荷物の事を聞いても、何だか煮え切らない返事で濁されてしまったらしい。

「珍しい獣か何かだったんでしょうか……？」

檻の様子までは見たらしいダイクは、そんな感想を口にする。
まさか、いたいけな少女があそこに捕まっていたとは夢にも思うまい。年の頃なら、彼と同じぐらいだったはずだ。
もしそれを知ったなら、間違いなく然るべき所へ通報しただろう。
しかし、それを知らない彼が気にするのは、どうやって荷物を弁償しようかという事だけだ。
未だ手掛かりすら掴めない凄腕の盗人に対して、周囲の使用人から時折小さい呟きが漏れるのが聞こえてきた。

「こんな時、カシューナ様さえいれば……」

今駆り出されている人々からすれば、まさにそれが本心だっただろう。
こう言っては申し訳ないが、代理の警備隊長の指示は今一心許ない。
……それはその人物の力不足というよりも、日頃から上に立っているカシューナの統率力の高さ故だろう。
その気持ちは一行にも良く分かった。
だが、逆に今回はそれが助かったとも言える。
この分なら、公の機関が捜索に入ることも、彼らにまで捜査の手が

回ってくる事も無さそうだ。
後は、ほとぼりが冷める頃に例の村まで行って留守にでもすれば…
…。

程なくして彼らは、自室に戻る人々と、そのまま警備組に加わって
捜索を続ける人々に分かれて、今回のミッションは終了となった。

第72話　さて、どんな事が聞きたい？

倉庫に忍び込んで少女を解放し、そ知らぬ顔で無関係のフリをする一同。
次の日、どうやら呼び出されるような事も無かった彼らは、町の盗賊ギルドにおいてネーランドの噂を聞いてみることにした。
向かうのは、相変わらずいつもの通り、イセルとベルだ。

「おっ、お前ら。また会ったな」
「あれっ？え～と……」

通された部屋でしばらく待った後に現れたのは、前々回の依頼人、ハルミトンだった。
盗賊ギルドに所属しているとは言っていたが、まさかこんな風に再会するとは。
しかし、何故かキョトンとした顔をしている二人。
まさか、もう忘れて……？

「ハルミトンだ。この前は世話になったな」
「ああ、そうだそうだ。どうもこちらこそ」
「ほんっとだぜ！……てめえのせいで……っ！」

思い出した途端、苦々しげに顔を歪めるイセル。両手の拳を握り、ワナワナと震わせている。
きっと、頭の古傷が疼いているに違いない。
それを見て、焦った表情で慌てて弁解するハルミトン。

「待て待て。俺のせいにするなって。アレは不幸な事故だろ？」
「……くそ、まあな。代わりに今日はまけといてくれよな」

「わかったわかった。で、今日は何の用だ？」
「ちょっと、ネーランドって奴の事を聞きたいんだけど」

了解した、といって少し奥へ入るハルミトン。おそらく情報の刷り合わせでもしているのだろう。
それほど待たされる事も無く、また戻ってきた。

「さて、どんな事が聞きたい？」

＊

またしても値切りに値切って（ハルミトンは苦笑いをしていたが）、聞き出した情報によると、概ね事前に集めていた情報の通りだったようだ。
日用品からレアな魔法の品々まで、色んな物を扱う雑貨行商人で、そこそこの財を成していたらしい。
特に珍しい物を集めて売り捌くのが好きで、その筋には有名な人間だったようだ。
しかし最近は趣味が行き過ぎて業績も下降気味、そのせいか少しきな臭い事にまで手を出し始めているとか。
だがこの町に関しては、今のラカーサ家に変わってからというもの、あまり付き合いが深くなくなったようで、いつも少し滞在してはすぐに出て行ってしまうのだとか。
だから今回も「あんな事」があっても、すぐに出て行くだろう、というギルドの見解らしい。

やはり既にこちらにもあの事件の事は伝わっていたらしく、問題の荷の事も大まかには掴んでいるようだ。
さすがに本職らしく、ハルミトンの表情からは、その犯人が彼らであると掴んでいるかどうかということまでは分からなかったが、本

気で捜査をすれば、少なくとも遠くないうちに尻尾は掴まれてしまうだろう。
……何しろ、架空の犯人などいくら捜しても見つからないのだから。

だが、まあこの様子なら、どうこうされるということは無いだろう。
復讐などした所で何の意味もないし、そんな無駄な事をあの商人がやるはずも無い。
俺だったらとっととこんな町なんか出て行くね、というイセルの言葉どおり、その翌日、ネーランドは町を出発することになったのだった。

当然、出発は慌しいこととなる。
馬の準備から次の町までの保存食の手配、着替えなどの支度など、ラカーサ家もフル稼働状態でのお見送りだ。
……結局、肝心の商売に関しては、当たり障りの無い物を少しだけ売買したそうだ。
後ほど、ダイクから聞いた情報だった。

一行はと言えば、犯人を捜すふりをする者や、あまり部屋から出ずにネーランドと顔を会わせないようにする者、全く関係なく日々を過ごす者などそれぞれに分かれ、商人の出発を待った。

「にこやかに手でも振ってあげようかしら？」
「馬鹿、余計な事するなっての」

部屋の窓のカーテンを少しだけめくって出発の様子を眺めるベルに、イセルが嗜めるように言う。
最も倉庫周辺をうろついていたこの二人は、誰かに何かを聞かれてボロが出ないよう、できるだけ部屋にいるようにしたのだった。
若干退屈だったのか、上記のような台詞が出てしまうベル。

もちろん冗談だったのだが、気分としてはそんな感じだ。
直感や生理的な嫌悪感が、すぐに行動へと移りがちな彼女なのだった。……全くもって職業盗賊とは正反対だな。

＊

「この度は非常に残念でしたな。……もうしばらく待ってくだされば、何らかの手掛かりが得られたかも知れないですに」
「いえ、……こうなった以上、もはや仕方ない。またあの惨劇を繰り返すわけには……」
「惨劇……？」
「いやいや、何でもありませんこちらの話です。では、またどこかでお会いした時には……」
「ええ。その節はよろしくお願いします（……多分無いだろうがの）」

最後まで演技派を貫くおっさんが別れを告げると、すぐに大量の馬車で組まれた隊商はラカーサ家を出発するのだった。
それを再び、屋敷の全員でお見送りするダイクたち。
どうやらじいさんは最初に挨拶をして以降、ネーランドには特に接触しないようにしたようだった。ここにも姿は無い。
多分まだ、客用の自室にいるはずだろう。
確か……ネーランドが出発したら、研究に必要な買出しをしてすぐに帰る、と言っていたはずだ。

＊

「じゃあな、お主たち。世話を掛けたな」
「おう、じいさんもまた来いよ」

相変わらず何故かじいさんには愛想の良いスプがそう言って見送る。
他一同も揃ってじいさんの見送りに来ていた。
そう言えば聞きそびれてしまったが、ラカーサ家との関係についてもよく分からないままだ。
ただ、カシューナを始めとして古くからの使用人などには面識があるらしく、簡単に挨拶を済ませるとじいさんはまたあの塔へと戻っていったようだった。

「お主等、……またあの少女に会うのならば……気をつけるんじゃぞ」

そう不可解な言葉を残して。
どういうことかピンとこなかった彼らは、特にその言葉の裏を尋ねる事は無く、じいさんを見送った。
何となく、『また狙われる可能性があるから注意するんだぞ?』ということぐらいに思っていたのが大半だっただろう。
まさか、これから向かう予定の村で、あんな事件が待っているとは露ほどにも思わずに……。

そして、ネーランドが去って二日後。
念のため少し間を空けた後、ダイクには適当言って、彼らは少女の言うリュムカという村へ出かけたのだった。

「あれ?皆さんお出かけですか?」
「……え?ああ。ちょっとな」
「そう。ちょっと北の方まで湯治だよ、湯治」
「……湯治?こんな急にですか?」
「色々あって疲れたんですよ……」

そう言うおっさんの哀愁漂う背中には、さすがのダイクもかける言

葉が無いようだった。

第７３話　こんな時に最初の人をヒュッて避けて後ろの人に当たる弓があれば…

「ここがリュムカであってるんだろ？」
「そのはずだけど……」

あちこちで情報を聞き込みしながら辿り着いたリュムカの村は、妙に閑散としていた。
元々それほど家の数も多くない村のようだが、それでも中心近くに存在している集落付近まで来ても、人っ子一人歩いていない。
しかし、時折通る家の窓からは、中に人がいる気配は感じ取れていた。

「何か、いや～な気配だな……」

村の中心部に近い広場に到着し、イセルがそう呟いた時。

「おい！こいつらだ！間違いない！」
『わあああぁ～っ！』
「な、何だ何だ！？」

その叫びと共に、各家々から一斉に村人と思われる人たちがワラワラと出てきて、一行を取り囲んだ。
唖然としている一同が立ちすくんでいる間に、村人は次々に増え、気が付けばざっと五十人近くの集団となって彼らの周りに円を描いていた。
当然、子供からお年寄りまで、老若男女問わず彼らに刺すような視線を向けている。それは少なくとも……。

「大歓迎されてるってわけじゃなさそうだな……」

そのイセルの台詞の通り、村人たちからは険悪な雰囲気が漂ってきている。
中でも男たちはクワや鋤を武器のように構え、今にも襲い掛かってきそうに一行の様子を窺っていた。

「こいつらが……」
「早く捕まえて！」
「逃がすな！囲め！」

皆血走った目で口々にそんな風に叫んでいる。
辺りは怒号に包まれ、話しかける一行の声など届いてはいなかった。

「何だ何だ？おい、一体これは何の……」
「ちょっと聞かんか！」
「やめてください！私たちはある少女からここの事を……」

人々は全く彼らの言葉には聞く耳を持たず、血走った目で一行を睨みつけている。
特に、グラムルが少女の事を口にすると、より一層村人のボルテージは高まった。

「やっぱりだ！あの娘の関係者だ！」
「ぶぶ武器を捨てろ！」
「暴れるんじゃないぞ……っ！」

完全に興奮状態にある村人たちは、今にも襲い掛かって来そうだ。
だが、人数は多いが、所詮は戦いには素人の集団だ。一行が全力で逃げようとすれば、何とかできないわけでは無さそうだった。

しかしその場合、もちろん流血沙汰は避けられないわけだが……。

「どうするよ。やっちまうか？」

「武器を向けられてるとは言え、一応戦士としては、一般村民を手にかけるのは気が進まんな……」

「まあ、確かにそれには同感だな」

「どういう理由かも分からんしの」

「何で私たちがこんな目に遭わなきゃいけないのよ！まったく」

「何とか聞く耳を持ってもらえないでしょうか……？」

「こんな時は英雄譚だと、カッコいい騎士かなんかが大声で説得して、民衆を静めるんだよなぁ……」

完全に思わせぶりなイセルの台詞に、みんなの視線がグラムルに集まる。

視線の先のグラムルはと言えば、注目を浴びて初めて何かを期待されているという事に気付いたらしく、一瞬の間を置いた後、慌てて両手をブンブン振って後ずさった。

「……えっ、あたし！？無理無理！！」

……まあ誰も、ここで彼女が率先して『静まれい皆の衆！！』などと言って事態を収めてくれるとは思っても無かったわけだが、それにしても諦めるの早すぎだろ……。

ちょっと額に汗を垂らしながらも、これで大方の流れは決まってしまった。

誰とも無く顔を見合わせて、諦めの表情で頷き合う。

「……決まったようじゃな……」

おっさんの呟きに反対する者は誰もいなかった。

唯一、イセルだけが苦々しげな表情をしている。このまま素直に捕まってしまうのは、彼の中の何かが許さなかったようだ。
何とか、この状況を打開する策は無いだろうか……。
気が付けば思わず、口元から呟きが漏れていた。

「くそ、こんな時に最初の人をヒュッて避けて後ろの人に当たる弓があれば……」
「……」
「……」
「……あれば……？」
「……特に何の役にも立たんな」
『なんだそれっ！』

素直にあっさりと一行は捕まってしまうのだった。

＊

「……一体、どういうことなんだと思う？」

捕まった一行は、今の状況を認識するための相談をしていた。
連れてこられるまでの間、村人たちに対して「おい」とか「なあ」とか言って話しかけてみたのだが、彼らはまるで何かに怯えているかのように「ひい」とか「へえ」とか言うだけで何も答えてくれない。
そのため、一体どういうことかと彼らの間で話し合っていたのだが、結局共通した認識なのは、誰かに脅かされてやっているのだろうというだけで他の事は良く分からなかった。
では、脅かされるような相手が誰かという事については、今の所、考えたくは無いが一人しか思い当たる人物はおらず……。

「おーい、誰かいるのかー？」

イセルが外に向けてそう声を挙げてみる。
彼らを捕まえているのであれば、必ず見張りが外にいるはずだ。しかし、返答は無かった。

彼らが捕まっている場所は、どうやら空いている民家の一つのようだった。
一応武器だけが集めて奪われてしまったが、それ以外は特に縛られたりはしていない。
外から閂の様な物で鍵が掛けられているようだが、古くなった民家では、イセルとおっさん辺りが全力で体当たりをしたら壊れそうな物でもある。
しかし外に出た所で、またさっきと同じような事になれば意味が無い。
そのためにも、せめて状況だけでも分かればと思ったのだが……。

「あの……、誰かいませんか……？せめてお話だけでも……心細くて」
「な……何か用か……？」

代わるグラムルの言葉に、今度は返事があった。
こっそりと彼女に台詞を耳打ちしていたイセルの顔ににやりとした表情が浮かぶ。
……通りで若干、台詞が棒読みっぽかったわけだ……。
ともかく、返ってきた見張り（当然男のようだった）の返事に続けて、イセルの腹話術人形と化したグラムルが続けて会話を行う。

「あの、オレた……あ、私たちは何故捕まえられてしまったんでしょう？さっぱり心当たりがないんだけ……ですが」

何だかボロボロな気もするが、グラムルのしどろもどろな言葉にも、見張りは怪しむことなく答えを返してくれるようだった。
だがその返事は妙に震えており、恐ろしい出来事を思い出しているかのように恐怖の感情が篭っていた。

「……ああ、あの女が突然村に現れて言ったんだ。お前たちのような奴らが来たら、ここに捕まえておけって。……こんな事を話していても、どこかでアイツは見てるかもしれないんだ！そう、そしてアイツはその時、村を……っ！！」

もしかしたら、見張りが答えてくれたのは優しさでも下心でもなく、彼自身が恐怖で心細かったのかもしれない……と一行が感じた時、周囲に異変が襲った。

ドドォォォンッ……！！！

何かが爆発するような音と共に、遠くの方から、悲鳴と喧騒が聞こえてきた。

第７４話　何が起きたってんだ……！？

「う、うわ、やっぱり聞いてたんだ！アイツだ！来やがった！うわぁーーーっ！！！」

その悲鳴は、一気に足音と共に彼方へと遠ざかっていった。
どうやら見張りは恐怖のあまり逃げ出したらしい。
その出来事に、呆気に取られる一同。しかし、外の様子が分からない以上、何が何だか分からない。
おっさんが打ち付けられている窓をこじ開けて外を見ようとしたが、中々頑丈にできているらしく、隙間を空けるにも時間がかかりそうだった。
とその時、ベルの視界がぼやけ、何やらぼんやりと外の景色が見え始めた。
それは間違いなく、ついさっき通ってきた村の風景に変わりないはずだ。

またしてもベルは先日と同じようにキョロキョロと他のメンバーを見回す。
すると、やはりいつかと同じく隣にはアホ面をしたスプの姿と、その向こうには「みみみ見えるよ……俺見えるよ……！」という顔をしたイセルのアホ面が視界に入った。

「はぁ……。もうそれはいいわよ……」

もはや突っ込む気力も無く溜息をついたベルに見える別の視界は、そのまま村の外の風景が移り変わっていき、ある一軒の小屋に辿り着いた所で止まった。

そしてその小屋の内部がまた透けて見えると、その中には彼らが没収された武具が揃っているのが見える。
そこまで見えた時、急に視界が元通りに戻ったのだった。

（これは……！？）

色々と思う所はあったが、ここで相談している時間は無さそうだ。
ともかく、何とか戦えるような状況にしておかないとまずいような気がする……。
辺りに立ち込める不穏な空気を、その場にいる全員が感じ取っていた。

「武器の場所が分かったわ。……行きましょ」

珍しく、はっきりと断言して立ち上がるベルに驚く一行。だが、それに続いてイセルも頷いて立ち上がったため、他の面々も続く。
事態が良く分からない他のメンバーがどういうことかと聞く前に、イセルは扉に突っ込んでいた。

バギャッ！！！

さすが馬鹿力だけが取り得なのか、思ったより呆気なく壊れた木の扉からなだれ出る一行。
ダダダッと外に出て見えた景色は、田舎の農村には似つかわしくない異様な光景だった。

＊

……村のあちこちから、黒煙が上がっている。

数にして十数件といった所だろうか。
それらは少し上空で合流し、この閑散とした農村の空を漆黒に近く染め上げていた。
そしてその根元から立ち上る赤い炎。
揺ら揺らと揺らめく炎が、時折怒り狂ったように高く昇りながら、赤い火の粉を飛び散らしている。
辺りに立ち込める熱気が、彼らの元へも届いていた。

木が燃える匂いに咽(むせ)びそうになりながら、村人たちが悲鳴を上げて逃げ惑っている。
……ある者はどこか安全な場所を探そうと。……ある者は家族を探して。……ある者は無謀にも立ち上る炎を消そうと、自らの家に向かって走っていた。
そして、炎の怒りを買い、吹き出てきた火柱に焼かれて地面を転がり回る。

……さっきまでの静かな農村とは打って変わった、地獄のような絵図が視界の全てに広がっていたのだった。

「何が起きたってんだ……！？」

もはや、誰も一行の事に構っている者はいなかった。皆、何とか自分と親しい者たちが生き残るのに必死なようだ。
このままでは村中焼け野原になりそうな景色の中、煙の向こうに見えたものは……。

「巨人……！？」

誰が発したかは分からないその台詞は、その場にいた全員が思った言葉だった。

遠くに見える家の後ろに、煙の影になりながらも映ったシルエットは、その家の倍の高さもありそうな巨大な人物の影だった。
そしてその近くで再び、爆音と共に炎が上がる。

「こんな所に炎の巨人が……！？でも……」

珍しく真剣な表情でシャルルが呟く。しかし、轟く爆音にかき消されて、他のメンバーには聞こえなかったようだ。
何やら気になることがあったらしい彼女だったが、その思考は袖を誰かに引っ張られた事によって中断させられてしまった。

「シャルル！早く！こっちです！」

見ると、一行はベルを先頭に駆け出していく所だった。
周囲は大変な状況だが、確かな情報を掴めていない今、下手に動く事はできない。
とにかく今は自分たちの身を守れる状態にすることが先決だった。

＊

「あった！ここよ！」

さっき見えた小屋には、問題なく辿り着く事ができた。……幸い、まだここまでは火の手は届いていないようだ。
農機具をしまっておくために使われていたらしい粗末な小屋には、大した扉すら付いてはいなかった。
向こう側が見えてしまうような途中で折れてボロくなっている柵を引くと、中には見慣れた彼らの武具が置いてある。
一同がそれぞれに自分の持ち物を受け渡していると、今度は全員の耳にどこからか声が響いてきた。

『――こっちよ！』

キョロキョロと辺りを見回してみるが、それらしい人物はどこにもいない。

唯一、ベルとイセルだけがその主に心当たりが付いているようだった。

その言葉と共に、声が聞こえてきた方角が彼らの意識の中に伝わってきたため、そちらを見てみると、視線の先には少し小高くなっている丘が村の外れに存在していた。

……そして一行は、充分に用心をしながらその丘へと足を踏み出すのだった。

第７５話　また騙された！

「ありがとう。本当に来てくれたのね」

村はずれの丘に着いた彼らの前には、見覚えのある少女が一人立っていた。

丘に転がっている一際大きな岩の上に立ち、馬車から逃げ出した時のままの格好で彼らを見下ろしている。

しかし、あの時とは随分と様子が違っていた。

「あのボーティウスのじいさんと一緒だったから、もしかしたら来てくれないかと思ったわ」

（あのじいさん、ボーティウスって名前だったのか……でも何で知り合い？）

その口調は、中身とは裏腹にまるで権力を持った横暴な領主のようにつっけんどんで上から目線だったし、表情も急に大人びて、あどけなさは消えている。

そして何より、その小柄な体の周囲にまとっているオーラが全く異質な物になっていた。

「でも良かった。来てくれないと無駄死にになっちゃうからね。あの商人の護衛たちも、村人たちも」

少女の物とは思えない残忍な台詞を口にした時、その違和感は確かな物となった。

もはやあの時の儚げで今にも消えてしまいそうだった印象は……、ない。

彼らの目の前にいるのは、少女の姿をした、一匹の魔物のような雰囲気を纏っている生き物だった。
とりあえず、会話の切り込み隊長イセルが一言聞いてみる。

「一体、どういうことだ？」
「でも酷いわよね。商売のために人を捕まえて売り捌くとか、自分の命のために他人の命を売るなんて、そんな人は焼け死んでも文句は言えないよね。くすくす」
「まあ、焼け死んだら文句は言えないよな」

少女はこっちの言葉に耳を貸す様子も無い。
……しかしそんなイセルの条件反射の突っ込みを聞きながら、一行は全く同じ事を思っていた。

『――また騙された！』

何だか俺たち騙されてばっかりだな……。
思い返せば、最初の依頼から。
続いてフェッケンとかカシューナもどきとか、さらには盗賊の館とかじいさんの塔とか……。
まるで騙されるために生まれてきたような、見事なまでの騙されっぷりだ。
全く、こんな頭を使うような依頼にはろくな結末が待っちゃいない……。

「折角、あそこに潜り込むために護衛たちを全滅させたって言うのに、まさか魔法が使えなくなるとは思わなかったわ。本当に感謝してる、ありがとう」

そんな一行の落ち込み具合など気にせずに、少女は続ける。

今や世の中を完全に信じられなくなっている彼らに、お待ちかねの台詞が届いた。

「……お礼に、苦しまずにあの世に送ってあげるから」

「その台詞、待ってたぜ！」

「全く、こっちの方が分かりやすくていいのう」

「ホント、私たち向きよね」

「とにかくぶっ殺せばいいんだろ？」

「あの姿ではちょっと気が進みませんが……」

「残念ながら、俺たちの怒りを買った罪は重いぜ……さてはお前、『あの女』だな！？」

「……何それ？」

ようやく彼らの言葉が耳に届いた少女は、一言それだけ答えると、軽く何らかの手振りを行った。

短弓を素早く構え、少女に照準を合わせようとしていたベルの前に、小さな障害物が現れる。

その障害物は人の形をしており、しかもおまけに小さくて無防備で気を失っているようだ。

「……やめてよね、こんなか弱い少女にそんな物騒な物向けるの」

その台詞を聞いた瞬間、ベルは（下手に「か弱い」って言葉使うのやめよう……）と思ったのだが、まあそれはそれとして少女の前に宙に浮かぶように現れたのは、村にいたと思われる少年の体だった。

どうやら少女が操作しているらしい少年は、彼らと少女を結ぶ線上に吊り下げられ、遠距離武器での攻撃を阻害するように配置されているようだ。

「人質ってわけ……？」
「飛び道具を打ち落とすほどの力は無いってわけだな」
「でも、接敵した時にも人質を取られていると厄介ですよ」

確かに、人質がいる相手と渡り合うのは非常に厄介だ。その事を彼らは以前、……主に１８話辺りで学習していた。
それを思い出した一同の顔に、悩める表情が広がる。
思わずイセルが、苦々しい顔で口走った。

「……こんな時に、最初の人をヒュッて避けて後ろの人に当たる弓があれば……」
『それだっ！！！』

いつものようにノリで口にしただけの台詞かと思いきや、意外と的を得ていた。言った本人も自分で驚いてるし。
……なるほど、こういう時に使うための物だったのか……。結構使えそうじゃないか、じいさん。
しかし残念ながら、ここにその弓はないのだった。
次にじいさんに会った時は忘れずに貰っておこうと思った一行だった……。

というわけで、ようやく分かりやすく、彼らの前に三つの巨大な影が現れたのだった。

第７６話　雑魚かどうかやってみろよ！

一行の目の前に現れたのは、いつかの塔で会ったような巨大な生き物たちだった。
……ん？じいさんと知り合いだって言うのはこういう所か？
そんな疑問はともかく、三匹がそれぞれ彼らの目の前へと進んできた。

一匹は≪巨大カマキリ（ジャイアントマンティス）≫、もう一匹は≪巨大クワガタ（ジャイアントスタグビートル）≫、そして最後の一匹は≪巨大芋虫（ランドクロウラー）≫だ。
説明するまでも無く見れば分かるが、一応スプが教えてくれた。

それに呼応するように、彼らも前衛が待ってましたとばかりに前へと進み出る。
すっかり戦闘準備はＯＫだ。この湧き上がるイライラを誰かにぶつけたくて仕方が無い所だった。
そして敵はちょうど前衛と同じ数だ。……よしよし。おっさんは満足気だ。

「さあお前たち、そんな雑魚ども蹴散らしてしまいなさい」
「雑魚かどうかやってみろよ！俺たちを騙した罪は重いぜ……！」

やる気満々の顔で満ちた一行は、少女が呼び出した魔物たちへと血気盛んに駆け出して行った。

＊

「おのれ、シャカシャカと小癪な奴め……」

「ななな何ですかこいつ！動けません……！」
「このやろ、全然ビクともしねえ……」

で、一行は完全に追い回されていた。

まずはカマキリに向かっていったおっさん。
カマキリは見た目通り、その二本のカマで間隙無く攻撃を繰り出してくる。さらに動きも思ったより素早かった。
その動きに完全におっさんは付いていけてない。
あっち行ってシュッ。こっち行ってシュッ。シャカシャカ動き回りながら素早い攻撃を繰り出すカマキリに、全く手も足も出ないおっさんだ。

そしてグラムル対クワガタ。
クワガタも見た目通り、二本のクワで彼女を挟んでくる。最初は「とおっ」とか「たあっ」とか避けていた内は良かった。
だが、一度捕まってしまうと身動きが取れない。
挟み込んでくる力は、鎧のおかげもあって何とか耐えれているが、残念ながら攻撃する方がままならない。
ちょうど脇の辺りを挟まれているおかげで、振りかぶった上段からの一撃も充分な力を乗せ切れずに、グラムルの一撃は硬い外骨格のクチクラ層に阻まれてダメージを与えられていなかった。

最後にイセルＶＳ芋虫。
一行の中では最も近接戦闘実力者であるはずの彼も、今回は押されていた。
というのも、芋虫は動きこそ鈍いものの、そのタフさは一番秀でているらしい。何度も攻撃を命中させながらも、全く怯む気配は無かった。
それに加えて、その巨大な体重で突進してくるものだから、細めの

剣を両手に持っているだけのイセルでは、その巨体を止めきれない。
さすがの力自慢も、最適な道具無しでは充分な力を発揮する事はできなかったのだ……。

ぜえはあと早くも肩で息をする一行を見て、少女の表情が曇った。

「……何？この程度の実力なの？……ホント雑魚じゃない」

依然として少年の体を楯にした状態で呆れたように言うと、少年の体がどさりと地面に落ちる。
一瞬、ピクリとそれに反応したベルだったが、少女を狙っていいものか、それとも苦戦している前線のメンバーへの援護をした方がいいか迷っているようだった。

「いいわ。お前たち後はよろしく。あーあ、つまんなかったわ」

そうこうしているうちに、少女は魔法行使のための身振りを行っている。その表情からは、彼らに対する興味はすっかり失せてしまったようだ。
少女の言葉にピクリと反応した一行にも気付かず、またしても彼女は溜息を残したまま、瞬間移動でどこかへと消えてしまった。

「……おい、聞いたかお前ら？」
「ああ、確かに聞いたぞい」
「雑魚で悪かったですね」
「……何なのあの女」

『許っっっさん！！！』

その時、一行の怒りボルテージは最高潮に達した。

……彼らの心が一つになった瞬間だった。

「もうやってらんないわ何でせっかく助けたのにこんな目に遭ってあんなこと言われなきゃなんないのよ！もうあったまきた！！」

「おい、相手チェンジだ。おっさんがクワガタでグラムルが芋虫、バカ戦士はカマキリとやれよ」

「るせえそんなことは分かってるよ！……おいシャルル！何かよこせ！」

「ほーい」

その言葉と共に、シャルルが召喚した≪闇の精霊（シェイド）≫がフラフラと芋虫の方へ飛んでいく。

そして芋虫を攻撃し始め、芋虫がそっちに気をとられた瞬間を狙ってイセルはその場を離脱する。

そのままおっさんの方へと駆け寄りながら、今まさにおっさんへと届こうとしていた二対のカマを代わりにカキィン！と受け止めた。

「おっさん、後は任せろ！」

台詞を最後まで聞き届ける前に、おっさんは隣のグラムルの方へと走り出していた。

戦斧を前面に構えながら、その勢いでクワガタへと体当たりする。

結構なおっさんの勢いに押されて体勢を崩されたクワガタから逃れ、グラムルは≪闇の精霊（シェイド）≫に攪乱されていた芋虫の元へと辿り着いた。

それを確認すると、シャルルは≪闇の精霊（シェイド）≫をおっさんの下へと移動させ、これで隊列変更は完成したはずだ。

「よし、これでいけるはずだ！」

そんなスプの声を聞きながら、前衛は一斉に攻勢を開始した。

第77話　second　fantasyの始まり

まず、スプが援護魔法を展開する。
これまで、何とか一匹でも動きを止めようと≪魔法の網≫をかけようとしていたスプだったが、どうやら少女に強化されているためか一向に虫たちには魔法がかからない。
仕方なく、直接魔法から支援魔法へと切り替え、全員の回避行動を補助する≪魔法の楯（シールド）≫、次に各前衛に≪魔力武器（エンチャントウェポン）≫をかけた。

シャルルに援護を受けながらクワガタと戦うおっさんは、まず味方に≪神の加護（ブレス）≫をかけてから、クワガタの正面へと陣取った。
そしてその頭上に漂う闇の精霊。……これで対クワガタ最強フォーメーションが完成した。

まず、クワガタが闇の精霊を狙った場合、おっさんは頭上に向かうクワガタの下方向からアッパー気味に戦斧の一撃を繰り出す。
下からの強烈な一撃を喰らったクワガタは、思わず後退して体勢を崩す。
それで怒ったクワガタがおっさんを狙った場合、グラムルとは違ってその低い位置へ狙いを定めるため、頭を下げなければならない。
その体勢が正に、クワガタの頭部におっさんの全体重を乗せた一撃を見舞うのに絶好のポジションだった。
まるで鍛冶でもしているように叩き付けられた斧からは、火花が出そうな勢いだ。
フラフラしながらも、とうとうそのハサミでおっさんを挟み込んだクワガタが「やった！」という表情をしたかどうかは分からないが、これで身動きが取れなくなり、ピーンチ！……に陥るかと思ったが。
何と、その低重心の体の腹が捕まれた所で、上半身の自由は充分に効くのだった。目の前に無防備に投げ出された頭部へ目掛け、これ

でもかといわんばかりに思いっきり斧を叩き付けるおっさん。
……あ、何か頭が割れて汁みたいのが出てきた。かなり気分爽快そうなおっさんだった。

さて一方グラムルは、後ろからベルの援護射撃を受けながらの戦いとなった。
ベルの矢の命中率はその負の感情と比例するようで、これがまた目標の大きさと相まって、百発百中と言ってもいいほどだった。
残念ながらその威力はさほどでもない短弓のため、芋虫の巨体を止めるほどではないが、数も重なってくると多少は動きを阻害するようになってくる。
元々遅めの動きがさらに遅くなり始めた。

「よいしょっ……と！」

全然気合の入らない掛け声と同時に、グラムルの大剣が弧を描く。
動きが遅いおかげで、充分に遠心力をつけられた鉄の塊が、芋虫の横っ面を思いっきりはたいた。
さすがにそれには芋虫も耐えられなかったようで、数ｍほど叩き飛ばされてふらつく。
そこから再び体勢を立て直して目標へと向か……おうとした所で再び大剣の一撃が飛んでくる。
間合いが広く威力の強い大剣と、動きが遅く的も大きい芋虫の組み合わせは、非常にマッチしていた。
グラムルにしては珍しく、危なげない攻防が繰り広げられているようだ。

「イセル双龍斬！！……決まった」
『――いつの間にそんな技ができたんだ？――』
「当然今だよ今。お前も昔小さかった頃、勝手に技とか作って出し

てみたクチだろ？短剣ぐらいの頃によ」

『――やってないし成長して大人になったから今の長さになったわけじゃないぞ……って突っ込み所が多い上に分かりにくいボケするなよ――』

いつものようにティルヴィンと夫婦漫才を繰り広げるイセルは、ちょうどカマキリの両手……というか両カマを切り飛ばした所だった。もはや説明や描写が必要も無いほど二刀流対二刀流の相性が抜群だった彼の戦いは、ただ純粋に技量勝負となった。

……まあ本来なら単純な技量で言えば、手に持った道具を扱うよりも、手そのものが武器であるカマキリの方が上なのだったが、そこはそれ魔法とか色々な援護のおかげで、カマキリの一瞬の隙を突いて、イセル渾身の即席必殺技が炸裂したのだった。

「これで……片付いたか？」

前衛の人間の様子をみて、そう呟くスプ。

戦う相手をスイッチしてから、特に危なげない流れを展開しているようだ。常に全体の戦局を捉えながら、援護する相手を見極めなければならない後衛だったが、ようやく一息が吐けそうだった。

……と思ったのだが。

「ギャー何か黄色いのが出た！臭っ！臭い！」

「な、何だこれ！気持ち悪っ！」

「ギャー！ハリガネムシです！爪の間から人間に入って寄生するんですよ！」

「マジかよ！？うわっ！こっちきた！や、やめろっ！」

芋虫の頭部からニュッと出た角とか、倒れたカマキリの体内から出てきた巨大ハリガネムシに翻弄される前衛を見て、残念ながら一息

は溜息へと変わってしまった。
……だがなんだか面白そうなので、『ハリガネムシが爪から入って人間に寄生するのは全くのデマだ』ということは黙っておく事にしたスプだった……。

＊

「あーあ、何だったんだ今回……」
「世の中って信用できませんね」
「言っとくけど、私のせいじゃないからね！檻に入ってた時はもっと儚げな……いかにも！っていう感じの女の子だったんだから！」
「わーったわーった。誰もそんな事思ってねーよ」
「つくづく、神の悪戯を感じるのう……。ちょっと神を疑ってしまいそうじゃ」
「あーあ、くたびれもうけだねっ！」

口々にぼやきながら、帰路に着いた面々。
あの後、巨大虫たちを倒した後には、丘の上には誰も待っておらず、未だ遠くに見える村の炎と煙だけが残っていた。
人質の少年の無事を確認すると、村人たちを助けに行こうかどうしようかと相談したのだが、最初の印象からしてあまり歓迎されなさそうだったというのと、逆恨みされそうな気配もしたので結局そのまま村を後にして帰ってきたのだった……。

それに、少女の言い分に賛同するわけではないが、自分たちの身を守るために一行を捕らえた村人たちに対して、身を挺してまでも「何とか助けよう！」という気が乗ってこないのも確かなのだった。

「……あれ？誰か寝てる？」

もう後少しでポルトヴァの町だという所まで来て、街道の隅に誰か人間が木にもたれて座り込んでいるのを発見する。
完全に人に対して疑心暗鬼になっている彼らだったが、さすがに見捨てて放置しておくわけにもいかなかった。
騎士であるグラムルと司祭のおっさんが代表して、様子を見るために近付き……と思った時。

「……あれ？あの人」
「カシューナさんですよ！」

慌てて駆け寄る一行。
以前、カシューナもどきに騙されていた事も忘れ、駆け寄って行ってしまう辺りが、彼らの人の良さだ。
人間、人を信じられなくなったら終わりだよね、うん。
……散々人を騙した、今回の教訓なのでした。

＊

……ともかく、こうしてここから物語は急展開を見せる。
もうさすがに初心者の域を脱した彼らには、新たなる『ｓｅｃｏｎｄ　ｆａｎｔａｓｙ』が待っているのだった……。

第77話　second　fantasyの始まり（後書き）

≪次回予告≫

「お、お前は……っ！？」

「あら閣下。その節は大変お世話になりましたわね」

――彼らがのほほんと依頼をこなしている間、周辺では静かに物語が進行していた。

再び動き出す教団。

巻き込まれていく人々。

「待てっ！」

「……誰かと思ったら。カシューナ様の登場ですか」

――舞台はポルトヴァの町を出て、広大な世界へと広がっていく。

「……ついに≪貝（シェル）≫を甦らせたか……」

「これで一つ目の『門』が開いた」

――ついにそのヴェールを脱ぐ魔法装置≪貝≫。……その実態とは？

「おいカシューナ。こんなとこでくたばるんじゃねぇよ」

「あなたは……！？」

――新キャラも続々登場し、展開は加速度を増していく新たなる冒険譚、≪ｆｉｒｓｔ　ｆａｎｔａｓｙ≫。

次章、『ヘルンデルク騒乱』お楽しみに！

第78話　ヘルンデルク騒乱　前編

「……勝手に入って来い、ね。分かりやすくていいじゃねーか」

ようやくいつもの様子に戻った彼が呟くと、彼らは塔の中に一歩を踏み出したのだった。

＊

――その頃。

ポルトヴァの隣町ヘルンデルクでは、異変が起きていた。

ダスター大公が居住する、ヘルンデルク城。

城内が慌しくなる中、謁見室から出て行っては帰らない配下の兵士たちに業を煮やしたダスターは、玉座に座ったまま大声を張り上げている。

「――一体何事だっ！」

「閣下、大変です！賊が城に侵入しました！」

その声に、少し慌てた様子でオルドーラスが入室してきた。

珍しく、いつもお供に連れている女戦士のリュミエールはいない。

……その違和感に、焦っているダスターは気付いていなかった。

「一体どういうことだオルドーラス。貴様というものがありながら……」

「申し訳ございません閣下。さあ一刻も早くこちらへ……」

そう言いながらオルドーラスはダスターを外へと促す。
ん？そっちは非常用の通路ではなく通常の外へと続く通路だが……？

「お待ち下さい」

腰を浮かせたダスターの横から、聞き慣れた静かな低い声が響いてくる。
そちらに目を向けると、そこには入室してきた時と同じ格好をしたオルドーラスがもう一人立っていた。
その後ろには、見慣れた従者リュミエールの姿も見える。

「何っ！？オルドーラスが二人！？一体これは……」

さらに慌てるダスターに、横から現れたオルドーラスは静かに告げる。

「そちらの者が、今その者が自ら言った賊にございます。ご注意を」
「さすが、≪魔力付与師（インストーラー）≫オルドーラスといった所ね。これほど早く駆けつけるとは」
「そういう貴様は……≪化身（アバター）≫か？」
「ふふふ、懐かしい名前ね。……でも、もう捨てた名だわ」

「な、何者だ貴様ら！外の衛兵はどうした！？」
「おめでたい男ね。外の奴らなら皆死んだか逃げたわ。……どちらかというと逃げる方が多かったわね。あんな≪火球（ファイアーボール）≫一発で。……アルフ？」
「……分かっている。主君の質が良く分かるというものだな」

最初に現れたオルドーラスが小さく呼びかけると、背後の入り口から二人の男が入室してきた。

それと同時にオルドーラスの姿が一瞬ぼやけ、別人へと変化する。

「お、お前は……っ！？」

「あら閣下。その節は大変お世話になりましたわね」

そこに現れたのは、黒髪にフードを被り、赤と黒の少し派手な色が混じったローブを身に付けている女だった。年季の入った樫の杖の先端に、幾つかの輝く宝石をあしらった目立つ杖を持ち、声までもが大人びた女性の声へと変わっている。

アルフ、と呼ばれた男はすらりと背の高い青年で、細い髪を少し長めに伸ばしていた。

まるで騎士の様な鎧を身に付けてはいたが、国の紋章を示すべき場所には何も描かれてはいない。

腰に下げた長剣などを見てもその姿は非常に様になってはいたが、たった一つだけ違和感のある部分があった。

――それは、その頭上に浮かぶ不思議な球体の存在だ。

小さくヴゥ……ンと音を立てながらゆっくりとその場で回転しているその球体は、常に男の頭上に留まるようにゆったりと漂っている。

球体の表面に幾つか存在している宝石のような物のうち、一つだけが光を放って男を微かに包み込んでいた。

魔法使いのような格好をした女は、その球体をチラリと目の端で確認した後、口元を少し歪めて笑う。

アルフと呼ばれた男は、一緒に入室してきたもう一人のがっしりとした体格の同じような格好をした男と共に前へ出ると、二人とも躊躇無く剣を抜き放つ。

それを見たダスターの側近が焦ったように釣られて剣を抜き、二人

の男へと斬りかかって行った。
後から現れたオルドーラスとリュミエールは、戦闘体勢を取ったまま、間合いを計っている。

「一体どういうつもりだ！？……そうだ、お前たちが探していたあの魔法装置の鍵がある！あれを今持って来させるから……」
「まだそんな偽物持ってたの？……おめでたい男ね」
「融通の利かない人間が権力を手にした時ほど厄介なものはないな」

その言葉と同時に、あっという間に三人いた側近が切り伏せられ、その場に倒れた。
領主の側近ということは、少なくとも多少の剣の腕に覚えはあるはずだが、その者たちが秒殺された所を見ると、侵入してきた賊はかなりの手練れであることらしいのが分かる。

「……まあ最後に、多少なりとも我らの役に立ってもらおうか」
「何だと！？」

……無慈悲なアルフの台詞に、顔面蒼白になったダスターが驚愕の表情を見せた時。

「待てっ！」

その言葉と共に、オルドーラスたちが現れたのと反対側から部屋に入ってきた人物がいた。
そこに登場したのは、白い鎧を着た金髪碧眼の男……カシューナだった。

「……おやおや、誰かと思ったら。カシューナ様の登場ですか」
「お前たち、教団の者だ――なっ！？あなたはっ！？」

カシューナは剣を抜こうとした所で、驚いたように手を止める。
その瞳の先には、女魔法使いの姿があった。

「……これ以上時間をかけると厄介だわ、やるわよ」
「了解。……ダリウス。向こうの女は頼んだ」
「承知した」

その言葉と同時に、アルフと呼ばれた男はダスターへと足を向ける。
それを見たリュミエールが駆けつけようとするのを、ダリウスと呼ばれたもう一人の男が遮った。
抜き身の剣をぶら下げたまま歩み寄りながら、アルフはつまらなそうに語りかける。

「ふん、死んでもらおうか」
「させんっ！」

カシューナは我に返ると、一旦は止めた足を再び動かし、素早く間に割って入る。
少し満足気に口を曲げるアルフ。

「……来るか」

そしてカシューナは、剣の柄に手を掛けたまま、アルフという男へと踏み込んでいく。
そのまま近付き様に居合いのように男へと切りつけた。
が、男は抜いた剣を構えようともしない。そして――。

ガィンッ！

「なっ！？」

まともに命中したはずの剣は、まるで強固な鉄の塊にでも切り付けたかのように、堅い手応えと共に弾かれていた。
驚きの表情を隠せないカシューナ。
それを見ていたオルドーラスが、憎々しげに呟く。

「……ついに≪貝（シェル）≫を甦らせたか……」
「無駄だ」

その手応えと同様、全く動じることなく答えたアルフという男は、唖然としているカシューナに無造作に反撃する。
咄嗟に反応したカシューナだが、かわしきれず、上腕部に軽く裂傷を負う。
驚きながらもカシューナは、二度、三度と続けざまに剣を打ち込んだ……が、同じように相手の体に当たった瞬間、強い手応えと同時にその剣は弾かれてしまった。
そして、カシューナの攻撃と同時に反撃を行うアルフ。相打ち覚悟のその剣は、回避不可能なカシューナに確実に少しずつ傷を与えていった。

さすがに何か異様な雰囲気を感じたカシューナは、少し間合いを取って後退する。
それを確認すると、アルフはそれを横目で見ながら通り過ぎて、ダスターへと近付いた。

「ひ、ひいっ！」
「閣下っ！」

近付いてくる男に対して、腰が引けて逃げられないダスターの前に、

今度はカシューナの代わりにオルドーラスが立ちはだかる。
しかし武器らしい武器も持たない彼は、辛うじてその杖を眼前に構えているだけだ。
対峙する二人の後ろから、涼しげな声が聞こえてきた。

「ふふふっ、真面目なあなたならそうすると思ったわ。オルドーラス」

「なっ！？まさか！？」

それに対して驚きの声で反応したオルドーラスだったが、もはや手遅れだった。
空いている左手を、オルドーラスに向かって眼前に掲げるアルフ。

「オルドーラス様っ！」

「……くっ！」

危険を察知したリュミエールが、何とかその元へ駆けつけようとしたが、それはダリウスに阻まれて近付く事が出来ない。
辛うじて剣を構えたまま、間に割り込んだカシューナとオルドーラスの耳に、低いアルフの声と共に仄かな光が降り注ぐ。

『≪吸収（アブソープ）≫』

アルフの発したその声と共に、頭上の球体が上下に割れ、開いた。
その様子はまるで、口を開けた二枚貝の様子を彷彿とさせる。……
光の元は、どうやらその魔法の貝から発せられているらしい。

「うっ！ぐあああぁぁぁっっっ！！！」

「おおおぉぉぉっ！！！」

その微かな光とは対照的に、包まれた二人の男から苦悶の悲鳴が上がる。
すぐ後ろでは、辛うじて光の範囲から外れたダスターが腰を抜かして尻餅を付いていた。
そして……。

――ドサッ

二人はその場に、倒れ伏した。

第79話　ヘルンデルク騒乱　後編

『≪吸収（アブソープ）≫』

ドサッ

アルフの頭上に浮かぶ球体から降り注ぐ光に包まれ、その場に倒れるオルドーラスとカシューナ。
よく見れば、こぶし大の球体に灯る光が一つから二つへと変化していた。

「……これで二つ目の『門』が開いた」

表情と口を大きく動かすことなく、アルフは小さく呟く。……どこか満足気な様子だった。
その後ろを見れば、魔法使いの女とダリウスも同様の表情をしている。
羊の毛で編まれた高級そうな絨毯が敷かれた床にうつ伏せたまま、オルドーラスは辛うじて顔だけ上げて呻くことしかできない。

「貴様ら……これが狙いだったのか……」
「そう。……まずは一人目。あなたの役目は終わったわ」
「ご苦労だったな」

満足気な表情を消し、無表情でそう告げるアルフ。
改めて剣を握り直すと、倒れている二人の下へ歩み寄ろうとした時。

「――そいつは待った！」

部屋の隅々まで響き渡る大声が轟くのと同時に、アルフと倒れた二人の間にすかさず割り込む一つの影があった。
その瞬間、同時に走る鋭い斬撃に、思わず剣で防御してしまうアルフ。
剣と剣がぶつかる、キィンッ！という甲高い音が辺りに響いた。

「おいカシューナ。こんなとこでくたばるんじゃねぇよ」
「あ……な、た、は……っ！？」

剣戟の音が鳴り止むと同時に、落ち着いた男の声が聞こえる。
間に割り込んできたのは、鎧を着た壮年の男だった。
少し薄汚れた格好をしてはいるが、その表情と瞳からは確固たる意思が感じられる。
同じく、ややボサボサになりがちなブラウンの短めの髪を見ても、その佇まいはまるで旅の途中の冒険者のような出で立ちだ。
その男の顔を見て、カシューナの顔には再び驚愕の表情が浮かんだ。

アルフという男の前に立ち、剣を男に向かって構えながらも、現れた男の視線は別の方向を向いている。
その瞳は、どこか懐かしげな雰囲気を纏っており、不思議と敵意は感じられない。
一方、視線が向かった先である魔法使いの女にも、カシューナと同様、驚きの表情が浮かんでいた。

「……！？」
「……随分と久しぶりだな、〇〇〇〇」
「……あ……ぁ……そんな……」

男が放った、その名を呼んだであろう単語を聞き、女の体がワナワ

ナと震え始める。
誰にも聞こえないぐらいの小さな音で、女の口から言葉が漏れた。

――フィィィィン――

その時、甲高い魔法的な音と共に、倒れているカシューナのすぐ横に光が集まり始めた。
それに気付いた全員の注意がそちらに向く。
――瞬間、眩いばかりの閃光が部屋を覆った。

一瞬の光の眩さに目を覆った全員が視力を取り戻すと、そこには一振りの長剣が現れる。
それを見た新たな飛び入りの男が、倒れている二人に聞こえるように呟く。

「お、これが二つ目の≪欠片≫か……よし、ズラかるぞ」

その言葉を聞いた時、未だ倒れて動けない二人の体がピクリと反応する。
そしてその内の一人、オルドーラスは僅かに顔を上げ、その左手を動かすと、首に下げていた飾りを手に取った。
その動作を見ていたリュミエールに目配せをしたと同時に、小さく呪文を唱える。

「くっ……今です！≪閃光（フラッシュ）≫！」

――カッ！

再び、室内に膨大な光が充満する。
オルドーラスの声に、そちらに目を向けていたアルフとダリウス、

そして魔法使いの女は再び目が眩み、身構える。
室内に溢れた光の渦に視力が奪われ、しばしの間、立ち竦んだ。
そしてそのまま数秒が過ぎる。

――そして視力が戻った時には、目の前からカシューナたちは消えていたのだった。

「……逃げられたか」
「まあいい。あの様子ならしばらくは動けまい」
「……そうね……」

数人が走り去る足音だけを耳にしながら、それにもあまり動じることなく、淡々と会話する三人。
乱入してきた男の姿に動揺していた魔法使いの女も、平静を取り戻してきたように見える。
改めて、辺りを見回す男たち。

……そして、その場に残された者が一名。

「ひ、ひいいいぃっっ……」
「どうでもいい害虫がいるが、どうする？」
「邪魔だな。片付けておこう」
「ままま待て。いくらなら雇われる？１万……いや、１０万Ｇ出そう！どうだ？」
「……クズだな」
「わ分かった！ならお前たちを私の側近として優遇しよう！望む物は何でも与えてやるぞ！？どう……」
「黙れ」

トスッ

邪魔な虫けらを見下ろしているような目をしながら、ダリウスが無造作に突き出した剣は、ダスターの喉元にあっさりと飲み込まれていったのだった。

＊

堂々とした態度で誰も動く者のいない謁見室を出るヘルンデルク城への乱入者三人は、入り口を出た所で、まだ微かに息をしている一人の兵士を発見した。

「あら？まだ生きてるのがいるわ。……しぶといわね」

ハァハァと荒い息をしながら、壁にもたれて座り込んだまま、兵士は何か言いたげに目だけで三人を睨んでいる。
その様子を見たダリウスが、戯れに近付いて膝を着いた。

「……何か言いたい事でもあるのか？」
「……ペッ！」

近付いたダリウスの鎧に、兵士は憎々しげに唾を吐く。
いきり立ったダリウスは、立ち上がると兵士の顔を思いっきり蹴りつけた。

「貴様！騎士に向かって唾を吐きかけるとは無礼な！」

壁から吹っ飛ばされ、床に打ち付けられる兵士。
しかしそれでも尚、男を床から睨みつけたまま微かに口を動かす。

「国家反逆罪は死刑だ。……罪人に礼儀なんているか……っ！」

その言葉を聞きつけたダリウスが、尚も追い打ちをかけようと力を込めたのを見て、後ろから女が止める。

「ほっときなさい。そんな雑魚、勝手に死ぬわ。……行くわよ」

「行くぞ、ダリウス」

二人に窘められ、ダリウスはふんと鼻を鳴らすと仲間の後を追う。動かなくなる兵士を背に、三人の反逆者たちは、もはや主が失われた城を後にするのだった。

第８０話　ポルトヴァ騒然

「……あれ？あの人」
「カシューナさんですよ！」

ポルトヴァへの帰り道から事件は再び始まる。
町の入り口付近で、木にもたれて座り込んでいるカシューナを発見し、駆け寄る一行。

「カシューナさん、大丈夫ですか！？」
「今回復を……って、むむ？」

一応司祭であるおっさんが具合を確かめてみる。だが、何やら不思議な反応をしていた。
それに気付いたイセルが尋ねる。

「どうした？おっさん」
「……いや、気になることが……。しかし……診てもらわんと分からんかな」

言葉を濁すおっさん。どうやら現時点では何とも言えないようなので、誰もそれ以上は聞く事はできなかった。
それよりも、カシューナの様子には不可思議な点が多かった。
体の数箇所には浅い傷があるようだったが、どれも応急処置が施されている。
しかし、カシューナにほとんど意識は無く、時折苦しそうにうめき声を上げるだけだ。
それ以外に目立った傷は見当たらないため、とにかく屋敷へと運ぼ

うという事になった。

＊

イセルがカシューナをおぶってラカーサ邸へと戻ると、前回の事件のほとぼりも冷めつつあるダイクの屋敷の人々が温かく出迎えてくれた。

……しかしそれも、すぐに慌しさへと変化する。

何しろ近衛隊長でありながら、ダイクの側近でもあり、名実ともにこの屋敷の最高実力者でもあるカシューナが意識不明で戻ってきたのだ。

その噂は瞬く間に屋敷中へと広がったし、ダイクを筆頭として手厚い看護体制が敷かれることとなった。

「一体……何があったんでしょうか……？」

「わからん……。この様子も見たことないものじゃ。傷ではないし、毒や病気という感じもせん」

おっさんがダイクの問いに答える。

詳しく聞いた所、司祭の中でも神の奇跡と呼ばれる神聖魔法を使える者は、ある程度相手の生命力やその体の異変を感知する事が出来るらしい。

それを見て、癒しの奇跡や毒消し、病気の治療などを行うらしいのだが、カシューナに関してはそのどれでもないようだ、と。

そのため、町のより高位の司祭にお願いしてみてもらう事になっていたのだが、その到着は遅れているようだった。

むしろそれよりも、スプの方が気になる事を言い始める。

「おい、カシューナさんの魔力がすげー減ってるぞ」

「どういう事じゃ？」

スプによれば、人間の誰しもが持っている魔力――精神力と言い換えた方がいいかもしれない――があり、それは大なり小なりあまり変化する事はないそうだ。
一般市民は少なく、鍛えられている冒険者などはそこそこ多かったりするのだが、その精神力を使って魔法使いは魔法を行使することができる。そして、魔法を使い過ぎると精神力が少なくなり、魔法は打ち止め、精神が疲弊してだるくなる（スプ曰く）……ということらしいのだが。

「俺らだったら、気絶寸前ぐらいの状態まで少ないな」
「……魔法を使いすぎたってこと？」
「そんな話は本人からは聞いた事がありませんが……」

カシューナが実は魔法使いだった、ということはその場にいる誰もが聞いた事は無かった。
彼の事だから、こっそり隠し玉として持っているということも考えられたが、彼と一緒に行動する事が多かった警備隊や近衛兵たちに聞いても、そんな様子は見たことがないそうだ。
スプによれば、もし魔法を使えるとするならば、騎士のうちで認められた者だけが使える『共通語魔法』ぐらいしか可能性は無いそうだ。
それ以外の魔法使いには、何らかの特徴がどこかに現れるはずだ、と。

例えば魔術師ならば、その魔法の発動体となる媒体――多くは杖である――を持っているし、精霊使いならば精霊が嫌う人間の加工した金属は身に付けられない。そして司祭はその信仰対象となる神の聖印を身に付けていなければならないということだった。
唯一可能性のある共通語魔法も、その専用の魔法を封じた発動体を

身に付けていなければならないはずだが、それも見当たらない。
このことから、魔法を使いすぎたという可能性はおそらく無いだろう……という見解だった。

「その……共通語魔法でしたっけ?発動体を誰かが外した、ということは考えられませんか?」
「それも思ったけど、だったらこうして休んでいる以上、魔力が徐々に回復してこないとおかしい。俺たちは普通に休んでれば回復してくるはずだから」
「……確かに」
「精霊力にも特に異変はないよー。……でも、外から何かの影響を受けてる感じはあるかな。少しバランスがおかしいかも」

続いてシャルルの見解。
精霊使いには、体の精霊力を見る力がある。そのバランスが変化した時に人は病気になるのだという。
風邪を引いたり、熱が出たり、精霊力の乱れによってその症状は違う。だが、カシューナはそれらのどれにも当てはまらないようだった。
ただ、外部からの干渉により、全体的な精霊力が不安定で乏しくなっている……ということだった。

「うぐ……ぅ……っ」

時折、苦しそうに呻き声を上げるカシューナ。その隣ではダイクが心配そうに手を握っていた。
その様子を見て、いたたまれない気持ちになる一行。
この屋敷において唯一の肉親に近い存在であるカシューナが倒れてしまっているため、こうしているとダイクも年相応の子供なんだという気にさせられる。

それほど、ダイクの表情にはいつもの元気が無いようだった。

「後は考えられるとすれば……ある種の『呪い』かもしれんな」

おっさんがポツリと呟いた不吉な台詞に、思わずゴクリ……と唾を飲み込む一同。

思い当たる事でもあるのか、スプが何やら難しい顔で考え始めた。

その言葉を聞いた時、ダイクが何かを思い出したかのように顔を上げ、再び領主の顔に戻ると一行に告げた。

「……そう言えば、隣町ヘルンデルクのダスター大公が暗殺されたそうです。……何か関係があるのでしょうか？」

「えっ！？あの性悪領主が！？」

「それは良くやった！……じゃなくて本当か？」

その大ニュースを聞き、急に色めき立つ一同。

いつもは人の名前など忘れがちな彼らだったが、その忘れたくても忘れられない苦々しい名前には、充分すぎるほどに心当たりがあった。……そう、第１４話辺りで。

「何だっけ？あの……」

「魔法使いの人？」

「そうそう。女の戦士の人と」

「あれ？あの……何だ？」

「お……オラ……オル……」

「オルドーラス！」

「あっ！それだ！オルドーラスとリュミエール！」

「あの人はどうしたんでしょう？宮廷魔術師か何かでしょう？」

「確かそうだったはず……」

領主が暗殺されたのであれば、その側近たちにも何かあったと考えるのが当然だ。
あの気弱そうな中間管理職役の魔法使いの事を思い出し、しばし回想に耽った一行。少なくともあの時点では結構な実力者だったであろう彼らは一体どうしたというのか。その辺りが気になる所だった。

ちょうどその時、神殿から偉い司祭様が到着したらしい。
カシューナの看病は交替し、自室に戻って相談し始める一行。

「で？どうするよ？」
「カシューナさんの体に関しては、ワシらにゃどうしようもできんな。……任せるしかない」
「でも……このまま放っておくわけにも行きませんよね」
「まあな。一応世話になってるんだしな」
「じゃあ出来る事って……情報収集ぐらい？」
「原因を突き止めれば、回復方法も分かるかも知れん」
「さっきから計算してたんだが、カシューナさんが失踪してた期間ってのは、大体ヘルンデルクまでの距離と重なるな」
「暗殺か……。前回の娘っ子といい、気になる事件でもあるのう」
「確かに。暗殺者っぽい感じもしたもんね」
「……」
「……」
「……行ってみるか？」
「いってみよー！」

勢いよく右手を突き上げるシャルル。……お前は完全に勢いだけだろ。
……というわけで、カシューナは神殿の偉い司祭に診てもらうこととし、一行はヘルンデルクへ行ってみる事にしたのだった。

第81話　ヘルンデルク再訪　前編

「……行ってみるか？」
「いってみよー！」

というわけで、ポルトヴァの隣町ヘルンデルクへと再びやってきた一同。
前回は『連行される』という不本意な来訪だったが、今回は普通に馬に乗っての到着だ。
ちなみに最近は三頭の馬を借りて、『イセル＆スプ』『グラムル＆おっさん』『ベル＆シャルル』という組み合わせで乗ることが多い。
というのも、三人しか馬に乗る技術を訓練していないからだ。

（くそ……近いうちに絶対馬に乗れるようになってやる……）

と、毎回嫌そうな顔をしてスプを乗せるイセルを見る度に、固く誓うスプなのだった。
かといって他の二人の後ろに乗せてもらうのも、彼のプライドが許さない……ということにしてあるが、実はどうも恥ずかしいらしい。
意外に微妙に照れ屋な部分もある彼だった。
……ちなみにシャルルとおっさんは、その身長から馬に乗ることは無理そうだ。残念。

＊

道中は特に何事も無く、ヘルンデルクへは到着した。
が、そのままあの忌まわしき想い出の場所、ヘルンデルク城に入ってみようとしたのだが、残念ながら関係者以外立ち入り禁止となっ

ていた。
その様子を見ると、どうやら暗殺事件というのは本当らしい。
彼らの唯一のつてである、オルドーラスたちとは連絡手段が無いため、このままでは会えそうもない。
仕方なく、一旦どこかに落ち着いてから手分けして探そうという事になり、一行は宿を探し始めた。

「どうもこの町にはいい印象が無いんだよな～……」
「確かに。あの領主だと思うとそうですよね～……」
「でも、その領主がいなくなっちゃんたんだろ？」
「次は一体どうなるんでしょうね……」
「さあな～、多分俺たちには全く関係ない話だろうが」
「そりゃそうでしょうけど……ってイタッ！」
「おい、お前気をつけろよな！」

一同が相談しながら歩いていると、フラフラと横の路地裏から出てきた浮浪者らしき人物にぶつかる。
ボロボロの服を着て、髪と髭も伸ばし放題という出で立ちは、貧民街（スラム）でよく見かける格好だ。
そのぶつかってきた男？は、イセルの言葉にも耳を貸さず、そのまますれ違ってどこかへ行こうとする。
だが、すれ違い様に一言、彼らにだけ聞こえるように小さく呟いた。

「ラカーサ家の居候だな？……ついてこい」
「……？」

一瞬、聞き間違いかと思い耳を疑った一同だったが、どうやらみんな同じ言葉を聞いたようだ。
顔を見合わせた一行は、充分注意しながらも、浮浪者が入っていった路地裏へと足を踏み入れた。

路地裏に入り、表通りから見えなくなった途端、彼らの前を歩いていた浮浪者は、突然背筋を伸ばし、しっかりとした足取りで歩き出した。
肩越しに彼らの方を振り返ると、再び言葉少なに呟く。

「……こっちだ」

それと同時に、近くにあったボロそうな小屋の扉を開けると、滑るように中へ入っていった。
怪しさ満点と思いながらも、ここまで来たら乗りかかった船とそれに続く一行。
そんなに大きくない年季の入った小屋の中には、さっきの浮浪者の男と、その目の前に設置された簡素なベッドに寝かされた一人の男がいた。

「あっ！お前はっ！？」

その男の顔を見た瞬間、イセルが驚いたように声を上げる。
……他の全員は心当たりが無いようだ。不思議に顔を見合わせる。

「……知り合い？」
「お前ら覚えてねーのかよ！」
「……無理も無いな」

ベッドの男が小さく呟いた所で、浮浪者の格好をした男はそのボサボサだった髪に手を当てると、一気にその毛をむしりとった。
唖然としている一同の目の前で、ようやく振り返って声をかけてくる。

「急にすまなかった。もしかしたら、監視されている可能性もある

のでな」
「あ、アンタは……」
「クラウドだ。久しぶりだな」
そう名乗ったのは、確かに薄汚れたなりをしているが、確かにカシューナの部下でありラカーサ家の密偵、クラウドだった。

第８２話　ヘルンデルク再訪　後編

「クラウドだ。久しぶりだな」

ヘルンデルクへと訪れた一行に接触してきたのは、ラカーサ家の密偵クラウド。
鋭い目つきと、狼のような雰囲気は前回会った時そのままだ。

「あ、久しぶり……です……」
「……で？そっちの男は？」
「お前らが忘れても俺は忘れちゃいないぞ！あの『罪人に礼儀はいらない』とか抜かしてた兵士だよ！城の！」
「……ああ、その節は悪かったな」

よっぽど根に持ってたのか、いつもは名前を覚えてる事の方が珍しいイセルがしっかりと顔を覚えていたベッドの男は、ヘルンデルク城で働いていた兵士の男だった。
寝かされていた理由は、どうやらその全身に巻かれた包帯が全てを表しているようだ。
その体のあちこちに、大きい怪我をしているらしい。

「おそらくお前らが来るんじゃないかと、城の前を張っておいて良かったな。……この男、ジャックは城の内通者だ。気にしなくていい」
「……内通者！？嘘だろ！？」
「本当だ。よく言うだろ、敵を欺くには何とやら……ってな」
「色々調べられると面倒なんでな。しばらくここに身を隠している」

淡々と説明する男二人に、まだ驚きを隠せない一行。
何だか知らない所で、色々動いていたらしい。
ついでにグラムルが聞いてみる。

「ダスター公が暗殺されたって本当なんですか？……城を見たら本当っぽかったけど……」
「……ああ。城の兵士はほぼ全滅だ。魔法使いみたいな女と騎士みたいな男二人の三人組だ」
「三人組……？たった三人で！？」
「カシューナ様は、≪教団≫ではないかと睨んでいた」
「≪教団≫……！？」
「俺が、≪教団≫がこの町に現れるという情報を掴み、カシューナ様と共に張っていたんだが……どうやら、情報は罠だったらしいな」
「それで……」

クラウドの話を聞き、カシューナが行方をくらませた理由が分かった。
……何故言ってくれなかったのか。
もしかしたら、ラカーサ家を巡る事件に自分たちを巻き込みたくなかったのかもしれないと、一行に少し後悔の念が過ぎる。
もう既に、当事者のつもりだったんだから。

一同は、前回会った時の教団の人物について考えてみる。
……魔法使いみたいな女……いた。『あの女』って奴だろう。
騎士みたいな男……いた。あのダリウスとか言う奴の事だろう。
そしてもう一人は……？

「……」

グラムルの表情が少し陰る。もしかしてそれは……彼女の兄、アル

フレドのことだろうか。
他のメンバーが少し彼女の事を気遣ったのが分かったのか、慌ててグラムルは話を変える。

「あ、あとお城にオルドーラスさんっていませんでした？」
「……会ってみるか？」

クラウドは少しためらった後、答える。
元々そのつもりで来た一同は、少し不思議に思いながらも頷いた。
……城に入れない以上、彼が会わせてくれると言うなら話が早い。

クラウドは、再び外への扉を開けた。

＊

寝込んでいるジャックはそのままに、クラウドに案内されて向かった先は、先ほどの小屋からさほど離れていない一軒の家だった。
裏通りと表通りのちょうど中間地点ぐらいに、目立たないように建っている。

「俺だ。……入るぞ」

キィ……と木がきしむ音を立てて開いた扉の向こうでは、先ほどの男ジャックと同じようにベッドに寝込んでいるオルドーラスと、その側に座って看病をしている一人の女性……リュミエールの姿があった。
リュミエールは以前と違い、今は鎧を脱いでゆったりとした服装を身にまとっている。

入室する一行を見て、一瞬顔を上げるリュミエールだったが、また

すぐに寝たきりのオルドーラスの方へと向き直る。
……今はそれどころではない、といった感じだ。
ただ一言、胸の奥から搾り出すように言葉を紡いだ。

「私がいながら……っ！」

顔の前で力を込めて握る両手を目にし、それだけで大まかに事を悟る一行。
側まで近付いてみると、それは彼らが少し前に目にした光景と似たような状況だということが分かる。
……オルドーラスも、カシューナと同じような症状に陥っていた。

「ぐ……ぅ……う……っ」
「オ……オルドーラス……さん……？」

苦しそうな声が漏れるオルドーラス。
遠慮がちに声をかける一行のことが分かったのか、微かに彼は目を開くと、顔を向けて身を起こそうとする。
しかしその動作は、横にいたリュミエールによって止められた。
仕方なく顔だけを一行に向け、オルドーラスはくぐもった表情のまま、かすれた声で語りかけてくる。
……その様子からすると、どうやら何かを伝えたいようだ。

「ボ……ボート師匠……ボート師匠が……危ない……」
「ボート？」
「ボーティウス様。……オルドーラス様の師匠です」

リュミエールが、横から補足説明を入れる。
それを聞いて、一行の脳裏に何か引っ掛かるものがあった。

「……何か聞いたことある名前だな……？」
「確か結構最近だったような……？」
「……じいさんの名前だよ。ボーティウス」

スプの言葉に、ハッと思い出す他の面々。
そういえば、前回の性悪娘がそう言っていたな。
でも……あのじいさんが危ないってどういうことだ？
不思議に思った一同だったが、再び目をきつく閉じて苦悶の表情を浮かべるオルドーラスには、誰もそれ以上聞くことはできなかった。

「例の騒ぎが起きた後から、ずっとこの様子だ。……カシューナ様も城に入った後、姿を眩ましていたんだが、いつの間にか何者かによって屋敷に連れ帰られたようだな」
「……冒険者のような格好をした男でした。カシューナ様はその男を知っていたようです」
「残念ながら、俺はその場にはいなかったので分からん。……だが、≪教団≫と何らかの関わりがある人間のようだ」

クラウドとリュミエールの話を聞き、大体の流れを掴んだ一行。
ダスター公を暗殺した≪教団≫の三人組。
それを止めようとしたカシューナたち。助けに来た謎の男。

「≪教団≫の三人組と謎の男……ね。何だか色々物語が動き出してるみたいじゃねーか」
「ワシらは大分出遅れてるようじゃな」
「それよりも、じいさんが心配だ」
「あのお爺さんも、同じような目に遭っちゃうんでしょうか？」
「そういうことなのかも……」

一行の脳裏に、ついこの間の食事の風景や、救出作戦の時の共同作

業の思い出が蘇る。
……いくら騙されてばっかりだといっても、知り合いに危険が及ぶのを見過ごすわけにはいかなかった。
何となく、みんなの意識が揃ったのを感じ取って、イセルが他のメンバーに話しかける。

「行ってみっか？」
「いってみよー！」

本当に事態を理解しているのかは分からないが、再び元気よくシャルルが声と片手を上げる。
そして、それに反対する者は誰もいなかった。

……というわけで今度は、再びじいさんのいる塔へと向かう一行なのだった。

第８３話　ボーティウスの塔の異変　前編

「行ってみっか？」
「いってみよー！」

……というわけで、じいさんのいる塔へと再びやってきた一同。
今回は出現しなかった幻のトカゲドラゴンの洞窟を抜けると、彼方に記憶に残る塔が見えてきた。
そして、遠くに見える人影が一つ。

「あっ！あいつ……！？」

目ざといイセルが見つけたのは、塔から出てきた一人の男だった。
その風貌に見覚えがあったのも無理も無い。
出てきた人物は、しばらく前にこの場所で彼を鼻であしらった冒険者風の男――クリムゾンだったからだ。
よくこんな遠目でも分かったな……。変な所で感心する他の面々だった。

「にゃろう！奴め……っ！」

と思い出し悔しがりをし、駆け出すイセル。
遥か先にいるクリムゾンはといえば、どうやらこちらに気付いたようで一瞬振り向いたのだが、そのまま彼らを無視して反対方面へと去っていってしまった。
そして繋いでいた馬に乗ると、颯爽とどこかへと駆けていく。

走って追っていたイセルは、あっという間に置き去りにされて見えなくなってしまった。

……まあ、そりゃそうだわな。
待てーとか言って大声を挙げて走っていくイセルが、非常にかっこ悪いことこの上なかった。

＊

「誰もいない……のか？」

塔に着いた時は、人気も生き物の気配も、辺りにはまるで無かった。
入り口の扉は開け放たれており、そこかしこにじいさんが門番代わりに配置していたと思われる、巨大生物たちの死骸が転がっている。
そして、そのどれもに大きな切り傷が残っており、中には大きく火傷の跡が残っている物もあった。

「おそらく、≪火球（ファイアーボール）≫だな……」
「≪教団≫の連中って事か……？」

死体とその周辺の痕を調べていたスプが呟く。
……何となく、一行も想像できていた結論だった。

以前とは違い、もう既に中央にあった転送の魔方陣にはほんのりとした光が灯っていた。
おかげでじいさんの居室へ行くために、以前のようにあちこち寄って回りくどい展開もすることなく、直接塔の上部へと転送される。
……だが、転送された先には、以前と同じじいさんの姿は無かった。
ただ、がらんとした空っぽの部屋と、相変わらず周囲に散乱しているガラクタのみが彼らを出迎えてくれたのだった。

「……おい、いるのかじいさん」

スプが代表して声を掛けてみるが、それに返事する者は誰もいない。
部屋に立ち込める無音の気配が、そこに誰も存在しない事を伝えてはいたのだが、彼らにはそうしなければならないような気がしていた。
……続いて、奥の倉庫へと足を踏み入れてみる。
ヴゥ……ン……
扉を開けた瞬間、彼らの目の前にいつものように、少し気難しい顔をしたじいさんが現れた。
「じい……さん……」
『やはり来たか、お主らよ』
オルドーラスの言葉によって異変を感じ、慌てて訪れたこの場所だったが、これでようやく無事じいさんを見つけてホッと一安心……したわけではなかった。
一瞬、安堵の溜息を吐きそうになった一行だったが、その違和感にすぐに気付き、言葉を無くす。
「……魔法の立体映像（ホログラム）だ」
無機質に呟いたのはスプだった。
残念ながら、彼にはそれが魔法による仕業だと見抜くことが出来てしまった。……そして、おそらくそれが意味する事も。
きっと最も彼が、これが魔法であって欲しくないと思っていたにも関わらず。
『おそらく、≪波の意志≫によってお主らがここに来るであろうと推測し、この映像を残しておく』

そんな彼らの心情には構うことなく、半透明のじいさんの映像は続ける。

『これを見るということは、おそらくその頃にはワシはこの世におらんだろう』

「……」

『因果応報と言えば、そうなのかもしれんな……。結局、アレに魔法の技術は教えてやったものの、自分の自由な人生を送る術は教えてやれなんだ……』

その台詞に、誰も言葉を発する者はいなかった。

ボーティウスの姿は、魔法による立体映像にもかかわらず、そこにその場所にまるで本当にじいさんがいるかのように細部まではっきりと再現されている。

皮肉にも、その現実感（リアリティ）に懐かしさすら覚えてしまうほどだ。

そんな中、映像のじいさんは少し眉を動かし、同時に映像自体が少しブレる。

『む……！奴らめもう来たか、早いな……』

どうやら映像の向こうのじいさんは、起きた異変に気付いたらしいが、残念ながらこの魔法ではじいさんの言葉以外の音は聞こえてこないらしく、彼らには何が起こったのか知る術は無かった。

『……仕方あるまい。短くなったが、最後にお主らに遺言を残しておくことにしようか』

少し名残惜しそうにしながらも、仕方ないといった表情をしてじい

さんが続いて発した言葉は、ついにこの一連の流れの確信を突く一言だった。

そして一行は、彼らが追ってきた物が何なのかをついに知る事になる。

『――絶対防御兵器≪貝（シェル）≫。それが奴らが蘇らせたモノじゃ』

第８４話　ボーティウスの塔の異変　後編

『絶対防御兵器≪貝（シェル）≫。それが奴らが蘇らせたモノじゃ』

「……絶対防御兵器？」

耳慣れない単語に、誰ともなく呟く。

兵器という言葉なら聞いたことはあるが、絶対防御兵器って一体何だ……？

その姿をうまく一行がイメージできる前に、じいさんは先を続けた。

『……クリムゾンを追え。クリムゾンは奴らを追っている』

……またしても意外な名前が。特に驚いたのはイセルだった。

あの妙な剣士が≪教団≫と関わりがあったとは。

じいさんとは何らかの関わりがありそうだという予想はしていたのだが、何だか世の中どこでどう繋がっているのか分からない。

そういえば、奴らが何故オルドーラスやじいさんを狙ったのかということも不明だ。

急に色々な繋がりが浮かび上がり始め、混乱する一同を尻目に、一息吸ったじいさんは、その長い台詞を口にする。

『六つの結界を作り出す、≪貝≫に対抗するには、六つの≪欠片≫を集めるべし。

≪貝≫と≪欠片≫は≪波の意志≫によって引き寄せられていく。

六つの欠片とは、

≪狂気の刃≫ティルフィング。

≪真紅の光≫クリムゾン。

≪水霊≫クリアランス。
≪魔眼≫ルビーアイ。
≪風神≫ノトス。
≪神の戦士の剣≫グラム。

≪貝≫が力を取り戻す時、≪欠片≫も同時に現れる。
……これらが≪貝≫の力を無効化する、唯一の方法じゃ』

どこか昔の叙事詩を口ずさむように、淡々とそこまで伝えたじいさんの映像は、しばらくの間、沈黙を保った。

「ティルフィング……？クリムゾン……？」

どうやらここが話の核心部分のようだ。
一気に情報量が増え、全員の頭もフル稼働して、忘れないように記憶しようと必死だ。
いきなり隠されていた真実が現れ始め、興奮してテンションが上がっているらしいイセルが思わずじいさんに向かって叫ぶ。
……こういう所は彼も、まだまだ少年っぽさを感じさせるね。

「おいじいさん！カシューナさんのアレは一体何なんだ？どうすりゃいい？」
「映像に話しかけたって無駄……」

『魔力の枯渇（カルドセプト）が起こるじゃろう』

「返事した！？」

まさかと思って二度見してしまう一行など眼中に無く、じいさんはその続きを語る。

え……この映像って質問に答えも返してくれるの……？と思っていると。

『……≪貝≫に力を吸収された者は、そうなる恐れがある。そうなったらもう、通常の回復方法ではダメじゃ。……自然回復力に身を任せるしかない』

一行の反応（リアクション）など無視して話すじいさんを見て、やっぱりこれは事前に記録されていたものなんだと気付く。

そして、分かっていた事だが再びガッカリするスプなのだった。

そんな彼を見越していたはずは無いのだが、じいさんはそこで決定的な台詞を言葉にする。

『回復力が衰えている者は……いずれ死亡する』

まるで、自らの行く末を見据えているかのように余韻を含ませたその言葉は、さっきまでの彼らの予感をさらに確実なものとすることになった。

……再び、一行の間に沈黙が流れる。

『≪貝≫はまだ魔力不足じゃ。今後も奴らは魔力を集めて回るじゃろう』

そこまで言った後、じいさんはおもむろに壁の方を指差す。

『三つ目の≪欠片≫『クリアランス』を持って行け。……≪貝≫と相対する時に役立つはずじゃ』

じいさんが示した先を見ると、不思議な感じの短槍（ショートスピア）が壁に立てかけられていた。

長さは1．5mぐらい。シンプルな外見に、刃の付け根には小さな白い布が結ばれている。
そしてそこからは、ポタポタと雫が落ち、下に小さな水溜りを作っていた。

『カシューナを救いたければ、精霊都市ユナトスにいる薬草師タトゥースの元へ向かえ。きっと役に立ってくれるじゃろう』

気を取り直したような素振りを見せたじいさんの映像は、少し明るい表情を見せた後、彼らに今後の道筋を示してくれた。
『精霊都市ユナトス』、『薬草師タトゥース』、忘れないようにその名前を記憶する。
最後にじいさんは、ラカーサ邸で再会したときのようなあの笑顔で、一行に別れの挨拶を告げたのだった。

『……話が長くなった。ではな。最後に愉快な想い出ができたぞ。……達者で暮らすがよい』

……そして目の前のじいさんの姿は、虚空に消えた。

＊

魔法による立体映像が消えてしばらく、部屋の中には静けさが残る。
今起こった出来事を噛み締めている者、そこから想像できる事態を飲み込めていない者、集まった情報を整理している者などそれぞれだった。

「じいさん……」

こうした稼業をしていると、知人の死は何度か経験したことはある

が、いつまで経っても慣れないし、慣れたくも無かった。
昨日まで一緒に飲んで騒いでいた人物が、もう帰ってこない。会えることもない。
……この感覚は、どう表現していいかも分からないし、他人とどう分かち合ったらいいかも、まだうまくできなかった。
――ただ、哀しい。

一つだけ言えることは、こんな時、彼らは下を向く事は無かった。
彼らは、まだ生きているのだから。
生きているのなら、前を向いて笑って進んでいくしかない。
……それが、死に逝く者へのせめてもの手向けだと、彼らは思っていたから。

少しの間のしんみりとした沈黙の後、ポツリポツリと一人ずつ、そうした決意の表情へと変わり、お互いの顔を確認する。
……そう、俺たちはまだ生きている。
ならば、できることがあるはずだ。……ただ、それをやるだけだ。

全員がそうした表情に変わった時、グラムルが拳を握って熱く語る。

「決めました。もう私、お爺さんの仇を討つまでは、このコップを使いません！」
「……そうか。それはまあ好きにすればいいと思うが」

……そこには、どうもうまく乗れなかった他の面々だった。

第85話　ランガルドからの旅立ち

『……話が長くなった。ではな。最後に愉快な想い出ができたぞ。……達者で暮らすがよい』

一行は、じいさんの遺言を反芻しながら、塔を出る。

ちゃっかりと、じいさんの部屋から役立ちそうな物はもらっておく辺り、さすがだな。

……とは言っても、何だかわけの分からない物ばかりで、さすがの彼らもそれを試してみようという気にはなれなかったようだが。

魔硝石を少しと、例の弓、そしてそれ以外に目ぼしい物を少しだけ『お借りする』事にする。

塔を出た所で、入り口から少し離れた開けた場所に少し土が盛られて、その上に何かが立っているのが分かった。

来る時はよく見ていなかったが、どうやら……お墓のようだ。

土の上にひっそりと立っているのは、じいさんが使っていた杖だった。

「これ……さっきのクリムゾンって人がやったんですかね？」

「まだ新しいな」

「アイツがぁ？……そんなことする奴かな」

「お爺さんとは知り合いのようでしたしね」

「さっきはこれを作ってたんじゃろうか……？」

口ではぶつくさと言いながらも、彼らはそれぞれに、お墓に対して少しだけ黙祷を捧げる。

帰りの支度をする間、グラムルは一人、例のコップに水を汲んでお墓に注いでいた。

（……おいじいさん、今度は一体何の味がしてるんだ？）

その様子をチラリと横目で見たイセルは、ふと真顔になってそんな事を思う。

そして、わざと明るく振舞って、別の話題を仲間に振った。

「で？これまでの話を整理するとどうなるんだ？」

「さっきのじいさんの話を総合すると……」

「≪教団≫は、絶対防御兵器？≪貝≫とか言うののために、魔力を集めて回ってるんでしたっけ？」

「で、例のクリムゾンが奴らを追ってる、と」

「クリムゾンと言えば、何か≪欠片≫を集めろとか言ってましたよね？≪真紅の光≫だっけ？」

「六つあるとか言ってたな。んで……」

「≪狂気の刃≫って言ってましたっけ？ティルフィング……？って確か……」

「ティルヴィンのことですよね？」

『――……』

肝心の話題になっていたが、何故か当の本人（本剣？）は返事をしない。

しばらく待っても特に何も言わない事から、一同はティルヴィンを無視して続きを話し出した。

まあ、放っといてもそのうち勝手に話し出すだろうしな。

「んで、これが≪欠片≫の一つだって？……≪水霊≫？クリアランス？」

「そうらしいな」

「見てみてこれー」

そういうシャルルの方を見てみると、何と手に持っているクリアランスから、半透明の水で出来た女性が浮かび上がっているじゃないか……！

一瞬だけ驚いた一同だが、それはすぐに精霊の一種であると分かった。

「うんでぃーねちゃん。うぃすぷ君としぇーどさんに続く新しいお友達でーす。……みんな仲良くしてね」

「あ、どもイセルです……って何だよこれ」

「何か、この槍に宿ってるみたい。火を和らげてくれるんだって。いい子だよ」

「ほー……」

この出来事で、何だかいつの間にかクリアランスはシャルルが持つことになってしまった。

まあ他に誰も持ちたいと言う人物がいなかったので、特に問題は無かったが。

ちなみにスプがこの槍の持つ魔力を調べてみようとしたが、よく分からなかったようだ。

＊

何だか色んな事をごちゃごちゃと話しながら、ようやく全員の理解度が一致した頃、ポルトヴァの町へと帰ってきた。

もうすっかり自宅のようになってしまったラカーサ邸へと戻る。

しかし、このままの流れだと、随分と久しぶりにこの屋敷を出る事になるのだろうか……？

屋敷の中に入ると、一応一行はこれまでの事をダイクへ報告する。

「そうですか……、やはり事件はカシューナと関係があったんですね……」

「自分だけで片をつけようとでも思ってたのかな……」

「そうかもしれません。すみません、また皆さんを巻き込んでしまって……」

「うるせーな。ガキにいちいち謝られると気分悪いんだよ。黙ってろ」

少ししょんぼりしているダイクに対して、イセルは若干突き放すように言う。

……これが彼なりの気の使い方だと言う事は、もうダイクは気がついていた。

なので言われた通り、それ以上は何も言わない事にしたのだった。

「というわけで我々は、精霊都市ユナトスに向かってみたいと思ってます」

「そうですか……」

おっさんからの報告に何と言っていいかわからないダイク。

確かに関係者と言えばそうなのだが、これを彼らに任せてしまっていいのかどうか悩んでいるようだった。

一応、この事件はラカーサ家の問題だ。彼らには関係ないということもできるのだ。

さらに、精霊都市ユナトスと言えば、この大陸を出て海を渡らなければならない。

順調に行っても一、二週間。途中で足止めがあれば、一ヶ月ほどもかかる道のりだった。

……そんなダイクを尻目に、イセルが何か引っ掛かった部分があるらしく、眉根を寄せる。

「ん？ユナトス……？何か聞いたことあるな……」
「行った事でもあるんですか？」
「いや……あ！思い出した！イリスがいるとこだ！」
「イリス……？」

その名前に、ピクッとするベル。……どうした？何か心当たりでもあるのか？
表情が闇の精霊のように曇り始めるベルと対照的に、急に顔が光の精霊の如く輝き始めるイセル。
そしてそのまま嬉々として説明し始めた。

「俺の妹だよ。言っとくがすげー可愛いからな。スプ、手ぇ出したら殺すぞ」
「……出さねーよ……って言い返すのすらなんかムカつくな」
「はぁ……このシスコン……」

どうやら、ベルの表情が曇ったのはこれのせいのようだった。
妙にウキウキとし始めるイセルを見て、深い溜息を吐く。
その顔はまるで、（またしばらくこのテンションに付き合わされることになるのか……）といった表情だった。
そんな彼女には全く気付かず、いきなり扉に向かって歩き始めるイセル。……まだ誰も準備してないのに。

「行こうよし行こう！さあ一刻も早く行こうじゃないかキミたち！！」
「どうしたんだ急に……？」
「妹のことが絡むと、急にああなるのよアイツ……」

「へぇ～……」

イセルの意外と言えば意外な反応に、何と言っていいか分からない面々。

一体どんな妹だと言うのか。……想像してみようとして、ちょっと怖くなってやめた一同なのだった。

またしてもそんな人々に気付かず、既に外に出て馬に乗った状態から呼びかけてくるイセル。……おいおい、気が早すぎだろ。

「オー行くぞみんな、早くしろよオイ！」

「うっさいな～も～。今行くって。じゃあ急ですが、……行きます」

「はい。……お気をつけて」

イセルの勢いに押されて、と言う部分もあるだろうが、結局ダイクは彼らに任せることにした。

今は最も頼りになるカシューナはいないのだ。

乗りかかった舟と言えばそうかもしれないが、もはや彼らに任せるしかない。

何だかんだで、これまで色んな事件を解決してきた彼らなのだ。その実力はダイクも良く知っていた。

……そして、それに勝るとも劣らない迷惑っぷりも、日々良く知っているが。

複雑な表情を抱えたダイクと、未だ寝たきりのカシューナを置いたまま、彼らは慌しく町を出る。

というわけで一行は住み慣れた町、ポルトヴァを勢いよく飛び出し、この広い世界へと再び走り出したのだった――。

第85話　ランガルドからの旅立ち（後書き）

久々に慣れ親しんだポルトヴァの町を飛び出した一行。
学術都市ダリムエールでは、数々の再会が彼らを待っていた。

「あら、スプじゃない」
「し、師匠……っ！？」

なんとあの罪深き、スプの師匠が登場！？

「兄さん……」
「……グラムルか……」

ついに対面するグラムルと兄、アルフレド。
彼女は兄と再会し、一体どうするのか。

「ぐ……はっ……」
「この程度か……不安材料にもならんな」

そして因縁の≪教団≫と対決する一行！
……その結末は如何に！？

≪次回予告≫

――次章、『学術都市　ダリムエール編』お楽しみに！

ここまでの主な登場人物

▼登場人物紹介

≪主人公パーティー≫

＞イセルナート／炎の戦士
金髪にブラウンの瞳。１８０?弱。砂漠の民のような服装をした、魔剣ティルヴィンを持つ二刀流の戦士。
パーティーでは主にトラブルメイカーと切り込み隊長役。割と戦闘では役に立つ力量を持っている。
一時は悲しい出来事によって一度は丸ハゲになったが、魔法の薬のおかげで坊主ぐらいにまで髪は戻ってきた。

＞ヌニエル・スーン（おっさん）／戦う司祭
癒す事よりも倒す事が好きな、髭もじゃの典型的な格好のドワーフの司祭。１３０ｃｍぐらいの一応パーティーのリーダー。
チャンスがあれば敵を倒そうと前衛になるが、回復役を担当していると中々思い通りに戦えないこともしばしば。
その辺が若干不満といえば不満。屋敷の掃除を率先して行う辺り、結構綺麗好き？

＞スプ／魔法戦士志望
目元まで隠れた黒髪の魔法使い。１７０ｃｍ弱。ローブに加えて薄い皮鎧を着込んでいる。
それで隙あれば肉弾戦を挑もうとする魔法戦士志望でもあるが、大体はやられる。

たまに面白半分で味方に悪戯をしては追いかけられている。
しかし真面目モードになると、途端に話の進行役になる。

＞イゼベル／怒れる狩人
エルフの森から家出してきた女盗賊。だが本人としては狩人を志望しているらしい。なので盗賊としての腕はいまいち。
１６０ｃｍちょっとで色白にロングストレートの金髪、切れ長の目という、見た目は非常に美人なのだが、割と性格はきつめ。特にイセルに対しては。
ツンデレっぽさを垣間見せてはいるが、未だデレた所を誰も見たことが無い。

＞グラムル／地味騎士
滅亡した王国から逃げ延びた放浪女騎士。１６０ｃｍ強のブラウンの短めの髪と瞳。
地味で消極的ながらも、時折素敵な言動を見せる。
どうやら兄が敵に回っていそうな感じだが、彼女は一体どうするのだろうか？迷える日々。
おっさんと並んで、パーティーの最後の良心と呼ばれている。

＞シャルル／お子様精霊使い
１４０ｃｍほどの身長にウェーブがかった肩までの金髪、青い瞳の精霊使い。
あまり会話には出てこないが、基本的に周りをウロチョロしてると思ってもらえれば。
だが戦闘中や色んな場面で空気が読める辺り、実は結構大人なんじゃないかという噂も。

＞ティルヴィン／知性ある剣
封印されていた魔剣。刀に似た刀身を持ち、高そうな装飾が施されている。
一行のへそくりとして同行することになったが、最近はすっかりイセルの愛剣に定着したようだ。
何だか色々と謎や曰くがあるらしいが、基本的には戦闘中のイセルへの突っ込み役が多い。
正式名称は、≪狂気の刃≫ティルフィング。

≪周りの人々≫

＞ソーンダイク・ラカーサ（ダイク）／子供領主
領主だった親が亡くなり、その代理としてポルトヴァの町の領主を務める事になった満十歳の子供。……そろそろ十一歳になりそう。
その際に一行に護衛を依頼して以来の付き合い。
一行がポルトヴァを出てから、しばらく出番が無さそうな予感。

＞カシューナ・シャルディ／近衛隊長
前述したダイクのお目付け役であり近衛隊長でもある。金髪碧眼１７０ｃｍ強の美男子。
前領主であるダイクの父親の代わりに、ダイクのサポートや補佐も行う。
概ね一行が起こした事件などの後始末を頼まれる苦労人。
現在は負傷して寝込んでいるため、しばらく出番が無さそうな雰囲気。

＞クラウド／密偵
ラカーサ家に仕える密偵であり、カシューナの直属の部下。
狼のような雰囲気を持つ一匹狼であり、そのため、あまり一行は話しかけられない。
出番が無い時は一行に忘れられているが、きっと何らかの仕事を遂行しているに違いない。

ロイ／警備兵
ラカーサ家に仕える警備兵の一人。
密かに仲間と、『ベルファンクラブ』『グラムルファンクラブ』を作って参加しているが、『シャルルファンクラブ』には在籍していない。
幸いにも、九章の事件の後には特にお咎めが無かったらしい。

＞オルドーラス／中間管理職魔法使い
ポルトヴァの隣町、ヘルンデルクの宮廷魔術師。ボーティウスじいさんの弟子。≪魔力付与師（インストーラー）≫の異名を持つ。
領主であるダスターとは反りが合わず、疎ましがられていたりもする。
カシューナと同じく寝込んでいるので、出番は無い。

＞リュミエール／女戦士
オルドーラスの部下であり護衛役。赤毛のがっしりとした体格の寡黙な戦士。
現在オルドーラスの看病中で、やっぱり出番は無いかと。

＞ボーティウス／魔法使いのじいさん
変な魔法の品物を作るのが好きな魔法使いのじいさん。ポルトヴァから少し離れた塔に住む。
十章の終わりで死亡したと思われる。

＞ハルミトン／盗賊ギルドの盗賊
ポルトヴァの盗賊ギルドに所属する男。七章で、一行に屋敷探索の依頼を持ちかけた。
そこでの事件以来、特にイセル辺りに逆恨みされて、ことあるごとに蒸し返される。

＞クリムゾン／謎の男
ボサボサの茶髪で冒険者っぽい格好をした謎の男。どうやら偽名らしい。
ボーティウスのじいさんとは知り合いだったらしく、≪教団≫を追っている。その目的は不明。
≪欠片≫の一つである、≪真紅の刃≫クリムゾンを持っている。
カシューナとは知り合いらしい。

≪教団≫の人々

＞あの女／魔法使い
黒い髪に赤い幾何学模様が入った黒いローブを身にまとう、高位の女魔法使い。≪化身（アバター）≫の異名を持つ。

元ボーティウスじいさんの弟子だったらしい。
相手を雑魚扱いするのが好きなようだ。

＞アルフレド／≪貝≫を纏う騎士
１８０?、ブラウンの髪と瞳。グラムルの兄であり、滅亡した王国の次期騎士団長を有望視されていた。
王国滅亡後、行方不明となっていたが、ひょんなことから≪教団≫に参加していることが確認された。

＞ダリウス／騎士
アルフレドの幼馴染。１７５?ぐらいで黒髪黒目。滅亡した王国の頃から、ずっとアルフレドと行動を共にしている。
騎士の誇り関連の言葉が口癖。

第８６話　新たなる野営の一コマ

今日は再び、野営中の一コマ。

「なんだ……ゴブリンかよ」

今いるのは森の中。
一行は久々の野営をしている所だ。

目の前にはこんがりと焼けた鹿の肉が串に刺さっている。それを視界から外さないようにしながら、イセルが呟いた。
一方で、彼の言葉に誰も反応せず、黙々と肉を口に運ぶ他の面々。

「ふむ。……まあまあね」

ベルが抗議の声を上げることもなく、淡々と肉に香草をまぶしながら食事を続けている。
一本の肉を食べ終わると、傍らに置いてあったいつもの弓を手に取り、座ったまま弦を引き絞った。
そしておもむろに矢を放つ。

「ギャグワェーッ！」

奥の茂みの中から、明らかに獣のものではない悲鳴が上がる。
そしてドサッと倒れこんできたのは、イセルが言った通り、右目にベルの放った矢が刺さっている≪悪小鬼（ゴブリン）≫だった。

「この野草、程好い辛味があっておいしいですね。今度教えてください」

「うん、いいわよ。結構そこらじゅうにあるから」

器用に肉を口にくわえたまま、大剣を持って立ち上がるグラムル。
さらに、肉を落とさないようにしながら、ガサガサと出てきたもう一匹のゴブリンに駆け寄ると、そのまま無造作に剣を振るう。
……呆気なく命中したグラムルの一撃は、相手を３ｍほど吹っ飛ばして止まった。
そして再び食事に戻り、赤身の多い肉を全部口の中に入れて頬張る彼女。……ちょっと行儀悪くないか？騎士さん。

「うん、いけるね」
「もぉひっこもはっへひひ？」
「おいしぃーおいしぃー」

言うまでも無く、一心不乱にかぶりついている他三名。周りでそんなことが起きていても、ほとんどお構いなくだった。
……おいおっさん、それほとんど生だぞ。
唯一、酒と同じくらい戦が好きなおっさんは、慌てて手ごろな肉を掻き込んだ後、喜んで戦斧を担いで駆けていく。
……もちろん、誰も止める者などいなかった。
たまにはこんな時ぐらい、好きなだけ暴れさせてやると言うのが仲間ってもんだ。

その隣では、全く音のした方を見ることなく、≪闇の精霊（シェイド）≫を召喚し、そちらへと派遣するシャルル。
そっちは任せたぞと言わんばかりだ。

一瞬、剣に手を掛けてそっちを見るイセル。
立ち上がって現れた魔物を倒しに行くのかと思いきや、突然振り返って鹿肉の前に剣を突きつける！

「もうその手は食わねー！……いや、食われねー！」
「……ちっ」

その切っ先の数センチ先には、彼の肉に手を出そうとするスプの魔の手が正に伸びてこようとしていた。
……色々と成長してますな。

渋々手を引っ込めるスプ。
今度は代わりに彼が杖を持って立ち上がった。

「しょーがねーな。……邪魔だっ！」　――　＊＊＊＊

呪文の完成と共に、茂みから出てきたゴブリンたちに向けて杖を振るう。
いつもの魔法により、バタバタ……と二体がその場に倒れた。

「ふふふ、俺様も学習するのだよ……。さて、と」

後顧の憂いを断ち、安心した所で戦闘に参加することにしたイセルだったが、剣を抜いて立ち上がった所で、周りの奇怪な声が一つも無くなっている事に気付く。

「……あれ？これで終わりか？」

どうやら、何だかんだで全部片付けてしまったらしい。
もはや今の一行にとって、ゴブリンなど敵ではない存在となってしまったようだ。
数々の試練？が、彼らをここまで成長させたってわけだね。うん。

「よしよし。これでゆっくり食えるな」

しみじみと成長を実感しながらも、魔剣（ティルヴィン）を鞘に収めて再び腰を下ろす。

……そしてようやくいい匂いが漂ってきた肉に手を伸ばそうとした時。

――ズズーン！バキバキッ！！！

「グオオオォッ！！！」

「って≪人喰鬼（オーガー）≫だと！？こんな所に！？」

奥からけたたましい音を立てて、身長三mにもなろうかというような巨大な怪物が現れる。

どうやら、さっきのゴブリンたちはこいつに追いかけられていたらしい。

……こいつは、めんどくさいから出来上がりってわけには行かないぞ？

――ランガルド王国を出て二日後。

一行は、聖王国トランにある、『学術都市ダリムエール』へと向かう街道を進んでいた。

第87話　たまには戦術確認

精霊都市ユナトスへは、ポルトヴァの町から南西へと向かう必要があった。
西にある大きな砂漠を北方面へ迂回し、一旦北西へと向かう。
そこで学術都市ダリムエールを経由して南下し、海沿いの町、商業都市ムザへと入る。
そしてそこで舟を調達して、対岸にあるユナトスへと向かうのだ。

明日にはダリムエールに着くという前日。一行は、日中の休憩時にとある相談をしていた。
さすがに一日中馬を走らせているわけにもいかない。乗っている方だって結構疲れるのだ。

「まさか、あそこで≪人喰鬼（オーガー）≫とはな……。この前といい、たまには戦術確認でもしなきゃいかんかな」

素振りを繰り返すグラムルを見て、イセルがみんなに話しかける。
弓の張り具合をチェックしていたベルも、その声に顔を上げた。
食後の酒を開けようとしていたおっさんも、名残惜しそうにその手を止める。
そして腰を上げると、みんなに向かって声をかけた。

「……そうじゃな、久々にやっておくか」

これまでは、ある程度多数の敵と戦う事を想定していた。
それぞれの実力も上がった事だし、これからは強力な個体と戦う事を考えておかないと。

昼食を食べた後、腹ごなしにみんなで今後の戦術の確認をしておくことになった。
……こうした連携を話し合って準備しておく事も、パーティーを組んで戦う冒険者の必須事項だ。

グラムルとベルは、基本的にフォロー役なので自分のフォームなどをお互いにチェックしている。
グラムルは接近戦においてイセルのサポート、主に取りこぼした相手が後列に来ないように壁の役目を担っている。
なので前衛は突出しすぎないようにするのも重要なポイントだ。

劣勢の部分を見極めて、飛び道具で援護する役目のベルにとっても、あまり離れられると命中率に影響が出る。
一応日頃の鍛錬のおかげで、ある程度の距離の変化は問題ないようにはしてあるが、やはり遠くなると自然の影響を受けやすい。
つまりは、パーティー全体としての相手との間合いの取り方も大事だと言っても良かった。
当然、魔法の効果の有効範囲外に出てしまっては元も子もないのだ。

「で、その魔法はどんな効果があるんだ？」
「えっとねー、体の周りがもやもや～っとなって、どこどこ？って感じになるんだよ」

一方で、後列組のスプとシャルルは、地面に絵を描きながら色々と相談していた。
基本的に難しい事はあまり分からないシャルルは、精霊を呼び出して援護させるのが主なパターンなのだが、さすがにそれだけではそろそろ限界があるかもということで、次のステップへ進もうとしていた。
シャルルが使える魔法をスプが代表して聞き取り（当然、スプはか

なり嫌そうな顔をしていたが）、うまく使えそうな奴を幾つか見繕って教え込む、と言う方針だった。

一応、同じ魔法に関しては、発動までの時間や有効距離、効果範囲など専門知識を知っている彼が適任だろう、ということからだ。

さすがにそう言われると他に適任者は見当たらない。

……戦闘での魔法の役割は、劇的に戦況を変化させる事もあるので、嫌とも言えない彼だった……。

で現在、魔法の効果やその有効範囲などを色々と聞き取っているわけだが、口だけで説明していてもなかなか伝わらない（……というか言っている事があまり理解できない）ため、地面に棒で絵を描きながら何とか理解を進めていた。

で、苦労しながらも何とか使えそうなものは幾つかあったので、それを戦術にどう組み込んでいくかを検討する。

戦闘中に使う魔法に関しては、雑魚相手と強敵相手の対応で差が出てくるのだった。

その辺のフィールドで会う『彷徨う魔物（ワンダリングモンスター）』相手だと、基本的に魔法は無し。特に、依頼を受けて目的がある場合などでは、精神力を温存しておくために、ダメージを与える魔法をちょこっと使うぐらいに留めておく。

あまりに強い敵と出会った場合や、依頼の核となる相手の場合、最初にサポート関係の魔法を幾つか使った後、判断は各自に任せられることとなる。

大まかに決まっているのはそれぐらいで、後は臨機応変にその場の状況に応じて個人の自由となるのだが、……さすがにその判断までを教え込むのは難しそうだ。

何とか「危ない人がいたら助けてあげなさい」ぐらいにしておいた。

……ちなみに、スプはどうもシャルルが苦手なのだった。無邪気すぎてからかい甲斐が無いから。

なので、微妙な空気のまま、珍しく真面目に役目を果たしているス

プなのだった。

「……こう来たら、こうだろ？」

離れた所では、おっさんとイセルが一対一でこれまでの戦いのシミュレーションをしている。

特に最近は、でかい相手と戦うことが多かったため、おっさんは上からの攻撃を想定して色々と最善策を検討しているようだ。

イセルが敵役になって、攻撃パターンを探る。

「じゃあこう来たら？」

「それは……こうじゃな」

斜め上から袈裟懸けに切り下ろしてくる一撃を、おっさんは戦斧の先端を当てて、反対の柄を地面に突き立てて受け止める。

これなら、よっぽどの渾身の一撃でも受け止められる事は間違いない。

……背の低いおっさんならではの防御方法だった。

「ならこれは？」

「こう」

今の作戦にちょっと『やるなおっさん……』と感心したイセルは、今度は横からの真横に向けた一撃にパターンを変えてみる。

すると今度は、斧を横に構えたまま、その広い側面で斬撃を受け止め、やや下に向けて力を受け流す。

……そうする事によって、相手の一撃は地面に向かって切っ先が固定されてしまう事になり、体勢を崩した所を狙っておっさんは懐へと入ることが出来るのだった。

「こうだと？」
「こう……かな」

いつの間にか、自分の特性を活かした効果的な戦い方を身に付けているおっさんにちょっと嫉妬（ジェラシー）を感じたイセルは、続いて様々なパターンでの攻撃を繰り広げていく。
それらをことごとくいなしていくおっさんに対して、次第にその攻撃パターンは変な方向へと向かっていった。

「これならどうだ！」
「なんのこれでどうだ！」

自棄になって魔剣（ティルヴィン）を投げ付けるイセル。
それを一本足打法でフルスイングして打ち返すおっさん。
『やめてくれー』とか悲鳴を挙げて、飛んでいって星になるティルヴィン。

「やるな！じゃあこうだ！」
「まだまだ！こう！」
「……いい加減にしろ」

前転したり、変なポーズを取ったり、段々とわけが分からない方向性になっていく二人に、突っ込むスプ。
このままでは延々と続きそうだったので、周囲で白い目で見ている他のメンバーを代表して、仕方なく止めることにしたのだった。
杖（スタッフ）で、謎の魔法ビームを発射する格好をしているイセルと、それを止める魔力バリアーを発生させるポーズを取っているおっさんの頭を叩きながら、全員に対して呟く。

「……やっぱり、そろそろバリエーションを増やしたい所だな」

「ああ。そろそろ強力な新魔法とかねーのか」
「あたいもあたいもー！」
「……仕方ない。たまにはお祈りでも行くか……」

ちょうど次なる目的地は学術都市。
新しい魔法の予感がてんこ盛りな感じだった。

第８８話　親切にダリムエール紹介

馬に水を飲ませるために、休憩中の面々。
各自で布を湿らせて、吹き付ける砂埃を拭っていた。……もうまもなくでダリムエールだ。
どんな街なんだろうね？というシャルルの言葉を聞き、誰にとも無くスプが話し出す。

学術都市ダリムエールは、その名の通り様々な研究が盛んな都市だ。
ランガルド王国の北西に位置する聖王国トランの外れにあり、特化したその特徴ゆえに半自治都市の権限を得ている。
王国直轄の領地とされながらも、研究機関の中枢である≪白い巨塔（ホワイトタワー）≫と呼ばれる学院が設置されているため、その学長は実質領主と同等の権利を有している……というのが通説だ。

「ふ～ん、何かやけに詳しいじゃないかよお前」
「……」

そう言われたスプは、いつものようにイセルの言葉に特に反論する事も無く、遠くのほうを向いたままだ。
何となくいつものノリで口にしただけのイセルは、何だか肩透かしを食らったように力が抜け、追求する気も失せてしまった。
……そういえば、じいさんの塔を出てから、珍しく彼の元気が無い。
無理に励ますような事も無いだろうし、そんなことしたら逆に気持ち悪がられるだろう……と思ってそっとしておいたのだが。

そんな彼の心遣いを知ってか知らずか、再び話し始めるスプ。
研究機関の中でも最も大きい組織が『魔術師ギルド』だ。ここダリ

ムエールには、その本部が存在する。
塔のフロアの最も多くを占めており、研究員の数も多い。ここなら、この世で情報が無い魔法は存在しないだろう……というぐらいの機関だ。

そもそも古代語魔法と言うのは、基本的には誰でも使えるものだということだ。
世界に満ちる魔力（マナ）に形を与え、術者が望む現象を起こす技術。それが古代語魔法と呼ばれている。
それに呪文と複雑な身振りが必要なのは、魔術師の権威を守るためだという話もある。誰にでも使える物ではなく、ある一定の技術を持ったものでなければ習得できない。だから魔術師は貴重なんですよ、……という建前を作るために、専門の身振りを付け加えて発動するようになっているのだ。

それに加えて、古代語を使う必要がある、というのも敷居を高くしている部分の一つだった。
元々古代の民が発明したと言われているから古代語魔法と呼ばれているのだが、魔力を『呪文』を媒体として外界に発現させているだけで、必ずその言葉でなければならない、と言うわけではなかった。ただ、古代語でなければ様々な魔法の効果を調節するのは難しいらしく、安定して発動させられるために皆、古代語を使っている。
しかしそれ故に使える人間は限られてしまい、ただでさえ識字率の高くないこの世界では、限られた特権階級にしかその権利は手に入る事は無かった。
しかし長年のここの研究で、普段使っている日常の共通語でも魔法を使えるようにしよう、という取り組みが行われ、広く一般的に魔法を知り、使ってもらおうという流れも生まれてきている。

……それが、共通語魔法なのだそうだ。

「……そういえば、その『共通語魔法』でしたっけ？騎士なら使えるって話でしたよね？……あの、出来るなら覚えてみたいんですがそれ……」
「なにっ！？」
「へぇ～っ、いいじゃないそれ」
「……ああ、多分大丈夫だと思うぞ」

「おいおいグラムル、お前いつからそんな魔物の技に頼るようになっちまったんだ？」
「魔術師に怒られますよその台詞……。いや、だって憧れじゃないですか、魔法使いって」
「そんなわけねーだろ、別に魔法の一つや二つ使えたからって……うらやましいな」
「でしょでしょ！」
「おい俺もそれ使わせろよ」

いつに無くミーハーなテンションで浮かれているグラムルを見て、ちょっと憮然とした表情でスプに何故か命令するイセル。

「……俺に言われたって困るぜ。多分そりゃ無理だな。やめといた方がいい」
「何でだよ」
「さっきも言った通り、魔術ってのはある種の特権階級なわけだ。そこを広く一般にも普及させちまうと、特権を持った人間たちが面白くない。ある程度希少価値を残しておかないといけないって考える奴らもいるのさ」
「いいじゃねーかこっそり教えてくれればよ」

「後はまあ元々持ってる魔力の素質ってのもあるわけだけどよ。…

…お前は多分ねーな。それにこっそり使ってたとして、もしそれが見つかってバレた場合、一気に魔術師ギルドからお尋ね者だぜ？…
…結構リスクがでけー」
「なんだよケチーな。これだから魔法使いってのはよ……」

「聖王国トランからも、何とかそこまでならっていう話で許可を得てるらしいし、あんまり魔術師たちの権力が強くなるのを面白くないと思う奴らもいるわけよ。……まあ色々と権力闘争やらしがらみがあるのが魔術師の世界ってわけ」
「……やっぱいいや。めんどくさそうだな、魔術師」
「それがいいと思うぜ？」

「特に、ここはその世界の中で色々と揉めてる最前線の場所だからな。……確か新しい学長は革新派で有名だったはずだぜ？」
「……おいお前、何でそんなに内部事情に詳しいんだ？」

そこまで言った時、彼らの視界の端に目立つ建物が見えてきた。
こんな場所からでも分かるほどの高さを持つ建造物は、ここでは一つしかない。

「……ほら、あれが≪塔≫だよ」

その次に続いて出たスプの台詞に、他の一同は思わず彼を二度見してしまったのだった。

「実は俺、ここにいたことあるんだわ」

第89話　懐かしく再会

「……実は俺、ここにいたことあるんだわ」

一つ明らかになったスプの過去を知ると同時に、ダリムエールへと到着した一行。

街に着くと、一行は馬を下りて歩いて街の中を探索することにした。

ダリムエールの中に入るのには、しばらく時間がかかってしまった。というのも、どうやらここまで隣のランガルド王国の暗殺事件が伝わってきているらしい。

……入国審査が少し厳しくなってきていた。

彼らの背より少し高めの壁で囲まれた街の何箇所かに、街へ入る者を調べる詰め所が設けられていた。

さすが学術都市と名高い街だけあって訪問客も多いようで、数十人ほどが順番待ちでズラリと伸びる列に並び、ようやく中へ入ることができた。

憲兵からの質問に、細かい部分は適当にごまかして街に入った彼らだが、待っている間の噂話で「戦が始まるかもしれないぜ」などという言葉を聞き、若干の緊張感に包まれる。

内乱の張本人だったダスターがいなくなったことにより、その政敵であるシュトゲル公爵はこの機会に一気に反対派を一網打尽にしようとしてくるはずだというのが巷の見解だ。

……確かに、戦争が起こってもおかしくない状況だった。

しかし、急いだほうがいいだろうという気持ちとは裏腹に、ダリムエールの中は思ったよりも賑やかで、一行の目を移らせるには充分

な活気だ。
他の街ではあまり見られない、ローブを着た人や、あまり肉体労働向きではない儀礼的な服を着た人が多く行き交っている。
内乱中だったヘルンデルクやまだ田舎っぽさの残るポルトヴァと比較しても、明らかに雰囲気が違う。
特に、さすが魔術師ギルドがあるだけあって、街の所々に魔法を使った看板や広告などが使ってあり、華やかさに拍車をかけていた。
光の魔法で点滅する看板、幻影魔法で作られた女の子が客引きをしている食堂など。
ランガルドは煉瓦造りの建物が多かったが、この辺りになると石造りの建物が多くなってきている。さらに、所々に東の神を奉った雷の聖印が掲げられている事もあり、聖王国の領土である事を感じさせるような雰囲気だ。

皆口々に、「ほー」とか「へー」とか言いながらキョロキョロと辺りを見回している。
おそらくそれらを生み出したであろう、中心部に見える、白くそびえ立つ塔が街のどこからでも見えそうだ。
ここにいたことがあるという驚きの発言をしたスプが先頭となり、簡素なダリムエールツアーが行われ、一行は完全におのぼりさんと化していた。
ガイドであるスプは、離れた所に見える塔を指差して説明する。

「あれが学院だ。中は目的別のコースに分かれてて、それぞれ専門とする研究員が日々熱心に研究を重ねてるってわけだ」

街の中央を通る大通りを歩きながら、塔へと向かう一同。
しばらく歩いた所で、揃いの制服を着た男たちが看板を手に持って大声を張り上げている。
その看板には、『魔術師ギルド入会者募集中！』とあった。

「……なんだありゃ？」
「……さあ？俺のいた時には、さすがにあれほどの勧誘はしてなかったけどな……。おい、そりゃなんだ？」
「あ、旅の方ですか？ようこそダリムエールへ！現在学院では『魔法にもっと親しんでもらおうキャンペーン』を実施中です！」
「よろしければ、今なら無料で初級古代語魔法講義が受講できますよ！いかがですか？」
「魔法講義？」
「ええ、普通ならギルド入会者しか受講できない特別な講義です。しかも講義を聞いた後に入会すれば、今ならもれなく発動体の杖を無料で全員にプレゼントするキャンペーンを実施中なんです！」
「そりゃすげえな……」
「もし良かったら、この後学院広場でやる『魔法アイドルショー』も見てって下さいね！今日は新魔法も披露されるはずですよ！」
「魔法アイドル？」
「はい。もっと皆さんに魔法を身近に感じてもらおうということで結成された、我が学院の選り抜きメンバーで構成された魔術師グループなんです！」
「はぁ、そうですか……」

何だか魔術師と言うイメージとはかけ離れた明るくさわやかな説明を聞いて、どっと疲れたような表情を浮かべるスプ。
まるで、（……５０人ぐらいいるようなグループはは止めてくれよ……？）とでも言いたげな雰囲気だ。
適当に受け答えをして、その場を去る一同。

「どうしたんだよ。何か良く分からんけどすげーじゃねぇか。無駄に賑やかだな」
「もっと魔術師って、地味でオタクなイメージでした」

「まあ、そのイメージを覆そうって魂胆なんだろうけどな。大体合ってるよ。そのイメージで」
「だろ？じゃあ何でそんな嫌そうな顔してんだよ。活気があっていいじゃねーか」
「……まあ、確かに」
「一体何が不満なんだよ」
「ん～……」
「……？」

スプはしばらく黙った後、振り返って塔を見上げ、呟いた。

「ただ、何か気に入らないんだよな……この空気」
「何っか気に入らないのよね……」

唐突に、スプの台詞に同調（シンクロ）した言葉が隣から聞こえる。
皆一斉に、声のした方を振り向いた。
そこにいた人物を見て、スプが絶句した。

「……あら、スプじゃない」
「し、師匠……っ！？」

そこには、真っ赤なローブを着た妖艶なスタイルの女の人が、塔を見上げて立っていた。
こちらを見て、目を丸くして驚いている。

『師匠っ！！？』

声を揃えて驚く一同。
……そこにいたのは、スプの師匠であるフォウだった。

第９０話　何となく世間話

「……あら、スプじゃない」
「し、師匠……っ！？」

学術都市ダリムエールで突如起こった、偶然の再会。
唖然としているスプと、砂漠で水の精霊でも見たような、彼の師匠フォウ。
そしてその成り行きを見守っている他の面々。
……てか、奴の師匠って女だったんだな……そして割と美人だし。

「師匠、何でここに……！？『意地でも学院には行かない！』って言ってたじゃないですか！？」
「そんなに驚くことないじゃない。……まあ、色々あったのよ。あれから」
「色々って……」
「あら、あんたパーティー組んだの？……あんたたち、この子と一緒ってことは、相当色々迷惑してるんでしょ、ごめんなさいね」
「よく分かりましたね！」

さすがスプの師匠。物分りのいい台詞に、即座に返答するイセルだった。
他の者も、意外な言葉に驚きを隠せない。
彼の師匠というぐらいだから、それはもうひどい＊％＆＃@……だと思ったのに。

「あはは、やっぱり。私が昔、散々魔法でいじめたもんだから、魔法を間違った方向にしか使わない上に、なんか普通の魔法使いが嫌

いみたいで……」
「なるほど……」
「うちから逃げ出した後、ドワーフの司祭に根性を叩き直される為に旅に出たとか聞いたけど？……あら？あなたの事かしら？」
「おそらく」

当人である弟子の目の前で、本人を無視して色々と話し込む一行。
その居心地の悪さに、（できることならここから瞬間移動したい……）とでも思っているような表情の魔術師が約一名。
前に自分が会いに行こうって言ってなかったか？……二章辺りで。

（ひょっとしてこいつ、女に弱いんじゃないか……？）

頼まれれば、コスプレして餅つきぐらいするかも知れん。
色々と恥ずかしい過去をバラされながらも、一言も文句を言わない彼を見ていると、何だかそんな気がしてくるイセルなのだった。

＊

フォウに誘われ、そのまま昼ごはんをご馳走になることになった一行。
そして彼女のリクエストに答えて、簡単にこれまでの経緯を説明する。
すると、興味深そうに聞いていたフォウは、思わず飲んでいたエールを（昼間から酒ですか……というスプの視線を無視して）吹き出しそうになっていた。
ちなみにスプは、さっきからずっと憮然とした表情で黙ったままだ。
……一応、師匠に何か言われた時だけは返事をしていたが。

「あ、あの≪魔力付与師（インストーラー）≫オルドーラスだって！？……しかも、≪

唯一の魔力付与師（アンインストーラー）≫ボーティウスとも会ったのかい？」
「あの人たち、そんなに有名な人だったんですか？」
「まあね……。ランガルドでは一、二を争うほどの魔術師よ。残念ながら、あまり魔術師は優遇されない国だからねあそこは。……最近はほとんど名前も聞かなくなったけど、昔は知る人ぞ知る有名人よ。確か学院からもスカウトが行ったはずだわ」
「へーそうだったのか。さっぱり知らんかったぜ」
「確かもう一人……有名な弟子がいたと思ったけど……あ、そうそう。≪化身（アバター）≫だ」
「ふ～ん……」

その異名の重要性をまだ知らない彼らは、さして興味ないとでも言うようにただ会話を流すだけだ。
見れば、各自の食事も粗方終わりつつある。

「ふふ……なかなか面白い経験してるわね、アンタ達」
「そうなんスかね？……自分たちじゃ良く分からんけど。……少なくとも、もう経験したくない出来事は味わったかな……」

坊主をようやく過ぎ、短髪と言えるぐらいに伸びてきた金髪を撫でながら、遠い昔を思い出すイセル。
確かに、いくら面白いと言われても、あんな経験だけはもうしたくないだろう。

「おい、お前もなんか喋れよスプ」
「……いや、遠慮しとく」
「何でだよ。別にフレンドリーな師匠じゃねえか。超意外だったよ」
「……お前はあの、『≪地獄の三頭番犬（ケルベロス）≫の行』と『≪石化鰐蜥蜴（バジリスク）≫の行』を知らないからそんなことが言えるんだ……」
「な、何か怖そうだな」

「……こう見えて、超怖いんだぜ師匠」

ドンッ！

「あれは、アンタが私が大事に取っといた『卵と牛乳の砂糖蒸し（プリン）』食べちゃうからいけないんじゃない！」

……向こうで会話が盛り上がってるからと思って油断したのがいけなかった。

小声でこっそり話していたにもかかわらず、どこかで密かに魔法でも使っていたんじゃないかと思うほど耳聡く聞きつけたフォウが突然割り込んでくる。

そこはかとなく顔が赤くなっている辺り、ああ見えて結構子供っぽいところもあるのかもしれない。

「いやあれは、ずっと置いてあるからいらないのかと思って、駄目になっちゃう前に食べないとと……」

「それは極刑に値しますね……」

何故か深く同意しているグラムル。……横を見ると、ベルとシャルルもうんうんと頷いていた。

隣で、そういうものなのか？という複雑な顔をするおっさん。

「わからんな……」

「じゃあ、『一日疲れた後のエール酒を飲もうと思ったら、横入りしてきたこいつに、最後の一杯を飲まれちゃった』ようなもんよ」

「何っ！！！それは神への冒涜じゃろうが！」

急に劇画調のような顔になって怒り出すおっさん。

……非常に良く分かったらしい。

「まあ何にせよ、お前の師匠とは思えねーな……」

特に食べ物にはそんなこだわりの無いイセルは、そんなやり取りを横目で眺めつつ、ポツリと呟く。

その言葉を聞いているのかいないのか、スプは密かにテーブルの下で握り拳を固めていた。

それに気付いたイセルが彼の方を見ると、何やら一人でブツブツと呟いている。

「……そう、俺は誓ったんだ！いずれ師匠を倒せるぐらいの魔法使い……いや、魔法だけでは今更敵わん……魔法戦士になるって！」

ギャーギャーと騒ぐ食卓の上の面々と、対照的にこっそりと瞳の中に炎を燃やす彼(スプ)を見て、はぁ……と一つ溜息をつくイセルだった。

「まぁ、どうやらここでも退屈しそうになさそうだな……」

第９１話　そういえば職務質問

まだまだ積もる話は続きます。
今度はスプからの質問。

「で、師匠はここで何してんですか？」
「あー……、一応宮廷魔術師？……みたいな？」
「きゅっ、『宮廷魔術師』！？（似合わねー！）」
「何、似合わねーって顔してんのよ」
「し、してないですしてない！（危ねぇ……）」
「……」

フォウのじとーっとした目から逃れるように、焦って次の話題を振るスプ。
何だか妙に師弟の息は合っているようだ。

「いっ、一体何でそんな事に？ここに関わるのだけはあんなに嫌がってたじゃないですか……」
「……ん～、まあね……。恩人の頼みで仕方なくね……」
「恩人……？」
「まあ、ぶっちゃけた話、私の師匠からの依頼なのよ。『……学院の魔術師どもは頭でっかちばかりになってしまったからな。お前が首突っ込んで≪火球≫でもぶち込んで来い』ってさ」
「師匠の師匠からですか……？」
「あれ？言ってなかったっけ？ここの学長だったのよ、元」
「へっ！？嘘！？」

今まで、そんなことは聞いたことはなかったので、思わず驚くスプ。

フォウはちょっと照れくさそうな顔をして続ける。

「実学をモットーとした学風で、結構入学者を増やしたんだけどね……。一応、今の冒険者パーティーに魔術師が普通に加わる事になったのは、師匠の力が大きいって話よ」

「ほー、何かすごい話になってきましたな……」

「別に大した話じゃないわよ。それよりも、それが段々時代と共に変わってきちゃったのが問題でね……」

「何かあるんですか？」

「……」

グラムルからの質問に、複雑な顔をしてフォウは口ごもる。

少し視線を一行から外した後、何かを思い出すような素振りをして、再び口を開いた。

「……さっきの見たでしょ？あれが今の学院の実情ってわけ。何だか『これからの魔術師は、もっと時代に合わせて変化していくべきだ！』とか何とか。やたらと広報が好きなのよ、新しい学長は」

「へー。それであんなにわけの分からんキャンペーンやってるわけですか……」

「そ。意外にそれが若手にウケててね。オタクっぽい魔術師たちにはピッタリだったってわけ」

「……まあ、確かに活気はある感じだったもんな」

「でも、保守派の前学長たちの反発は大変だったんじゃ……？」

意外そうなスプの意見に対し、フォウは大げさに両手を広げて、勘弁してくれ……とでも言いたげなリアクションだ。

思い出したくも無いような顔をして溜息を吐いた後、恨みがましい声色に変わる。

「そんなの、大変だった所の騒ぎじゃないわよ。隣の国の内乱じゃないけど、こっちも学長争いが激化して大変だったんだから！……結局、私の師匠も介入してようやく収まった感じ。おかげで師匠は胃を痛めて、代わりに私が送り込まれる羽目になっちゃったってわけ」

「はぁ、そりゃ師匠も大変でしたねぇ……」

「……全くよ。こんならどっかの出来の悪い弟子の相手でもしてた方がよっぽどマシだわ。……もうそろそろ飽きたから、辞めてやろうかしら……」

「ちょっとちょっと！いきなりそんな爆弾発言は止めてくださいよっ！」

慌ててたしなめるスプ。

急にそんな事を言って、どこで誰が聞いてるか分かったもんじゃない。

関係者にでも聞かれたら大事になってしまいそうな台詞だった。

横で見ていたイセルが呟く。

「……なるほど、こうして奴の突然真面目人格は形成されていったわけだな……」

皆、大きく頷いて納得したのだった……。

＊

全員の食事は終わったにもかかわらず、何だか気を良くしたらしいフォウが一行をお気に入りの店へと連れてきてくれた。

そしてそこで出てきた、噂の『卵と牛乳の砂糖蒸し（プリン）』を食べながら、まるで水車のように涙を流して喜ぶグラムル。

その横では同様にほっぺたを押さえているベルと、大事そうにほん

のちょぴっとずつ食べているシャルルの姿があった。

……一口だけもらうと、向かいからそれを冷静な目で見ている男たち。

それぞれ、『う～む、分からんね』といった表情だった。

そんな観衆の視線など、コボルドの威嚇ほども気にせず、グラムルがフォウに話しかける。

「学院は頭でっかちって、一体何がいけないんですか？」

「……まあ、研究するのが悪いってわけじゃないけどね……」

当然のように同じスイーツを頬張りながら、フォウは少し間を置いてから喋り出す。

「今の学院は、『研究のための研究』になっちゃってんのよね。その研究結果が世界に対してどう影響するかとかじゃなく、自分が画期的な成果を出して、その後の研究生活のためのスポンサーを集める事が目的になりつつあるわけ。……ああやって大げさに広報を行うのもそう。入学金や学費を集めて、より高度な研究設備を整えたり、それでまたさらに優秀な人材を揃えたり……」

そこまで話した後、一口プリンを頬張る。ぱくり。

「要するに、当初の純粋だった理念が薄れて、大分邪念が混ざってきちゃったのよ。確かに優秀な人材は優れた環境で研究が出来るけど、それ以外にもミーハーで面白半分な道楽貴族の息子たちがかなり増えてきてるのも事実」

また一口。ぱくり。

「時代に合わせて変わっていくのは仕方の無い事だけど、もう少し何て言うかね……。きちんと世界に出て、現場で魔法を役立てる魔術師が増えて欲しいと思うわけよ。今のように身内で盛り上がってるだけじゃなくてね」

ぱくり。

「……とまあ、こうやって若者に説教するのも年寄りの仕事かなと思ってさ。似合わない事をペラペラと喋ってみました。まあキミたちには関係ないことだからね。忘れてちょうだい」

そこまで一気に話した後、黙々とプリンを口に運び続けるフォウ。

もう、プリンはほとんど無くなっていた。

……喋りすぎたかな、とちょっと反省してるのかもしれないとスプは思った。

「そうなんですか……」

「多少は聞いてたけど、何か色々と複雑そうね……」

「……そうか。俺も魔術師になんなくて良かったかな」

「だからお前にゃ無理だってば。……でも年寄りって、師匠まださんじゅう……」

ゴスッ！

突然辺りに鈍い音が響き渡ると共に、テーブルの上のプリンが数ｃｍもジャンプする。

黙々とプリンを食べ続けていたグラムルだったが、そのいきなりの轟音に顔を上げると、向こうでは杖で頭を殴られたスプが、丁度テーブルと同化する魔法の訓練を始めた所のようだった。

「余計なことは言わないでいいの！」

ぷんすかと可愛く怒っているつもりのフォウのようだが、それを見ていた他のメンバー全員の表情からは血の気が引いているのが丸分かりだ。

（あれ、魔剣よりも破壊力あるんじゃあ……）

（肉体強化魔法とか使ってるんだよな……？）

（神よ、憐れな魔術師を導きたまえ……）

皆思うことはそれぞれ違っても、感じている危険性は同じのようだ。

それにしても、（……おいおい、三十代で宮廷魔術師って、結構大変な事なんじゃないのか？）

そう気が付き、改めて目の前のフレンドリーな若い女性魔術師の得体の知れなさを感じたイセルなのだった。

「そ、そういえば、私『共通語魔法』ってのを覚えてみたいんですけど……」

気を取り直し、グラムルが話題を変える。

（……ナイス、グラムル！）

他の面々が視線でそう合図を送る。

「あら、いいじゃない。私が教えてあげようか？」

「え、いいんですか？」

「もちろんよ。じゃあまず、魔法にとって一番大事なことからね」

「……一番大事なこと？」

「そう」

テーブルと同化する訓練が順調に進む中、スプは何だか嫌な予感がしてくるのを止められなかった。
少し得意気にフォウは続ける。

「魔法にとって一番大事なことはね……」
「……一番大事なことは？」

『火力よ』

スプの嫌な予感は的中した。

第９２話　しばらくは観光客

『火力よ』

「えっ……！？」

「……あはは、冗談よ！……あ、あんた達、まだ時間あるんでしょ？だったらゆっくりしてきなさいよ」

屈託ない笑顔で明るく笑うフォウに、引きつった顔で冷や汗を垂らす一行。

グラムルは、（とても冗談とは思えません……）とは言えなかった。

その向かいでスプは突っ伏したまま、密かに（このまま本当にテーブルになれたらいいのに……）と考えていた。

とにかくフォウに勧められるまま、しばらくこの街に滞在し、次の旅路までの準備を整える事になった。

何だかんだでグラムルも共通語魔法を教えてもらうようだ。

その間、他の面々も色々と準備を整える事にする。

割と着の身着のまま屋敷を飛び出てきてしまったので、保存食やら武器防具の手入れやら、色々と次の街までの準備があるのだ。

そういえば、しばらくぶりに馬を飛ばしたので、イセルの馬の手綱が切れかけていたのもある。

まだまだ先は長い。

……それに、新しい魔法を覚えたいというリクエストもあるし。

少なくとも数日はここに滞在する必要がありそうだ。

カシューナの事は心配だが、ボートじいさんが紹介したぐらいだか

ら、きっとまだ時間の猶予はあるのだろう。
まさか一行が≪瞬間移動（テレポート）≫で移動するとも思っていまい。
じいさんがユナトスまでにかかる時間を考えていないはずがなかった。

「そうだ。折角だから、塔の中でも案内してもらうといいわ。……もうすぐ学長就任の儀式があるしね」
「そんな事出来るんですか？」
「言ったでしょ、新しい学長は広報好きだって。……それに、一応宮廷魔術師の私の権限があれば、それぐらいわけないわよ。まあ観光がてら、いってらっしゃいな」
「そんな職権乱用しちゃっていいんですか……？」
「いいのいいの。可愛い弟子の勉強のためだってことでね。……そういえば、一応アンタもここの元生徒じゃないの。……ま、一応設備や何かは世界最高峰が揃ってると言われてる場所だからね。後学までに」

そういうと、フォウは塔の方へと一行を案内するように歩き始める。
道中、簡単に街の中の事を説明しながらも、しばらく歩くとすぐに≪塔≫へと辿り着いた。
フォウは「誰か案内役を呼んでくるから」と言って大きめの外門を潜り、中へと入っていった。

一行は、しばらくその辺をブラブラとしながら、塔の入り口にて待つことにする。
そうしている間だけでも、ローブを着た連中が数多く、塔を出入りしていた。……何だか忙しそうだ。
一方でスプはと言えば、懐かしいのか思い出したくないのか、果たしてそのどちらでもないのか分からないような顔をしながら、ぼんやりと塔を見上げている。

通り過ぎるまだ若い人々は、一行のような人間が珍しいのか、皆こちらをジロジロと見ていく。
だが、どうやら彼らは誰もがそれどころではないらしく、すぐに足早に去っていってしまった。
なので退屈を紛らわすように、皆揃って巨大な石造りの塔をぼけーっと見上げていると、しばらくした後に一人の若者が彼らの元へ近付いて来るのが分かった。

「……あの、皆様がフォウ様からの紹介の方々ですか？」

そう声をかけてくると、その若いにーちゃんは、レイノルドと名乗る。
そして、スプの方を向いて軽く口元を上げる。

「やあ、スプ。……久しぶりだな」
「おぉ、お前か」

どうやら二人は知り合いらしい。……聞いてみると、スプが学院在籍時の同期だったとか。
そこそこ仲も良かったらしく、軽く思い出話に花を咲かせている。
何でも、彼は今は外部の人間の案内役をしているらしい。このように、学院の見学希望の人を連れ、中を案内するのが仕事のようだ。
頭をかきながらそう説明するレイノルドに、スプは少し意外そうに聞いた。

「お前……魔法の研究は止めちまったのか？」
「いや、細々とやってるよ。これは……まあ仕方ないな。ギルドの方針だし」
「そうか……」

少し残念そうにスプが言う。
それを感じたのか、レイノルドの方も少しの間、無言となる。
同期の人間の進路に、少し考えるものがあったようだ。
しかしそれ以上は何も言わず、入り口から中へと入っていくレイノルドの後をついていくスプ。

「フォウ様は一旦仕事に戻られました。話は聞いておりますので、皆様こちらへどうぞ」

レイノルドが先へと行ってしまった後、ポツリと呟いた彼の言葉が聞こえる。

「あいつ、あんなに『……女にモテる魔法を開発する！』って頑張ってたのにな……」

大真面目にそう呟くスプに対して、一行は何と言っていいか分からなかった。

第９３話　ぶらりと塔見学

レイノルドは、そのまま先頭に立ち、一行を引き連れて塔の内部へと入っていく。
スプとそう年の変わらない案内役は、白を基調としたこざっぱりとした衣装を身に纏い、まるでピンクな下心全開の魔法を開発しようとしていたなどと思わせないほど、真面目に建物の中を案内してくれる。
一行は見学の札を首から下げ、学院の受け付けやロビーなどを通り過ぎた後、小さめの部屋がいくつも並んでいるフロアへと出た。

「ここが世界一の学術研究拠点≪白い巨塔≫の研究棟になります」

レイノルドの仕事用口調の言葉の後に続いて≪塔≫の内部へと足を踏み入れた一行は、その建物の造りを見ただけで感嘆の言葉が出てしまった。
さすが、学術都市の中心となる建物だけあり、重厚な石造りの塔は年季と風格を漂わせている。
現在案内されているのは中央塔と呼ばれる最も大きい建物だが、それ以外にも幾つかの棟に分かれており、一番数が多いのが魔術師ギルドの『魔法研究棟』だということらしい。
傍目から見て、幾つもの塔が乱立する様子から、『学者の森』と呼ばれることもあるこの塔群の中には、他にも『歴史』や『考古学』、『地理』『天文学』などを研究する部門があり、各分野の専門家たちが日夜研究を重ねているとかなんとか。
そんな知識の宝庫なのがこの学院であり、ここを中心として街がどんどん出来上がっていったという歴史があるという話だ。

とそこまで言うと、急に通路の真ん中で一行の方を振り返って、様々な分野の最高峰の知識が集まっている場所がここなんです！……とレイノルドは力強く説明する。
そしてそれを適当に聞き流す一同。
……まあ、確かに彼らにはあまり関係の無い場所だろうからな。
生返事を返しながらも、大人しくレイノルドに続いて案内される一行。
時折、見たこともないような変な器具が置いてあったり、白い石の壁に木炭でわけの分からない記号が羅列されているのを興味深く観察する。

……うん、全く分からん。

それぞれみんな、そんな顔をしていた。
しかしそんな彼らの様子にも気付かず、レイノルドは馬鹿がつくほど丁寧に、一つ一つ説明をしている。
彼はゆっくりと進みながら、部屋の入り口に掛かっている立て札を指差すと、部屋の中で行われている研究について詳しく解説をしてくれたのだった。

以下、その内容。

＊

魔法研究は、その目的に応じて幾つかのコースに分かれています。
研究生から院生を経て、教師になったり、独立したり、魔法職人になる人もいます。

そういって一行は一つの部屋の前で止まった。
石のアーチで区切られただけの部屋の中を覗くと、何人かの学生ら

しき人々が何やら熱く語っている。

「やはり安定した指向性を持たせるには、この部分の言語を使った方が」

「いや、それならば片手を使った動作を加えて省略したほうがいい」

「ならばいっそ、全てを動作に組み込んで、パワー重視ということにしては」

「それはいい」

『魔法開発学』は、その名の通り、新しい魔法を開発する学部です。日常において、こんな魔法があったらいいなという魔法を開発するために、日々古代語の解析に取り組み、ある現象を起こすためにはどんな古代語を使ったらよいか、それを安定して発動させるためにはどんな動作が必要か？……などを研究しています。

一応、この学院の花形ですね。

おそらく皆様が見たことのある魔法のうち、半分近くはここで開発された魔法だと思います。

＊

続いての部屋に進むと、中には街で見たような点滅する看板や幻影の案内映像が出る看板が置いてあり、それを囲んで二人の男が話していた。

「うーん、どうもこの案内娘のモデルの細部の再現性がいまいちなんだよな……」

「再現性というよりも、元々のイメージに曖昧な部分があるのでは？」

「なるほど、それで二次加工する際にブレて来てしまうのか……」

「おそらく、一次のイメージをより強固にすることで、二次加工以

後の解像度にもいい影響があるものと思います」
「そうかもな……。……じゃあ再度研究に……行きますか？いひひっ」
「行っちゃいますか？ぐふふっ」
レイノルドは、慌てて先へと一行を促しながら説明する。
『魔法応用学』は、これまでに開発されている魔法を応用して、一体どこまで出来るかといったことや、魔法のマイナーチェンジなんかも研究しています。街で見かけられたと思いますが、光の魔法を応用した点滅看板や、予め記録しておいた幻影魔法を使った案内看板などもこちらの研究成果です。
＊
次の部屋からは、熱心な議論の声が聞こえてくる。
「というわけで、魔法とは人間に課せられた、新たな人種への到達のための崇高な手段であるという……」
「それは選民主義的な思想であり、むしろ宗教的な意味合いが強い！ここで議論されるべきことではないと考えるな」
「それではこの後に起こるであろう次元上昇はどう捉える？これはもはや人間の力の範疇を超える出来事ではないかね？」
「何の話だ。それなら君は司祭にでもなった方がいい。我々はただの現象としての魔法についてだな……」
「とにかく次元上昇が起こることは決まっているのだ。魔法とは、その先駆けとしてのメッセージを我々に送っているに違いない……！」
『魔法哲学』は魔法とは一体何なのかを追求する部署です。

この世の物理法則を捻じ曲げて引き起こす魔法という現象とは一体どのような仕組みなのか。はたまた魔法が目指すものとは一体何なのか。そういった事を研究し、魔法という原理そのものを解き明かすための学問です。

＊

次の部屋には、外からの日差しが差し込み、中の人たちは日向ぼっこをしながらお茶を飲んでいる所だった。

「……あー、おい。背中の真ん中の辺りが掻ける魔法はできたのか？」

「えーと待ってください。今、固い結び目がほどきやすくなる魔法がいい所なんで」

「そうか……。誰か、代わりに魔法を開発してくれる、ネコ型ゴーレムでも作ってくんねえかな……」

「そうですねぇ……」

『生活魔法』は、その名の通り生活に役立つ魔法を考えたり研究している所です。

広く一般的に魔法を普及させるため、日常の中での魔法の役割を改めて考えて、生活に適応させることが目的です。

分かりやすい例で言えば、料理における発火魔法や、夜のランタンの代わりの光の魔法など、より魔法を身近に捉えてもらう事を研究しています。

共通語魔法の開発も、ここでの研究の成果の一つと言えますね。

学生たちからお茶を勧められたのを断って、一行は次の部屋へと進んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1383q/

first fantasy

2011年12月30日22時49分発行